NHK

4

鈴木健二

歴史への招待

秘剣一の太刀—塚原卜伝　豊田穣　岡田一男
吉川浩一郎

決闘巌流島　村上元三　桑田忠親

柳生一族の謎　邦光史郎

寛永御前試合　尾崎秀樹　宝井馬琴

露国皇太子遭難　山本七平



NHK

歴史への招待 4

鈴木健二

秘剣一の太刀——塚原卜伝　豊田穣　岡田一男
吉川浩一郎
決闘巖流島　村上元三　桑田忠親
柳生一族の謎　邦光史郎
寛永御前試合　尾崎秀樹　宝井馬琴
露国皇太子遭難　山本七平



NHK 歴史への招待 4

●秘剣一の太刀
●寛永御前試合
●決闘巖流島
●露国皇太子遭難
●柳生一族の謎

日本放送出版協会

日本放送出版協会



歴史への招待

定価 1200円　雑誌コード69691-04

歴史への招待

日本放送出版協会

歴史への招待 4

目次



秘剣一の太刀が覗いた

卜部朝孝——後の塚原新右衛門高幹号して卜伝は、戦国の乱世に生き、天狗飛切り、武蔵との鍋ぶた試合、無手勝流の逸話を以って高名は今に伝わる。この時代、剣豪あまた輩出した中で、卜伝一人、天下一の兵法者よ、剣聖よ、と謳われた。それには彼の自得したと伝えられる「一の太刀」が、鹿島を背景に持つ神秘性、謎の要素に支えられて来たことが与って力あった。卜伝を遥かなる祖に仰ぐ、吉川浩一郎氏は、鹿島新当流の嫡流である。鹿島神宮、秋の景色は神韻縹渺として、氏の持す秋水の光に一の太刀が覗いた。

鹿島新当流宗家・吉川浩一郎氏

この本は、NHKテレビの「歴史への招待」の出版化です。一本のテレビ番組が作られる裏では、表に現われない大量の取材が行われます。
その結果は、一定の時間の中に凝縮され、刈り込まれ、カットされることで出来上がります。この本では、その大量の素材をたんねんに追跡し、補足し、編集し、一冊の書物に編み上げることにしました。
多くの協力者や資料提供者の協力、アイディア提供等々をまって、映像化された番組を、すべてにわたって再現し、出版の世界に定着させることは、苦難の連続といって過言ではありませんでしたが、ここにささやかなその結果をお届けすることが出来ました。映像と出版とのこよなき結合が、読者の皆様のご賛同を得られればこれにすぎることはありません。

豪の人・塚原卜伝

卜伝高幹が生を享けた故里・鹿島は、今茨城県東南部、霞ケ浦、北浦に近い佳景の地である。その鹿島台地に神宮はあった。古来、「鹿島立ち」に名を留めて来た神宮には、日本建国の功神武甕槌大神が祀られ、香取神宮とともに武道の祖神として、多くの武芸者の修行道場となり、栄えた。

卜伝は、この鹿島神宮の祝部で、常陸大掾鹿島四宿老の一である名家卜部（吉川）家に人となった。幼にして塚原城主新右衛門安幹の養子となり、実父より鹿島流を、養父に神道流を学んだ。長ずるに及び、全国回国の武者修行の途に上り、生涯両三度、延べ三十余年を逆旅に送った。武将として出陣回数三十七度、真剣勝負十九回のことごとくに負けを知らず、と伝えられる。げに豪の人であった。



天下一の兵法者・塚原卜伝の画像（吉川浩一郎氏蔵）



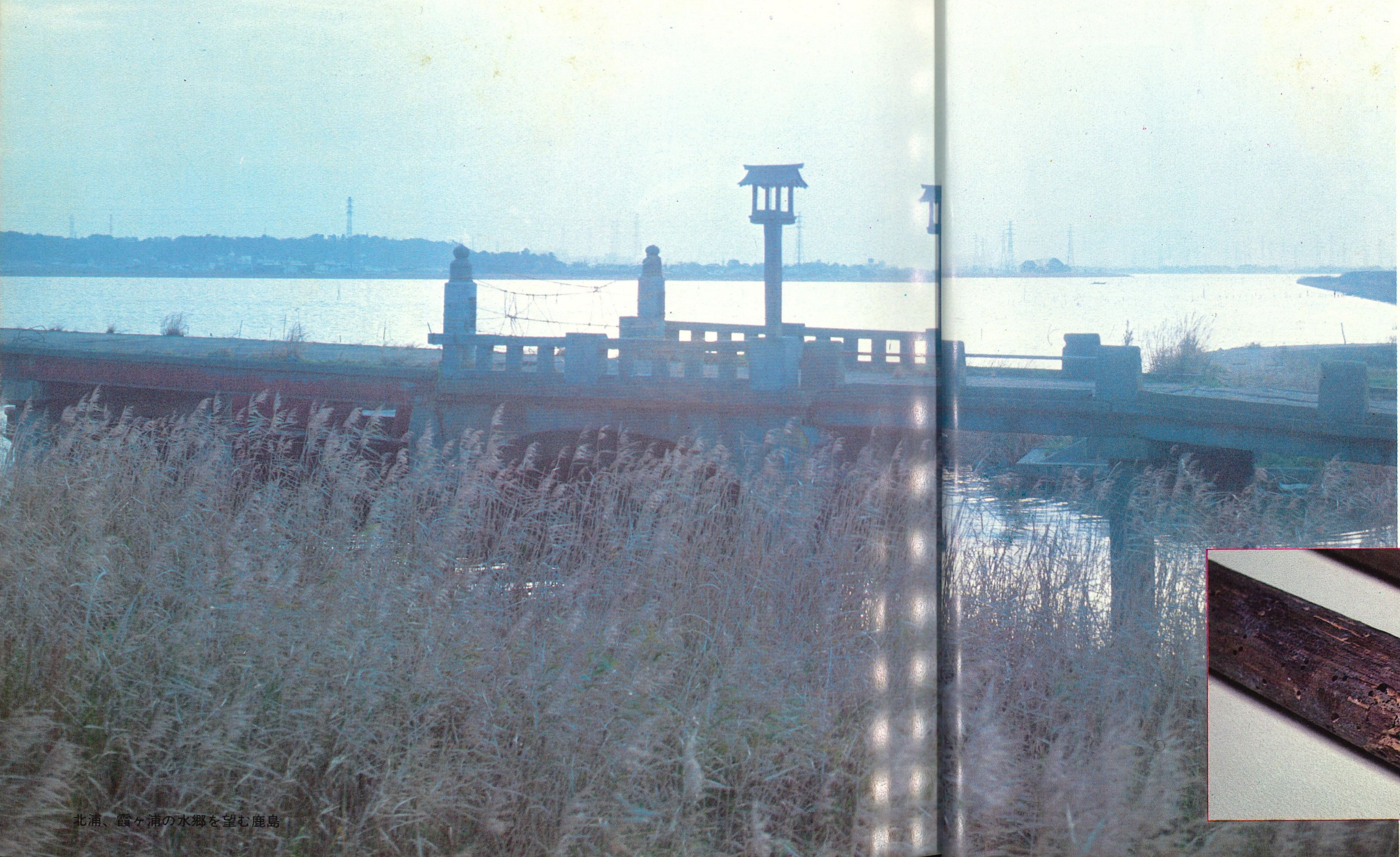
卜伝の木刀（吉川浩一郎氏蔵）



卜伝遺愛の印（同）



武の神を祀る鹿島神宮



北浦、霞ケ浦の水郷を望む鹿島



塚原城址（鹿島町須賀付近）

頂点に立つ兵法者

若くして国摩真人に発する鹿島の神剣を伝える正統者となった卜伝は、更に剣の蘊奥を極めんと、神宮に参籠すること一千日、遂に神意を被り「一の太刀」の秘剣を得た。これより卜伝は、鹿島七流の総帥として、鬼一法眼を祖とし、吉岡拳法を擁する京八流に対抗した。能く敵を鏖にする必殺の剣法は、戦国に風靡したが、「大鷹を据えさせ、乗り替え馬三頭をひかせ、上下八十許召し連れありき」と『甲陽軍鑑』の伝えた卜伝の姿は、後世の創作とはいえ、頂点に立つ兵法者としての自負をうかがわせて、きらびやかである。



こぶしに鷹を連れて武者修行する卜伝
（『武者修行巡録伝』より　綿谷雪氏蔵）



東の鹿島・香取を中心にした鹿島七流に対して、都では京八流が栄え、吉岡拳法などの武芸者が輩出した（『武稽百人一首』より　綿谷雪氏蔵）

宮本武蔵との鍋ぶた試合は、講談などであまりにも有名（吉見屋提供）



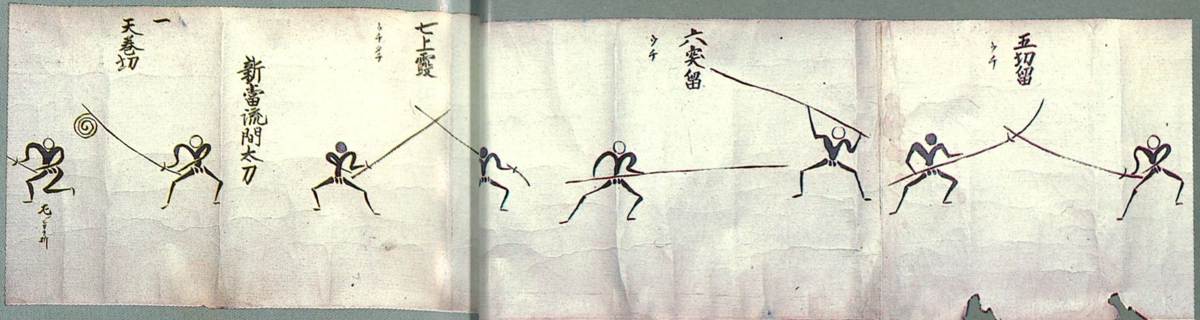


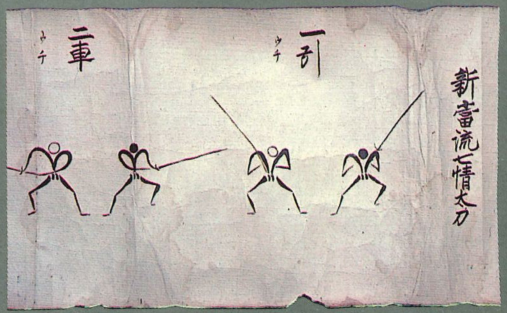






鹿島新当流「面の太刀」より（演武者　内田栄一・岡見安定氏）





鹿島新当流「七情の太刀」より引と車、「霞の太刀」より、切留・突留・上霞、「間の太刀」より天巻切







「七情の太刀」より（演武者　吉川浩一郎・伊藤昭司氏）



秘剣一の太刀

秘剣一の太刀を背景に、卜伝の剣名とみに高まり、秘剣を伝授されたと称せられる弟子の中には、北畠具教や将軍足利義輝の名があった。卜伝を頂点とする階梯は、各流を派生して行く。

鹿島新当流には、卜伝の剣法を伝える伝書、目録が多数遺る。「面の太刀」、「七情の太刀」、「霞の太刀」等々、口伝されてあった剣法を、いずれも江戸期に筆録したものである。だが、真髄一の太刀は、そのいずれにも伝えられていない。『甲陽軍鑑』『関八州古戦録』に伝える「一つの位、一つの太刀、一つ太刀」は、いずれも表現は具体を示していない。

今、吉川家に伝わるのは、他の道場剣法にはたえてない、諸関節、手首、腿、頸動脈などを突き、斬る実戦的剣法であった。

秘剣一の太刀

——塚原卜伝

豊田穣
岡田一男
吉川浩一郎

■とよだじょう
作家　大正９年満州生まれ　元東京新聞文化部記者　ペンクラブ理事　『長良川』で第64回直木賞受賞　著書『ミッドウェー海戦』『三人の卜伝』（中央公論社）

■おかだかずお
大正４年茨城県生まれ　国学院大学教授　日本古武道史　『振武館の記』（共著）「小田流の研究」「富田流の考察」「鹿島・香取の剣法とその伝流」

■よしかわこういちろう
大正７年茨城県生まれ　鹿島神宮などの神官を経て、茨城県庁に勤める　卜部吉川家鹿島新当流第64代宗家

NHK　河邑厚徳



北辺の卜伝流のふるさと・弘前と、津軽卜伝流の剣法を伝える小山秀雄氏

サバイバルの剣法

鉄砲伝来による兵法変革のこの時代、なぜかなじみ深い剣豪たちが多く輩出する。新陰流上泉伊勢守信綱、槍の名手宝蔵院胤栄、中條流小太刀の遣手富田勢源、御存知柳生石舟斎宗巌、等々、多士済々。

信長の覇権は、鉄砲によってなった。今や刀槍の兵法は変革を余儀なくされ、徳川将軍家師範柳生宗矩は、禅僧沢庵に蒙を啓かれ剣禅一如の剣理を説くに至って、抽象化した。

全国に弘流した卜伝の兵法も、今北辺の弘前に僅か命脈を保つ。津軽卜伝流がこれである。津軽藩指南役を伝世した小山家に伝わる目録は、諸岡一羽の流れを汲むこの流派が、岩間小熊を流祖に、越前の人田中武平により津軽に伝えられた由緒を記す。抽象に流れぬ、生き延びる卜伝の技法が、僻陬の地に遺った。



卜伝の位牌・宝剣高幹居士には、「帰一」の文字が記されている（長吉寺）



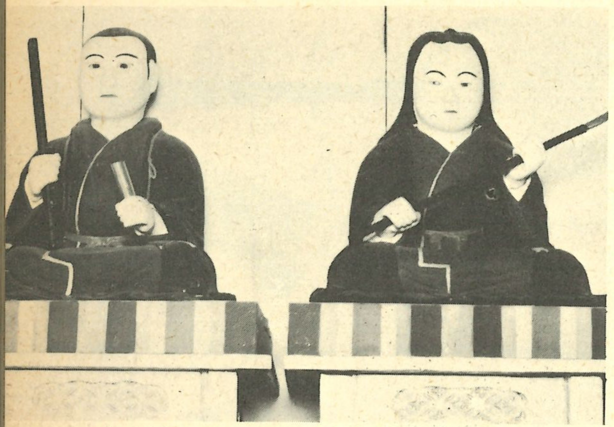
世上有名な、卜伝武蔵の鍋ぶた試合は、史実ではなかった　卜伝の死後武蔵が生まれている（都立中央図書館蔵）

戦国動乱の必殺の剣法を編み出した男

戦国時代から江戸末期まで剣豪あまた輩出した中で、後世、天下一の兵法者、あるいは剣聖とうたわれるのは、塚原卜伝ただ一人である。

卜伝は宮本武蔵との鍋ぶた試合など、数多くの逸話で有名だが、これらはすべて後世作られた伝説である。

実在の人物としての塚原卜伝は、戦国時代の初め、延徳元年（一四八九）に常陸国鹿島神宮の神官の家に生まれたと伝えられる。古来、鹿島・香取両神宮は武道の神として信仰を集めてきた。この土地からは近世剣法の源流ともいえる、飯篠長威斎（いいざさちょういさい）（神道流）や松本備前守政信などが生まれている。



飯篠長威斎夫婦像（飯篠快貞氏蔵）

卜伝も実父卜部（うらべ）覚賢、養父塚原安重などに鹿島伝来の太刀を学び、十六、七歳ごろから武者修行をして全国を回った。天分に恵まれた卜伝は、若くして国摩真人（くになずのまひと）の「鹿島の太刀」を伝える正統者と認められたが、さらに新しい境地を求めるために鹿島神宮に参籠（さんろう）すること一千日、神意を被って悟りを開いた。この時会得した太刀が「一の太刀（ひとつのたち）」である。

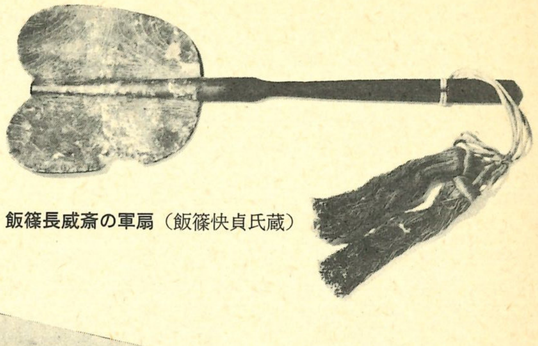
また心を新たにして、無念無想、敵に当たる——という境地を悟ったということから、門弟たちが師の流儀を新当流と名づけたという。

「一の太刀」を完成した卜伝は、鹿島神宮の卜部の伝統を守るという意味で「卜伝」と号するようになった。時に、大永二年（一五二二）、塚原卜伝三十四歳であった。

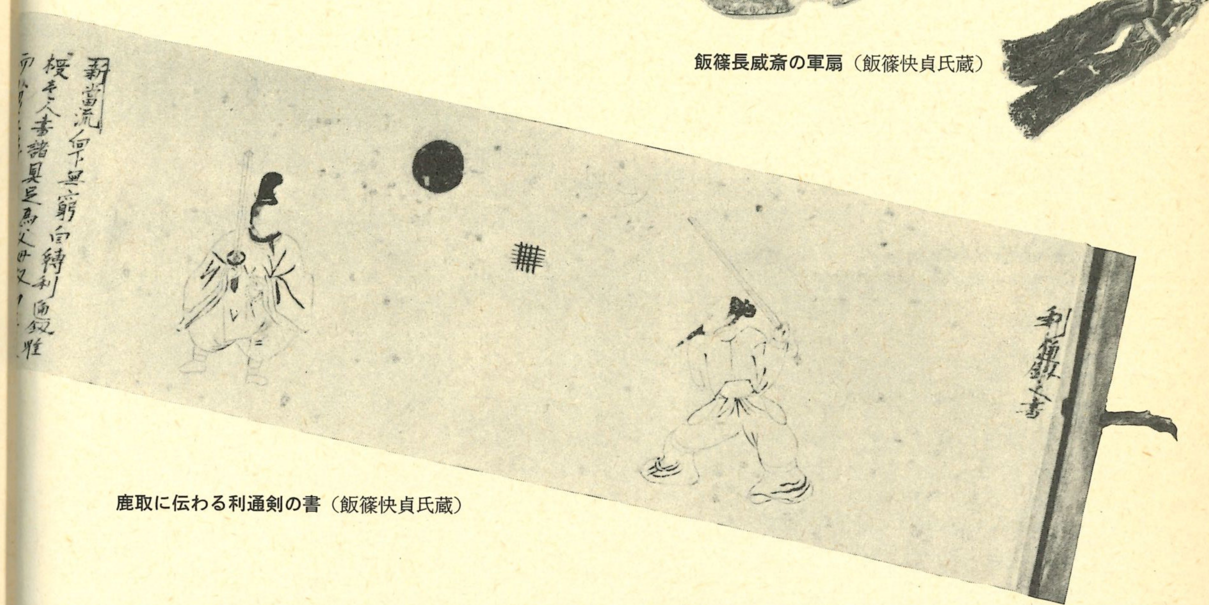
それでは、塚原卜伝とはいったいどのような人間で、いかなる剣の使い手であったのだろうか。それを知る手がかりが一つある。それは卜伝が四百年以上も前に編み出し、今なお鹿島に伝わる新当流の形を見てみることである。スポーツ化した剣道とは違い、形武道といって、形を演ずるものである。

——私たちが小さい時から知っているいわゆるチャンバラとはだいぶ違いますね。

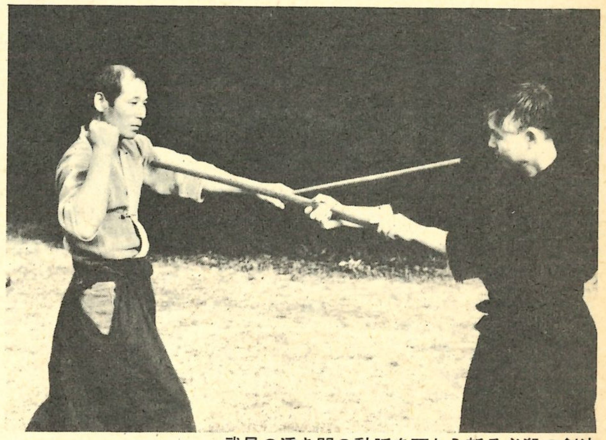
豊田　そうですね。後世の面、胴、小手の道場剣道とはぜんぜんと言っていいくらい違いますね。正に実戦的です。体の関節、手首だとか、あるいは足の腿だとか、股の付け根だとか、各関節にいわゆる道具はずれ、甲冑の弱いところがあるわけです。そういうところを突くなり斬るなりして、そこの動脈をねらって致命傷を与えるわけです。



飯篠長威斎の軍扇（飯篠快貞氏蔵）



鹿取に伝わる利通剣の書（飯篠快貞氏蔵）



武具の透き間の動脈を下から斬る必殺の剣法

江戸時代に入ってからのいわゆる道場剣法ですと、面、胴、突きも必ずしも必殺の技ではないわけです。しかし鹿島新当流で伝えられる技のように、頸動脈や手首を下から斬ると、これが致命傷になって必ず相手を倒せる技ですね。私は最初に見たときから、これこそ戦国動乱の必殺の剣法だと感じ興味がありました。解剖学をやっていたかどうかわかりませんが、どこに動脈があるかということはわかるでしょうからね。正に実戦の経験から来ていると思います。もっぱら動脈を切るというのがたいへんおもしろいですね。後世の剣道は骨のあるところをたたいておりますね。

―― 後の剣道は小手でも上から斬りますね。

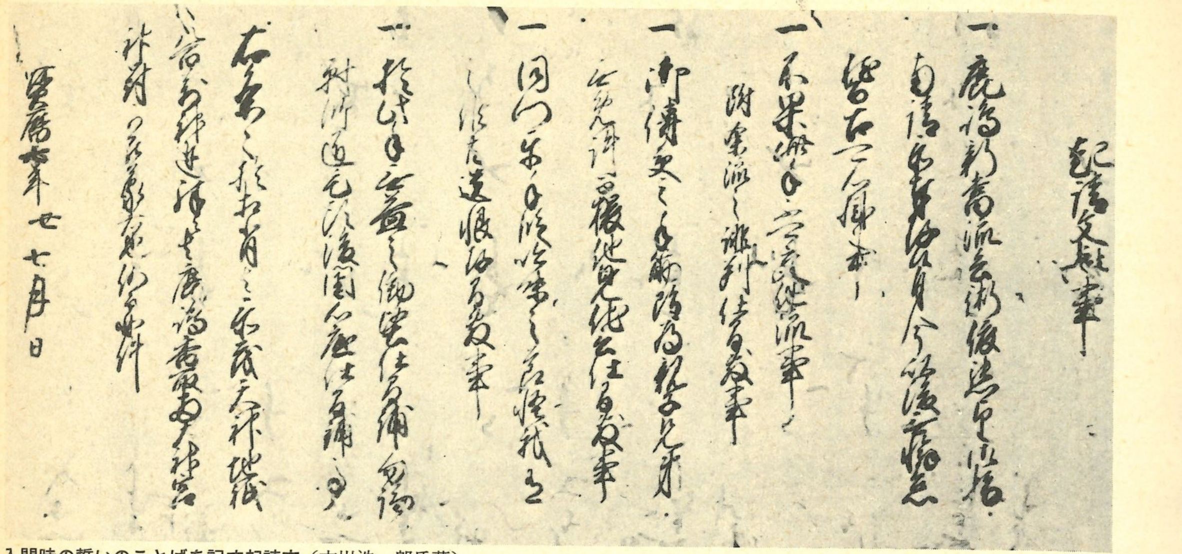
豊田　頭でも骨がありますし、よく使われる袈裟斬りというのも、鎖骨があって、ほかにも骨があるんですが、そこはスパッとうまく斬れないと思うんですよ。カッコいいですけどね。

―― それと、もう一つ気がつきますのは、相手が打って来ると、それをうまくよけるんです。相手の力を巧みにスッと流してしまって、次には必ず攻勢に出るわけです。

豊田　そうですね。神道から出た剣法ですから、悪魔をはらうといいますか、身に降りかかってきた災難をはらう。それは受けでなくてはいけないということから、侵略のために闇打ちをくらわしたり、自分の方から積極的に攻勢に出てはいけないというようなルールが初めにあったようです。実戦の場合は、これはやっぱり先手の方が勝ちだと思うんですよ。受け手専門でやっていたのではやっぱり勝てませんのでね。ところが、卜伝は恐らくいろいろ実戦の経験から、必ずしも先手必勝ではない。精神的に勝ちを焦ると攻めそこなったときに裏をつかれる。一応相手に攻めさせてから勝つこともあるのではないかと、そういうものを彼は考案している。それに何か理由をつけるには、神様から授かった太刀だから、降りかかって来た悪魔をはらうのが主体であって、自分から相手を攻撃してはいけない、というような理論をくっつけたのではないかとも思いますけどね。つまり邪悪の剣ではない、正義の剣である。降りかかる火の粉ははらわなければいけない。襲って来る悪魔を倒す神意に応える。そういうことになっているのではないかと思いますけどね。

さまざまな流派の頂点に立つ卜伝

塚原卜伝は当時の兵法者の中でどういう位置にあったのだろうか。彼にはたくさんの弟子がいるが、その弟子がさまざまの流派



入門時の誓いのことばを記す起請文（吉川浩一郎氏蔵）

卜伝の弟子たち

塚原卜伝
- 伊勢国司 北畠具教（一の太刀の秘伝を伝えられる）
- 将軍 足利義輝
- 松岡兵庫則方（松岡流）――徳川家康
- 斎藤伝鬼房（天道流）
- 諸岡一羽（一巴流）
  - 土子泥之助―水谷八弥
  - 根岸兎角（微塵流）
  - 岩間小熊
- 真壁暗夜軒（霞流）
- 塚原彦四郎
- 本間勘解由左衛門（新当流槍術）
- 鹿島盛幹（鹿島神道流）

を興し、その頂点に卜伝という人が立っているのである。

しかも、この中で注目しなければならないことがある。まず北畠具教は卜伝から直接「一の太刀」を伝授されたと伝えられている人であるが、この人は伊勢の国司であった。さらに卜伝の直弟子の松岡兵庫助の弟子に徳川家康がいる。また、歴代足利将軍の中でただひとり豪勇無双の将軍であったと伝えられる足利義輝、この人も卜伝の弟子であるということである。

こうした徳川家康や足利義輝のような権力者も卜伝を師と仰いでいた。いかに卜伝が当時最もすぐれた兵法者であったかということがわかる。しかしながら、卜伝のあと、なぜこのようにたくさんの流派が出来てしまったのだろうか。

――卜伝がこれだけ弟子を持っていれば、卜伝の剣をそのまま受け継げばいいのに、なぜこのようにたくさん流派というものが出来てしまったのですか。

岡田　卜伝が生まれたのは、ちょうど応仁の大乱が終結してから十年後ですね。当時、巷には強盗、放火、殺人の横行した無秩序時代ですから、武士は言うに及ばず、百姓町人に至るまで、自分の大事な生命財産というものは自分で守らなければならないという社会世相であったわけです。ですから、そこに武術を習得するという必要性が、武士にも百姓町人にもすべてに、そういう機運が起こって来たわけで



卜伝の弟子足利義輝（相国寺光源院蔵）

す。そこでこんどは武術を教える一つの職業が生まれて来たわけですね。これはその時代の一つの新しい職業とでも言うべき……。彼らは戦場体験をもとにしていろんな武器を考案しました。その武器の操作方法を教えることによって禄米をもらったり、あるいは道場を設けて授業料をうけたり、そうして生活が成り立ったのです。つまり流派が出来たということは、そういうことを教えることによって商売が成り立ったという一つの時代背景があるわけです。

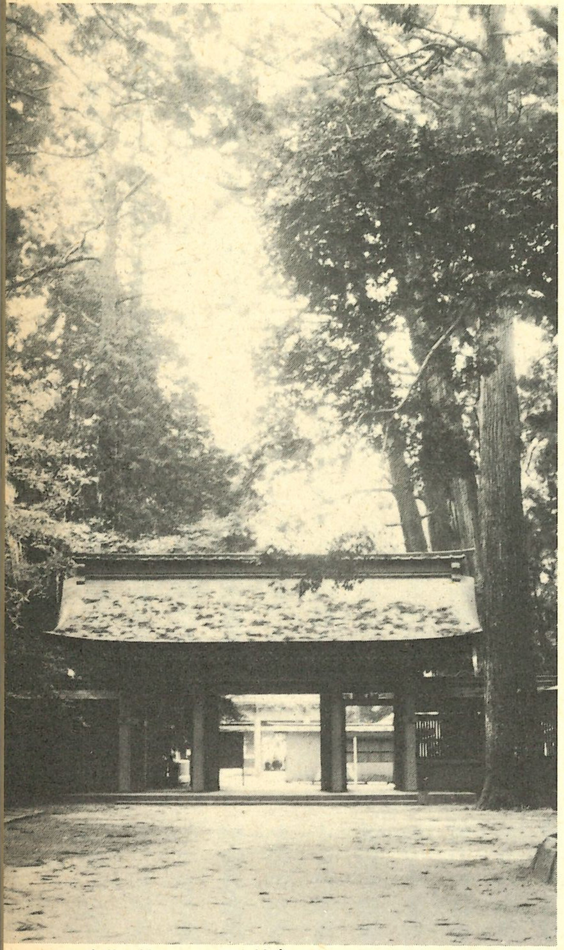
――なるほどね。武士そのもののあり方も変わって来てしまった……。

岡田　はい。そういうことです。

諸流派の成立事情――イメージ・チェンジと就職運動

――ただ、これだけの流派がありますと、それは卜伝の剣とどこが違うのか、明らかにこう構えていたのがこうなったとか、そういう違いがあるのですか。

岡田　若干はあるでしょうが、おおよその内容は同じだと思います。人を斬るのに、いろいろな斬り方があるわけではありませんから。もう一つ考えられる分派の要因は、当時の武術は総合武術であったということですね。もちろん、剣が中心をなしていましたが、槍、薙刀、弓、柔、馬、水泳などに至るまで何でもこなさなければならなかった。その中には当然、得手、不得手が出来るものですから、それらの中で自分に適した得意の武器と操作方法を考案して、さらに深く研究するようになります。例えば、鹿島系は剣が中心であったし、香取系は長物、つまり槍、薙刀技法が特色であって、それらがさらに細分化されて種々の分派となったのです。ことに、卜伝以後、鹿島地方でたくさんの分派が生じたということは、このころ鹿島一族の内訌が進展して城主廃立問題となり、陰謀の渦の中で戦いが繰り返されていたという背景があります。同じ流派の中でも敵対意識を燃やして、敵



武道の神を祭る鹿島神宮

に勝つ秘術を創案して武技を錬磨したことが、新流派の発生につながったと思います。剣豪松本備前守も、この内訌の犠牲となって戦死しています。さらに流祖になるということは一つの肩書きになりますから、就職運動の時に非常に有利であるという打算も言えると思いますね。

―― 中身はそうたいして変わらない……。

岡田　はい。つまりそのイメージを変えようというところに意図があったことは確かでしょう。例えば卜伝の弟子で天流を作った斎藤伝鬼坊というのがいますが、伝鬼坊などは鳥の羽で作った衣服をまとって、「あたかも天狗のごとし」というようなことが諸書に見えています。こんなのもやっぱり一つのデモンストレーションですね。

―― 今で言えばインディアン・スタイルみたいな……（笑）。

岡田　それから、卜伝の孫弟子になりますが、根岸兎角というのは微塵流というのを創始した人です。この人なども体が大きくて、それで魔術を使って、「これは天狗の申し子だ」と言われるような、そういう奇抜な格好でいたようですね。この宣伝がきいたのか、小田原、江戸でたくさんの門弟を集めて、道場には「兵法天下無双」とキャッチ・フレーズのついた旗まで立てていたといいます。

―― 一人の人間が一本の刀を持ってやるのに、そうたくさんの構え方、突き方、斬り方があるわけではありませんしね。これが江戸時代に入ると何百もの流派が生まれるという話がありますが、そうなんですか。

岡田　ええ。ことに江戸時代の中期から幕末になると、これはもう今おっしゃったように五百以上の流派が出来るわけです。ですからイメージ・チェンジと、それから流祖という肩書きのもとに就職なり、あるいは門戸を張った場合に、門弟がたくさん集まる手段方法として、というのが本音かと思いますね。ただ、このころの分派の事情はちょっと変わってまいります。

戦国の余韻を残した江戸時代初期までの試合というのは、真剣か木刀を用いたものです。ですから、負ければ命を失いますし、片輪になるくらいは当たりまえだったでしょう。

武術を修練する目的は、いったん緩急の場合に、主君のお役に立つためですから、自分の力を試す段階で命を亡くしたり、片輪になっては何の意味もありません。そこで幕府は他流試合を禁止したのです。そうなりますと、反面、弱小剣客にとってはありがたい話で、試合で敗北の屈辱を受けることがありませんから、安心して自流を立て剣理の高邁を論じて技法は形中心となり、武術は衰微する結果となるのです。そして、流派は雨後の筍のごとく発生して、ついに五百以上に達するのですが、大部分は内容の乏しい泡沫流派が多かったように思います。

鹿島七流と京八流

戦国の習いか、卜伝の弟子たちの末路はあわれである。

北畠親房から数えて八代目の具教は、伊勢の国司で権中納言、正三位の名門であった。

しかも「一の太刀」を卜伝から伝授された剣の名手であった。しかし天正四年（一五七六）に、家人が織田信長に内通して、三瀬の御所を囲んだとき、みずから太刀をふるって戦い十数人を斬り伏せて、壮烈な最期を遂げている。

将軍足利義輝は、二條の邸を叛臣松永久秀の兵に襲われみずから



京八流の祖鬼一法眼（『武稽百人一首』より　綿谷雪氏蔵）

闘っている。薙刀をふるって力闘し、数十人を殺傷したうえ、邸に火を放って自害した。将軍みずからの壮烈な闘いぶりには敵味方とも嘆息したという。

弟子どうしの殺し合いも悲惨である。

真壁道無は、強力無双、戦場では筋金入りの赤樫の棒をふるって闘ったというが、同じ卜伝の弟子の斎藤伝鬼坊を弓で射殺してしまったという。また諸岡一羽の弟子岩間小熊、根岸兎角も、江戸の常盤橋で試合をして、後に恨みをかって岩間は殺されている。

松岡兵庫助は、鹿島神宮の配社である沼尾神社の大祝であるが、卜伝の弟子としてはいちばん出世したひとりである。今も鹿島町の松岡家には、家康直筆の文書が保存されている。

「新当流兵法無残所、一之太刀相伝感悦候。……家康（花押）」

弟子に恵まれなかった卜伝の唯一の例外である。

塚原卜伝は生涯のうち三度、延べ三十年以上も武者修行の旅に出ている。

各地の戦国武将たちは競って卜伝を己の師と仰ぎ、みずからの領地へと招いた。

当時の兵法の流派は、大きく分けて、鹿島・香取両神宮を中心とした鹿島七流と、鬼一法眼に源を発する京八流との二つの流れに



牛若丸（綿谷雪氏蔵）



山本晴幸は、叔父山本帯刀について京流を学んだといわれる（綿谷雪氏蔵）

分かれている。

鹿島・香取はともに武神を祀った神宮であるから、これに奉仕する神人たちは教養上からも、また自衛上からも武術の修錬が義務付けられ、その中心をなしたのが卜伝の生家吉川家であった。

吉川家というのは、神宮に奉仕して吉凶を占う「卜部」であると同時に、大行事職をも兼ねていた。大行事職というのは、神領内の治安維持の任に当たる役職で、吉川家はその総領として重要な地位にあったから、特に武術修得の必要性があったわけである。

『武芸小伝』には、

「常陸鹿島の神人、其の長たる者七人、刀術を以て業となす。今に至りて関東七流と号する者は是なり」

とあり、『本朝古今剣術名数』は、七流とは良移流、鹿島流、香取流、本心流、卜伝流、神刀流、日本流である、としている。

一方、京八流というのは、治承年間（一一七七〜八一）京の一条堀川に陰陽師鬼一法眼という文武両道の達人があって、剣の秘術を鞍馬の僧八人に教えたという。牛若丸もその一人だとしているが、詳細については拠るべき資料がない。

義経の牛若丸は、京五条大橋で大の男の弁慶を手玉にとったり、源平合戦では、鵯越の坂落としや屋島の奇襲戦法、あるいは八艘飛びなど超能力の武技を発揮していることから、これにあやかって名を借りた流儀は実に多い。しかし、それらはいずれも後世人が流儀を神韻化し、権威付けるための作意にほかならない。

京都には、松本備前守や塚原卜伝よりもさらに古く、飯篠長威斎とほぼ同時代に正門流というのがあった。この流儀の創始、道統はまったく不明であるが、大館持房という人物が達人であり、時の将軍義教は、持房の力を試そうと刺客に命じて襲ったが、たちまち刀を奪い取られた逸話が『大館持房行状記』に紹介されている。

あるいは、この流儀などは、京八流の流れを汲むものかも知れない。武田家の山本晴幸も京流の流れを汲む達人であったと伝えている。

剣の東西対抗戦——京八流対新当流

さて、両流の特色をはっきり区別することは、京八流の資料が皆無に等しいので比較しがたい。

まず、新当流について角度を変えて、流名からその特色を推察してみることにしよう。

新当流の解釈については、従来の説として、単なる神道の替え字であるとか、伝来の鹿島の剣に新意を加えた意であるとか、あるいは「心を新たにして事に当たれ」という御神託から名づけられたとかの諸説があるが、ただそればかりではない。吉川家蔵『新当流和歌』の序文を見ると、

「新当の二字、他流は太刀の号を以て此に名づけ、或は始祖の号を以て此に名づく。吾が新当流は能く敵に向うを以て新と曰い、能く敵を鏖にするを以て当と曰う」

とある。新といえば、直感的にアタラシイと解釈するが『漢和大

秘剣一の太刀〈年表〉

文明9（1477） 応仁の乱がほぼ鎮まる(67〜) 戦後は、巷に強盗、殺人が横行する無秩序時代が続いた

延徳1（1489） 常陸国鹿島神宮の神官卜部覚賢の2男として、卜伝生まれる 幼名を朝孝という 幼少のころより、実父から、鹿島神宮に伝わる「鹿島の太刀」を学び、その剣の才能を伸ばしていった
10歳のころ、常州塚原の城主塚原土佐守安幹の養子となる
この養父からは、飯篠長威斎の天真正伝神道流を学んだ
16、7歳になると、剣の腕は上がり武者修行に出たという

永正8（1511） 鹿島神宮の神前の選抜試合に優勝し、京に上って京八流の代表者岡本三河坊を破ったという 卜伝22歳のときである

大永2（1522） 鹿島神宮に千日の参籠ののち、秘法「一の太刀」を編み出し、新当流を開く また、卜部の伝統を守るという意で、卜伝と号す
これよりのち、新当流弘布のため武者修行に出て、諸国を歴遊す
卜伝の武者修行は、大鷹をこぶしに据え80人ほども引き連れた、大がかりなものだったという
この修行中に、伊勢の北畠具教に「一の太刀」を授け、京に上っては、将軍足利義輝、細川藤孝らに刀槍の術を教えたという

天文12（1543） 鉄砲が伝来す これにより兵法は大きな変化を見たが、剣は依然として有効な武器であった

元亀2（1571） 卜伝、鹿島で没す 生涯のうち真剣勝負19度、戦場へ37度出、212人を討ち取ったが、矢傷以外には傷を受けなかったといわれる 享年83歳であった
卜伝が編み出した生き残るための術は、戦国から泰平の徳川時代へと伝えられたが、他流試合の禁止が出るに及んで、多くの流派が生まれたにもかかわらず、武術は形だけのものとなり衰微していった

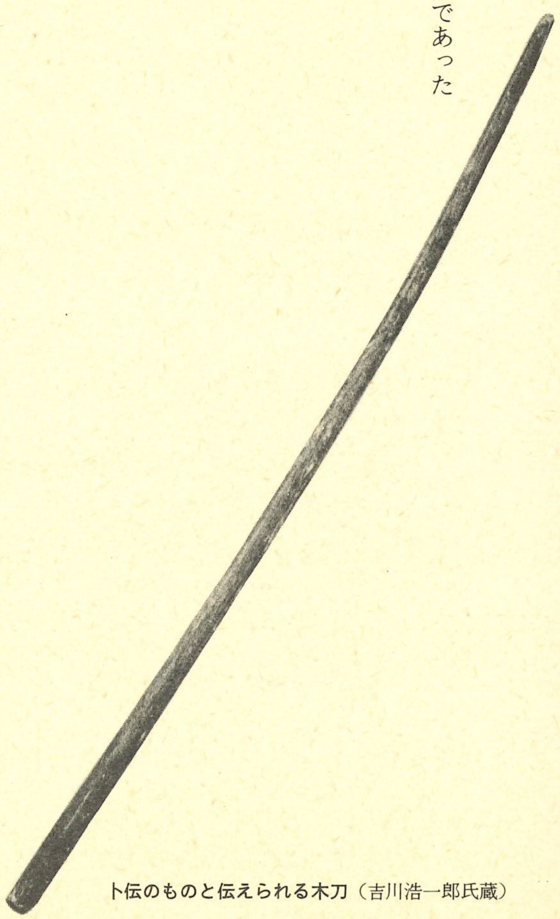
『字典』によると、
「新とは、辛と木の合字。木を伐採すること。故に斤と木をかく。辛は音符。当とは、アタル、相敵ス、真直にアタルこと」
とあって、新の語源は木を斤で断ち斬ることである。序文ではいちだんと語気を強めて「敵にまっしぐらに当たって、これを鏖にする」のが新当の意味である、という説をたてている。
卜伝の活躍した時代は下克上の足利後期から、弱肉強食の戦国乱世期であるから、敵を鏖にしてやまない必勝の新当流が歓迎されたことは当然といえよう。
卜伝の孫弟子に当たる根岸兎角は、自己の流儀を、木っ端微塵に打ち砕く意をもって「微塵流」と称したが、これらから察しても、鹿島系兵法がいかに猛烈果敢、すさまじい剣法であったかが察せられよう。
では、京八流とはどんな流儀であったろうか。
京都は政治、経済、文化等すべての中心をなしていたから、武術に関しても古くから伝統があったことは否定出来ないが、その内容は漠としてわからない。
『心形刀目録序弁解』によると、鬼一法眼の京八流は、刀槍の術ではなく、六韜三略の軍学であるとしている。また、今に残る『鬼一法眼虎之巻』その他関係巻物は、後世の転作であるとはいうものの、中味は真言密教による呪術的内容である。その中には剣・槍の術も一部含まれていたと思うが、関東七流の純粋の武術とは内容がおのずから異なっていたのではあるまいか。
武術の老舗はなんといっても鹿島・香取であることは自他ともに許すところであるが、武術が盛んになるにつれて、関西チームを編成して東西対抗戦を試みないとおもしろくない。そこで、鬼一法眼の京八流を構成して関東七流に対抗させて競争意識をもりたてたということであろう。
卜伝は鹿島の太刀の正統者として、大いに京八流、つまり都への対抗意識を燃やしていたといわれる。
甲州武田の軍学の書『甲陽軍鑑』に塚原卜伝の記述が残っている。
「塚原卜伝、兵法修行仕るに、大鷹三羽を据えさせ、乗り替え馬三頭をひかせ、上下八十許召し連れありき。兵法修行いたし、諸侍、大小共に貴むやうに仕なす。卜伝、兵法の名人にて御座候。」
つまり卜伝の武者修行は、こぶしに鷹を据え、乗り替え馬に供侍まで従えた美々しい行列仕立てで繰り出したという。卜伝の武者


『甲陽軍鑑』武田信玄・勝頼2代の事績、軍法などを記した甲州流軍学書（山梨県立図書館蔵）

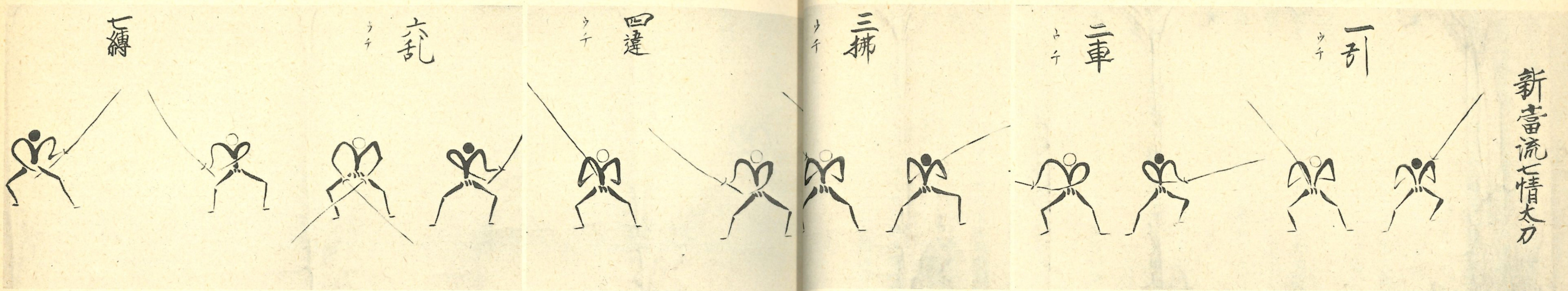
修行は、後世伝えられるいわゆる深編笠に草鞋ばきの武者修行とはまったく別のものであったことがわかる。

宣伝を兼ねた剣法──「一の太刀」

卜伝の体得した、秘剣「一の太刀」とは、いかなる剣法であったのか。
『甲陽軍鑑』には「一の太刀」について
「一の位、一の太刀、一太刀
斯くの如き太刀一つを、三段に見分け候」
と述べている。
『関八州古戦録』の解釈として、
「凡一箇ノ太刀ノ中三段ノ差別アリ、
第一、一ツノ位トテ、天ノ時ナリ、
第二ハ、一ツ太刀トテ、地ノ利ナリ、
是ニテ、天地両儀ヲ合比シ、
第三、一ツノ太刀トテ、人和ノ巧夫ニ結要トス
当道心理ノ決徳ナリ」
といっているが、結局「一の太刀」がいかなるものかは、抽象的な表現で理解することはむずかしく、具体的にどのような技法であったのかは、わからない。
塚原卜伝の剣法を伝える鹿島新当流には、今も多数の兵法目録・伝書が残されている。代々口伝で伝えられていた剣の形を、江戸時代になってから書き記したものである。
この多数の目録・伝書の中には六十四の形が残っているが、「一の太刀」がいかなる剣であるのかは記されていない。
鹿島には今も黒ずんだ木刀が一ふり残っている。卜伝が愛用した木刀として代々吉川家に伝えられたものである。
卜伝は、この木刀をどのように振り、どのように構えて「一の太刀」を完成したのであろう。


卜伝のものと伝えられる木刀（吉川浩一郎氏蔵）

──この「一の太刀」というものですが、これは宗教性の中から出て来たものなのか、あるいは一つの技法として、刀の使い方、敵の倒し方としてあったものなのか、どちらだとお思いになりますか。
岡田　これは今「一の太刀」といってもどういう技法であるかはわからないんです。わかりませんが、その当時の時代背景から考える



新当流七情太刀（吉川浩一郎氏蔵）

と、精神的なものもありますが、何しろ戦国時代の剣術ですから、要は相手を倒すことにあるので、したがって「一の太刀」というのは、自分の全身全霊をこめて一刀のもとに斬り倒す、二の太刀は使わない、という必殺の剣であったように思います。

江戸中期に「一の太刀」について具体的に記された伝書があります。それによると、「まず、太刀よりも体を敵の方へ露出する。この時の太刀は、うしろに引くように持つか、振りかぶってもよい。体を明けておくのは、敵を誘い込むことになるわけですが、その打って来る敵の太刀が、わが身から一寸（三センチ）以上離れてくれば取り合わない。五分（一・五センチ）以内の近くに来れば踏み込んで斬る。これを『一寸のはずれ、五分のはずれ』という。人間は本質的に臆病であるが精神力でカバーできる。だが一寸離れていれば辛抱できても、五分では反射的に避けようとしたがるものだ。そこを逆に踏み込み『毛抜合わせ（密着）』のつもりで斬るのである。」（『古武道史』）

まあ、後世卜伝の「一の太刀」はさまざまに解釈され、研究されていたようです。

――そうしますと、想像でけっこうなんですが、その「一の太刀」というのは、斬る技法でしたでしょうか。それとも突く技法だったでしょうか。

岡田　斬る技法です。

豊田　ぼくは、卜伝の「一の太刀」、あるいは一太刀、一の太刀と呼ぶ人もありますが、これは具体的にはただ一刀の技法としてはなかったのではないかと思うんですよ。

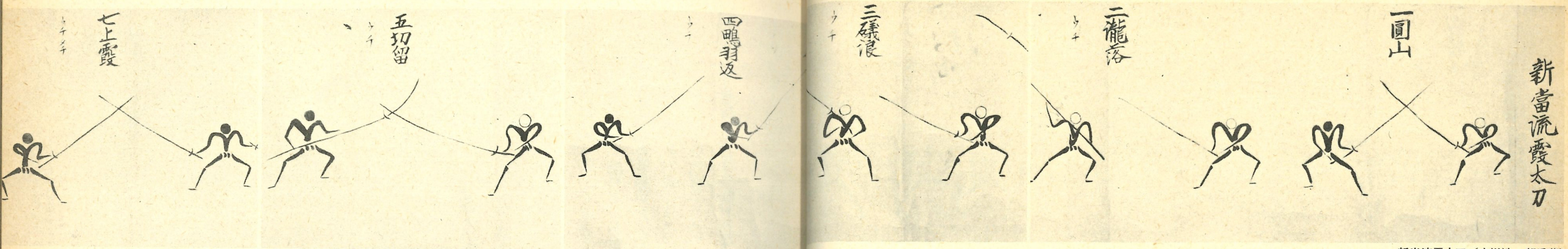
つまり、卜伝が上段、あるいは下段に構えて、相手がどう出て来ても、これを一刀のもとに倒すというような、常時必殺の一刀というものが固定されていたとは考えがたいんです。しかし、鹿島新当流の秘法として有名な「一の太刀」がぜんぜん存在しなかったということはないと思う。

ではどういう太刀筋かというと、まず神に仕える者の兵法であるから、攻めの太刀や、相手の虚を衝く悪しき太刀であってはならない。一応は護身の太刀であったと思う。しかし、常に受け太刀かといえばそうではない。受けると同時に相手を倒す。そして敵に第二撃を許さない……。ここに「一の太刀」の精髄があると思うのです。

では、その「一の太刀」は方法論的にただ一つかというとそうではないと思う。森羅万象を師として修行する兵法家のことですから、多くの相手の多くの変化に応じてそれぞれの対策を講ずるのが「一の太刀」の方法論であると思う。

卜伝は神官の出であるが、当時の流行として、武家が禅の道を学ぶということも修行の中に取り込んでいたと思う。禅道の根源は「一即一切」ということです。一の中に一切がある。一つの円は拡大すれば無限の宇宙となり、縮小すれば一つの点となる。このような思想のもとに、多くの攻撃に対するそれぞれの護りの剣を「一の太刀」というように総称した。したがって、これこそ「一の太刀」だといって示すのはむずかしいと思う。

しかし、卜伝は大物のオルガナイザーですから、別の見方をとることもできる。例えば、「一の太刀」を一つの秘伝として世間に具体的に示すことなく、おれは鹿島神宮に千日間参籠して「一の太刀」を会得したんだと言って北畠具教に秘かに伝えたりしたと言われている。実態がわからないというのは、具体的にはいろいろあって、総合してその精髄を「一の太刀」と称したのか、それとも具体的にはなくて、お



新当流霞太刀（吉川浩一郎氏蔵）

れが用いるのは「一の太刀」であると、このようにうまく宣伝したという気配もあるとぼくは思うんですよ。そういうふうに一種の宣伝といいますか、自己顕示といいますか、そういう点では非常にすぐれたオルガナイザーであり企業家であったと思います。実力があっても名まえはそれほど残らない人はいるわけなんです。例えば『甲陽軍鑑』の記述のように、なぜ鷹を連れたり何十人もお供を連れて道中をしたかというと、当時都は京都にあり、京都には吉岡一派の京八流が勢力を張っていた。京八流に対して東には、鹿島・香取があり、一つの信仰の中心でもあり、武道の本家だという対抗意識があったわけですよ。ですから京八流に対する、都へ対するデモンストレーションとして、卜伝は大いに威勢を張って武者修行をするわけです。だから、一種の宣伝でもあり、わりと近代的な感覚なんですよね。そういうところが卜伝のおもしろいところだとぼくは思いますけどね。

鉄砲伝来——来たるべき世の武術はいかにあるべきか

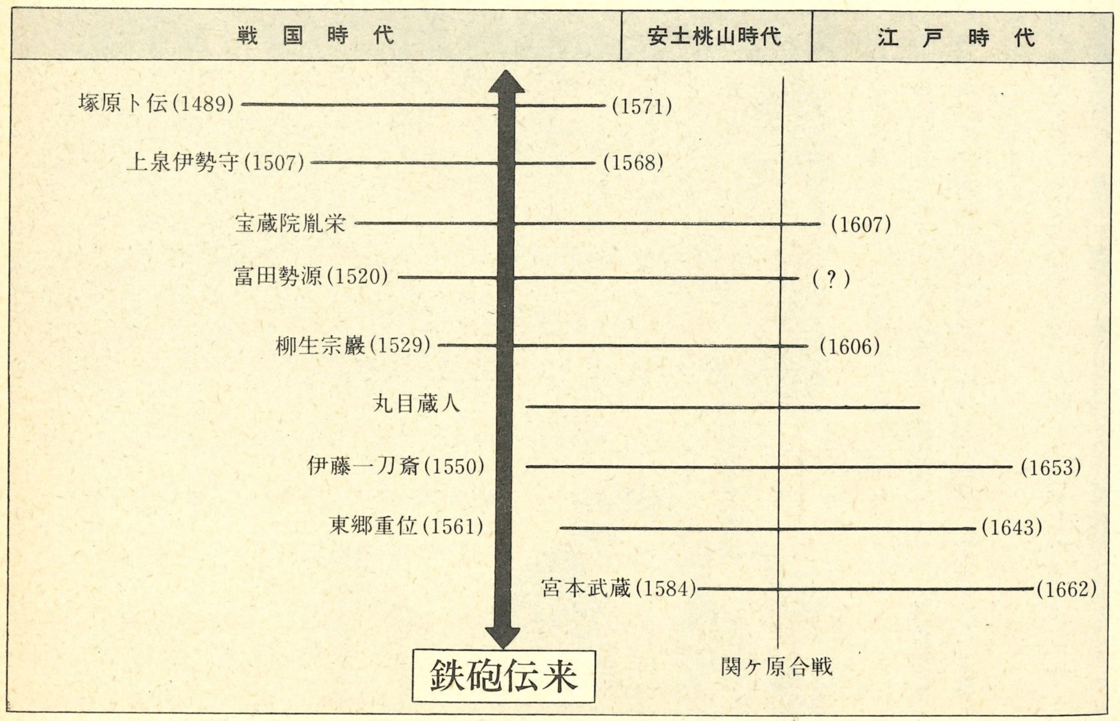
なぜかこの時代になじみ深い剣豪たちが多く輩出する。

新陰流の上泉伊勢守信綱。奈良の僧侶で槍の名手、宝蔵院胤栄。越前の兵法者である中條流の小太刀使い、富田勢源。御存知柳生石舟斎宗厳。

注目すべきは、宮本武蔵である。塚原卜伝が亡くなるのは元亀二年（一五七一）であるが、武蔵はそれよりも十三年も後に生まれている。講談や立川文庫でおなじみの、卜伝と武蔵の鍋ぶた試合は不可能であったことがわかる。興味深いのは、鉄砲の伝来である。

一五四三年に鉄砲が日本に伝わって以来、合戦の様子が急激に変

剣豪生没年表



わって行く。これまでのように、「やあやあ、遠からんものは」といって、弓を放ち、槍や太刀を振り回して敵に突っ込んでいく、そうした戦法が通用しなくなる。つまり新しい兵法の時代がやって来た。

岡田　日本の兵法、武芸は二回大きな変革を遂げています。最初は鎌倉時代の蒙古襲来、そして二回めが鉄砲の伝来です。蒙古襲来以降、それまでの古代的兵法が近代化して、例えば集団戦法に重きを置かれ、武器としては長い槍がその長所を発見され、主要な兵器となって来ます。

鉄砲が戦場で使われたというのは、長篠の合戦からです。この時に、武田の騎馬隊が、織田・徳川の連合軍のために壊滅的打撃を受けて再起不能となります。それまでの主力だった騎馬隊がそのメリットを失うわけですからたいへんな転機ですね。

兵法家にとっては今日まで精魂をかたむけ、難行苦行を積み重ねて体得した剣技ですが、科学戦の前にはもはや無力に等しいことを痛感したのです。その結果、兵法家たちは来たるべき新時代の刀槍術はいかにあるべきか、構想を練らねばならぬ気運となったのです。

確かに鉄砲の戦場登場は剣技の方向転換を迫りましたが、しかしそれが直ちに剣の地位の低下にはつながりませんでした。

刀剣は武士たるもの、権威の象徴でありますし、個人の闘争にあっては最も身近な護身の武器です。また戦場実用からみても甲冑の重武装は白兵戦には欠かせませんが、鉄砲の弾丸は通ってしまいます。だから重苦しい軍装も次第に軽装へと変化しますね。そうなると刀は依然として有効な武器となりますから、剣技の探究は武士の表芸としてますます盛んになって来るのです。しかしその内容は戦場剣技から脱皮して、特に儒学、禅学の要素を取り入れた宗教的、哲学的内容へと進化してまいります。

この黎明期に、宮本武蔵は剣の修行を通じて体得した闘争の原理を個人技から集団技に、さらに天下の政治に活用出来るという先見構想をたてましたが、実現に至りませんでした。

柳生宗矩は、禅僧沢庵の啓蒙によって禅学に傾倒して剣禅一如の新境地を開拓し、徳川将軍家師範として、もっぱら天下人としての剣理を説いています。

両者共通の傾向としては、内容が極めて精神的、思索的であったことで、このような先哲に影響されて以来、兵法家の間では偃武時代の新しい風潮として、武辺一徹を軽蔑して道理の高邁を論ずることが誇りがましいことに考えられる傾向になったのです。



長篠の戦い　信長、家康の連合軍が鉄砲隊を組織して武田勝頼を破った鉄砲伝来32年後のことである（「長篠合戦図屏風」部分　徳川黎明会蔵）



種子島時堯　初めて鉄砲を買った（綿谷雪氏蔵）

香取神道流と兵法

日本武道の原流である天真正伝香取神道流は、飯篠伊賀守家直公を流祖として、下総の国香取の地に伝承する武道である。

長威斎家直公は元中四年（一三八七）に下総の国飯篠村（今の香取郡多古町）の郷士の家に生まれ、幼少のころから刀槍の術にすぐれ、主家の千葉家でもその名声は四隣に轟いていた。千葉家の滅亡後、世の無常と栄枯盛衰は人力のいかんともしがたいことを、痛切に感じられたのであった。家直公は六十歳で香取神宮にほど近い梅木山に隠棲し、経津主大神（香取神宮御祭神）に一千日の大願をたてた。それより斎戒沐浴兵法を励み、百練千鍛を重ね、毎夜丑の刻には神道にて天下泰平を祈念し、寅の刻に至れば毘沙門経をよみ、粉骨の修行ののち、香取大神すなわち神変童子の尊形にて、梅の古木の上において、「汝、のちに天下剣客の師とならん」との神示とともに、兵法神書一巻を授けられたと伝えられている。経津主大神の真伝であるところから天真正伝を冠し、香取神道流と称するのである。

神道流への入門は、香取大神、敵一倍大神に神文を奉り、住所、氏名、血判を捺すことから始まるが、その方法は秘密とされている。その手続きが終わって、剣術から居合術、棒、薙刀、槍、柔、手裏剣、忍術等を修めるが、各術には表と裏があり、そのほか築城法や天文地理風水陰陽学等や、不動智や神妙剣、ツバメ返し等の極秘剣、軍配法などの奥伝へと進んでゆくが、これらの習得は生涯をかけてもなお至難なことである。

ところで、わが国の仏教の中で、禅は無を以って生命の根源を究めようとするのに対して、密教は有の表現を以って生命の根源を象徴する。この有は、宇宙生命の展開を表した真理であり、「色即是空有無即表裏、顕密一如」である。日本の軍学兵法の奥儀もまた、「表裏陰陽有無一如」である。それゆえ、武器である日本刀の刀身彫りの九十五パーセントは真言密教に関係のあるものばかりで、刀の柄、槍、薙刀や、城壁等にも、「九字」や「十字」が残されている。

また部将たちが「冑の八幡座に九万八千の軍神軍天を勧請」するのは、大黒天のことであり、飯篠家の氏神も摩利支天であった。このように、兵法と密教が一体となっていることが世上あまりよく知られていないのは、兵法が秘伝を多くもつことによるのだともいえよう。（大竹利典）

この傾向は反面兵法家を堕落させる原因ともなりました。泰平の時代を迎えた彼らは死の覚悟から遠く離れ、ことに他流試合が禁止されますと、試合に敗れる恥辱がありませんから安心して自流を立てます。そうなると剣技は次第に第二義となり、理論先行の形式的内容となって、ついには学者たちの非難の的となってくるのです。

例えば、井沢蟠龍子をあげてみましょう。この人は剣術も相当な達人ですが、考え方が極めて科学的で、「剣術の流祖が神仏に祈念して一流を授かったとか、天狗や猿から秘伝を習ったとかは、いずれも妄作で、愚昧をたぶらかし、米銭をむさぼる手段である。また禅法を学んで剣術の奥秘を悟ったなどというのも真っ赤な偽りである」と喝破し、柳生の剣禅一致の剣法を真っ向から否定しています。

このように兵法家と学者とが対立しますが、要するに実際家と評論家との立場の相違といおうか、乱世から治世への新旧の葛藤といおうか、いずれにしても鉄砲の登場は、剣術界に大きな宿題を置土産としたということでしょう。

ト伝は、長篠の戦いのあった四年前に世を去っています。ト伝も鉄砲がやがて戦場の花形として活躍する時代が到来することを予見したかも知れませんが、その洗礼をうけずに一生を終わりました。ですから『ト伝百首』などにも、鉄砲に関しては何もふれていません。兵法家としては幸せであったかも知れません。

津軽ト伝流と天流

青森県弘前市。この地には現在もト伝の剣が命脈を保っている。

戦国時代、塚原ト伝の剣法は、全国のかなり広い範囲に流布された。しかし現在では鹿島の鹿島新当流以外には、全国でもただ一か所この北辺の弘前にだけト伝流が残されている。

弘前でト伝流を伝えているのは、代々津軽藩の指南役をつとめた小山家である。

津軽ト伝流とはいったいどのような剣法で、どのようないきさつで伝えられたのであろうか。小山家に伝わる目録によると、津軽ト伝流は諸岡一羽の流れを汲むという。一羽の弟子岩間小熊が、ト伝流を名乗り、その弟子筋にあたる越前の住人、田中武平によって、津軽に伝えられ今に至ったという。時は延宝年間、四代将軍家綱のころである。太平の世になっても、剣一振りをもって諸国を流浪する武芸者がいたことがうかがわれる。

小山家に一巻の変わった目録がある。この目録には、剣の形だけではなく、具体的に敵と闘うための技法が記されている。全部で



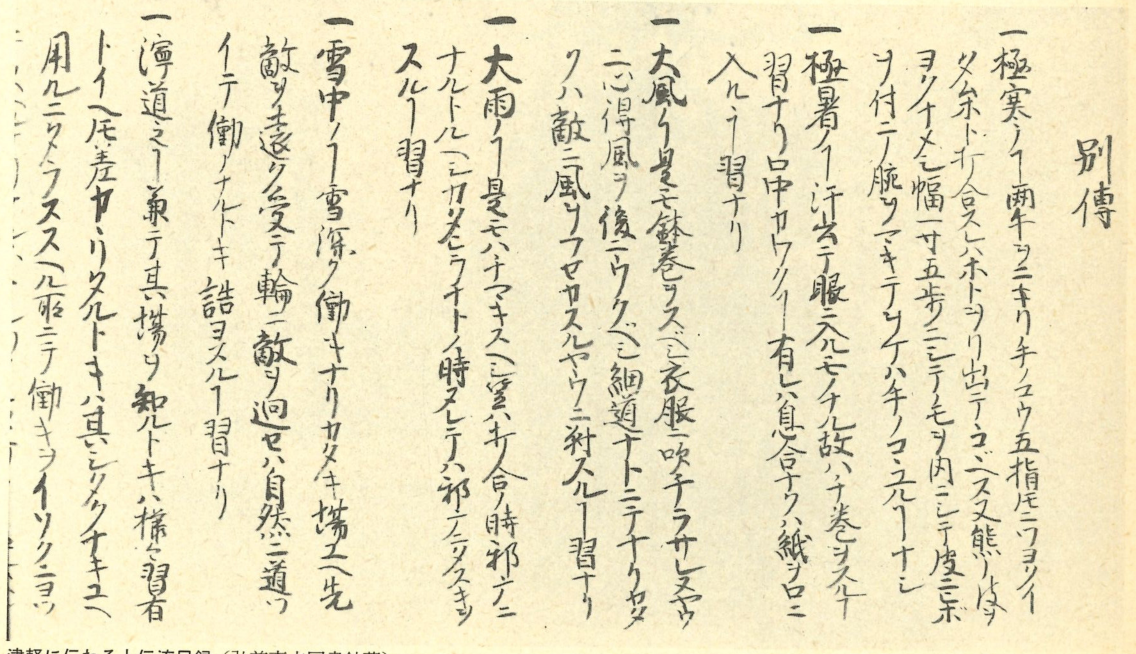
弘前城で津軽ト伝流の形を示す小山秀雄氏(右)と、小山秀弘氏



二十二か條にわたって、気候条件、地理的条件、相手の武器、相手の人数などに対応して、それぞれどのように闘うべきかを具体的・合理的に分析して、目録に記したものである。

一、極寒　一、極暑
一、大風　一、大雨
一、雪中　一、濘道
一、溝間　一、坂中
一、戸入　一、敷居踰
一、灯火隠形　一、闇夜
一、柄取　一、居合々
一、無刀合　一、棒合
一、槍合　一、矢止
一、甲冑太刀打　一、馬上
一、歩行立　一、八方詰

極寒　熊の皮をよくなめし、幅一寸五分にし、毛を内側にして腕に巻けば、極寒といえども手の凍ることなし。
大風　鉢巻をして、風をうしろに受けること肝要。
雪中　敵を遠くうけて輪に回せば、敵が自然に道をつけてくれるから、雪深くとも有利に戦うことができる。
濘道　足を静かにふみ定めよ。両足一様に踏むべからず。片足ずつ、浮かすようにすること。
棒合　棒は刃もなく先もない。勝負となっても、一打深手をうけても死ぬものではないから、打たせておいて、かまわず踏み込んで斬れば勝ちを制す。


別傳

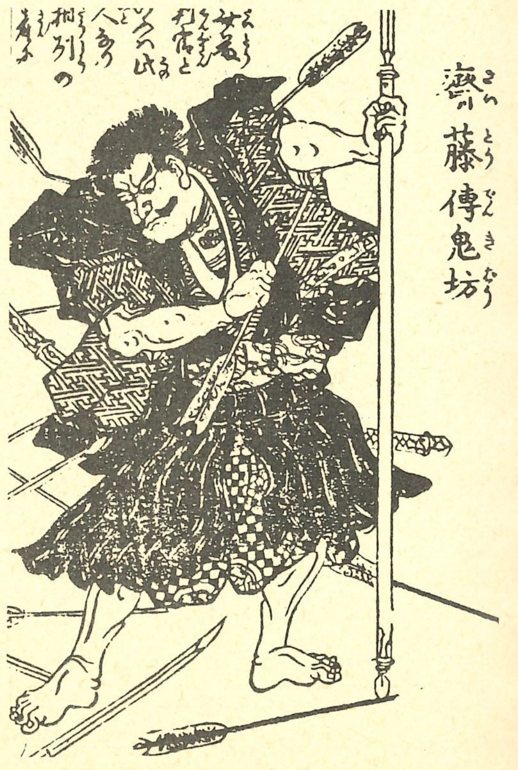
津軽に伝わる卜伝流目録（弘前市立図書館蔵）

このように、きわめて細かい注意が記されている。津軽に伝わった、「卜伝流目録」からは、抽象に流れず、時代を生き延びるサバイバルの技術としての卜伝の剣の側面がうかがわれるのである。

時代には時代の剣がある。

塚原卜伝は、戦国動乱の時代に戦闘の技術を教える兵法者としてもてはやされ、天下にその剣が広がっていったのである。しかし江戸時代になって、隆盛を誇った剣法は卜伝の流派ではなかった。

柳生新陰流の祖柳生石舟斎、一刀流の祖伊藤一刀斎などは、塚原卜伝より半世紀以上も遅く生まれて来た武芸者である。戦国時代の終わりとともに、時代を風靡した卜伝流はその役割を終え、急



卜伝の弟子斎藤伝鬼坊（『武者修行巡録伝』より　綿谷雪氏蔵）

剣聖塚原卜伝と卜部吉川家

卜部吉川家は大鹿島命を祖とし鹿島神宮において神卜を司る役目をもつとともに、大行事座主職として代々鹿島神宮に奉仕する家柄である。

塚原卜伝は延徳元年（一四八九年）二月鹿島中古流を伝え流祖国摩真人から数えて五十代卜部覚賢の次男として生まれ、幼名を朝孝といった。彼は幼い時から実父に鹿島中古流を学び、鹿島城二十三館の一、塚原城主塚原土佐守安幹のところへ養子にいってからは、養父から香取神道流を学び、生来の天禀と錬磨により十歳代ですでに武勇の人となっていたといわれている。

卜伝は養子に行ってから名を新右衛門高幹と改め第一回の回国修行に出たのが永正二年十七歳の時で、十五年に帰郷するまで多感な青年時代を十三年間修行に費やし、十数回の真剣勝負、数十回の合戦に参加したといわれている。

帰郷した卜伝もすでに三十歳、いかに戦国乱世とはいえ、恨みも憎しみもない多数の人を殺傷した反省と剣について深い疑問を抱いての帰郷だったのではなかろうか。

卜伝は鹿島神宮に一千日の参籠に入り、剣は殺人剣ではならぬ、活人剣、人を正しく活かす道でなければならぬと悟り、その悟りを具現するために神域でひそかに剣を磨きついに「一つ太刀」を完成し、これが生家卜部吉川家に伝わる中古流の神髄であるところから、卜部の伝統を継承する意味で卜伝と号することになったのである。

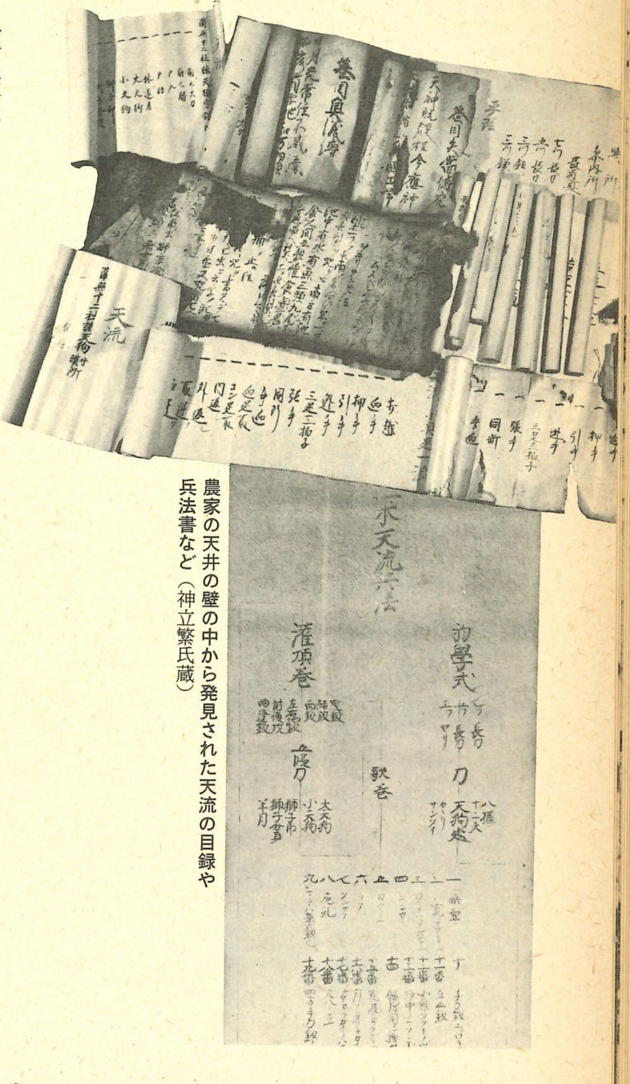
また卜伝は参籠中に神託を得、「心を新たにして事に当たれ」という簡単ながら深遠な言葉に新当流と称したといわれる。

卜伝は大永二年第二回の修行に、弘治二年第三回目の回国に出発し、足利将軍義輝、義昭、北畠具教等を指導し、また甲州武田家に招かれて家臣に教えた様子が『甲陽軍鑑』等に記されており、永禄年間帰郷してからは悠々自適の生活を営み、元亀二年三月十一日に八十三歳の生涯を終えた。

没後塚原家は佐竹氏により滅亡したが、生家卜部吉川家は兄常賢以後連綿として鹿島新当流宗家として継承されている。

以上のごとく鹿島の剣或は鹿島新当流が武神鹿島大神の神示により創始されたことにより毎年鹿島神宮祭典には新当流門人が神輿警護の任に当たり、十二年ごとに行われる御祭船の盛儀には甲冑姿も凛々しく船上において、路上において警護することを慣例としているように鹿島神宮とは密接な関係を保ちつつ今日に至っているのである。

（吉川浩一郎）



農家の天井の壁の中から発見された天流の目録や兵法書など（神立繁氏蔵）

速に衰退していったのである。

塚原卜伝の弟子の一人、斎藤伝鬼坊は、鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮に参籠して天流を開眼したと伝えられる。

最近、茨城県筑波町の一軒の農家から、天流の目録・伝書などが発見された。錦の袋に入ったまま天井の壁の中に塗り込められていたもので、江戸時代の中ごろのものである。

これらの文献からは、伝鬼坊が天流を創始した当時の単純な内容が、時代を経てどのように変質していったかがうかがわれる。

剣の道は神秘化され、宗教的な雰囲気が強く加えられていく。そして、剣の奥儀とは、技術を超えた、神仏と一体となる境地であると記されている。

天流へ入門する者への起請文には、さまざまな守護神・本尊に祈願して、神仏の加護を得なければならないと記されている。

津軽の卜伝流と筑波の天流の二つの流れは、同じ塚原卜伝から始まっている。



天真正伝香島神道流の剣術

日本人好みの剣の精神——絶対的矛盾の自己同一

豊田　剣というのは非常に危険なものでしてね。これで闘うときには前方に死があるわけですよ。原則として死がチラチラと点滅しているわけです。これを乗り越えて闘うには、やはり何かそういう信仰というものがいりますね。そこからある人は神道に入りますし、ある人は仏教、剣禅一致といいまして禅の道に入ります。そういうものがないと、死に対する恐怖を乗り越えて、そして一歩踏み込むということはできないと思うんですよ。

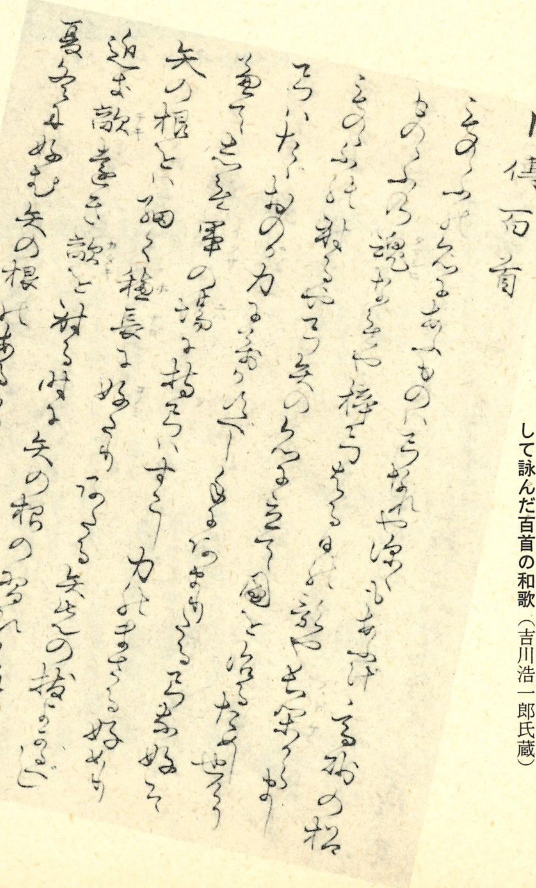
ということは、卜伝は死を乗り越えるということに、精神統一ということで非常に苦労したんだと思います。それは「一の太刀」にまたつながって、自分は自分なりにそういう一つの精神統一、無我の境地に達して、いわゆる仏教でいいますと生死一如といいますか、死んだつもりで生きかえる。新しい哲学語でいえば絶対的矛盾の自己同一といいますか、そういう背反するものをなんとか統一しようと、そういうことが彼なりにあったと思うんです。だからそういう点で一つの精神主義として、大勢の弟子にたいへん威圧感を与えたと思いますね。と同時に、またあの辺から始まって精神主義というものがずっと近代にも流れているわけです。ですから、剣と精神主義というのは、かなり日本独特のものだと思いますね。日本の文化と言えるなら文化でありますし、危険な思想と言えるかも知れませんね。

——ご自身が経験なさった戦争というもの、その下地にも流れていたわけですね。

豊田　それは剣というものは武器ですから、一つの国ならば、武力をたくさん持てば、やっぱり戦争もしたくなるし、侵略もしたくなるわけです。大国は侵略するというのは、戦争の文学を勉強してわかった一つの法則なんですが、というのは小国は侵略出来ないという、非常に簡単な話ですけれども。

このことはまた、渦中にいるとわからないけど、あとから振り返ってみると、武力が増大すれば必然的に侵略につながる可能性が増大するということなんですね。

と同時に、非常にいい刀を持っていれば、ちょっと人を斬ってみたくなりますし、それからそのいい刀を持っているということがその人の信仰なんですね。「一天剣によって寒し」とか「電光影裏春風を斬る」とかね。単なる技術ではなくて、つまりテクノロジーではなくて、非常にアイデオロジカルな、イデオロギッシュなものに昇華するわけで



卜傳百首

卜伝百首　卜伝が晩年に武士の心得などを託して詠んだ百首の和歌（吉川浩一郎氏蔵）



無手勝流の卜伝（立川文庫より　足立巻一氏蔵）

す。そういうことが日本人は好きな民族なんですよ。

最近の事件でぼくが非常にショックをうけたのは三島さんの死ですね。三島由紀夫さんが剣道を勉強して——剣道を勉強するのは結構ですけれども、剣の道というものをあの人なりに考えて、そして最後の辞世なんか読みますと、太刀の鍔鳴りに堪えてきたというようなことを詠んでいます。ということは、剣の非常に危険な側に入り込んでしまったのではないか。もともと、卜伝あたりが考えた剣の道というか、兵法というか、それはやはり護身の術であったろうと思うんです。ですが、それが後世だんだんと日本精神の精髄であるというような精神主義と結びついて、そして太平洋戦争中でも、刀を持って行けばおれは強いんだ、安全だ、戦いの神が守ってくれる。弾丸が飛んで来ても、爆弾がすごく炸裂するところでも刀を持って行けばおれは安全であると、そういう考え方にかなり影響を及ぼしていると思いますね。

ですから、例えば太平洋戦争中に飛行機で、あるいは特攻とか、特攻でなくても前線へ行くときに、指揮官が軍刀を持っていきますね。そうすると、軍刀で磁気コンパス、羅針儀が狂ってしまうんですよ。それで、指揮官がそこへ来ると、コンパスが狂ってしまうというので操縦士はいやがるんですよ。そんなことおかまいなしで、中には二人くらい軍刀を持って来て、コンパスが狂ってしまうということがあったのです。だけど、やっぱり死地へ赴くときには自分の愛刀を持って行けば、それで死を前にしてなんとなく精神的に安定性を保てる、そういうような考え方が日本人の精神構造です。

一見勇壮に見えて、あれは自分の動揺を静めるための呪術的な効果を果たしていたとも考えられると思うんです。

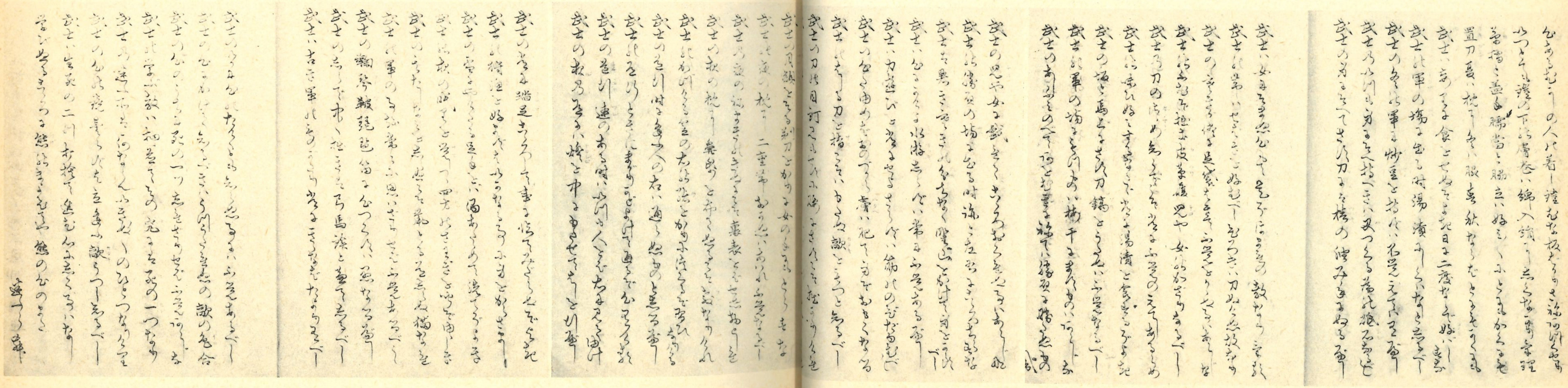
——刀や剣というものが、日本人独特の、いってみれば美意識のようなものを作り上げて来ている面がありますね。

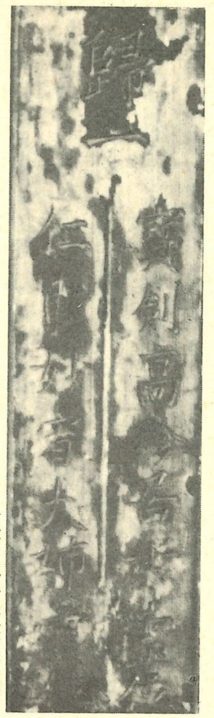
豊田　私も戦争中にはおやじが買ってくれた日本刀を持っていたんです。戦争中には名刀だというので、素晴しいなあと思ってながめていました。

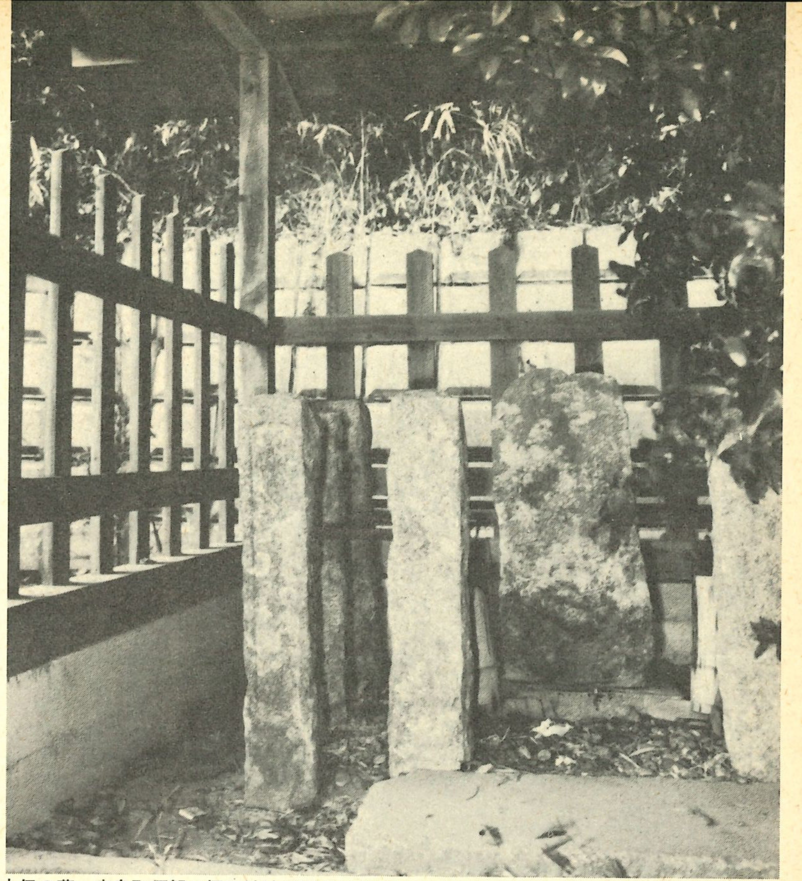
ところが、最近ですと、先日も岐阜県の関へ行っていい日本刀を見せてもらいましたが、やはり何となく恐い感じがしますね。

こんないい刀を持っていると、人を見ると斬りたくなるんではないかとか、自分自身が腹切ったらどうなるんだろうかとか、一種のノイローゼみたいなものかも知れませんが、不安感を覚えますね。

マッカーサーなんかも大好きだったそうですけど、外国人というの




卜伝の位牌（長吉寺蔵）


卜伝の墓　鹿島町須賀の塚原城址の近くにある

は、不思議に日本刀が好きです。まず形がいいし、やはりあれだけの素晴しい切れ味の刀は、世界でもないのではないでしょうか。

武力をたくさん持てば、持つだけ危険だということで、日本が太平洋戦争に入ったのも、日本がたいへんな武力を持ったことが一つの原因だと思うんですけどね。

その点でも、剣というものは武器であるとともに信仰のシンボルであるだけに、今まで民族の運命、国の運命にも何かかかわりを持って来た。またそういう影響を与えて来たと、そんな気がいたします。

塚原卜伝の位牌には、「帰一」――一つに帰るという文字が刻まれている。

元亀二年（一五七一）、享年八十三歳であった。時あたかも信長の天下統一がようやくその途についたばかりのころであった。

卜伝は、時代を風靡した「一の太刀」を「帰一」という文字におさめて戦国の人生を全うした。

「武士道とは死ぬ事とみつけたり。」

江戸時代、山本常朝の『葉隠』によって日本の武士道倫理の典型が生まれたといわれる。

しかし、ここに塚原卜伝が晩年弟子に書き送った百首の和歌がある。その一首に

　武士(もののふ)の学ぶ心は押しなべて
　　その究(きわま)りは死の一つなり

とある。

『葉隠』が世に出る二世紀前、塚原卜伝は武士の究極的な境地は死にありと詠んでいたのである。

武者修行の実態

岡田一男

武者修行のはじめ

武者修行のはじまりは、応仁・文明（一四六七〜八六）のころからといわれている。このころ、香取の飯篠長威斎はすでに老い、鹿島の松本備前守は少年から青年期、そして、塚原卜伝や上泉伊勢守はまだ、この世に生を享けていなかった。

新当流宗家吉川氏蔵の『新当流正統之血脈』及び「新当流和歌序文」によると、鎌倉時代のはじめ、卜伝の先祖である吉川長慶が諸国を回遊して鹿島の武術を高揚し、武蔵、下総にはたくさんの門弟があった、と見えている。そして、長慶の門人平山末栄は剣技特にすぐれ、鎌倉にあって諸士の師範となって武者所に起用された、とある。

これは、足利末期にはじまるいわゆる武者修行と同一にみていいのか、それとも鹿島の剣の紹介程度のことなのか明瞭でないが、通説を遡ること約二百五十年も前に武者修行なるものが実在したことは刮目(かつもく)すべきことであろう。

武者修行の目的

武者修行の目的は、自分が修行した武術の実力を諸国をめぐりながら、国々の武芸者と立ち会って試してみることである。

その間、もし自分より勝れている者があれば、師弟の礼をつくして教えを乞い、よりいっそうの実力をつけることにつとめ、逆に教えを乞う者があれば、流儀の弘流拡張のため、あえて指導をおしまなかった。

第二の目的は、諸国回遊中、幸いにして自分の実力が認められて仕官がかなえられれば、それより出世の糸口を見つけようとする、つまり就職運動のためであった。

第三は、諸国遍歴中に、国々の風俗、習慣、地形、特に戦力などを調査して、この情報を敵側に売りものとし、その代償として仕官の道を求めるようなこともあった。

『剣法略記』に、

「むかしは武者修行ということ、人々常に心にかけしことなり。これは遠近にかぎらず国々へ行きて、その地、その所にて名の聞えし方を問いたずねて、業学びなどを試み、ここかしこに止まり学びならわしたるに、そのまことは国々の風俗、国主城主の様子、士卒の強弱、和不和、兵器のたしなみ方をも見聞し、かつ地理をもはかり知ることを心とする業なり」

とあるように、表向きは武者修行であるが、実はスパイ的行為が目的であった。


応仁の乱（真正極楽寺蔵）

武者修行の実態

応仁の大乱（一四六七〜七七）によって、諸豪族の中には、あるいは浮上し、あるいは没落した者も多かったから、多くの浪人が世にあふれた。

浮上した豪族は自衛のため、武芸練達の士を求めたから、浪人はしていても実力次第では仕官の道も開けたし、出世の機会はじゅうぶんあった。そこで浪人たちは夢を求めて武者修行の旅に出たのである。

それらは『室町日記』に、足利十三代将軍義輝が、三好長慶と一戦に及んだとき、処々方々に隠れ住んでいた浪人、あるいは武者修行の途上、しばらく滞留していた武士どもを集めて、追討軍を編成した、と記されていることによっても証される。

これは天文十九年（一五五〇）のことであるから、当時応仁の乱によって禄を離れた浪人、武者修行に名を借りた浮浪士が、相当巷にさまよっていたことが知れる。

さて、一戦の結果、雇主側が勝てば、それ相当の報酬が期待できるが、負ければ一命を失なう危険もじゅうぶんあった。危険とは知りつつも積極的に徴募に応じたことは、永禄元年（一五五八）五月、六角、松永対陣の折、戦死者の中に武者修行の男がいた、と記されていることによってもわかる。

ところで戦闘員を募集する場合、雇い主にすれば有能な武芸者は欲しいが、じゅうぶん警戒もしなければならない。そこで、浪人たちは雇い主を信用させるために、報酬は論外として臨時の雇兵となって戦闘に参加し、手柄を立てて後、正式に任官するという約束をする。これを陣場借りといった。

有名な甲州流軍学者小幡勘兵衛景憲も、関ケ原の合戦に井伊直政の陣場を借り、大坂冬の陣では富田越後の陣場を借り、最後に徳川方について出世の幸運をつかんだという。宮本武蔵が大坂の陣に豊臣方に味方したのも、陣場借りの部類とみることができよう。



『武者修行巡録伝』より（綿谷雪氏蔵）

修行者の七難

彼らの大部分は足利末期の戦乱による犠牲者であるが、敗戦とはみじめなもので敗者には何の保障もない。だから世の悪戯を嘆きつつ人生をあきらめる者、世をすねつつ落伍していく者、だが中には臥薪嘗胆、難行苦行しつつ武術への執念を燃やして再起をはかる者など人それぞれであった。しかし、いかに武者修行者であろうとも生活上の収入のない限り、それはみじめなルンペン同様であった。

『合伝流武教私言』は、武者修行者たる者は七難を克服して、身を鍛え、心を練り、武道を成就させなければならないことを教えている。

七難とは、次の七項目である。

一、寒天、炎暑、風雨に身をさらして嶮山遠路を歩行す。

一、暮野に臥し、山に宿す。

一、路金用糧も貯えず、飢えを凌ぎ、衣服も着たままで寒さを防ぐ。

一、国々に合戦があれば陣場を借りて手柄を顕し、あるいは武芸者に逢って仕合勝負を決し、あるいは辻斬り強盗を斬り伏せ、あるいは取り籠もる者を捕える。

一、悪霊悪風ある物凄い場所、または妖狐悪蚆等の害あって人の通らない所を独り往来する。

一、囚人と成って牢獄に下り、勇力智弁をもって是を脱出する。

一、わが身を卑賤に下し、農民のもとで草鞋を作り、鎌鍬の業をなしつつ渡世を営む。

右の項目を一瞥しただけで、当時の武者修行者日常の実態が概ね推測できよう。

卜伝と秀綱の場合

七難克服を旗印とする一般修行者とは対象的に、上級武芸者は門弟を引きつれて威風堂々、四囲を圧する豪華な回国修行の旅を続けた。ここに塚原卜伝と上泉伊勢守秀綱を例として実態を探ってみよう。

卜伝は延徳元年（一四八九）、鹿島神宮の神職であり、剣の名家である吉川家に生をうけ、幼時から鹿島の剣を厳しく指導された。十歳のころ、鹿島の支城である塚原城主新左衛門安重の養子となった。養祖父土佐守安幹は、かの飯篠長威斎の高弟であるから、以来新たに香取神道流の指導をうけ、剣豪として長じていく、まことにめぐまれた環境にあった。

卜伝には、国摩真人の後裔として、鹿島の剣を伝える正統者であるという自負があったから、塚原城主という社会的地位よりも、剣の完成こそ卜伝にとって生涯の念願であったに違いない。だから、応仁の乱からほうり出されたルンペン武芸者とは天分、毛並、覚悟、環境など、すべて出発点から異なっていたのである。

秀綱の場合も同様である。

上泉家は代々上野国（群馬県）上泉城城主の家柄である。御曹子秀綱は頭脳明敏、度量宏大、かつまた、体軀偉丈で膂力衆にすぐれ、武将として完璧な条件を備えていた。天晴れ兵法家をめざして、あこがれの鹿島に遊学したのが十五、六歳の少年時代であった。

ところが、当時鹿島の地は城主廃立問題に端を発し、一族鼎のわくがごとき大動乱で、師と仰ぐ松本備前守政信も高天原の決戦で壮烈な討ち死にをとげるというありさま。しかも、卜伝は第二回目の回国中であったから、落胆した秀綱はついに鹿島を去り、愛洲移香斎について陰流を学び、やがて新陰流として大成することになる。

秀綱は故山に帰って箕輪城主長野信濃守業正に仕えたが、永禄六年（一五六三）武田信玄に滅ぼされた。信玄は秀綱を高禄をもって召し抱えようとしたが、節を守って新陰流弘流の旅に出立した。

西国に出た秀綱はいたるところで歓待をうけ、北畠具教、宝蔵院胤栄、柳生宗巌、丸目蔵人等、当世第一級の剣豪がいずれも門人となって教えを乞うている。その上、京都では将軍義輝に剣技を披露し、正親町天皇の天覧にも供する栄誉を担うなど、浪人武芸者など及びもつかない存在であり、武芸者も正にピンからキリまでであった。

卜伝、秀綱ともに門人に名将、貴人を多数擁していたから当然、収入も多かったであろうし、したがって優遇もされたことであろう。

『甲陽軍鑑』には、卜伝の兵法修行は、大鷹を据え、乗り換え馬をひかせ、門人数十人を引きつれて馬上豊かに行列を組んだと記され、秀綱もまた回国に一族門人を擁して堂々たる行列をつくったという。話半分としても相当なデモンストレーションで深編笠に草鞋ばきの武者修行イメージとは雲泥の差である。

このような華美な回国修行は、卜伝、秀綱の派手好みの性格があったかも知れないが、望まないにしても、門弟としては剣聖剣師に対する礼としてできうる限りの歓待をしたということであろう。また、京八流への対抗意識からのデモであったとも考えられないことはない。いずれにせよ、ただ、言えることは、卜伝、秀綱ともにひたすら流儀の正統者としての道を選んだ純粋の修行者であったということである。

武者修行と試合

卜伝の剣歴の概略を『卜伝百首奥書』は、次のように記している。

「真剣の試合十九度、戦場のはたらき三十七度、いちども不覚をとらず、矢きず六か所以外傷一つうけず、立合って敵を討取ること二百十二人と云へり。」

鹿島動乱の折、卜伝は回国中で留守であったから右のような戦場往来、試合の数々はほとんど、他国での出来事であったろうが、それにしても恨みも憎しみもない幾多の人々を殺傷して平然たるところは、正に戦国の異常心理と言えよう。

また、宮本武蔵は『五輪書』に、十三歳の時、新当流の有馬喜兵衛との勝負に勝ってから、佐々木小次郎との巌流島の一戦に勝利した二十九歳までの間に六十余度の試合をしたが、一度も敗れたことはなかった、と自叙している。

それら数々の試合の中で、最も人口に膾炙されているのは、吉岡一門との三回にわたる決闘と、佐々木小次郎との巌流島の一戦であろう。

両試合を通じてみると、武蔵は遅刻することを常套手段としている。そこで武蔵は卑怯者の汚名をきるのであるが、武蔵にすれば手強い相手に対する兵略手段なのである。つまり、わざと時刻を遅らせて相手の心をいらだたせる作戦にほかならない。

戦国時代というのは、正論であろうとなかろうと弱肉強食の無茶苦茶がまかり通る世相であった。当時の武将も生きぬくためには遠交近攻の策や婚姻政策によって親交を持続した。しかし、一度利害が相反すれば、それらの誓約はたちまち反古にして相手に奇襲攻撃をかけることを恥としない。卑劣な行為は許されないにしても、生きるため、勝つための手段は兵略の内として許容されていたのである。

個人の勝負においても同様で、生か死かの決戦において、駆け引きや戦略はこれまた兵法の内であり、当然のこととして許されていた。

武蔵の行動を卑怯と評するのは、儒教によって武士道が律せられるようになってからの解釈で、戦国乱世の背景を考慮しつつ、彼らの試合の実態を眺めることが肝要であろう。

（国学院大学教授）

剣豪番付異考

稲垣史生

剣豪を選ぶ剣豪天狗

昭和四十二年のこと、「週刊朝日」の企画で「剣豪列伝」なる続きものを連載、後に単行本にするというものがあった。登場させる剣豪は十人、それを十人の時代もの作家に書かせ、作品上でも試合をさせようという試みであった。「朝日」らしい頭のいい企画である。

ところがそれにまたおまけがつき、作家の執筆依頼に先立ち、取りあげる十剣豪の選出にこの道の研究家五人を招いて記名投票をさせた。研究家といえばカッコいいが、私など実はこの道にありがちの〝お天狗〟にすぎず、今から思えば見当はずれの名を書いたと思われるふしもある。が、「週刊朝日」が取りあげたほどだから、四十二年前後は剣豪ブームであり、研究熱も最高なら、研究者もこの道ひとすじの人々であった。招かれたのは藤島一虎・綿谷雪・武蔵野次郎・尾崎秀樹、それにわたくし稲垣史生であった。

ところで本題の「剣豪番付」だが、だれが横綱でだれが大関かと、二百流もあった武芸者をランクづけることはむずかしい。強弱・人柄(ひとがら)・業績など、格付けの条件も複雑で一概には言いがたい。そこで前述の「週刊朝日」の前座、研究者五氏による投票が大いに参考になるというものだ。

選挙の方法は各自に投票用紙が配られ、剣豪十傑と思う者を書き出せという編集部の注文であった。条件や視点につき質問は出たが、とにかく「常識的に見て」というだけの編集部の答えであった。そこで各自は思い思いに、十人の剣豪名を書いて出した。したがって同じ剣豪名を何人もが書き、逆に知名の剣豪でありながら案外名の出なかった者もいる。

それらの結果を総合すると、記名された剣豪は二十八人、得票数を上位から並べると次のとおりである。

四票　柳生十兵衛
三票　上泉伊勢守・伊藤一刀斎・宮本武蔵・千葉周作
二票　小野次郎右衛門・針谷夕雲・白井亨・千葉栄次郎・榊原鍵吉・塚原卜伝・宝蔵院胤栄・堀部安兵衛・男谷精一郎・島田虎之助・高柳又四郎
一票　残る十二人が一票ずつだったが、柳生宗矩・桃井春蔵ら高名剣士もこの中に入っていた。

私としては意外な結果というほかはない。

これでもし番付を作れといわれれば、横綱に柳生十兵衛と上泉伊勢守、大関に伊藤・宮本・千葉ということになる。一刀流の開祖小野次郎右衛門、鍋ぶたで敵刃をふせいだ塚原卜伝の関脇も不満だが、柳生新陰流の祖宗矩、〝位（品位）は桃井〟といわれた桃井春蔵が十両クラスに落ちるのは何としても腑に落ちない。

これは相手に対する視点の置き場や、評価の基準をあらかじめ決めなかったからではないか。各自ばらばらの視点では、このように票が割れるのは当然であった。今回の首相選挙によく似ている。

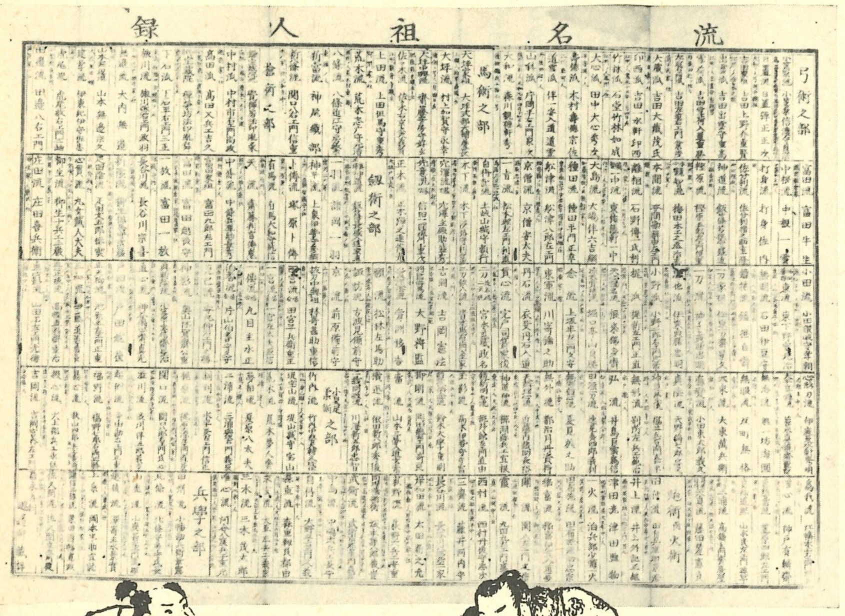
まず虚像の垢を落として……

しかし編集者はそこが狙いだったのかも知れない。研究者・専門家といわれる私たちが、それぞれ異なる観点から選び出す人物を見よう。政治選挙なら知名度や、党籍に左右され、勢い、常識的な結果しか出ない。それでは雑誌としておもしろくないので、票が割れ、意外な人物が飛び出す、そこに新しい剣豪像を求めたのかも知れない。

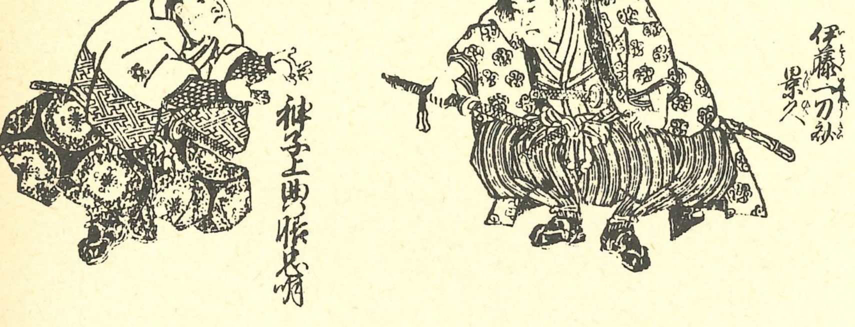
そうなら私が後藤又兵衛や、堀部安兵衛をあげたことで編集部をよろこばせたかも知れない。後藤又兵衛は豪傑に違いないが、滅びゆく豊家を見捨てることができず奮戦して死ぬ。

堀部安兵衛の高田馬場十八番斬りは虚構、たった二人を斬ったにすぎないが、松の廊下事件の不公平な裁きに憤慨、討入りの急先鋒となったところが義に勇む武士として後藤又兵衛に共通するものがある。

私は選定の基準をそんな男らしい、さっぱりとしたところに置いたようだ。双方ともに強く、剣豪の名に恥じぬからいいようなものの、はたして「剣聖」または「名剣士」の名に適合しているだろうか？　今日ではいささか疑いをはさまざるをえない。


流名祖人録

流名祖人録（渡辺一郎氏蔵）



弘治元年（一五五五）鉄砲の輸入以来、戦場における戦術は一変して、接近戦の太刀打ちはほとんど意味を失った。

戦闘方式はまず遠距離から鉄砲で撃ちまくり、代わって弓組が前線に出て矢をあびせかける。このふたつの飛道具で、さんざん敵をたたいてから、待機していた騎馬隊が飛び出して敵を蹴散らした。

かつての合戦のように名乗り合い、一対一で太刀打ちを演じることはほとんどなくなった。刀を抜き合わせ、斬り合う前に勝負がついていたのである。

しかし妙なことに、その戦闘方式が定着したころ、剣術が盛んになったのはどういうわけか。特に戦場へ出て、直接戦うことのない将軍や大名の間に、剣術を学ぶ者のふえたのはなぜか？

実は永い戦乱の世に、人間どうしの信頼感がまるで失せてしまったからである。将軍も大名も、対談中にとつぜん相手から斬りつけられることがあり、戦争とは無関係に、自身で護身用に剣術を習得する必要があった。それは将軍・大名ばかりでなく、中級・下級の武士だとて変わりはなかった。

こうして武士は上から下まで、戦いより護身のために、刀槍または柔術を身につけるようになったのである。大いに励んだことはいうまでもない。

だが、大坂の陣が終わり、幕府が文治政策を取ると、武士の精神支柱たる武士道の観念に変化が来た。刀の操法は実際に血を流して殺し合う技術ではなく、単に形式的・儀礼的、つまり典礼作法の一分科に堕してしまった。その上、折から隆盛をきわめた儒学の影響を受け、武芸は武士のたしなみとも、精神練磨の方便とも考えられるに至ったのである。

他家を訪問するには刀を右手に持ち、敵意のないことを表現するしきたりや、書院では刀の柄頭を左にして刀架に掛け、来客に対し害意のないことをあらわしたのもこのころが始まりであった。武芸はもはや敵を倒すためではなく、武士のたしなみとして身につけたにすぎない。

ふつう、武術の進歩はそこまでであった。

だから剣豪を選ぶとすれば、戦国末期から江戸初期へかけての、一対一の勝負に強い者、または武士道観念の変革期に、精神練磨の方途として道を切り開いた者ということになる。例えばそれは上州大胡城主だった上泉伊勢守で、城を失ってから剣術に打ちこみ、新陰流を編み出して諸国を漫遊、将軍足利義輝にまで、その護身用として秘術を伝授している。塚原卜伝も新当流を創始し、一対一の剣の秘術を多数の門弟に教えた。いずれも剣豪というべきだが、はたして剣聖または名剣士といえるだろうか。"剣"の意義をさらに深め、精神的にその秘奥に達した者こそ真の剣豪ではなかろうか。さらにそれを自身だけではなく、広く門弟に教授し、治国・修身の糧とした者でなければならない。いったい、それはだれなのか?

宮本武蔵・柳生宗矩こそ適格

その条件にかなう剣豪として、私はやはり宮本武蔵をまずあげたい。

武蔵は天正十二年(一五八四)播磨国宮本村に生まれ、十三歳で新当流の有馬喜兵衛と試合をして勝ち、以来、諸国を遍歴して各地の剣士と戦ったが、一度も敗れたことがなかった。相手は槍術宝蔵院胤栄の一門、鎖鎌の名手伊賀の宍戸梅軒、江戸ではタイ捨流剣士波多野二郎左衛門、および神道流棒術者夢想権之助らで、武蔵はどんな種類の武術にもりっぱに対抗できたことを証している。横綱の一人に武蔵をあげたのは、実はすべての勝負に勝ったことではなく、いかなる武器、いかなる流儀にも対抗できた技術の独創性にある。

その果て編み出したのが二刀流であり、寛永十七年(一六四〇)修業の旅をおえて熊本の細川家に客分として招かれてから、多くの門弟を育てたことでも横綱格として申し分がない。何より彼が名人たる所以は、寛永二十年(一六四三)六十歳の時、岩戸山観音の霊巌洞にこもって『五輪書』を書きあげたことである。その中で武蔵は、剣の一生をふりかえって、

「太刀の徳は世を治め、身を治むる事」

と結論づけている。その境地に達したことと、それに剣の哲学を創始したことに、まず横綱の資格じゅうぶんということができよう。

次に私は柳生但馬守宗矩をあげたい。「剣豪列伝」ではわずかに私の一票しか入らなかったが、この人こそ完璧に横綱の条件を備えている。宗矩は元亀二年(一五七一)新陰流の名手——石舟斎宗厳の子として生まれた。京に近いだけに、戦国期には柳生の庄も捨てて落ちのびることもあったが、苦難のうちにも宗厳は絶えず新陰流を子の宗矩に教えこんだ。

家康の力により戦国の世が終わったとき、幸運にも宗矩はその家康の知遇を得て徳川家に仕えた。

慶長五年(一六〇〇)関ケ原の戦いで宗矩は勇戦、「さすが剣の家柄よ」と讃えられ、翌六年、三十二歳で将軍秀忠の兵法師範となった。さらに家光が生長するとその師範にも任じ、官職・禄高もどんどん昇進した。すなわち大名を取り締まる大目付となり、自身も寛永十三年(一六三六)所領一万石に加増され、大和の大名に取り立てられたのである。

この俗世的な出世よりも、はるかに宗矩を偉大にしているのは、名僧沢庵との交わりであり、その沢庵から禅の要諦を学び取り、"剣禅一如"を唱えたことである。さらにそのエキスを惜しむことなく、『兵法家伝書』を書いて門弟に教えたことによる。

この書は父宗厳から伝えられた新陰流を、心と技の両面において進化し、体系化したもので、透徹した生死観を基調としていることで無双の書ということができる。

その内容を要約すれば、常に白刃の下にある兵法者は、禅における無の境地に達せよというのだ。物事に執着したり、勝負にこだわったりしては破綻のもとである。融通無碍、進退自由なるを柳生新陰流の奥義と喝破したのであった。その真諦は宗矩作の、次の修飾なき和歌によくよみこまれている。

兵法はふかきふち瀬の薄氷
渡るこころのならいなりけり

(時代考証家)

武の神としての鹿島

吉川浩一郎

霰降り鹿島の神を祈りつつ
すめらみくさにわれは来にしを

関東の東端、黒潮洗う鹿島灘と、北浦、霞ケ浦の水郷を望む鹿島台地の中央に鎮座する鹿島神宮は、古来武道の祖神として崇敬されてきた大社である。

鹿島神宮の御祭神武甕槌大神は、日本建国の功神として、日本の神典である『古事記』『日本書紀』などにそのご功績が詳細に述べられている。

すなわち神代の昔に、天照大御神の御命令で出雲の伊那佐の浜に降りられた武甕槌神は、剣を抜いて浪の穂に逆しまに突き立て、その前に座して出雲周辺を治め山陰・山陽を統治されていた、大国主神と国譲りの会談を行うのである。

大国主神には八重事代主神と建御名方神の二人の子供があり、事代主神は「仰せの通りに致しましょう」と身を隠されたが、建御名方神は「この国へ来て小さな声で物言うのはだれだ。言うことがあれば力くらべに勝った上で物を言え」と大きな岩をさげてやって来て、武甕槌神の手をとった。すると、その手が氷や剣のように鋭いので建御名方神はびっくりして手を退こうとすると、では今度は私が握ろうというなり建御名方神の手を若葦をひしぐようにつかんで投げると、建御名方神は逃げ出し、信濃国の諏訪まで追いつめ、そこで建御名方神は、父大国主神の申すことに従って、葦原の中国は天神の御子にさし上げますと言って降参されたのである。

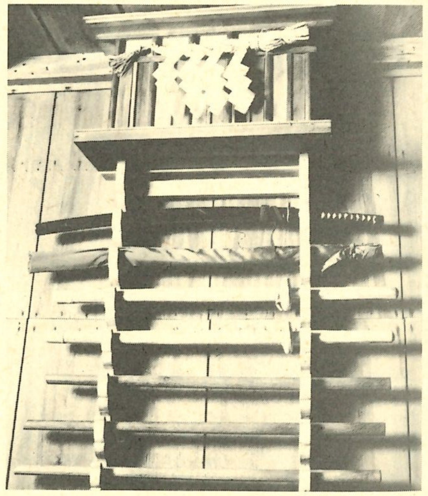
『古事記』と『日本書紀』では多少の違いがあり、『古事記』は武甕槌神一人が出雲に行かれたように書かれ、『日本書紀』は香取の経津主大神と武甕槌大神の二人が行かれたと書く。

いずれにしても武甕槌大神が出雲へ行かれたことは間違いないことであり、この出雲神話に見える武甕槌大神の行動は、真心と道理と決断力の具現にほかならないのである。

しかも前に派遣した二神がいずれも成功しなかった国譲りの交渉に軍勢も率いずに遠い国を訪れて、国を譲れというのには、譲られるべき道理がなければならないのは当然である。しかも軍勢を伴わないから襲われればいかに武神とはいえ、力には限度がある。それを行うには真に強い勇気と決断力が必要なのはいうまでもないことである。

しかも、この国譲りは話合いによって成立するのであって、血を流す争いはない。建御名方神との争いも、力くらべか、相撲という感じが強いのである。

この国譲りの後、武甕槌大神は全国を歩かれて国の統一を説き、最後に関東を訪れるのである。



鹿島新当流宗家の剣道場内



鹿島の武神・武甕槌大神（『武稽百人一首』より

当時の関東地方は未開の地であり、湖沼や内海が広がって葦などが見渡す限りに茂っていたと思われる。その一角、現在の日立市大甕を本拠地として荒し回っていたのが天香香背男である。『日本書紀』には妖星・天津甕星と書かれ、最後に残ったまつろわぬ者であるという。

武甕槌大神は鹿島に至ってここを本拠地として、副将ともいうべき建葉槌神を遣わして天香香背男を討伐した。

こうして当時の日本は残る所なく平和となり統一されたのである。ゆえにこそ武甕槌大神は建国創業の功神として尊崇されるのである。

武甕槌大神は全国平定を果たした後は、この鹿島を本源の地として、東北並びに関東地方の開拓と鎮撫にあたられ、殖産の道を未開の地に住む人々に教えられた。武神としての一面開拓の祖神、殖産の守護神と仰がれるのはこの当時の功績によるものである。と同時に東北地方に武甕槌大神を祭る神社の多いこともご神威の及んだことの現れであろう。

時代は降って神武天皇御東征のころとなる。九州を出発して東へ進む神武天皇は今の大阪の地で長髄彦の反乱にあい、兄五瀬命が亡くなられるという悲劇が起こった。

神武天皇は日神の子孫が日に向かって戦うのは天の道に背くものと考えて、紀伊国より上陸することとなった。ところが熊野で禍神の毒気に当てられて全軍が病に倒れてしまったのである。

この熊野に、高倉下という者がいた。高倉下がある夜夢を見たが、その夢の中で、天照大御神が武甕槌大神に仰せられるのに、神武天皇が苦戦しているから行って助けてあげるように。すると武甕槌大神が答えて、私が参らずとも、私が全国平定の折に携えた平国の剣を下せばだいじょうぶでしょうといって、高倉下に向かい、私の剣の名を韴霊というが、この剣を汝の庫の中に置くから神武天皇に差し上げるようにといった。高倉下が「おお」と返事をして目が覚め、夢の教えに従って庫を見ると確かに剣があった。

そこで高倉下は韴霊剣を奉持して神武天皇に献上すると、たちまち全軍が毒気から覚め元気になったのである。

こうして神武天皇は無事大和へ入国し初代の天皇として即位の式を挙げられたのである。

神武天皇は武甕槌大神の神恩を深く謝して、即位の年に使を遠く常陸の鹿島に遣わして神の宮を営み、感謝を捧げたのである。

鹿島神宮の創祀を神武天皇の勅祭により神武天皇紀元元年とするのはこの事情によるものであるが、しかし、それまでは神子神孫により武甕槌大神が祀られてきたことも当然考えられることであろう。

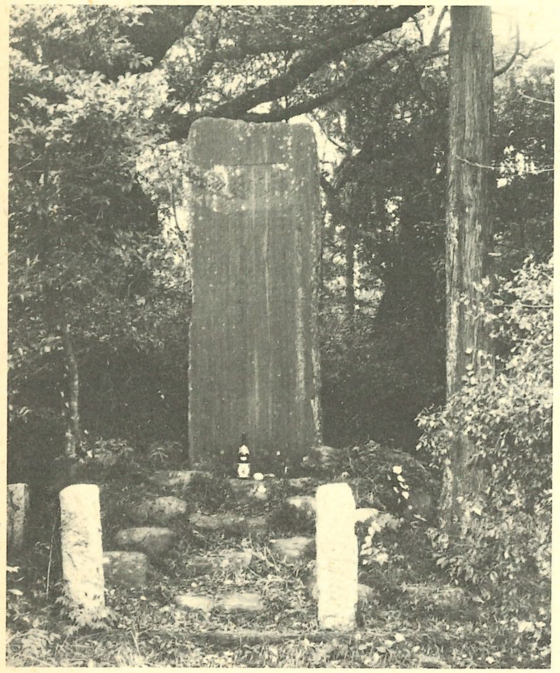
正に武甕槌大神の神威は偉大であり武神として、長い歴史を崇められてきた由縁は、出雲平定とこの神剣韴霊の霊力の強さによるものといえよう。

鹿島から東北にかけて、鹿島大助とか、お助け人形という民俗行事が古代から行われており、これは武甕槌大神が関東・東北の鎮撫の折に食糧が不足し、土民が人形の腹に食糧をつめ、あるいは背に食糧を負わせて援軍を送った古事によると伝えられている。

また、鹿島に伝わる諸行事の中にも大神の関東地方を巡行されたことを物語るものもあって、鹿島神軍が存在していたことがわかるのである。

こういう歴史の中で、大神の全国平定の折に示された強い力を授かって、武の真髄を悟りたいという者が現れるのは当然であって、崇神天皇の御代のころ、鹿島の神官であった国摩真人という者が、鹿島神宮神域の高天原という所に祭壇を築いて熱禱を籠め、ついに大神より韴霊剣の法則を授かるのである。

韴霊剣の法則とはどのような教えであるかは



鹿島神宮にある塚原卜伝の碑

っきりしないが、一閃すれば国中が平和になるという平国の神剣のことであるから、強い決断力と、神剣をふるう作法、道理などを授かったのであろう。

神代のことはともかく、刀法とか武術として伝えられる言葉としては、この韴霊剣の法則が初見ではないかと思われる。

国摩真人がこの法則を授かってから、鹿島の神官は武技に励み、各家にそれぞれの流れを伝えるようになった。

時代がさらに降れば、天智天皇二年の朝鮮半島の乱に百済を救おうとして二万七千の水軍を送った日本が、白村江の戦いに敗れ、唐の侵攻より国を護るために、壱岐、対馬、筑紫などに防人を置くことになった。

防人は、初めは全国から徴募されたが、やがて東国の兵が強いため再三にわたって東国から集められるようになった。東国あるいは常陸国の防人は鹿島神宮が集結場所となり、多くの防人が武運の長久と道中の平安を祈って旅立ったため、征旅の前途を言祝ぎ、鹿島立ちという言葉が使われるようになった。

鹿島に集結した防人たちは、鹿島神宮の神官から武技の指導を受けて鹿島立ちをした。武技とは刀術・棒術・格闘術などであり、ここに鹿島の武技が広く世に知られる基となったのである。

現在、国の選択無形文化財の鹿島の祭頭祭は、数百の若者が二メートル近い棒を組み合わせて囃す関東の奇祭として知られるが、この神事は防人の鹿島立ちと、がいせんの姿を伝えるもので、棒は古代の武器を示す。

また、鹿島の相撲祭にコトリヅカイの古語が残るが、コトリヅカイとは防人の部領使のことであって、防人と鹿島の相撲がただならない関係にあったことがうかがわれるのである。

このように鹿島神宮の御祭神は日本建国の功神として、歴代皇室の御崇敬極めて篤く、また武士の出現による武家政治の開始に伴い武神として、武将の崇敬をあつめ、とりわけ源頼朝をはじめ鎌倉幕府は常に当神宮の祭祀を慎みて神領を寄進し、徳川幕府は御社殿を造営するとともに鹿島郡の大半をもって神領・朱印地と定められるなど、報恩を感謝し御神威の発揚に努められたのである。

国摩真人によって創始された鹿島の武技は、いつのころからか鹿島の太刀、あるいは鹿島上古流、中古流などの名称で呼ばれるようになった。京八流に対し坂東七流といわれる坂東七流はまた鹿島七流ともいわれ、鹿島の神官七家が伝えたものであるという。

いずれにしても、古武道は国を平和にすべき神の業に始まり、平国の神剣韴霊剣の法則をもって濫觴とする。

鹿島神宮が武道の祖神と仰がれるのも、ものの道理を明らかにし、強い決断力を示されるところにある。道理が明らかでない武技はまた単なる人殺しの業にしか過ぎない。ここにこそ、武技が平国の神技に始まることが明らかになるのである。

（鹿島新当流宗家）

津軽の卜伝流―剣術としての卜伝流

小山秀雄

卜伝流の特色は何であろうか。

卜伝流剣術目録に

「当流ハ天文之コロ天下乱世ニテ昼夜甲冑ヲ放サザル時代ニ諸人崇敬シタル教ニテ、流儀之本意ハ甲ヲモ打割ルワザヲ第一トス故ニ打込之修練木刀ニテハ此流儀之本意ニ叶ワズト可知也」という記述がみられ、はなやかではない素朴な形が残されている。さらに刀法に即して言えば、一つの太刀に生を燃焼しつくし、一気に甲をも打ち割るほどの気迫を込めた捨て身の技を精神とし、二の太刀、三の太刀を用いないことである。

古来どんな修練の仕方をしたかについて目録から拾いあげてみると、

一、当流ニシナイヲ用イル事ハ、木刀ハ当リ強ク疵付ク事多シ、因テ互ニ労テ存分ニ打合コト成難シ、修行之実ヲ知ラス故シナイヲ以テ存分之働ヲ教ルナリ、然レドモ韜バカリ用テハ、ヲコタリ出、調子、拍子モ乱ルルユヘヲ以テ仕形ヲ教ルニハ木刀ヲ用ル也

一、免書ヲ授テ後、歯引ヲ用テ真剣之理ヲ伝フベシ、歯引ヲ修練セズシテ真剣之位ハ知ルベカラザル也。

一、フトキ柱ヲ五尺ノ高サニシテ土ニウズメ、重キ木刀、或ハ歯引ヲ以テ打込打テ剣ノスタラザルトコロヲ常ニ修練スル事当流第一ノ伝来ナリ、人ヲ相手ニスレバ、タトヘシナイニテモ人ヲ労ルユヘ打ガタシ、然レバ第一トスルワザ物マネト云也、話ノゴトクナリ寔ノ勝負ニ至テ俄ニ強ク打コトスレバ常ニ馴ザルワザニテ改ルユヘ稽古セザル者ト同前也、タトヘ妙ヲ得タリトモ、細ナル術寔之勝負ニ至テ勝利トハ成難シ、人ハ生死之場ニ至レバ心気強クナルユヘ二三所之薄手ハ知ベカラズ、然レバ少キワザニテ先ヲ打テモ勝トハナリガタシ。

一、スエ物ヲ切ルニ、壇ヲ思ヤウニ築キ、気遣モナキ死胴ヲ横タエ心ヲシズメ手ノ内ヲ和ゲ存分ニ打込ミ胴之落ザル事多シ、況ヤイソガシキ生死之場ニ至テ、常ニ修練セザルワザ俄ニ出ベカラズ、シイテ強ク打タントスル時ニ俄ニ求ルワザデ改リ稽古セザル者ト同前ニナル也。

つまり、袋竹刀で存分に打ち合う稽古から始めるが、袋竹刀では調子、拍子が乱れるので、形を学ぶには木刀を用いる。免書が授けられるほどに上達したら歯引きの刀を用いて真剣の理合を修練する。また、太い柱を土に埋めて、重い木刀または歯引きの刀をもって実戦的な強い打ち込みを修練するのが当流第一の伝来であるという。

形にみられる特色

卜伝流の形として大太刀二十五本、小太刀十六本、奥伝三本、合計四十四本が伝えられている。

大太刀
表　五本
裏　五本
折身　五本
居敷　五本
変形　五本

小太刀
表　四本
裏　四本
折剣　四本
随剣　四本

奥伝
八字二刀　二本
印可　一本

一、若干の例外を除けば、すべて打太刀（敵）の動作に応じて仕太刀が技を決める形である。すなわち相手に従って勝つということ。

一、手の内、肘切りを含めて、小手打で決める技が多く、次いで喉または腹を突く技が目立つ。

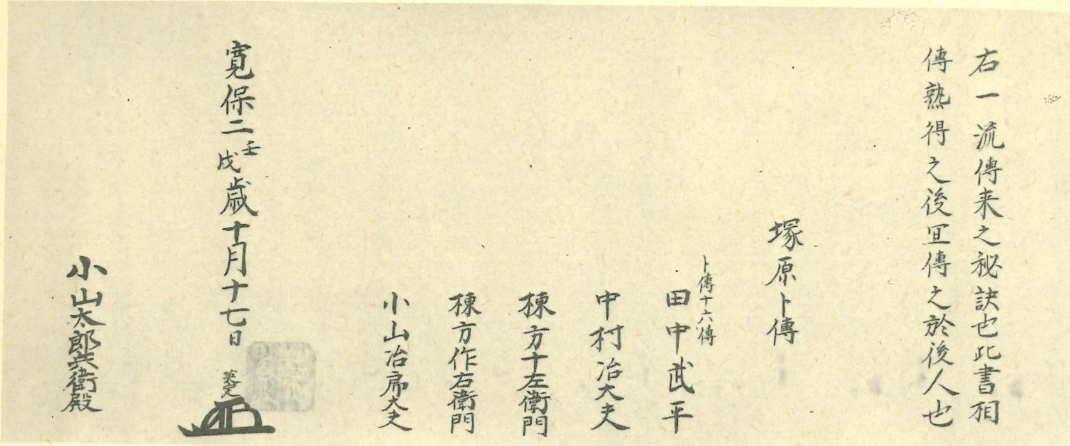
一、正面または胴を切ることによって決まる技は一本もないのは甲冑を用いた時代の形であるからであろう。

一、いわゆる八相の構えから剣先を下げて水平にしたような構えを当流では中段の構えと称し、上段の構えは頭上真上にではなく少し前に出し、やや水平に構えるのも兜をかぶった時代の流儀を感じさせる。

一、奥伝の形は三本あるが、うち二本は相手の打ちを切り落として首を切る技であり、いま一つは切り落として突く技である。

一、最も目立つ特色としては、体を左右にかわすか退くかして、相手の攻撃をはずして技を決める形が多いことである。例えば居敷五本のうち四本までもがそのようにして勝つ技である。

一、最初の形は間合を修練することから始まる。例えば、大太刀の最初の形である表一本目は、下段の構えから静かに剣先を上げて相手の左眼につけて進んでいくと、間合に接するや相手が打ちを出すが、それに構わずそのまま静かに歩み寄るだけのものである。間合、間、拍子の修練を重視したことは、次のエピソードにもうかがわれる。


右一流傳来之秘訣也此書相
傳熟得之後宜傳之於後人也
塚原卜傳
卜傳十六傳 田中武平
中村治大夫
棟方十左衛門
棟方作右衛門
小山治部大夫
寛保二壬戌歳十月十七日 英貞
小山太郎兵衛殿

卜伝流免許（小山秀雄氏蔵）

奥儀に関するエピソード

卜伝流剣術目録によれば、当流は延宝年中（徳川四代家綱のころ）越前の国（福井県）より中村次太夫が津軽に来て、棟方十左衛門清久に伝えた記述がみられ、清久より棟方作右衛門貞長を経て小山次郎太夫英貞に伝えられたのである。

卜伝流剣術免書には名目を記してあるばかりで、皆口伝となっているが、その名目の中の一つに「間　阿吽口伝」の文字がみえる。

抽象的な免書とは別に師の口伝を直接記したものとみられる卜伝流剣術目録があり、具体的実戦の戦法が記されていて興味深いのでその内容を記してみたい。

場に適した戦法

極寒の事

両手をにぎり、手の甲、五指共に強く痛むほど打ち合わすと、熱が出て凍えない。また、熊の皮をよくなめし、幅一寸五分（約五センチ）にして、毛を内側にし腕にまいておけば、手が凍えることがない。

極暑の事

汗が出て眼に入らないように鉢巻をすること。口の中がかわくことがあれば紙を口に入れよ。

大風の事

これも鉢巻をすること。衣服に吹きちらされないように風をうしろに受けよ。細道などでできなければ敵に風を防がせるように戦うこと。

大雨の事
笠、惟巾は打ち合いの時、邪魔になるので取って、鉢巻、たすきをすること。
雪中の事
敵を遠くうけて輪に回せば、自然に道がついて動きが自由になる。その時、勝負に出よ。
濘道の事
静かに足をふみ定めよ。両足を一様に踏むとすべるから、片足ずつ浮かすようにすること。
溝間の事
敵を急がすようにしかけること。
刀がとどかないように敵に見せて敵の打ち出す模様によって、片手打ちにすること。このような技が多いので当流は刀の軽いのを用いる。
坂中の事
坂を横にして敵を受けよ。坂が狭く、そのようにできず、坂の上にある時、敵はすそを払うものであるから、心得て折身折敷を用いよ。坂の下にいるときは後退しながら敵をひきよせ、虚をみて、すそを払うこと。
戸入の事
戸を打ち破って入ること。たとえ戸が破れないにしても、その勢いで敵が現れてくるものである。
敷居踰の事
敵の頭上を切り割る勢いをみせて横に払うこと。敵より横に払ったらうしろに退いて敵に敷居をこさせること。
灯火隠形の事
蠟燭を刀の鞘に持ちそえ、火を向こうにしてわが顔の真ん中にあてて向かえば敵からわが面は見えぬものである。
闇夜の事
大小の鞘を背中にさし、二刀を背中にかざし、折身に伏して敵の切りくる太刀が当たるのを合図に、片手で裾を払う。この技は修練しないとむずかしい。
柄取の事
敵に柄をとられたとき、敵がつかんだ拍子にかえして惣身で折身をもって引けば離れるものである。
棒合の事
棒は刃もなく先もないから一打うたれても突かれても、勝負となっては気が強くなって弱るものではない。かまわず踏み込んで切れば勝てる。
居合々の事
抜かせて勝負すること。
無刀合の事
左の手をさし延べて開き、敵の顔をふさぐようにして、木刀をうしろにかざし寄り、左の手にとりつくのを合図に切ること。
鑓合の事
刀の鞘を左に持ち、右に刀の柄を持って三分の二抜けば長刀となる。しかし剣術が上手であれば刀で鑓にかなわないということはない。
矢止の事
敵が弓や鉄砲で射かけるとき、羽織か袴を鞘の先につけてかざせば矢玉はこれで防げるものである。
甲冑太刀打の事
甲冑の上を切っても勝利は少ない。よだれかけの下、手の内、両脇草摺下のようなすき間を狙うこと。
馬上の事
輪をかけて敵をなやますこと。敵が大勢であれば駆け散らし乗りころばす心得が第一である。強いて切ろうとせず、切りちらす心得がよい。歩行立からは、ひざより下を狙うこと。互いに馬上であれば敵を左にうけること。互いに右にうけては落馬すること多く手綱を切られることもある。軽い刀を用いるのが習いである。
歩行立の事
馬上の敵へは近寄ってひざを切ること。馬上から輪をかけてもそれにかまわず敵が乗り寄せるとき馬の足を払うこと。
八方詰の事
四、五人の敵を相手にするとき、とり巻かれてうしろに敵を受けぬように心得て中の敵へは寄らず、端の敵を攻めれば一人に立ち向かうと同然である。
なお、刀については
「刀ハ二尺三寸ヲ定寸トス。此上人々ノ分量也。然トモ二尺五寸ヨリ長キハ損多シ直ナルモ、ソリ高キモ宜シカラズ、我分量ヨリ少シ軽キヲ用ル伝来也。変化ニ因テ片手打ノ業モ有故也。」
とあり、実戦では奇襲の片手技も出すので少し軽量の刀を用いたのも卜伝流の特色といえよう。
(津軽卜伝流宗家)



九州岸柳島において宮本無三四佐々木岸柳仕合之図(芳虎画　都立中央図書館蔵)

小次郎負けたり

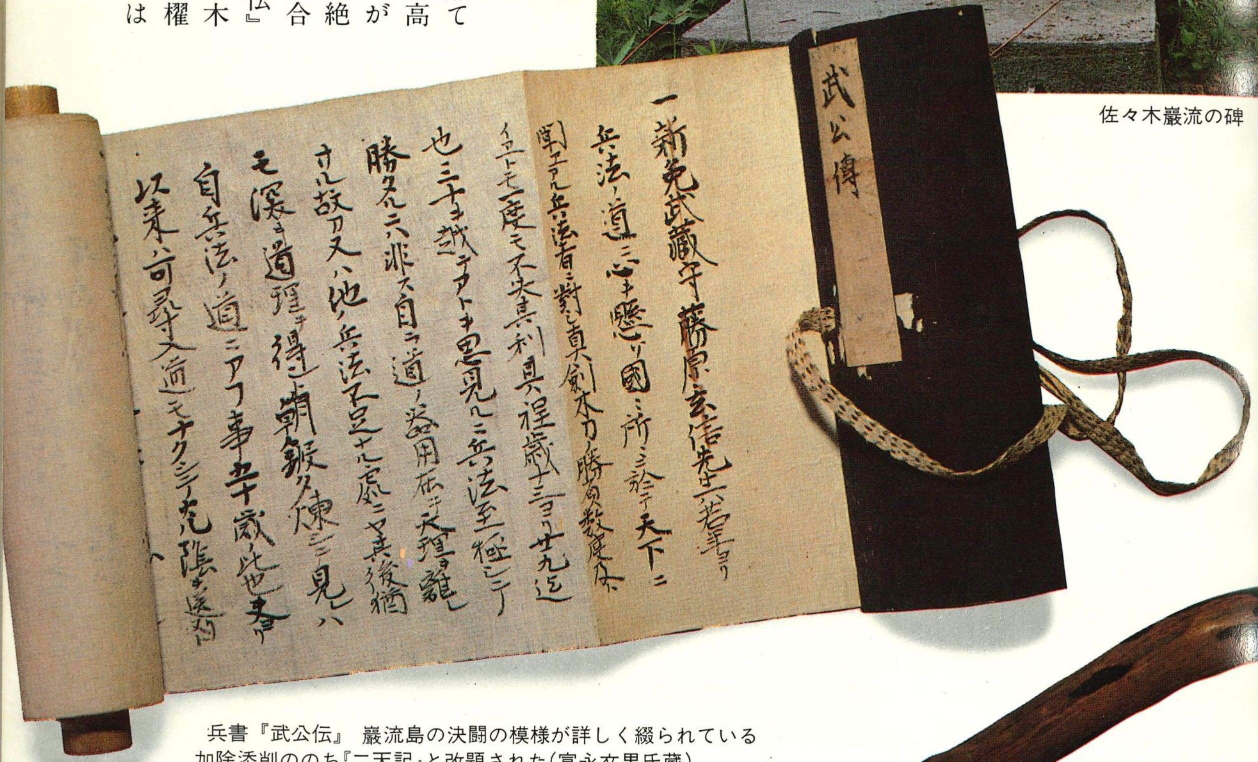
「武蔵、何ぞ遅れたるか、ああ、汝、後れたるか。武蔵黙々として答えず、小次郎霜刃を抜て鞘を水中に投、水際に立て武蔵が近づくを迎ふ。時に武蔵、水中に踏み留まり、にっこと笑て云く、小次郎負けたり、勝者何そ其鞘を捨てん。」
『二天記』のこの條は、講談に芝居にクライマックスとして典型化した。だが何よりもこの巌流島の決闘のシーンを、名高らしめたのは、吉川英治の『宮本武蔵』であった。
戦後、傲岸な巌流小次郎像を、恋多き夢多き青年の姿に描き直したのは、村上元三氏の『佐々木小次郎』であった。慶長十七年、戦国の末に行われたこの決闘に後れることわずか三年、元和元年七月、偃武の刻が訪れた…。

敗者巌流の名が残った…

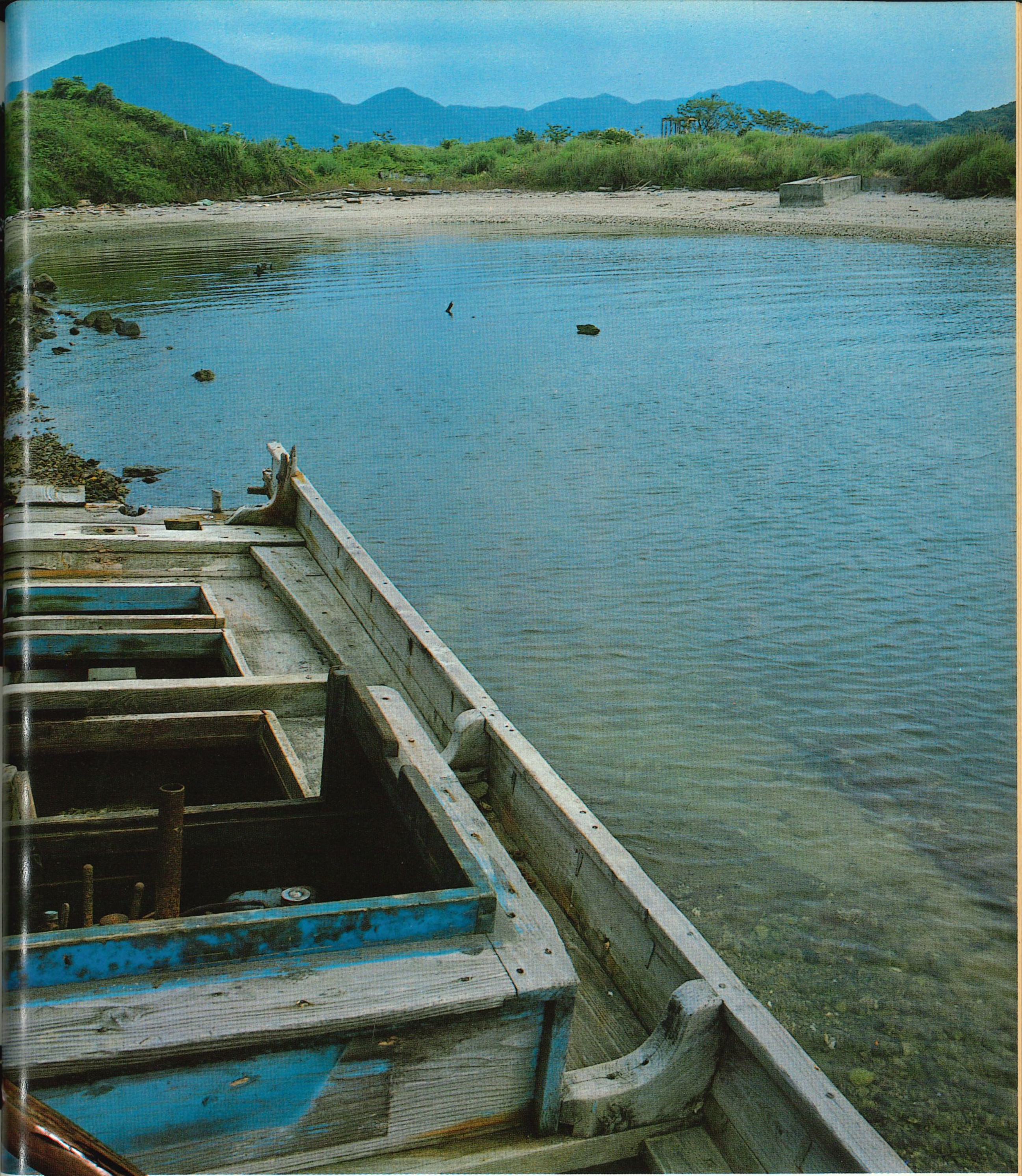
関門海峡――幅わずか七百メートル、本州と九州を隔てる潮迅き水道に浮かぶ巌流島。島の名は、余りにも名高いこの決闘の敗者巌流佐々木小次郎の号に因んで世人が呼び慣わしたものという。「口鼻より血流れ出」でて息絶えた小次郎の碑が、無人の叢に佇立している。この試合の模様を伝える史料は、しかし少なく、中で兵書『武公伝』は、武蔵門弟の覚書を今に伝える。武蔵の用いた櫂の木刀は、この書の所伝であり、求に応じて自ら模刻した櫂の木刀は、小倉藩家老家に伝世した。勝者武蔵の遺品は残り、敗者巌流は、小島にその名を留めるのみか…。



佐々木巖流の碑



兵書『武公伝』 巖流島の決闘の模様が詳しく綴られている
加除添削ののち『二天記』と改題された(富永文男氏蔵)



巖流島(山口)関門海峡に浮かぶこの島で武蔵、小次郎の凄絶な戦いが繰り広げられた



巖流島で武蔵は櫂の木剣を使った のちに武蔵はこの木刀を作り、松井寄之(長岡佐渡子孫)にその形を示した(松井家蔵)

二人の出生を探ると…

この時代、関ケ原の合戦、大坂冬・夏の陣など、戦国の世は未だ終熄のきざしはない。戦国乱世に生きた二人の剣豪・武蔵、小次郎とは、いかなる素性の人間だったのだろう。

巖流佐々木小次郎の出生は明らかでない。近江佐々木氏の庶であるという説もあるが、『二天記』によれば、越前宇坂庄浄教寺の生まれとある。中條流富田勢源の門下で腕を上げ、勢源の弟を打ち破って出奔。富田勢源の門から出た点は共通しているから、初め中條流を修めたものであろう。ただ勢源直門とすると、巖流島の時、既に老境にあることとなり、十八歳とする『二天記』は矛盾している。

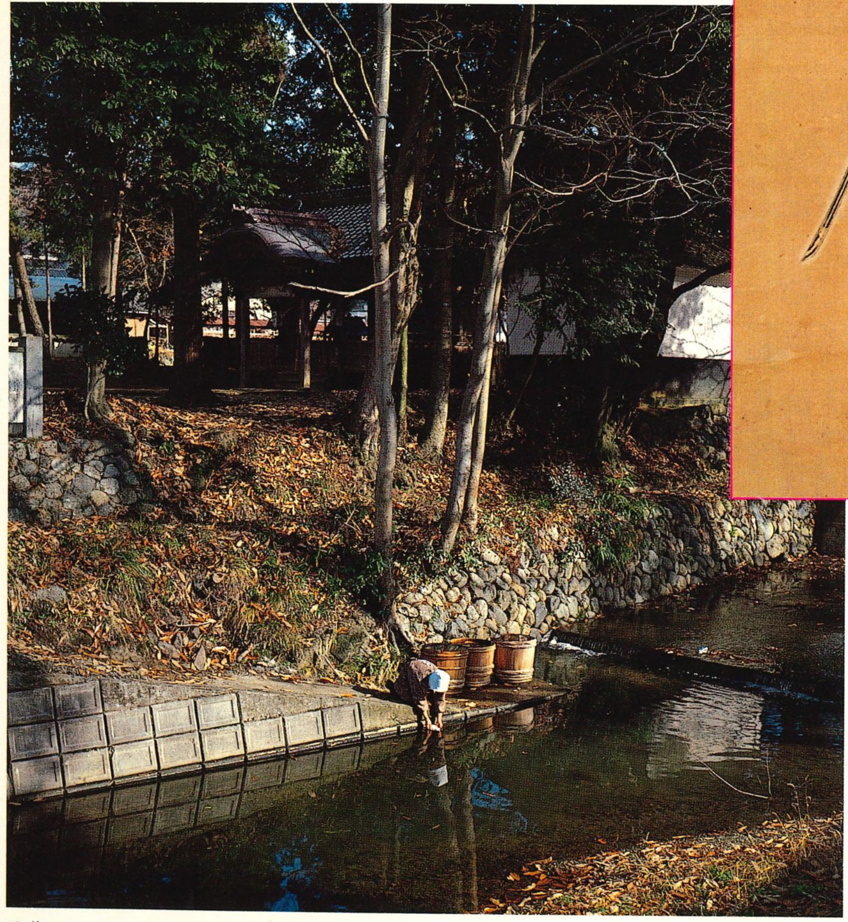
ことほどに、佐々木小次郎年齢すら不詳。

一方武蔵は、美作国宮本村の産という。

これすら確かであるかは、わからないが、武蔵自ら記した諸本にわずかに生の軌跡を辿ることができる。



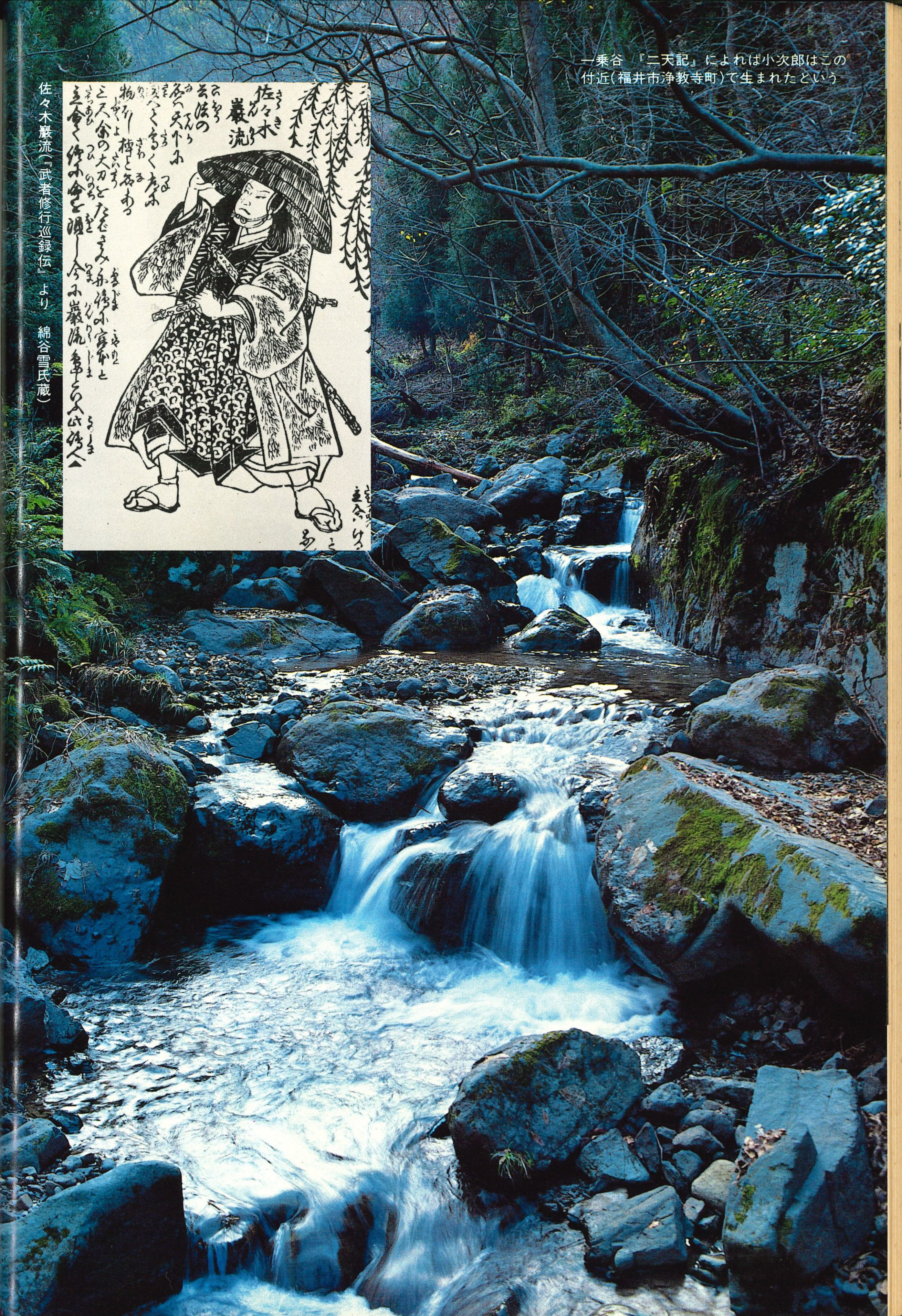
宮本武蔵自画像(島田美術館蔵)



武蔵の生地といわれる宮本村(岡山県英田郡大原町宮本)



武蔵作唐草模様鍔
(島田美術館蔵)

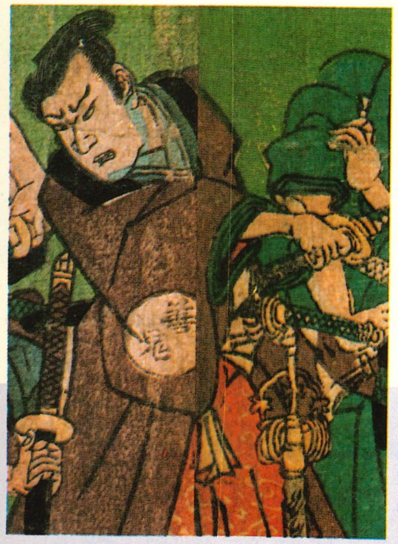


佐々木巖流(『武者修行巡録伝』より 綿谷雪氏蔵)

一乗谷 『二天記』によれば小次郎はこの付近(福井市浄教寺町)で生まれたという



神子上典膳



典膳に斬られた兄弟子小野善鬼（「本朝武術名誉鏡」より　綿谷雪氏蔵）

浪人の就職運動——決闘

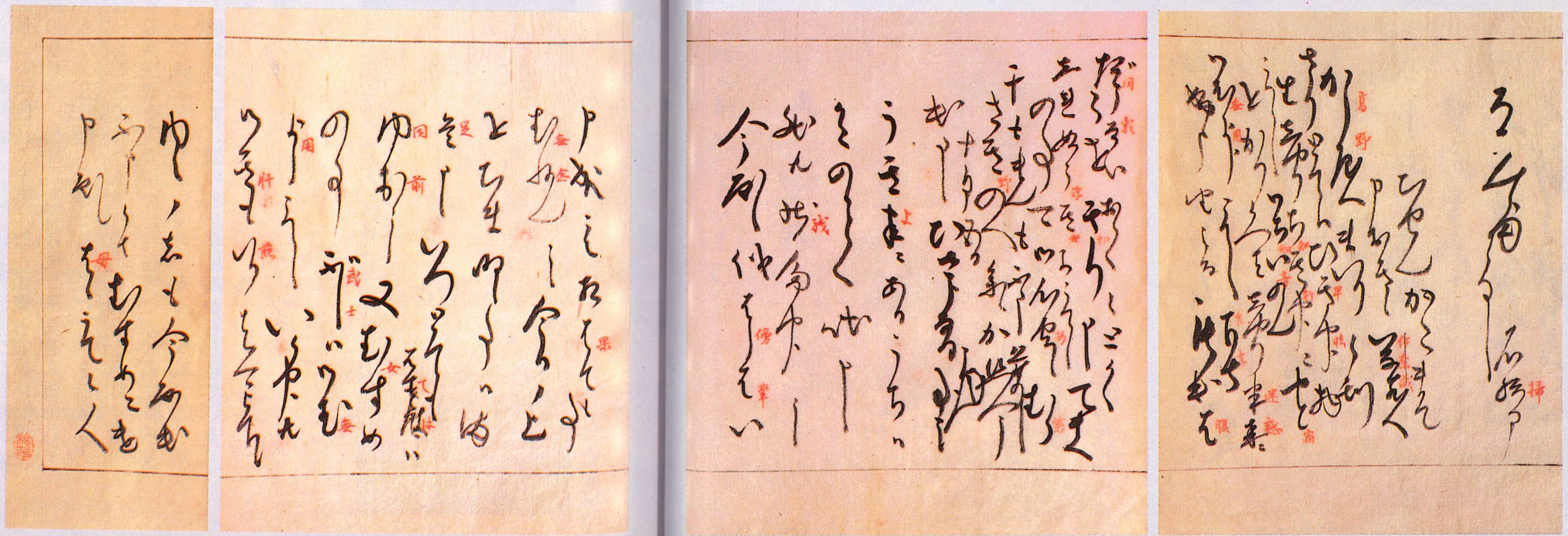
慶長五年（一六〇〇）九月、徳川家康を総大将とする東軍は、石田治部少輔三成を謀将とする西軍と、美濃関ケ原で天下の権を争って戦った。宮本武蔵、この時十七歳。西軍の手に属して戦ったと伝えられる。勝利は東軍の上に輝き、西軍の兵・卒は将を失い天下に浪々の身となった。その数七万。更に後、改易された大名九十家、浪人十五万人。更に又、元和偃武るや大坂方浪人十六、七万を加え、その数実に四十万になんなんとしたとある。武蔵またその一人であった。

西軍の将の一人石河一宗は、関ケ原敗軍の後、高野山に上ったが、朋輩に裏切られ切腹して果てた。遺書に曰く、「むすめの事は、武士は御無用にて候」。娘は武士に嫁がせるなと、侍の我身を呪っている。

武士を捨て切れず、仕官の途を探して諸国を放浪する者にとって、剣技は仕官の有力な手段とされたのも無理からぬものがあった。決闘は、武の究極を求めるという本義の他に、浪人の就職運動の側面を持ちつつあった。その時、武蔵は剣名の夙に高かった巌流佐々木小次郎に出合ったのであった。



武蔵が加わった関ヶ原の戦いは、40万人もの浪人を生み出した　（関ヶ原合戦図屛風　関ヶ原郷土館蔵）



石河一宗の遺書（影写本　東京大学史料編纂所蔵）

決闘巖流島

村上元三
桑田忠親

■むらかみげんぞう
作家　明治43年朝鮮元山生まれ　『上総風土記』で第12回直木賞受賞　著書『佐々木小次郎』(講談社)『日本剣客伝』(朝日新聞社)『大久保彦左衛門』『流雲の賦』

■くわたただちか
明治35年東京生まれ　国学院大学客員教授　日本史　国史学会　古文書学会評議員　著書『千利休研究』『豊臣秀吉研究』『戦国乱世』『桑田忠親著作集』(秋田書店)

NHK 三浦　基



『五輪書』 開いてあるのは空の巻
(永青文庫蔵)

天地自然の理を説く『五輪書』

「我等事、年罷寄り、其上近年病者に成候。何の望も御座無く候。妻子とてもこれ無く、老躰に相成候へば、居宅家材の事思いもよらず候。」自ら晩年の心境を細川家取次役坂崎内膳に宛てた武蔵玄信は、慶長十七年春、肥後熊本五十四万石、細川家に客分として身を落ちつけた。時に五十七歳。求道的面貌を現し始めるのはこれ以降である。泰勝寺（細川家菩提寺）の春山和尚に師事し、二天道楽の法号を持つに至る。

寛永二十年（一六四三）十月、岩戸山観音霊巖洞に籠って二昼夜のうちに、後世思索者武蔵、求道者武蔵の名を高からしめた『五輪書』五巻を書き上げた、と伝える。五輪とは、仏教語で言う五大、地水火風空を意味する。武蔵晩年の兵法観を書き留めた家伝書だが、柳生流の如く禅を以って兵法を説くというのでなく、天地自然の理法を説く趣があって、彼の名を今に高からしめている。晩年、書画の筆を執ることも多く、鵙の枯れ木に鳴く一幅は、彼の心境を伝えるものとして、名高い。



枯木鳴鵙図（宮本武蔵画　島田美術館蔵）

ハングリーから生まれた武蔵

関門海峡。

本州と九州を隔てる幅わずか七百メートルの海峡である。激しい潮流で知られるここは、一日一千隻近い船が行き交い、海の銀座と呼ばれている。

その早瀬の中に、小さな島影が浮かぶ。島の名は船島。

慶長十七年四月十三日、この小島で二人の剣士の壮絶な闘いが繰り広げられた。以来、この島の名を巌流島と呼ぶ。

――私どもがもっている武蔵、小次郎にたいするイメージは、子供のころは、剣豪武蔵と敵役の佐々木巌流という、立川文庫に出て来るイメージですね。それが吉川英治さんが『宮本武蔵』をお書きになりますと、剣の道を求める求道者としての武蔵という人物像が出来上がる。そして、村上さんが『佐々木小次郎』をお書きになりますと、こんどは夢多き青年剣士小次郎というイメージが出て来ますね。この中に共通した部分というのはあるんですか。

村上　吉川さんが『宮本武蔵』を書いたときは戦争が始まっていますね。今から見れば暗い時代だと言うけれど、青年にとっては人生をどう生きるか、真剣に悩んだ時代だったんですね。ですから、吉川さんのあの小説の中には、精神修養の意味もあったんでしょうね。それを織り込んでありますから、だから求道者武蔵という扱いをしています。

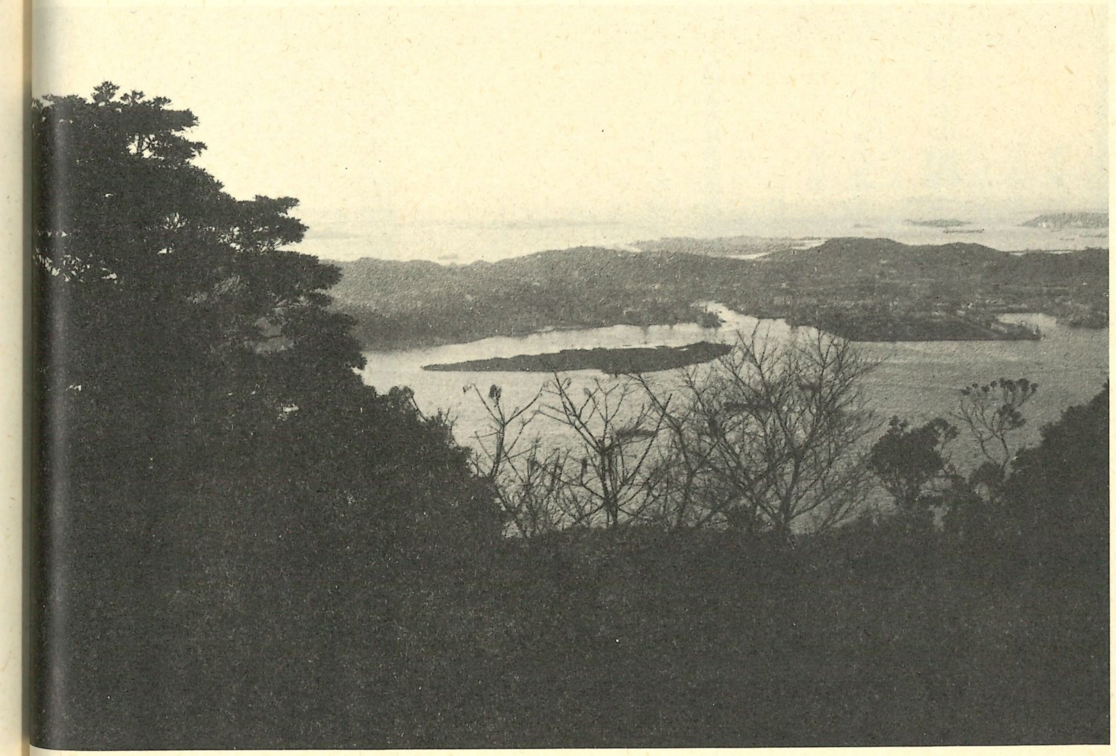
ぼくの場合は戦後でしょう。青年に夢も希望もないときですから。偶然、あれを書き始めることになったんですけれども、執筆の動機はともかくとして、ねらいというのは、何か読者に夢を与えたいということだったんです。あの小説の中でロマンチックな剣客を書こうと思った。ですから、小次郎は最後までたいへんロマンチックに死んじゃうんです。私は小次郎という男を精神的な面でちっとも大成した人間には書いていない。剣の道を求めて争ったという、そんな人間には書いていないんです。

――時代背景としては、自分の腕一本でなんとか生きていかなければならない、そういう時代ですね。その混乱の中で生きていった二人というふうにおとりになった。

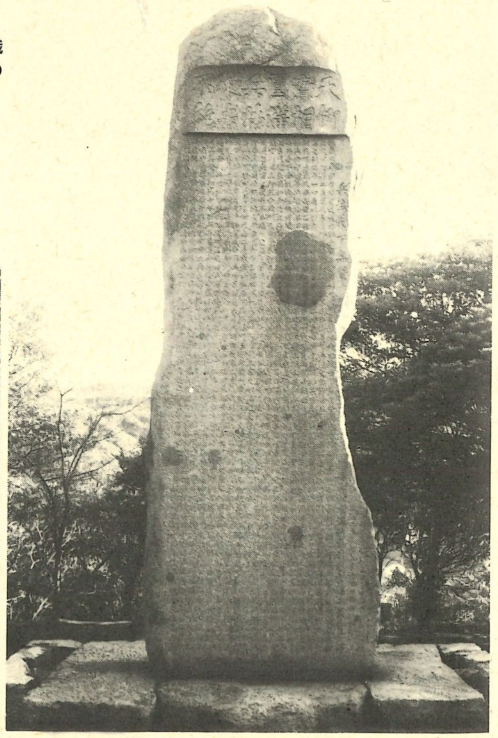
村上　ええ、ですから、ほんとうを言うと武蔵というのは一生のあいだ何をして食っていたのかよくわかりません。五十一で、熊本へ国替えになった細川家の方へ自分の養子の伊織をつれて行く。その時のことは、『二天記』に書いていますが、たいへん苦労しているから、昔のよしみでもって養ってくれる。それまでの間、どこで何をしていたのか、どうやって食っていたのか、これはわかりません。私は『佐々木小次郎』を書いたときには、何をして食っていたのか、はっきり書きました。これは切実な問題だと思うんですよ。一流の武芸者でも霞を食って生きていたわけではないんですよ。いくらなんでも剣だけでもって食えるわけはないですから。

――自分で食べるあてがないから、かなり必死の生き方だったでしょうね。

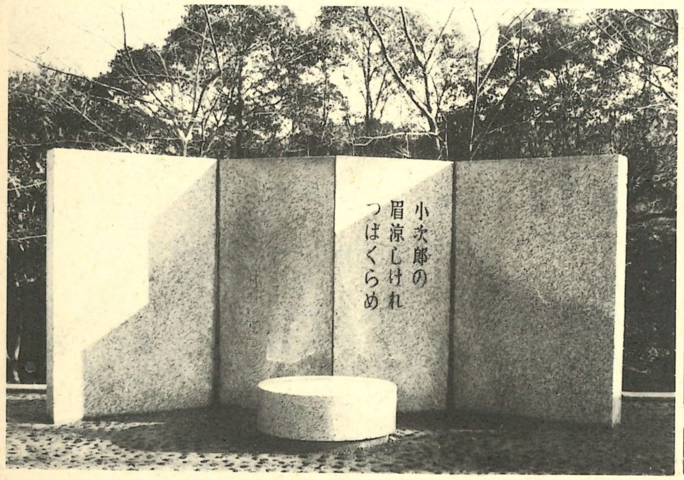
村上　ですから、ハングリーだというところから武蔵という男が出たんだとぼくは思うんです。ボクサーでもそうでしょ。ハングリーなところから出たのが、やっぱり強いですからね。



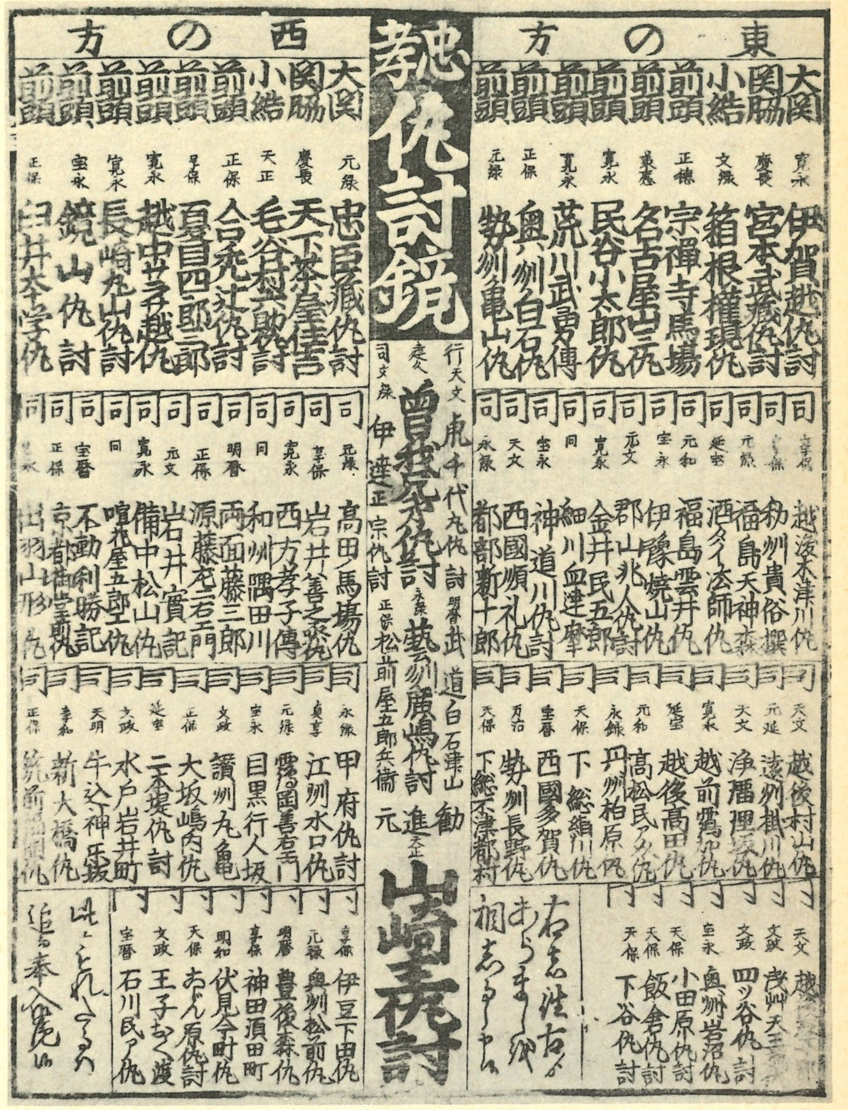
関門海峡に浮かぶ巌流島



現在手向山公園に建つ武蔵の碑
小笠原藩家老となった養子の伊織が承応3年(1654)に建立したもの



武蔵の碑と並んで建つ小次郎の碑　村上元三氏の句が彫り込んである



仇討ち東の関脇、宮本武蔵　（「忠孝仇討鏡」中山榮之輔氏蔵）

命をかけた二人の剣客の物語の誕生

巌流島の決闘が広く知られるようになるのは、江戸時代も半ばを過ぎ、芝居や読本、つまり今でいう流行小説が広まってからである。

今日、私たちは巌流島といえば剣の道をかけた試合であると思っているが、江戸時代から昭和の初めに至るまで、芝居や講談で知られていた巌流島の決闘は、仇討ち物語であった。

仇討ち物の代表的なあら筋を紹介しよう。

武蔵の父、宮本無二斎は広島で毛利家に仕える剣客であったが、武道の上での恨みから、佐々木巌流の闇討ちにあう。無二斎を殺した巌流は広島を逃れ、諸国を放浪する。何年かが経ち、九州の小倉で道場を開いている巌流の前に武蔵が現れる。ふとしたきっかけから巌流を父の仇と知った武蔵は船島で決闘をして首尾よくこれを討ち果たす。

これは「俗談船島仇討」という物語の、あら筋である。全体の構成から見ると単純な仇討ち物というほかないが、江戸の庶民には仇討ち物がよくよくうけたとみえて、元文三年（一七三八）江戸の市村座で巌流島の決闘を初めて芝居にした「敵討巌流島」という芝居が上演されたが、この芝居はたいへんな大当たりをとって、巌流を演じた役者の給金が三百両から、いっぺんに五百両に上がったという。

もちろん、こうした芝居に登場する佐々木小次郎は、私たちの知っている前髪を垂らした美青年ではなく、年のころなら五十過ぎ、総白髪に赫ら顔の憎々しい男に描かれている。

武蔵と小次郎の決闘が仇討ちだという説はあまり根拠がなく、恐らくは、芝居をおもしろくするための作り話だと思われるが、庶民とは対照的な世界である武家の間で語り継がれて来た、もうひとつの巌流島の物語があるので紹介しておこう。

正徳四年（一七一四）というから、武蔵の死後、七十年ほど経ったころ、天道流の達人として知られる日夏繁高が、祖父の重能から伝えられた武芸者列伝を『本朝武芸小伝』という本にまとめたが、ここでは次のような逸話が語られている。

決闘の日、単身、舟を雇って島に渡ろうとした小次郎は、船頭から島には武蔵の仲間が多勢いるから、神技のような腕をもっていても、とても命はないだろうと島へ渡るのを止められる。しかし、小次郎は「たとえ、死ぬとわかっていても約束をたがえるのは勇士ではない」と、船頭に形見を与えて、悠然として島におも

決闘巌流島〈年表〉

天正12(1584)	3月、美作国吉野郡宮本村（今の英田郡大原町宮本）に生まれる　幼名を弁之助といった
天正18(1590)	父・新免無二斎を失う
慶長1(1596)	新当流・有馬喜兵衛という兵法者と初めての試合で勝つ　この時より勝負すること60余度、一度もおくれをとったことがなかった
慶長4(1599)	但馬国秋山某という兵法者に勝つ
慶長5(1600)	7月、伏見城を陥し、8月濃州岐阜城を攻める　ついで9月15日関ヶ原の戦いに西軍として参戦、敗北する　戦後、九州におちのび、黒田家に一時身を寄せるが、間もなく武者修行の旅に立つ
慶長9(1604)	京都洛外の蓮台野で吉岡清十郎と試合、一撃のもとに絶息させる　次に挑んだ弟・伝七郎も即死　清十郎の子・又七郎を押し立てた門弟たちも洛東一乗寺藪の郷に敗る
慶長17(1612)	4月、小倉沖船島（一名向島、後の巌流島）で、巌流佐々木小次郎と試合、勝つ
慶長19(1614)	10月、大坂冬の陣に参加
元和1(1615)	大坂夏の陣に参加　5月8日、大坂落城　以後、諸国を遍歴する
寛永11(1634)	養子の伊織を伴い6年間、豊前小倉の藩主小笠原忠真に客分として寄寓する
寛永14(1637)	島原の陣に小倉藩主に従って参戦
寛永17(1640)	肥後・細川忠利の招きにより熊本に下り、細川家に仕える
寛永18(1641)	2月、細川忠利の命により「円明流35か條」を記し、奉呈する
寛永20(1643)	10月10日の夜、岩戸山霊巌洞で『五輪書』を書き始める　死ぬ前『独行道』を著す
正保2(1645)	死去（享年62歳）
承応3(1654)	養子伊織により、小倉城下に武蔵顕彰碑建てられる
宝暦5(1755)	『二天記』（武蔵の記録）成る
昭和14(1939)	吉川英治『宮本武蔵』で武蔵、国民的ヒーローとなる
昭和25(1950)	村上元三は『佐々木小次郎』で小次郎を敵役から美青年剣士に変貌させる


芝居絵に見る巌流島の決闘（都立中央図書館蔵）


直木三十五（日本近代文学館提供）


菊池寛（日本近代文学館提供）

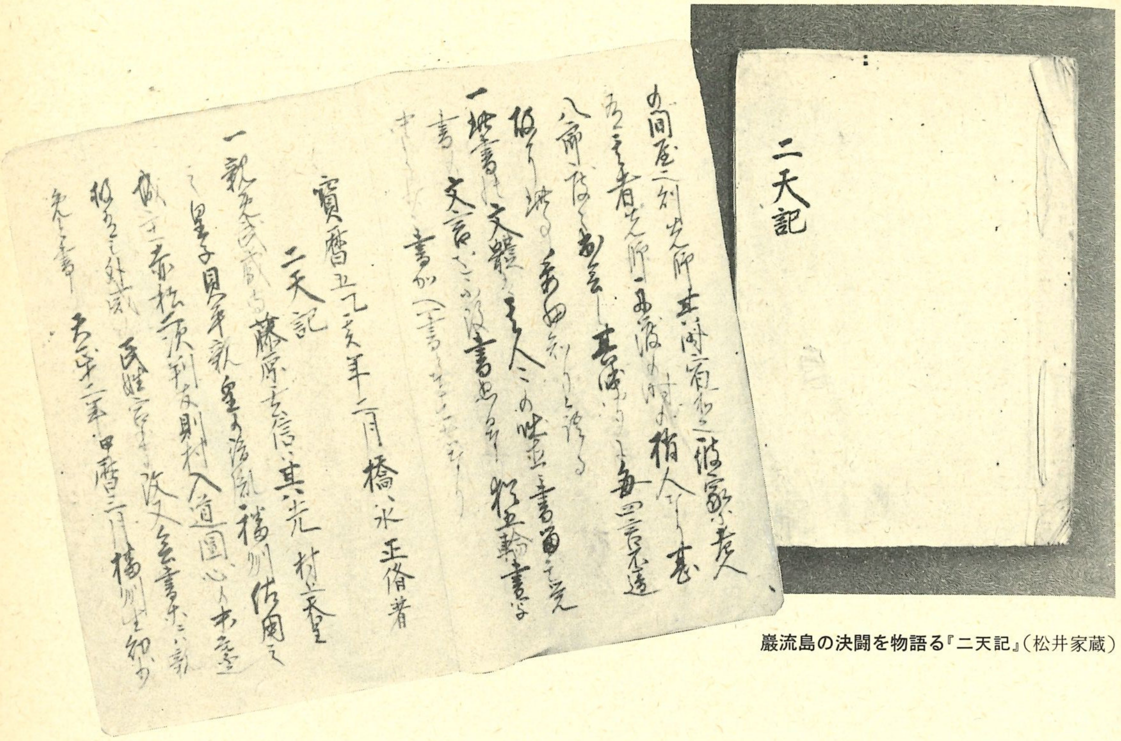
むく。

芝居では憎々しげな敵役として登場した小次郎が、ここでは武士道の鑑のような男として描かれている。

ほかにも、同じような話がいくつか伝わっているところをみると、武家の間では武士道をわきまえた剣士、小次郎に対して策を弄する男、武蔵というイメージがあったようだ。

昭和七年、宮本武蔵の評価をめぐって大論争が起きる。

そもそもの発端は、直木三十五がラジオで武蔵のことを術策と自己宣伝の男だと決めつけたことに始まる。これを聞いた武蔵の崇拝者を自任する菊池寛は「六十三回も真剣同様の仕合をして、一度も負けなかった武蔵と、竹刀で叩きあった徳川時代の剣客などを比較するのは紙上論に過ぎないであろう」と猛反発をした。この応酬は、その後、歴史学者も加わっての大論争に発展するが、ここから一つの名作が生まれる。吉川英治の『宮本武蔵』である。



巌流島の決闘を物語る『二天記』（松井家蔵）

吉川英治は途中から論争に参加して、直木の説を批判する側にまわったが、彼の興味は、単に武蔵の剣客としての強弱をうんぬんすることよりも、むしろ晩年の著『五輪書』に表れた武蔵の姿から、彼の剣客としての人生をどう評価するかにあった。

「其後国々に至り、諸流の兵法者に行合（ゆきあい）、六十余度迄勝負すといへども、一度も其利をうしなはず。其程年十三より二十八、九迄の事也。

我三十を越へて跡をおもひみるに、兵法至極してかつにはあらず、をのづから道の器用有りて、天理をはなれざる故か、又は他流の兵法不足ある所にや、其後なをもふかき道理を得んと、朝鍛夕練してみれば、をのづから兵法の道にあふ事、我五十歳の比也。」（『五輪書』）

吉川英治は武蔵の戦いの一生を、兵法の理をきわめようとする、一人の求道者の姿として描き出したのである。

こうして、江戸時代以来、陳腐な仇討ち物であり、型にはまった講談に過ぎなかった巌流島の決闘は、二人の剣客の人生をかけた勝負の物語として甦えることになった。

〝巌流島の決闘〟はいかに闘われたか

それでは、この決闘はどのように戦われたのであろうか、それを知る手がかりは極めて少ない。吉川英治は随筆の中で、このことに触れ、宮本武蔵について書かれた記録・伝記は七、八十種に及ぶが、ほんとうの史実だと信用できる記録だけ選んで要約すると六、七十行で終わってしまうと書いているくらいである。



小次郎霜刃を抜いて……（内田吐夢監督「宮本武蔵」より　フィルム・ライブラリー協議会提供）

こうした記録・伝記の中で吉川英治は最も信用のおけるものとして『二天記』をあげている。

しかし、この『二天記』も同時代の記録というわけではなく、武蔵の死後、彼の門人たちの話を細川藩士豊田正剛が記録し、それを孫の景英がまとめたもので、この時、すでに武蔵の死後百十年を過ぎていた。

しかし、すべてが史実というわけにはいかないが、『二天記』が武蔵についての、最もまとまった記録であることは確かである。ともかく、この『二天記』によって巌流島の決闘の様子を描いてみることにしょう。

決闘の朝、武蔵は小倉から送られて来る飛脚の催促も気にせず、宿の亭主にもらった舟の櫓を悠々と削っていた。

『二天記』によれば、武蔵が当時向島（むこうじま）と呼ばれていた巌流島に着いたのは、試合の刻限をはるかに過ぎてからである。

「漸　巳の刻過に、武蔵向島に到る。

彼、木刀を提げ素足にて舟より下り、浅きなぎさを渉ること数十歩行く帯にはさむ。

手拭を以て一重の鉢巻にす。

小次郎は猩々緋の袖なし羽織に、染革の立付を着し、わらんじを履き、三尺余の刀を帯す。備前長光の由、甚た待ちつかれ、武蔵か来るをはるかに見、憤然として水際に立て云う、

『汝、何そ遅するや。汝後（おく）れたるか。』

武蔵黙然として答」不、小次郎霜刃を抜て鞘を水中に投、水際に立て武蔵か近つくを迎ふ。

時に武蔵水中に踏留り、にっこと笑て云く、

『小次郎負たり。勝者何そ其鞘を捨てん。』

小次郎益々怒て、武蔵か相近くと斉く刀を真甲に振立、武蔵か眉間を打つ。武蔵同く撃処の木刀、小次郎か頭に中り立所に仆る。小次郎伏なから横に払ふ。武蔵か袷の膝の上に垂たるを三寸斗（ばかり）切さきぬ。武蔵か撃処の木刀、小次郎か脇腹横骨を撃折て即ち気絶す。口鼻より血流れ出つ。暫く有て武蔵木刀を捨て、手を小次郎か口鼻に覆ひ、顔をよせて死活を窺ふ事漸暫也。而して後遙に検使に向て一礼し起て木刀を把り本の船に行き飛乗、自らも共に棹さして行事速か也。」

――　巌流島の決闘といいますと、まず私たちは徳川夢声さんのあの名調子「小次郎敗れたり」、あれがピンとくるんですが、ほんとうにそうだったのでしょうか、小次郎が鞘を捨てるというのは。

村上　決闘の場合、鞘を捨てるというのはふつうなんです。相手の血をこの刀に吸わせるまでは鞘におさめないという、つまり必死の覚悟です。それからまた『二天記』の描写だと、鞘を海に向かって捨てたとありますね。武蔵は舟を下りて海の方から来るわけです。そうすると、わざわざ海の方に向かって長い刀――巌流の持っていたのは太刀のようなものですから、長い刀です。それを抜いてわざわざ海の方へ捨てるばかはないと思う。抜いたらうしろへ捨てるはずです。ちょっとそういうところもやはり『二天記』の描写にはおかしなところがあると思う。そしてまた船島という所が音に名高い関門海峡のまっただ中でしょう。六時間おきに潮流が変わるという所です。だから『二天記』の描写のように、渚をスタスタと上がって来るということはちょっと考えられない。

―― そうですね。渚で下りて、水の中で武蔵は小次郎に答えておりますね。

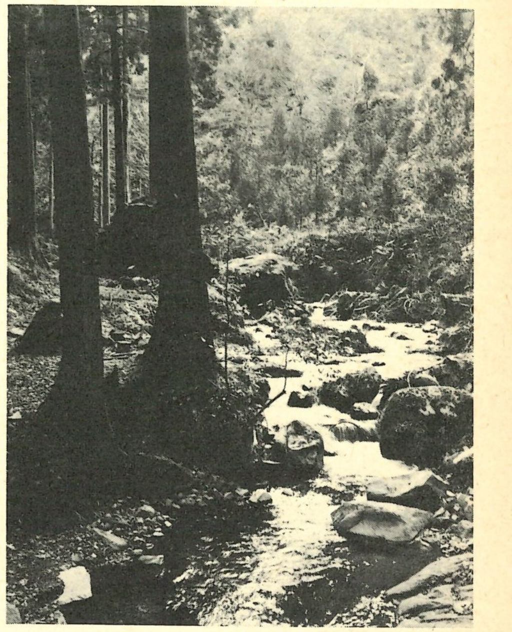
村上　あんな島ではなかったと思うんです。戦争中までは巌流島は要塞地帯でしたから、ふつうの人間は上がれなかったんです。ぼくは戦後ですが、あそこへ船を出してもらって上がりましてね。やっぱり渚なんてないんですね。すぐ海です。潮が流れている。だから「小次郎敗れたり」というようなことを言って舟から下りたら、そのままズブズブと沈んでしまうわけでしょう。だから舟はいきなり島にのし上げたんだと思います。

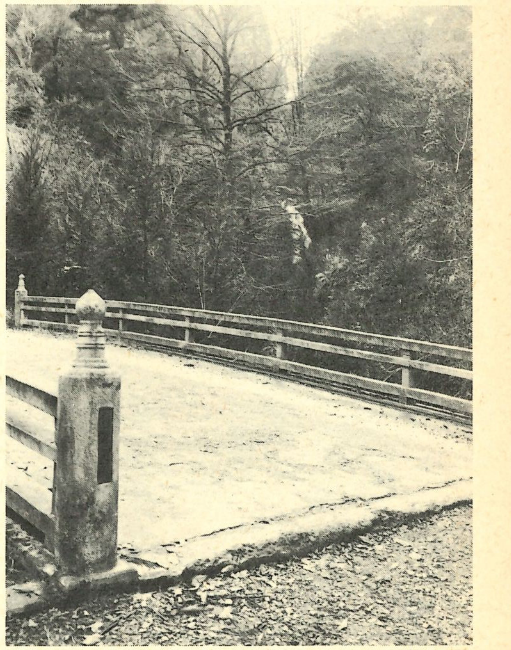
―― なるほどね。次に小次郎が武蔵に何で遅れて来たんだと聞く、これはありそうな気がしますね。

村上　武蔵は四時間ほど遅れて来ています。

―― 武蔵はなぜ四時間も遅れたんでしょう。

村上　武蔵というのは、吉岡流との試合、一乗寺下り松の試合、それからいろんな試合を見ても作戦を用いていますね。一乗寺下り松の時は武蔵一人に相手は五十人くらいいますから、狭い畦道に引き込んで一人ずつ斬っていった。あらかじめ地形を見ているんですね。巌流島の時も武蔵は、あらかじめ潮の流れを計算していたと思います。その前の晩、海を渡って下関の舟宿に泊まってますし。巌流島には下関から潮の流れに乗ってすっと来たんだと思いますね。それから舟を岸に上げておいて、試合の片がついたらすぐ舟に飛び乗って、そのまま島から去っていくわけです。試合の経過はわかりませんけれど、相当長い時間にらみあっていて、一瞬の間に片がついたというのは、やっぱりほんとうだと思いますね。チャンチャンバラバラやったのではないと思います。


小次郎の生地といわれる一乗谷


一乗谷にある小次郎橋

剣客たちの仕官競争

慶長五年（一六〇〇）九月十五日、徳川家康率いる東軍と、石田三成の率いる西軍が天下をかけて戦った。関ケ原の合戦である。この合戦に参加した者、東軍十万四千、西軍八万二千。その多くは手柄をたて、一国一城の主になることを夢みる若者たちであった。武蔵の養子で細川家の家老をつとめた伊織が巌流島を見下ろす丘の上に建てた武蔵の碑には、若き日の武蔵がこの戦いに加わっていたことが記されている。

それでは『二天記』によりながら、佐々木小次郎、宮本武蔵、この二人の若者がこの時代をどう生きてきたのかをたどってみることにしよう。

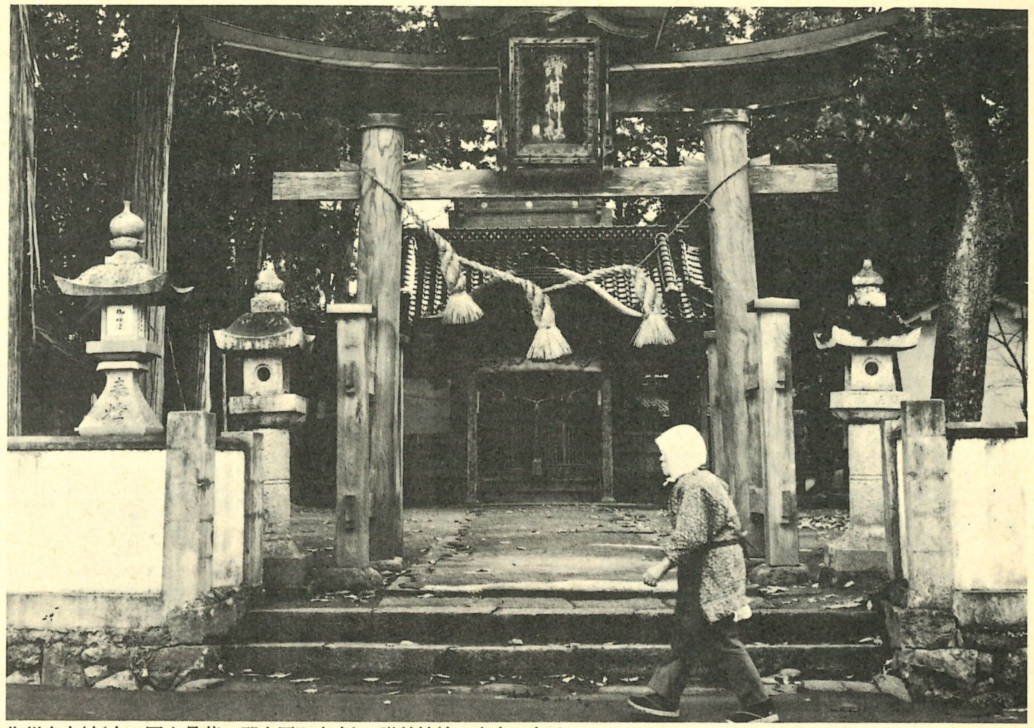
佐々木小次郎の出生は明らかではない。『二天記』によれば、小次郎は越前国宇坂の庄浄教寺村（今の福井市浄教寺町）に生まれたという。浄教寺村のある辺りは一乗谷と呼ばれ、戦国大名朝倉氏五代の本拠地として知られている土地である。一乗谷は朝倉氏の繁栄とともに、京都から文化人が数多く訪れ、小京都とまで称される文化の地であったが、一方では、中條流小太刀の達人、富田勢源をはじめとする剣客たちによって尚武の地としても知られていた。


小太刀の達人富田勢源（『武稽百人一首』より　綿谷雪氏蔵）

富田勢源の中條流小太刀の術は一尺五寸の小太刀を使って、三尺余りの大太刀に勝つことを目的とする野戦向きの実戦剣法であったが、幼くして富田一門に入った小次郎はこの小太刀の相手をつとめさせられたという。ところが、小次郎は次第に剣の腕をみがき、大太刀でもって小太刀を打ち破るようになり、ついには勢源の弟、富田治部右衛門を打ち負かしてしまう。こうして富田一門にいられなくなった彼は故郷を飛び出し、みずから一流を立てて岸流と号したという。

もっとも、この話には異論がある。なぜなら朝倉氏が滅ぶのは天


小倉37万石の城主細川忠興（永青文庫蔵）



作州宮本村（今の岡山県英田郡大原町宮本）の讃甘神社　宮本の名は、この神社の元あった所の下に村があることから起こったといわれる

正元年（一五七三）、富田勢源の全盛時代はその少し前の一五六〇年ごろといわれる。したがって、小次郎が勢源の門下にいたとすれば巖流島の決闘の時、すでに彼は老境に入っていたということになり、決闘の時、小次郎十八歳という『二天記』の記述には矛盾がでることになるからである。

彼が故郷の浄教寺村を飛び出してからの足跡は明らかではないが『二天記』によれば、決闘の少し前、小倉に現れた小次郎は細川忠興に認められ、城下で道場を開いていたという。

一方、宮本武蔵は天正十二年（一五八四）に生まれた。生地は作州とも播州ともいわれている。父の新免無二斎は十手二刀の達人として知られ、将軍の命による剣術試合で、二度までも日下無双の号を賜ったという。しかし、無二斎は世に容れられず、失意のまま山里にこもっていた。父から剣を継いだ武蔵は十三歳の時、新当流の使い手、有馬喜兵衛を撲殺する。彼が剣客としての才能をあらわすのはこの時からである。

その後、十七歳の時、関ケ原の合戦に加わった彼は、ふたたび故郷に帰ることなく放浪の剣客としての道を歩みはじめる。慶長九年、二十一歳の時、都に上った彼は吉岡清十郎を洛外蓮台野に破り、さらにその弟、伝七郎、清十郎の子、又七郎を斬殺、このため足利将軍の兵法指南として知られた吉岡家は断絶する。さらに同じ年、奈良では宝蔵院流の槍の使い手と戦い、伊賀上野で鎖鎌の名手、宍戸梅軒を討ち果たす。

正に戦いの毎日である。こうして彼は慶長十七年四月、都から小倉に下り、佐々木小次郎に出会うことになる。

ここで不思議なのは『二天記』の記述のどこにも、それまで武蔵が小次郎と出会ったことが書かれていないことである。小倉に来るまで二人の間には何の面識もなく、何の遺恨もないらしいのである。とすれば、二人はいったい、何のために戦ったのか。



宮本村に残る槍　武蔵が少年時代使ったといわれる（平田家蔵）

――武蔵と小次郎が決闘をした、そのいちばんの理由は何でございますか。

桑田　剣客といっても、やっぱり浪人でして、結局は、仕官するための就職運動ですね。浪人は今日の失業者で、生活に困っているから当然のことです。

――就職運動をするためには、当時、この二人のほかにも、いわゆるライバルはたくさんいたはずですね。そんなにたくさんいたわけですか。

桑田　関ケ原の合戦で西軍についた者のうち、戦死者を除いたあとの者は、みな浪人になる。それから、その後で、かなりの大名がとりつぶしにあいますね。それでまた、浪人がたくさんできます。西軍に属した者が約八万二千人で、それから戦死者約八千を引いた残りの約七万四千人が、戦場を離脱して、浪人になったのです。それから、関ケ原戦後、徳川幕府の命令で改易になった大名が九十家（六百二十二万石）もあります。一万石あての軍役を二百三十五人とすれば、ここで、十四万六千百七十人の浪人ができた勘定になります。

――関ケ原浪人が七万人、それから九十くらいの家がとりつぶされていますから、その浪人が十五万人。

桑田　そうですね、合わせて二十二万人ということになりますね。ただし、これは大略の計算ですよ。

――このあとに大坂の陣が行われますね。

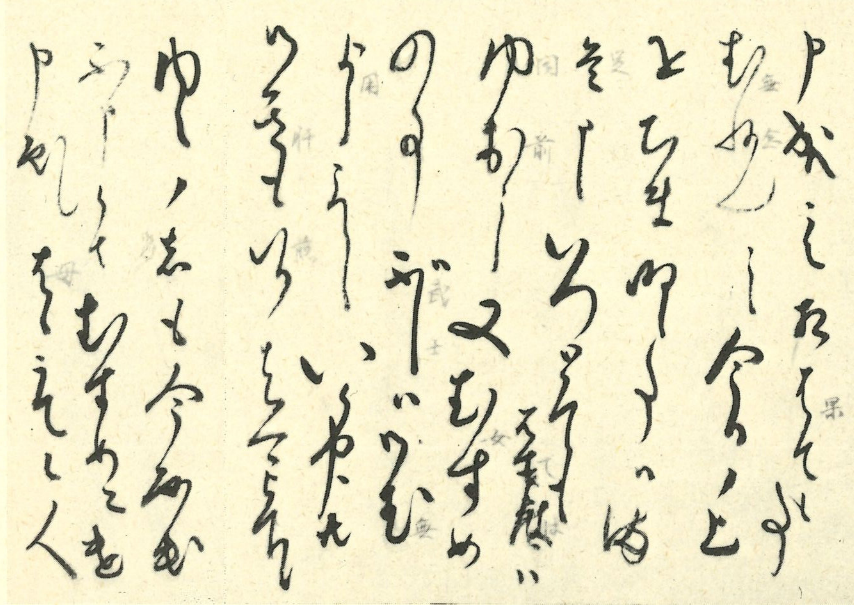
桑田　大坂の陣で、その約二倍になります。四十万人くらいの浪人が出たと考えていいでしょう。いわゆる大坂浪人の推定は十六、七万人とみなされていますが、まあ、大まかにいって、約四十万もの浪人が輩出したわけで、たいへんな社会問題です。しかし、当時の就職対策には、全く見るべきものがなかったので、物騒な失業者が、ごろごろしていたのです。

――当時の人口からすると、たいへんな数ですね。

桑田　そのころの日本の人口は千八百万くらいだから、その四十五分の一が浪人だったという勘定になります。

――戦いに敗れ、職を失った浪人たちはどうなったのですか。

桑田　いちばん悲惨な実例を紹介しますと、石河一宗という男がいるんですが、これは兄貴が賤ケ岳の合戦で一番槍の功をあらわし、それがきっかけで、ひきたてられ、その後、自分も戦功をあらわして一万石の大名になったんですが、関ケ原の合戦の時に西軍について負けてしまうんです。そこで、高野山に登って坊主にでもなれば、自分の命だけは助かると思った。ところが、友人が裏切って彼を訴えたために、結局、捕まることになったが、捕まって恥をかくよりは腹を切って死んだ方がいいというので、切腹してしまうんです。この悲惨な浪人の遺書が残っていますが、その遺書を読みますと、実に気の毒なも


石河一宗の遺書（影写本　東京大学史料編纂所蔵）

ので、友人の裏切りを非難したあとに、自分の娘は、ぜったいに武家には嫁にやるな、とまで書いています。戦国時代の武士の遺書には、死を前にした際の心のありかたを示したり、覚悟のほどを教えたりしたような、子孫向きの教訓書が、概して多いのですが、この石河一宗が親友に送った遺書は、実に未練がましいものであり、それだけに、人間の真情を吐露したものとして、珍重に値します。死を直前に控えた人間の切ない悲鳴ともいえましょう。だから、武士は強いとか、潔いなどというのは、一つの概念にすぎなく、史実ではありません。これが、その証拠です。

合戦に敗れた「浪々の人」たちの運命

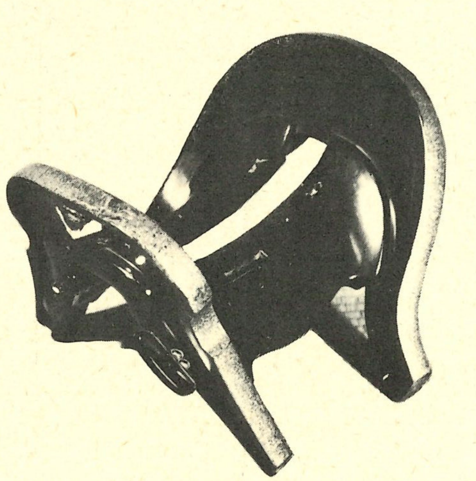
関ケ原の合戦に参加した石河掃部守一宗は、近江の大津城を攻めて、これをおとしいれ、大津城にたてこもったが、石田三成敗北の報せを聞き、大津を出て紀州の高野山に向けて逃れた。高野山に上るにはかねてからの友人、生駒修理亮の領地に宿を借りればよかった。ところが、修理亮は友人の願いを聞くどころか、一宗を追い返したために、彼は京都にまい戻り、一か月後の十月十一日、腹を切って果てた。その首は、間もなく三條河原に曝されたという。次の文書は、石河一宗が死の直前、無二の親友に宛てた遺書である。

「高野にまいり候刻、修理知行に宿をかり候へば、修理迷惑になり申すよし、申し候間、まかり出で、腹を切り申候。今度の儀、朋輩の申しなしにて相果て候事、無念に候。又、むすめの事は、武士は御無用にて候。いかやうとも、御きもいり候て下さるべく候。」

さて、こうした剣客の仕官競争の背景にあった浪人たちの実態であるが、室町時代から、江戸初期にかけては「牢人」という字が当てられていた。牢人というのは「牢籠の人」を指す言葉で、牢籠とは落魄、困窮を意味する。つまり、失業して落ちぶれた武士を指したものである。

しかし「牢人は字さへあさまし穴冠、牛か午かと人に言はれて」（『世話用文章』）といわれたように、牢という字は牢獄を思わせるところから、江戸中期に入って「浪人」という字があてはめられ「浪々の人」、つまり、主君もなく、さまよい歩く武士を指すことになった。

浪人が江戸初期に大量に発生した理由は桑田氏の解説にあるように、徳川幕府の成立に伴ってとられた、諸大名の改易・減封の政策によるものである。江戸初期の改易は豊臣政権の領国体制を、徳川政権の体制に塗り変えようとするものだけに非常に厳しいものがあった。改易（取潰し）は主に豊臣大名を中心とする外様大名に集中しているが、その数は慶長五年（一六〇〇）の関ケ原の合戦から慶安四年（一六五一）の由比正雪の事件まで二百家余りの大名が改易・減封にあっている。当時の軍制では一万石当り二百人程度の家臣がいたと考えられるから前述のように、ざっと四十万人の武士が失業の憂き目にあったことになる。当時の人口は、千八百万人ぐらいであったという推定があるが、これからすると当時四十万人という失業者が、いかにばく大なものであったかがわかる。しかも、つい昨日まで戦場を駆けめぐっていた男たちが失業したのであるから、これらの浪人が生み出す社会不安は計り知れないものがある。浪人たちにとっても社会の混乱は、新たな仕官＝就職へとつながるものに思えたにちがいない。慶長十九年に始まる大坂の陣は、正にそうした浪人たちの願望にかなうものであったろう。大坂方の籠城者十万人、その主力は真田幸村、大谷大学、長宗我部盛親など関ケ原で西軍についた武将たちであったし、一方、幕府方にも比較的無名の浪人たちが数多く参加していた。


武蔵作の鞍（松井家蔵）

大坂の陣のあとも、浪人たちの叛乱は絶えない。寛永十四年（一六三七）に起こった島原の乱では一揆側に小西・有馬両氏の浪人たちが数多く参加し、鎮圧する幕府にも浪人たちが参加していた。ついでながら、『二天記』には宮本武蔵が、この島原の乱の鎮圧に加わったと書かれ、また、養子伊織の建てた碑文には、武蔵が大坂の陣に参加したと記されている。こうした、大きな叛乱

以外に、百姓一揆が、改易・減封にあった大名の旧領地に多く起こったという研究もある。こうした現実に、幕府は次第に浪人に対する抑圧政策を強めていく。その最初は大坂の陣である。従来下級武士の場合、合戦の敗者はそれほど詮議されることはなかったが、幕府はこの時、大坂方の落人に対して全国津々浦々に至るまで厳しい追跡を加えた。さらに島原の乱のあとよりいっそう厳しい浪人対策がとられていく。それが浪人払、武家奉公構である。浪人払というのは浪人追放のことで、京都などで実際に行われた。武家奉公構というのは、構、つまり仕官の禁止である。こうした抑圧策に窮した浪人については大名の門先に押しかけて切腹しようとするなどの哀話が数多く伝えられている。

武士をやめて成功した関ケ原浪人たち

——武士をやめて商人や農民などに商売替えをした人もいるんですか。

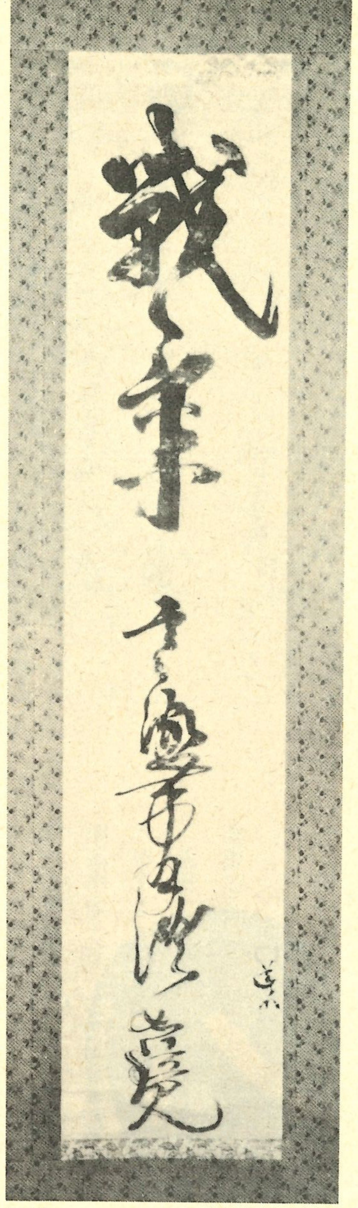
桑田　無名の人のことはわかりませんが、有名人で、上田宗固という武士がいまして、これも西軍についた関ケ原浪人の一人です。彼は特殊技能があり、庭づくりの名人なんです。茶人でもありました。利休の弟子なんです。庭づくりの方で認められて、阿波の大名、蜂須賀家政のところへ仕官するわけです。これなどは、武士としてではなく、庭師として仕官したのです。

宗固は、信濃の小笠原氏の一族で、もと、上田に住み、上田氏と称したのです。祖父の重氏の時に尾張の星ケ崎に移り、織田信長の部将丹羽長秀に仕えます。宗固は、この重氏の孫にあたります。父は重元。幼名を亀丸、長じて佐太郎と称し、重安と名のり、長秀の死後は、秀吉に仕え、歴戦の功により、越前の内で一万石を領し、従五位下、主水正に叙任されます。茶の湯を初め利休に学び、のちに古田織部の門弟となります。ところが、関ケ原の役には、旧主の丹羽長重（長秀の子）に属して、敗れたが、蜂須賀家政に招かれ、四国に渡り、阿波の徳島に留まること三年、この間に、蜂須賀家の武士に茶の湯の指南をしたり、また、数寄屋や庭園の設計に専念したといわれています。

その遺蹟は、今も徳島市に残っているのです。その後、浅野幸長に望まれて、紀州和歌山に至り、山口に和風堂と号する草庵を営みます。たいへん特殊技能を持つ武士で、浪人ながらも、大名家の客分として優遇されるので、生活に困るどころか、案外に豊かな暮らしをし、最後には、浅野幸長の弟長晟に仕えて、安芸の内で一万七千石の知行を与えられます。そして、八十八歳で天寿を全うしているから、浪人としては、最も幸福な人物といえましょう。

それから、土佐の有名な長宗我部元親の四男に長宗我部盛親というのがいます。これもやはり関ケ原浪人ですけれども、京都に出て寺子屋の師匠になります。

この盛親というのは、はなはだ運の悪い男でして、関ケ原の合戦には、初め東軍に味方する決心をして、使者を家康のもとに派遣しようとしたが、西軍の石田方のために妨げられ、仕方がなくて、西軍に味方することになり、兵を率いて、関ケ原の南宮山の東南麓の栗原に布陣したのです。そのうちに、島津義弘の知らせで、西軍の敗戦を知り、多少の抗戦はしたが、力およばず、戦場を離脱し、大坂を経て土佐に帰国しています。しかし、なんとかして、長宗我部家の安泰を守りたいと考え、家康の寵臣井伊直政に頼み、直政の勧めにしたがって、大坂に上り、家康に謝罪したのです。ところが、大坂に上る直前、盛親は、兄の親忠を殺害するという失敗をやっている。これは、亡き父の長宗我部元親に幽閉されていた親忠が、懇意であった東軍の部将藤堂高虎を介して、長宗我部家の存続を家康に懇願した結果、家康の了承を得た。しかし、これは、家督相続に不満を抱いていた親忠が、前から東軍に内通し、高虎を介して土佐半国の横領をたくらんだという噂が流れた。それを聞いた盛親が、これを怒り、兵を遣わして親忠を殺害した、というわけです。ところで、家康は、この事件を問題視し、兄を殺害するとは、元親の子に似合わぬ不義者であるといっ


武蔵の書「戦気　寒流帯月澄如鏡」武蔵の気概がうかがわれる（松井家蔵）

武蔵生地探訪

鳥取から播州に通じる因幡街道の大原古町は、鳥取藩の本陣が残る宿場町として知られている。吉野川沿いに、宮本武蔵の生家に向かって下ると、右手にテレビ塔のある小高い山が見える。そこが竹山城趾である。頂上への道はテレビ塔工事のために整備され車でも登れる。ところどころに武蔵にちなんだ俳句を書いた木札が建っている。頂上は馬場跡でここからは、吉野川とそれに沿った因幡街道が一望できる。

左手に続く街並が大原古町で、右手に見える木立ちが荒巻大明神（讃甘神社）と、隣接する武蔵生家といわれる平田家のある辺りである。

宮本武蔵生誕碑の脇に小さな流れがあり、これが宮本川。左側が讃甘神社、右側に平田家がある。

この平田家のすぐ脇から旧因幡街道の鎌坂峠がはじまる。かつての往還をしのぶよすがもない細い山道を登ってすぐ、右手の木立の中に平田家代々の墓地があり、武蔵の祖父の平田将監、父の無二斎夫婦、そして武蔵の墓石がひっそりとねむっている。その墓地のすぐ先に武蔵神社が新しく建立された。

逆にこの鎌坂峠を降ってくると、遙か遠くに竹山城趾が見え、右手前に大きくそびえる樹齢四百年を数えるタラヨウの木が見える。それが武蔵の姉おぎんの嫁ぎ先の平尾家。そのすぐ先が武蔵の生家となる。

この鎌坂峠を越えて佐用平福の宿場町まで八キロ。現在は中山峠といわれきれいな道路が出来ており、鎌坂峠はほとんど人影がない。頂上が岡山県と兵庫県の県境で、すぐ近くに鎌坂峠の道が落葉にうずもれている。

この佐用平福は利神城の城下町で、ここに武蔵が九歳まで育ったという田住家が現在も風格のあるたたずまいを見せている。

すぐ脇を流れる佐用川にかかる橋が利神城趾への入口。この橋の下の河原が、武蔵が十三歳の時に最初の決闘をした場所で、相手は新当流の達人有馬喜兵衛といわれている。ここにも碑が建っている。

姫新線の佐用駅に向かって国道三七三号線を行くと中国縦貫自動車道と交差する佐用インター。この辺りに本位田群集墳があるが、武蔵ゆかりの本位田又八とは無関係。本位田家は竹山城の家老をつとめ、本位田外記之助は城主の誤解が因で無二斎家で切腹し、その墓は鎌坂峠の中ほど、武蔵神社の先にある。本位田家は竹山城趾の下にどっしりとした構えを見せている。

て、盛親を誅伐しようとしたのです。しかし、井伊直政の取りなしで、盛親は、死罪を赦されたが、領国の土佐は没収され、東軍の部将山内一豊に与えられたわけです。そこで、国を奪われて完全に浪人となった盛親は、京都の町人に預けられ、上立売の柳ケ図子に蟄居し、剃髪して、大岩祐夢と号し、それから十四年間も、寺子屋の師匠をしていた。しかし、大坂冬の陣が起こると、豊臣秀頼の招きに応じて、大坂に入城するわけです。

命をかけた〝就職運動〟

――武士ですから、みんな剣術の腕はたちますね。そうすると、だれでもが出来る剣でもって仕官しようとするのはたいへんなことになってまいりますね。

桑田　そうですね。まあたいした地位の武士ではない、宮本武蔵みたいな足軽階級の下級武士で、腕におぼえのある者は、とにかく諸国漫遊して、自分の名まえと強さを宣伝するわけです。そうして相当な武芸者と立ち合って勝てば、それが認められて、大名に仕官できる。いい例が、薩摩の示現流剣法を開いた東郷重位という男で、この人は自分の先生の息子、東新之丞と試合して勝ち、それで強いということで、島津家久に召し抱えられ、指南役として、四百石の知行をもらっています。それから有名なのは小野次郎右衛門忠明。もとは神子上典膳というんですが、先生の伊藤一刀斎の前で兄弟子の小野善鬼と真剣で試合をし、善鬼を斬り捨ててしまう。先生の折紙つきで勝ったわけです。それで六百石をもらって、二代将軍徳川秀忠の剣法お手直し役になるわけです。

この伊藤一刀斎景久と弟子の小野善鬼、神子上典膳に関する逸話には、さまざまな説がありますが、どれもおもしろく、講談師によって語り伝えられ、私など、少年のころから興味を持ち、こんな剣客談を聞いたのがもとで、日本の歴史が好きになったんですよ。ある時、徳川家康が伊藤一刀斎を招いて、その剣技を見て感嘆し、ぜひ仕官して指南してほしいと勧め、二代将軍秀忠の剣法師範役に所望した。しかし、一刀斎は、老年を理由に辞退し、その代わりに、門弟の神子上典膳を推挙したのです。そして、これを機会に、一刀流の極意を典膳に皆伝しようとした。一刀斎には、典膳のほかに、小野善鬼という兄弟子がいたけれど、邪心があるのを悟り、これに極意を授けなかった。それを知った善鬼は、激怒し、隙をうかがい、極意を記した一刀斎の巻物を盗んで、逃げ去ろうとする。一刀斎は、典膳と共に、これを追いかけたが、善鬼は、ある商家の店先にある大きな置き瓶の中に身を隠し、瓶をあけられると、そのトタンに下から相手の脚を斬って逃げ去ろうと考え、口に巻物をくわえ、小刀を手にし、身がまえていた。それを悟った一刀斎は、これまで三十三度の真剣勝負に使った銘刀を



仕官に成功した小野次郎右衛門忠明（下段右）、
上段はその師伊藤一刀斎景久（綿谷雪氏蔵）

典膳に授け、置き瓶ごと、善鬼を断ち斬らせた。典膳の剣技で、善鬼は瓶ごと頭を斬られたが、まなこをかっと見ひらき、口から一巻をはなさない。そこで一刀斎が、善鬼に向かって、この一巻を典膳に与えよ。その代わり、典膳には小野姓を嗣がせると、言い聞かせると、善鬼は初めて一巻を口から放して、瞑目した。それ以来、神子上典膳は、小野次郎右衛門と姓を変え、徳川秀忠の剣道お手直し役となり、小野派一刀流の開祖となったといわれています。実は、私も青年時代にこの小野一刀流の剣を修めた次第です。

—— そうですか。しかし、今のように就職率があって、何人に一人は就職できるというようなものではなくて、このように自分の命をかけてやるんですからね。

桑田　たいへんなものですよね。真剣勝負といったって、ほんとうに命をかけてやるんですからね。お面、お小手といったような、道場での竹刀競技とは、全く違いますよ。

就職できた剣客たちのサラリー

こうして命をかけて就職運動をした剣客たちの禄高はどれくらいだったのだろうか。

まず剣客としては最高位、将軍家御指南番になった柳生家をみてみよう。初代柳生石舟斎のころは、わずか二百石、それが柳生宗矩の時代になると、関ケ原の勲功が認められて、柳生藩一万二千五百石を領有するようになる。これを月収に直すと、今のお金で石舟斎が三十三万三千円、宗矩は二千八十三万円になる。小野善鬼を斬って秀忠のお手直し役に召し抱えられた小野次郎右衛門は六百石、今の月収で百万円。荒木又右衛門は有名な伊賀越えの仇討ちをする前に大和郡山で松平忠明に仕えて二百五十石、月収四十一万五千円をもらっていたことになる。薩摩示現流の開祖、東郷重位は四百石、月収六十七万円。上泉伊勢守の高弟で新陰タイ捨流の創始者、丸目蔵人は伊勢守から西国での新陰流の指南をまかされたほどの剣士だったが百七十石で月収は二十八万三千円に過ぎない。

—— そうすると、武蔵と小次郎はいったいどのくらいの禄高をめぐって、命をかけた決闘をしたことになるんですか。

桑田　まあ二百石から三百石ぐらいですね。私は、こんど、柳生石舟斎とか、同但馬守宗矩とか、小野次郎右衛門、荒木又右衛門、東郷重位、丸目蔵人などの知行高を調べ、それらを今日の役人か会社員の月収に直してみたんですが、当時の米一石が今の何万円にあたるか、祖税は何割かなどと計算して、だいたいの答えを出すのに、たいへん苦心したのです。それに、今日のサラリーマンは家族を養うだけですむが、昔の武士は、体面上、家族のほかに、家来、下男、女中なども雇わねばならず、剣士の場合は、門弟もいるわけですから、収入の割に、生活はそれほど楽ではなかったと思いますよ。

—— 三十三万から五十万円、今の課長さんから部長さん。

桑田　そうでしょうね。まあ、だいたいそんなところでしょうね。はっきりした数字を無理に出せばのことですよ。

—— そのくらいの月給をもらうために……。

桑田　命がけでやるんだから、ほんとうに気の毒といえば気の毒、悲惨といえば悲惨ですね。

真剣勝負で敗れたら、もとの失職どころか、命がなくなるか、片わになるわけですから、たいへんですよ。だから、勝つためには手段をえらばない。自分より強い者との試合はなるべく避け、勝ち目のありそうなものとやる。どうしても強敵と立ち合わねばならない場合は、いろいろと術策を弄する。宮本武蔵なんかも、それがうまかったように思いますね。

—— だいたい当時の剣客の相場は、かりに召し抱えられるとすると、だいたいこのくらいですか。

桑田　もっと低いでしょうね。一般は、百石か二百石。

—— 細川藩という大藩の就職だからこのくらいということですか。

桑田　そうですね。藩によって違いますからね。肥後熊本の細川藩は五十四万石の大藩です。その割に、十七人扶持米三百俵というお手当ては、少しも高くはない。もっとも、細川家の客分待遇ですからね。

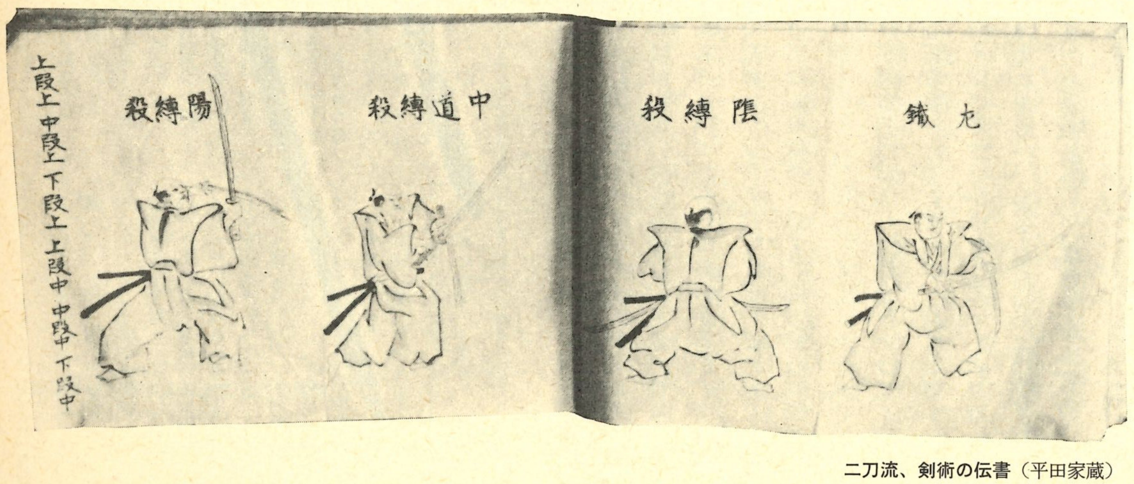
—— 百石から二百石ということは、今の月収になおすと十六、七万から、三十三万くらい。それでも職があればよかった。

桑田　そうですね。あとはほんとうに悲惨なもので、浪人してしまえば、のたれ死したか、腹切って死んだか、どっちかでしょう。前にお話した石河一宗のようにね。彼は切腹しています。

戦場は仕官の口さがし

—— 剣客、剣客といって歴史の上には派手に登場しますが、実はそうではなかった……。

桑田　そうですね、今の人から見れば、ほんとうに気の毒なものです。われわれは幸福です。今日のわれわれは、たとえ失業しても、国



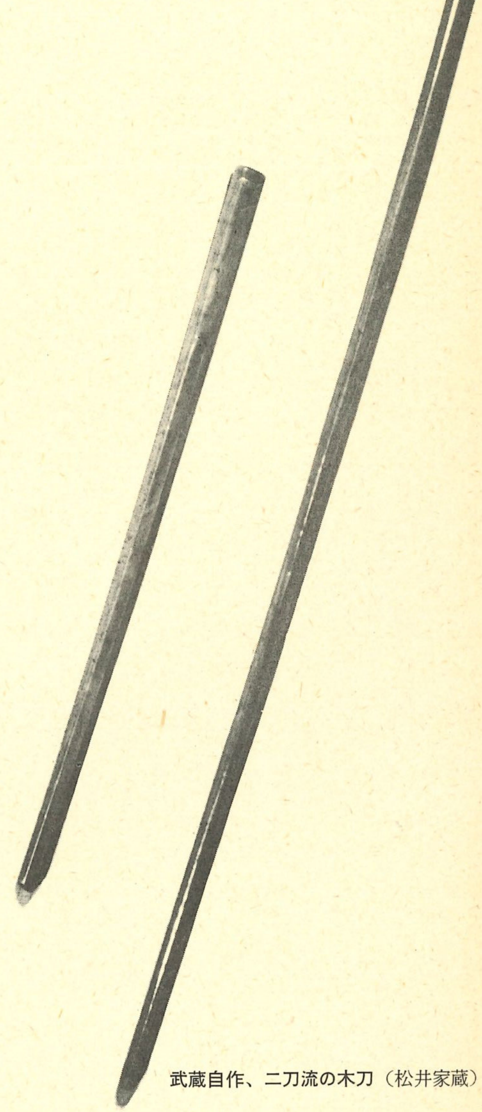
二刀流、剣術の伝書（平田家蔵）

家から失業手当がもらえますからね。その幸福につけこんで、これを結婚費用にあてる女性もいるようですが、幸福すぎて、文句いうと罰があたりますよ。宮本武蔵ほどの剣客も、二十歳ごろは、備後の鞆（福山市）の庄屋の家に居候していて、その土地に塩田の水あらそいが起こったとき、一方の農民に頼まれて用心棒となっています。もっとも、その時、大勢の農民を相手に、右手に木刀、左手に櫂を持って立合い、勝利を得たのが動機で、二刀流を発案したともいわれていますが……。

この当時の剣客たちは決して身分の高い階級の出身者ではなかった。よくて、せいぜい土豪、地侍といったところ。ほとんどは町人や農民の出身であった。

宮本武蔵が京都に上って決闘をする吉岡一門は足利将軍家指南役として知られているが、本業は染物屋で代々の当主は吉岡憲法を名乗り、ここの染物は憲法染めといって広く知られていた。

剣客の最大の望みはなんといっても仕官である。戦乱の世の中であるから実力さえあれば出世の糸口はみつかるが、それだけでは足りない。できるだけよい仕官の口を見つけるためには自己宣伝が必要である。有名なのは塚原卜伝で、回国修行に際して、大鷹三羽を据え、乗り替え用の馬三頭を用意し、八十人の門弟を引きつれていたという。舞台装置にこれだけ金をかけても、それで塚原卜伝の名が全国になりわたるとすれば、決して高い出費ではなかったろう。塚原卜伝ほど金をかけなくても、猩々緋の羽織を着ていた佐々木小次郎のように、派手な格好で諸国を放浪しながら、行くさきざきで他流試合をして名まえをあげることができた。しかし、仕官の口がころがっているという点では戦場にかなうものはない。合戦が起こりそうだということになると、さっそくかけつけ、どちらかの陣を選んで加勢させてもらうのである。これを「陣場借り」と呼んでいるのだが、その実態は雑用係のようなものであったらしい。こうして無報酬で働き、いざ合戦となると最前線に出て敵の首をあげるチャンスをねらう。よい首でもとれば仕官の途も開けるが、ほんとうは、弾丸よけに使われているというのが真相であった。こうした戦場では剣法といっても力まかせに叩きつける戦場剣法で、剣の技が認められて剣客が召しかかえられるようになるのは、むしろ大坂の陣が終わってからである。平和な時代になって、大名たちは実戦のためよりも、アクセサリーとして剣客を召しかかえたらしい。結局、剣客というのは所詮、武芸者、つまり武という芸を持つ芸者の一つに過ぎなかったともいえる。剣客たちの禄高が低いのも、ここに理由がある


武蔵自作、二刀流の木刀（松井家蔵）


吉岡憲法（『武稽百人一首』より　綿谷雪氏蔵）

決闘始末記

巌流島の決闘は、武蔵にとっても小次郎にとっても、一世一代のハイライトである。藩主みずから許し、検使の立ち合いのもとに行われた試合は、他にはない。

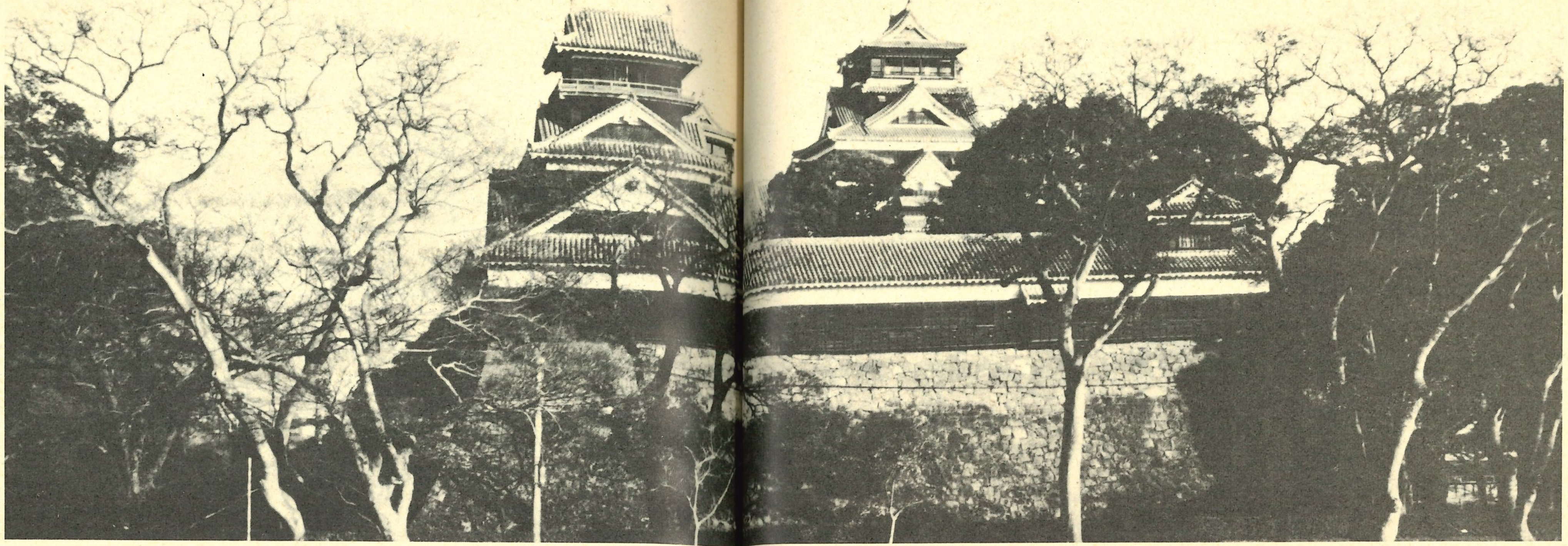
その一部始終は、生証人たちの口から口へと、広く世間に伝えられた。それら伝聞が後世にまとめられているが、内容は諸書まちまちである。『武将感状記』によれば、試合を申し込んだのは小次郎になっている。承知した武蔵は、船頭から櫂を譲り受け、二つに割り、二尺五寸と一尺八寸の二本の木刀で小次郎と闘った。武蔵は二刀を組んで、小次郎が三尺の刀を拝み打ちにきたのを受け流し、その頭を狙ったが、小次郎がよけ、一撃は左の肩に当たった。その時、小次郎は踏み込んで刀を横に払った。武蔵は足を縮めて飛び上がり、渾身の力で相手の頭を打った。この一撃で頭を微塵に砕かれた小次郎は即座に息絶えたという。

また、『沼田家記』によると、武蔵は豊前で、二刀兵法を教えており、小次郎も巌流兵法を教えていたという。二人の決闘は、両方の弟子たちが兵法の優劣を決しようと申し立てたことから始まった。双方の申し合わせで、試合の場にはどちらの弟子も参加しないことにしていた。

試合は武蔵が勝った。ところが、武蔵の弟子たちは、約束を違えて、島に渡っており、まだ息のある小次郎を打ち殺した。このことが小倉に伝わったので、小次郎の弟子たちは大いに怒り、武蔵殺すべしと、大挙して船島へ押しかけた。武蔵は細川忠興を頼って逃げ、城中にかくまわれて無事であったが、その後、忠興は身辺警護に鉄砲組の者をつけて、豊後にいた武蔵の父無二斎のもとに送り届けたそうである。

弟子たちのことで、もう一つおもしろい話がある。小次郎が船で船島に着くころに、ふと後を振り向くと、弟子が乗った三隻の船が近づいて来る。たすきがけの総勢二十人ほどである。もしものことがあればと、応援に来たのである。

小次郎は大声で、「勝敗は時の運である。もしもおまえたちの応援で勝ったとあれば、小次郎の名がすたる。直ぐに引き返せ」と叫んだ。師の声に驚いた弟子たちは、そのままついて行くこともできず、かといって、今さら引き返すわけにもいかない。しかたなく彦島の岸に船を着け、勝負が決まるまで待っていたという。このことから、のちに土地の人たちは、弟子たちが待っていた所を弟子待と呼ぶようになったというが、真偽のほどはわからない。



小倉から移封された細川氏の肥後熊本城

といえよう。

さて、本筋に戻ろう。巌流島の決闘をもって武蔵の闘いは終わった。

その後、彼が肥後熊本に姿を現すまでの二十八年間、彼の足跡は定かではない。恐らく武蔵は、その後も大藩の指南役として仕官することを夢みながら、悶々とした日々を送ったにちがいない。

武蔵が肥後熊本五十四万石の細川家に客分として身を落ちつけるのは慶長十七年春のことである。永い諸国放浪の果てに彼はようやく、ここに安住の地を求めた。時に五十七歳。

『二天記』によれば、武蔵は、細川家の取次役坂崎内膳に宛てた手紙に、みずからの心境をこう記している。

「……我等事、年罷寄（としまかりより）、其上近年病者に成候。何の望も御座無く候。妻子とてもこれ無く、老体に相成候へば、居宅家材の事思いもよらず候。」

文面には、望みを果たしえぬままに年老いてしまった剣客の苦渋が切々と記されている。

人を寄せつけなかった武蔵の性格

村上　彼は六十何度試合をして一ぺんも負けたことがない。それから生涯女を知らないし、ゆあみしたことがない、風呂に入ったことがない。それからくしけずったことがない。髪は伸ばしっぱなしでしょう。今の長髪族のはしりです。

それから「我れ事において後悔せず」と言っています。これにぼくはひっかかるのです。非常に人を容れない。大らかな人物ではなかったということは事実でしょう。自画像を見てもわかります。刀を差してグッと立っている。人が近づきにくい性格ではなかったかと思う。それから自分の家に道場がないんです。ただ内弟子はいますけれども。これは細川家の記録にあるんですけれども、ある時内弟子が、こういう時なら先生も隙があるだろうと思って、囲炉裏のそばで本を読んでいる武蔵のうしろから、薪ざっぽで殴りかかる。人格が出来上がっている剣客ならば、薪ざっぽをひったくって「何をするッ」と叱りつけるくらいでおしまいでしょうけれども、その薪ざっぽをひったくって相手の腕を折っておりますから、非常に気性は激しい。だから、細川家の侍もいろいろ話を聞きに行ったという記録はありますけれども、どうでしょうか。ちょっと藩の侍たちに受け容れられなかったのではないですか。孤立した剣客だったのではないでしょうか。晩年は淋し



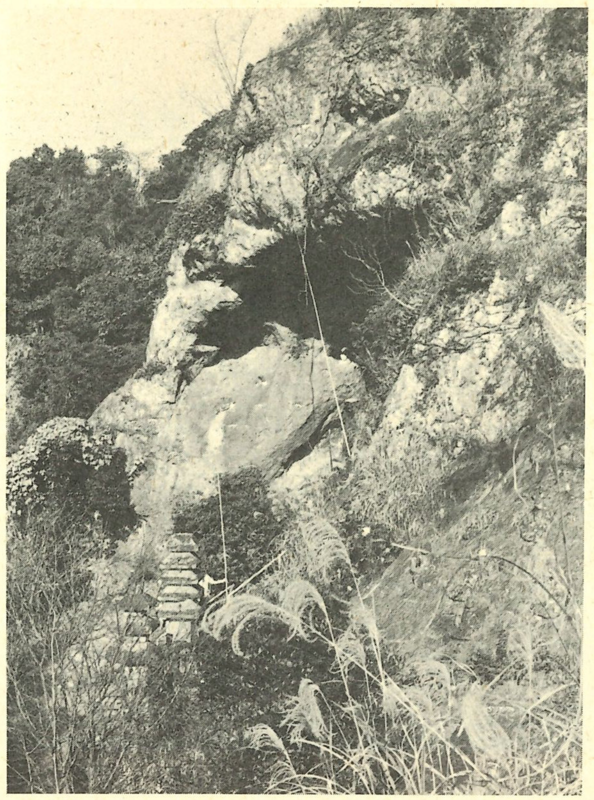
晩年の武蔵　自画像を模したものか…（富永文夫氏蔵）

かったと思います。

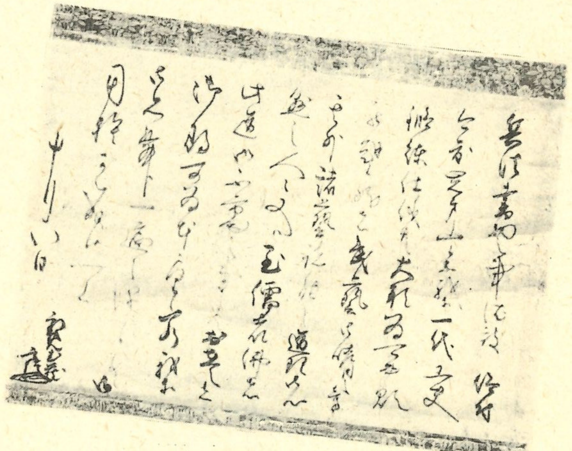
武蔵――戦国に生きた無名剣士たちの代表者

――宮本武蔵の存在をほかの武芸者と比較してどのようにお考えになりますか。

桑田　やっぱり、関ケ原の合戦あたりまでは、足軽として参加するわけですから、人を殺すことが専門で、それは殺人剣法だと思います。『五輪書』なんかを見ますと、しょっちゅう勝ったようなことが書いてありますが、あれは武蔵の自己宣伝でしょう。しかし、あの本の中に、二天一流の剣法の理論はともかく、実際のところを見ますと、今の剣道をやっている人が読んでも、もの凄い迫力がある。ほんとうに殺人剣法なんですね。そういうところが、平和な時代になって、武蔵の性格を孤独にしたのではないかと思います。しかし、宮本武蔵という剣客も、この『五輪書』があるために名まえが残っているんですね。あれは門弟に与えた二天一流剣法の秘伝書ですけれども、武蔵の場合、あれが偶然残っていたわけです。ほかの剣士にも、ああいうものが残っていたら、やはり、武蔵と同じように有名な男がかなりいたと思います。だから、宮本武蔵というのは、あの時代の多くの無名の剣士を代表するような存在なんです。そして、武蔵の陰には非常に不遇な剣士がいっぱいいて、一生を剣にかけながら、ついに仕官の口にもありつけず、結局、のたれ死んでしまったような、そういう同情すべき剣士がいたように思われますね。



『五輪書』をものすためにこもった霊巌洞



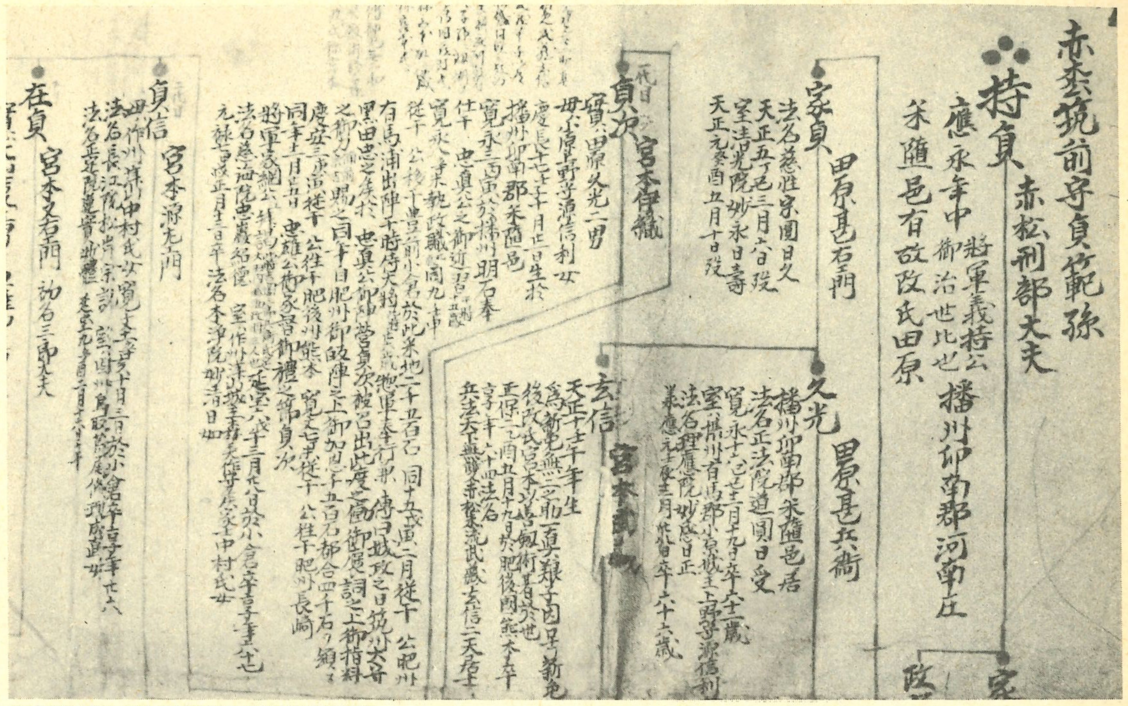
霊巌洞にこもる時、細川光尚に宛てた書状
御見舞は御容赦と、その決意を見せる（島田美術館蔵）

『五輪書』によって、武蔵の剣歴を調べますと、若いころは殺人剣法を実施し、試合の相手を片わにしたり、殺したりしているが、老年に近づくにつれて、殺人剣法を活人剣法に改めているようです。これは、気力がおとろえたせいだといってしまえば、それまでですが、やはり、時代が、戦国乱世から江戸初期の天下泰平の世の中に推移したせいでありましょう。したがって、晩年に書いた『五輪書』には、活殺両様の剣法について説明していますが、だんだんと、道徳のお説教じみた逸話も出て来ます。単なる剣の技術だけでなく、剣の道についても説き示しているようです。しかし、この『五輪書』というのは、精読すればするほど、怖い本です。ここで、一分の兵法といっているのは、個人闘技で、多分の兵法といっているのは、団体闘技、つまり、戦争のことなんです。武蔵は、関ケ原合戦や大坂の陣にも参加し、戦争の体験もある。そこで、戦争に勝つにはどうしたらいいか、というようなことまで説明しているのです。なかなか物騒な書物と思います。

――何ものも書かず、そして名も残さず消えていった剣客たちが



五輪の塔（武蔵の墓）　墓は他にも見られるが、遺体は、この墓のある泰勝寺細川家墓地に埋葬された



宮本家に代々伝わる家系図（宮本信男氏蔵）

たくさんいたということですね。数えれば、そのほうが多いんではないですか。

桑田　惨めな生活してね。歴史上に有名な剣士は、特に柳生一族などは、宮本武蔵の『五輪書』のような剣法の秘伝書を、子孫や門人のために書き残し、それが、今日に伝わっていますが、そのほか何も書き残さずに死んでいった剣士は、無数にいたことと思います。このことは、生活がみじめであったということにも増して、彼らにとっては、心残りだったと、私は思います。

村上　ですから、武蔵というのは『五輪書』を書いたために名まえも残ったし、存在もはっきりした。

闘いののち、船島は巌流島とその名をかえ、三百年近くの間、人々の記憶から消え去っていた。

この島が再び、歴史にその姿を現すのは明治に入り、わが国が大陸への侵出を開始してからである。

明治二十八年、日清戦争の勃発とともに大陸への玄関、下関の入口であったこの島に、伝染病を防ぐための隔離病院ができた。そして、明治四十三年、島の周囲は埋め立てられ、すっかりその姿を変えた。

今、その役割を終えた巌流島は、船の残骸に埋もれようとしている。

かつて、二人の剣士が壮絶な闘いを繰り広げた、あの巌流島の面影はもはやない。

大坂城の浪人群像

桑田忠親

大坂方の籠城準備と浪人募集

京都の方広寺大仏殿の鐘銘事件、大仏殿普請奉行片桐且元の大坂城退出をきっかけに、徳川と豊臣、東西が手切れになると、豊臣秀頼の居城大坂城では、籠城の準備に狂奔すると同時に、太閤秀吉恩顧の諸大名に来援を乞い、諸国に散在する浪人者を募集することに大童となった。しかし、大坂方の危急に馳せ参ずる大名は、一人としてなく、反対にみな、誓書を徳川方に提出し、家康に対して二心なきを誓った、というから、人間社会などというものは、今も昔も、変わらずに、いざというと、非情なものである。弱きを助けて強きを挫くのではなくて、強きを助けて弱きを挫くのが、世の慣らいだった。そこで、頼りになるのは、天下の浪人衆だけである。大坂城内にあって、浪人者の募集に従事したのは、大野治長、織田有楽、津田左門らだが、関ケ原合戦以来、輩出した数多くの浪人たちの中には、西軍（石田方）の残党のほかに、その後、さまざまな理由で徳川幕府によって改易に処せられた諸大名の旧家臣などが交じっていた。彼らは、みな徳川の天下に対して不満をもつ者どもで、常に天下の動乱を待望していた。彼らは、大坂の陣をば千載一遇の好機とし、大坂方の招きに応じ、数万余人も馳せ集まって来たのである。

大坂城に参集した浪人たち

さて、大坂城に参集した浪人たちを大別すると、まず、関ケ原合戦の時西軍に属し、敗戦の結果、その領地を徳川氏に没収された大名やその息子が挙げられる。真田幸村、長宗我部盛親、仙石宗也、毛利勝永、大谷大学、増田盛次、手塚為広、堀内氏弘、氏家行広が、これである。次に、そうした大名の家臣。これは、明石全登、浅井長房、淡輪重政などである。次に、関ケ原合戦後、嗣子がないため、または、罪を犯したために、徳川氏によって改易、あるいは減封された大名やその子がいる。石川三長、織田頼長など。次に、改易になった大名の旧臣には、筒井定次の家来たち、小早川秀秋の旧臣岡島道喜などがいる。

それから、主人と喧嘩したり、他人を殺傷したりして、主家を追われた者がいる。これには、後藤基次、塙直之、御宿正友、細川興秋、米田是季、小倉作左衛門、北十左衛門、若原右京、平野長勝、北川宣勝、山川賢信、宍戸元盛、佐野道可などがいる。

なお、『大坂御陣山口休庵咄』によると、このほかに、京極丹後守の従兄弟にあたる関ケ原浪人、京極備前守。石川玄蕃頭三長の弟、石川肥後守康勝がいたし、また、小身者には、結城権之助、伊木七郎右衛門遠雄、名島民部丞忠統、浅井周防守長房、三浦飛騨守義世、稲木三右衛門教量、南部重左衛門、多田藤弥などがいたという。これらの小身者は、それぞれ、五騎か十騎くらいの部下を連れて、大坂方代表の大野修理助治長と面接したが、入城の前には、塀裏に集まっていた、とのことである。

これらの浪人たちの妻子は、たいてい、大坂の町屋にいた。そこで、大名浪人は屋敷を貰うことになった。が、一騎で駆けつけた浪人には、現在、妻子のない者が多かったという。

大坂城に参集した浪人たちは、馬乗一騎について黄金（竹流し金）二枚ずつを下賜された。扶持米も、その浪人の身分に応じて与えられたのである。このうち、特に有名なのは、真田幸村、長宗我部盛親、後藤基次、明石全登、塙直之、御宿正友の六人だから、これらについて、その前歴や入城の動機、人物などを略述してみよう。

大坂城での最後の奮戦華々しかった真田幸村



武道の面目果たした真田幸村

真田幸村は、信州上田城主真田昌幸の次男で、関ケ原の乱には、父と共に西軍に属し、上田に籠城し、下野の宇都宮から、関ケ原めざして中山道を西上する徳川秀忠の大軍を信州で支え、西軍を有利にしたが、西軍が関ケ原で惨敗した結果、東軍の総大将家康のために、城地を没収され、東軍に属した兄、信之の命乞いによって死罪を免れ、紀州の九度山麓に流された。父の昌幸は大坂冬の陣の三年前に九度山で病死したが、幸村は、その子大助と共に蟄居し、貧窮生活に堪えていた。そこへ、大坂城主の豊臣秀頼から入城依頼の使者が訪れた。そのことを知った紀州和歌山城主浅野長晟は、家康の指令通り、幸村の行動を監視させ、大坂入城を阻止しようとしたが、幸村は、長晟の命令で幸村の警戒にあたっている土地の百姓らを酒宴ぜめにして、九度山を脱出し、大坂入城を果たした。幸村が、大坂の使者が持ってきた巨額な黄金に買収された、との説があるが、これは徳川の御用学者の書いた曲筆にすぎない。幸村は、父昌幸の遺志を継ぎ、弱きを助け強きを挫くといった武道の面目を果たすため、不利な大坂入城を果たしたのである。黄金を下賜されたり、五十万石を予約されたというのは、入城以後のことだ。さればこそ入城以後、ことに夏の陣の最後の奮戦ぶりは華々しく、敵将細川忠興をして、真田の武功日本一——と、賛嘆せしめたのである。貧窮生活から脱出するために、一か八かで大坂へ入城したなどという学説は、その研究者の人柄の卑しさを裏書きするほかの、何ものでもない。幸村の享年五十。

寺子屋の師匠をした長宗我部盛親

長宗我部盛親は、土佐国主長宗我部元親の四男にあたる。兄の信親が秀吉の九州討伐で戦死したため、元親の死後、土佐二十二万石を継いだ。関ケ原の乱の時、初め東軍に従おうとしたけれど、強引に西軍に味方させられ、敗戦の結果、土佐に逃げ帰った。その後、大坂にのぼり、徳川家康に謝罪したが、兄の長宗我部親忠を暗殺したことで、家康の怒りを買い、領国を没収され、浪人となった。その後、京都上立売の柳ケ図子に住み、剃髪して祐夢と号し、十四年間も寺子屋の師匠をして日を送った。ところが、大坂冬の陣が始まると、京都所司代の板倉勝重の宅を訪れ、徳川将軍家の大坂出馬を好機として、身上の引き立てを乞うて、安心させ、宿所に町人たちを呼び集め、徳川へ仕官の前祝いと触れて、酒宴を催した。しかし、その夜半、盛親は、宿所を忍び出て、高瀬舟に乗り、伏見の京橋に着くと、どこからともなく盛親の旧臣が十騎、二十騎、三十騎と集まり、大坂へ入城するころには、五千人に及んだというから、かなり計画的な京都脱出だったことがわかる。大いに感激した豊臣秀頼は、盛親を宮内少輔に任じ、一方の大将と定めた。しかし、大野治長は、盛親からも人質を取った。このように志士気どりで入城した浪人たちから、一々人質を取ったのが、大坂方敗戦の原因だったと、『翁物語』の著者は評している。盛親が夏の陣で戦没したときは、四十一歳だった。

どこの仕官も断わった後藤基次

後藤基次は、黒田長政に仕え、九州陣、朝鮮両度の役、関ケ原合戦などに武功を立て、また智謀と機転を発揮し、長政が筑前福岡城主になると、嘉摩郡で一万六千石を与えられ、大隈城を預かった。ところが、その後、他の大名と信書を交わすなど、その挙動に不遜なところが多いのを科められ、一時、長政に謝罪の誓書を提出した。が、謀叛をたくらんでいるといった風説が起こったため、大坂冬の陣の八年前、ついに筑前を立ち退き、旧知によって、播磨の池田輝政の客分となった。しかし、黒田長政から基次追放の依頼が再三あったため、池田家を去り、諸国を流浪するに至った。基次は、その後、福島正則、藤堂高虎、徳川秀忠にも招かれたが、みな、仕官を拒絶している。が、浪人中に、金百両を具足の内に貯え、戦国の一匹狼としての立場を押し通した。大坂入城も、個人的な武力を高く買わせるのが目的で、十万石を予約されていたというが、叛骨的な人物だったことは、理解される。人数六千を率いて入城したという。

吉利支丹だった明石全登

明石全登は、播州の豪族明石景親の子。備前の大名宇喜多秀家に仕え、二万石を知行したが、吉利支丹であった。関ケ原の乱には、秀家の家老となり、四万石を加増された。合戦当日、秀家に従って西軍の先鋒をつとめて、力戦したが、敗走し、浪人となって大坂にかくれ、キリスト教を広めた。しかし、徳川氏のキリスト教禁圧がきびしくなってきたので、播磨の芦森に潜伏していた。大坂冬の陣が起こると、大野治長の招きによって、四千人を率いて入城したという。

動乱の勃発を念願していた塙直之

塙直之は、通称を団右衛門といい、大坂入城の浪人中、真田、後藤について有名。講談本でも最もなじみの深い豪傑である。彼は、遠州横須賀の生まれで、初め秀吉の家臣加藤嘉明に仕え、重用されて、朝鮮役で成功を立て、知行三百五十石を与えられた。しかし、関ケ原合戦の時、東軍に属したが、軍令に叛いたため、嘉明の怒りを買い、加藤家を去った。一時、小早川秀秋に仕えて千石を知行したが、秀秋が死ぬと、諸国を流浪し、常陸の水戸城下に隠棲したり、京都花園妙心寺の僧侶となり、鉄牛と号して諸国を遍歴したりしたが、ついで福島正則に仕え、また、小早川家臣宮原与惣左衛門方に寄宿したともいう。流浪中の直之は、常に悪事災難に遭遇するように、天下に動乱が勃発するようにと、神前に祈願していた。それを人が怪しんで問うと、浪人の身だから、畳の上の奉公では容易に立身できぬ。災難か動乱が起これば、それを好機に名を揚げることができるだろうと、答えたという。物騒な男もいたものだ。ところで、大坂冬の陣が起きて、直之が大坂に入城しようとしたとき、肥田志摩という武士が、同じ戦いに参加するならば、東軍になされよ、と忠告すると、直之は、東軍のほうは多人数だから、よほどの働きをせぬ限り、立身出世はおぼつかない。それに比べ、西軍には、すぐれた将士が少ないから、一手の大将として功名が立てられる。冥土に行っても心残りはない、と述べて、大坂に入城したという。やはり、乱世の一匹狼だった。

武田信玄の孫といわれる御宿正友

御宿正友は、相州竹の下に住む御宿監物入道素全の子だが、実は、甲斐の英雄武田信玄の五男葛山十郎信綱の子であるという。武田家が滅亡したとき、正友は、越後の上杉景勝のもとで養育された。成長すると、景勝の養子となった。のち、御宿源左衛門と称し、福島正則に仕えた。その後、勘兵衛と改め、越前福井城主松平忠直に召し出された。しかし、忠直の命令に背いて、福井を立ち退き、大坂に入城している。入城の時には、越前一国を下賜される約束だったという。それを聞いた松平忠直は、大いに怒り、御宿正友の首を五千石で買い取りたい、といったそうである。忠直も、徳川家康の孫だが、問題の人物だけあって、やはり、常規を逸した言動である。

(国学院大学教授)

剣聖と剣豪

奈良本辰也

剣豪という言葉は辞書にあるが、剣聖という言葉はない。しかし、これは辞書にないながらもいつの間にか人々のあいだに定着した言葉である。

人々が剣をもって闘うようになった歴史はかなり古いところまでさかのぼることができよう。しかし、源平のころまでは、弓矢が中心であった。

源為朝の豪勇ぶりも、その強弓によっていちだんと高くうたわれている。為朝の祖先、源義家が安倍貞任を追いかけたのも馬上で弓に矢をつがえてのことだった。

平家方で言えば平知盛である。彼が使用したという鏃が紀州の熊野神社に収められているのをみたが、恐ろしいほど大きな鋼鉄できたえられていた。あれを強弓につがえて射れば岩をも通すような感じをうけた。

そのころの人は武士のことを「弓矢取る身」と呼んでいたようであるが、まことにそうであろう。太刀も揮うが、最後は組み討ちである。組んで小刀で喉首をかき切るのだ。

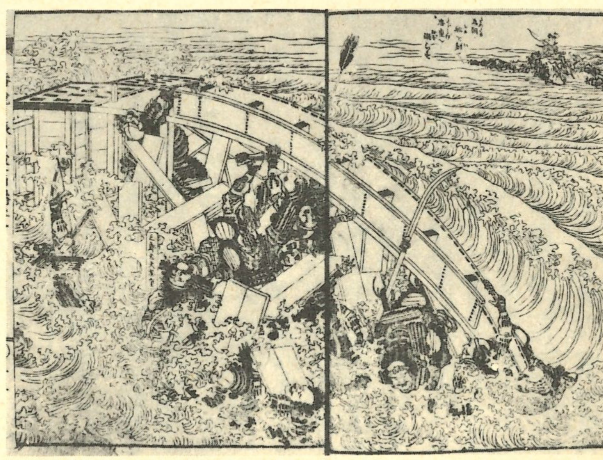
甲冑や鉄の具足類で身を固めた者同士の戦いだから、太刀は余り有効ではない。それよりも槍や薙刀の方がよほど有効であったろう。鉄砲が出現すると、それが最も有力な武器となる。

いま、正徳四年（一七一四）に書かれた『武芸小伝』をみると、武芸の順序は、巻一　兵法、巻二　諸礼、巻三　射術、巻四　馬術、となって、次の巻五が刀術となっている。刀術の次は槍術、砲術、小具足、柔術と続くのだ。兵法は、今日いうところの軍学あるいは兵学と言ったところである。

だから、この部には北條流の祖北條安房守氏長、山鹿流の祖山鹿素行、甲州流の祖小幡景憲などがあげられる。彼らは、いわゆる武辺者ではない。学者とか軍師といった方がよい人物であろう。

礼法は、小笠原流の小笠原信濃守貞宗ら小笠原一家の人々が並び、それに一宮とか逸見、小池、畑、星野等々の礼楽にくわしい人物の名があがる。

射術は、日置流の祖日置弾正や吉田流の祖吉田上野介重賢等々、馬術も大坪流の祖大坪式部大輔慶秀等々である。



一矢にて船を沈める為朝（葛飾北斎画）

さて、刀術であるが、これは飯篠山城守家直、上泉伊勢守秀綱、塚原卜伝、伊藤一刀斎、柳生兵庫、同宗矩等五十六人の名があげられている。その中には宮本武蔵も居れば、吉岡憲法もある。

正徳のころは、すでに柳生家が断然他を圧しており、将軍家御指南番たるの栄誉はその家流に輝いていた。上泉伊勢守の名が特筆され、その師と言われる飯篠山城守が最初にあげられるのも故なしとは言われまい。

この中に出てくる吉岡憲法は、京都の染物屋の出身で、その名も諸方に聞えており、将軍家の指南番をつとめていた。この場合の将軍家は足利氏である。将軍義輝のごときは、なかなかの達人で、三好・松永の軍勢が押し寄せたとき、刀を揮って寄手の十数人を斬り、やがて力つきて自刃したという。

将軍がみずから刀を揮わなければならない時代が来たというべきであろうか。それと共に吉岡憲法のような兵法者も世に出ることになるのである。剣豪に目の向けられる時代が来たのだ。

そこで、柳生家の祖が剣を教えられたという上泉伊勢守秀綱が登場する。上泉伊勢守は、上州の人で、武田信玄に亡ぼされた長野信濃守の家臣だった。永禄六年（一五六三）箕輪の城が落ちたとき、信玄の誘いを蹴って他所に出たと言われる。

上泉は、飯篠山城守から剣の教えをうけたと言われるが、彼に最も大きな影響を与えたのは愛洲陰流の祖移香斎である。上泉は彼から刀槍の術を学び、その極意をきわめた後、みずからの新陰流を開いたと言われている。

上泉は諸国をめぐって、京都にもしばらく滞在しているが、伊勢や大和をもめぐり、柳生宗巌と試合をし、宗巌はその試合で遙かに及ばないことを感じて、その弟子となったことが言われている。

上泉は、二人の門弟を従えて歩いたが、その一人が神後伊豆守、他が疋田文五郎で、ともにすぐれた剣豪であった。将軍義輝も神後を招いたことがある。関白豊臣秀次も武辺が好きで、疋田文五郎が招かれた。

疋田は、丹後の細川幽斎にも仕えたことがあるという。こうしてみると、剣に名を取るということは、仕官の途だった。したがって、上泉、飯篠、神後、疋田など剣の達人と称する者が出て来たことは、やはり時代の要請だったのだろう。

疋田文五郎については、徳川家康が、彼の刀術は確かにすぐれているが、しかし大名も家臣も同じような教え方をしている。それは考えが足りないからだ。一軍を率いる者が、みずから剣を抜いて戦わなければならなかったらそれは全ての終わりである。大名や貴人は、そのような刀術を学ぶ必要はない、と言った話が伝えられている。

剣豪というのは、そうした深い考え方があって、その上にたって剣の道を進んだのではない。宮本武蔵が言っているように、十三の歳から他と戦って一生に六十数回、一度も負けたことがないというような強さが身上であった。

伊藤一刀斎は伊豆の人と言われるが、鐘巻自斎らについて刀術を学び、一流を開いた人物である。宮本武蔵ほどではないが、彼も三十三度他流試合をやったが、一度も敗れたことがなかった。

一刀斎には、彼と試合して敗れた側からの夜襲をうけた話があるが、その夜襲において一人で立ち向かい、対手方四十八人を皆殺しにしたという話も残っている。しかし、これは荒木又右衛門の三十六人斬りと同じように、いささか誇張がある。

しかし、剣を学ぶ者はともかくも強くならなければならない。技を磨かなければならない。それでこそわが身を守ることができ、また対手を斃すことができるのだ。だれもが剣豪になりたかったことは想像できる。

だが、技にすぐれ、強さが増してきたとき、人々は唯に強いばかりでは物足りなくなってくる。家康が疋田文五郎を批評したのも、そうした一面を衝いているのだ。

塚原卜伝という剣の名人がいた。常陸国塚原の人で、父を土佐守といった。父は上泉伊勢守と同じように飯篠山城守から刀術を学んだというが、少年のころその父に伝授をうけ、長じては上泉伊勢守の門に学んだ。戦場にあっては、いつもたいへんな手柄を立て、討ち取った首の数は百を越えたという。

その塚原に次のような話がある。『武芸小伝』からの引用であるが、

「……或時東国へ下れる折節、江州矢走の渡に著きて、一葉の扁舟を借りて、乗合五七人有りしが、其中に三十七、八程に見えたる男あり。長高く髪黒にして、言いかつなり。船中にて唯一人口をたたき、別に人もなげに慮外至極なる体にて、天下に敵手なきように兵法の自慢をする。卜伝、初めは知らず顔にて、打眠りて居たりしが、……彼の男に向ひて云ひけるは、さて

も種々の御物語を承るもの哉。其中に兵法の枕言こそ心得ぬ事なれ、我らも若年のときより形のごとく精を出して稽古したれども、今迄人に勝たんと思はず、只人に負けぬように工夫するの外、更に侘事なしと言へば、男聞いて、御坊のやさしき兵法は何流ぞと問へば、いや、ただ人にまけぬ無手勝流と答う……。」

そこで、その男に試合を持ちかけられ、あの島でということになるのだが、卜伝は、その男を先に上陸させて、船頭の棹を引きとり、さっさと舟を返してもとの場所に帰ったという。上陸した男は、ただ一人で島に残されて、地だんだを踏んで口惜しがったが、卜伝は

「これこそ、無手勝流よ、この兵法の極意はよくおわかりじゃろう」

と言って、そのまま立ち去った。剣の達人でありながら、無暗に剣は使わないという話が出来てくるのである。剣法、すなわち刀術は、いたずらに蛮勇を揮わない精神の領域に入ってゆくのであった。

上泉伊勢守にもそのような話がある。これは、彼が旅中のこと、一つの事件に出会った。ある村で人だかりがしているので聞くと、咎人が小児を人質にして立てこもっているという。近よれば人質を殺すというのでどうすることもできない。

そこで上泉は旅の僧から衣を借り、頭を丸めてもらって握り飯を手にその場所に赴いた。そして咎人に向かって、

「子供が腹をへらして弱っている。坊主として見逃して通れぬので握り飯を持ってきた。投げるから受け取って食べさして呉れ」

と頼んだものである。

咎人は、そこで少し警戒の色を解いた。すると、すかさず上泉は、

「おまえも腹がへっておるに違いない。さあ、これをやるからおまえも食べよ」

といってもう一つの握り飯を差し出した。咎人が手に取ろうとした瞬間に手もとに飛び込んで、その男を差し抑えたという。剣法は、ただに刀を交えて勝つことだけではない。

こうした話から、剣豪という言葉に対する剣聖の言葉が出て来たと見るべきだろう。塚原卜伝も、上泉伊勢守も、剣聖というべきだ。それに禅宗の影響も入ってくるとますます、剣聖の言葉が意味を持つようになる。

先に、剣は力の問題だけではなく、精神の問題であるといった。有名な山本常朝の『葉隠』にも、

「武士道は死ぬことと見つけたり」

という言葉がある。一対一の勝負に勝ち残ることができるのは、平素から死の覚悟が出来ている者の方だ。相手の出方を冷静に見きわめるには、生への執着があるとそれが出来ないとするのだ。

死の恐怖で眼前が真っ暗になったり、筋肉が硬直して自由に振舞うことができなくなったりするからであろう。柳生但馬守が帰依した禅僧沢庵も、その著『不動智神妙録』で、次のようなことを記している。

「向ふから打つとも、吾から打つとも、打つ人にも打つ大刀にも、程にも拍子にも、卒度も心を止めれば、手前の働きは皆抜け候ひて、人に斬られ申すべく候。敵に我身を置けば、敵に心を取られ候間、我が身にも心を置くべからず。我が身に心を引きしめて置くも、初心の間、習ひ入り候時の事なるべし。大刀に心をとられ候……。」

つまり、心に執着があったら、その人は敵に勝つことはできないだろうと言っているのだ。禅でいう、無心の境地、すなわち、とらわれないで右にも左にも、前にも後にも、どうにでも対応出来る境地を獲得することだという。

剣禅一体というような言葉が出来たのも、このころからであろう。そのような境地に立てば、剣はもはや人を斬るだけの技術的なものではなくなってくる。

よく〝一流に達する者は百芸に通じる〟、という。剣から入って剣を抜けるといってもよいであろう。剣豪はやがて剣聖の境域に入ってゆくのだ。

宮本武蔵のごときも、まさに剣豪として出発したが、やがて辿りつくのは剣聖の境地であったようだ。佐々木巖流を討ち果たしたのちの彼には、絵画や彫刻の世界に遊ぶというような境地が開けてくる。

今日残された彼の作品をみると、いかにも精神のとぎすまされた内容がある。凡人の及ぶところではない。剣聖の境地が書かせたか。

（歴史学者）

武蔵と小次郎

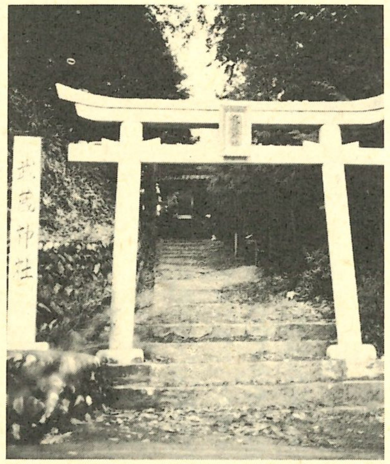
佐藤忠男

宮本武蔵と佐々木小次郎は、古くから講談で語り伝えられた豪傑であるが、一九三〇年代の終わりに吉川英治が書いた『宮本武蔵』と、四〇年代の終わりに村上元三が書いた『佐々木小次郎』という二つの長編小説によって、もとの講談の豪傑のイメージはすっかり忘れられ、かわってこの二つの小説で描かれたイメージが定着した。特に宮本武蔵のばあい、吉川英治の小説によってほとんど国民的英雄といっていい人物になった。

小説『宮本武蔵』のテーマが人間修業であることはよく知られている。昔の講談では、武蔵のような豪傑はただ強くなるためだけに修業するが、吉川版の武蔵は、ただ強いという以上のなにかを求めて修業する。強いという点では彼はもう、少年時代から滅法やたらと強いのである。ただこの強さは野蛮なものである。これでは惜しい、ということで、多くの人物がつぎつぎと彼の前に現れて、もっと内面的、精神的、文化的な価値のありかを示唆してゆく。禅僧沢庵、奈良宝蔵院の老師、茶人利休とその母、遊女の太夫、そしてなかんずく、恋人のお通さんである。

野蛮な活力を生来はちきれんばかりに持っている武蔵は、それらの人々の好意に謝しながら、しかし容易にそれらの文化人たちに飼い馴らされることなく、剣道の試合による殺人をつぎつぎと重ねてゆく。彼は、彼にもっと知性をもて、もっとゆとりを持て、もっと風雅を知れ、もっと恋と情を知れ、と教えてくれた人々のことを忘れているわけではない。むしろ大いに尊重しているつもりなのである。しかし、彼の活力は、彼に力づくで対抗する者のすべてを殺してしまうまで平安を知らないのである。

この武蔵の姿は、明治から太平洋戦争の敗戦にまでいたる日本の歩みの見事な象徴である。いや、ある意味では日本はいまなお、この武蔵のようである。



宮本村の武蔵神社

西洋列強の脅威に実力でたち向かうという決意で開国して以来、日本は、武蔵が吉岡一門や宝蔵院の荒法師どもや天才佐々木小次郎をつぎつぎと倒したようにして世界の国々と戦って勝っていた。この間、武蔵が、ただ強いだけではダメだから精神的文化的な面にも気を使えと文化人たちから言われつづけ、自分でも多少はその気になったとおなじように、日本全体も、精神や文化をなおざりにしてきたわけでは必ずしもない。

ただ、吉川英治の武蔵にとって、この精神や文化というものが、危機にあっても、動揺しない態度を養うといったような、強さを補完する性質のものなのか、それとも、たんなる肉体的、闘争的な強さを否定するものなのか、どうも、もうひとつはっきりしないように、富国強兵主義から軍国主義の時代における日本の精神文化というものも、世界に覇をとなえる者にふさわしい精神を養なおうという、覇権主義の付

属物のようなものを意味する傾向が強かった。武蔵は正に日本だったのである。近代日本の矛盾が武蔵の矛盾だったのである。

もし武蔵が、精神文化というものを、ただ危機に動揺しない精神修養としてでなく、野蛮な殺し合いをやめて平和に生きるためのものと考えるとしたら、それは彼が、恋人のお通さんと結婚して子どもを生むときであろう。もちろんこんなことはありえないが、しばしば彼がお通さんへの恋に悶々とする描写は、この意味で彼の人生の根本的な岐路であり、同時に、これが書きつづけられていた日中戦争の時代には、日本の進路の岐れ道をも暗示するものであって、重大なサスペンスをはらむ記述だったはずなのである。武蔵は、愛と平和のシンボルとも言うべきお通さんへの想いを、くり返し、くり返しみれんとしてふりきって修羅の道を進む。なぜか。理屈はない。強いて言えば日本そのものがそうしていたからで、答は国家と民族が出してくれるだろう。そういう小説であった。

事実、答は国家が出した。小説が完成して数年後におとずれた敗戦がこれであった。日本は非武装の文化国家を宣言し、武蔵の原理は敗れたかに見えた。しかし小説『宮本武蔵』は戦後もずっとロングセラーである。思うに長年つちかった国民性というものはそう一朝一夕に変わるものではなく、明治以後八十年の日本人の歩みを圧縮したかのようなこの作品もまた、そう簡単には忘れ去られないものを持っているのであろう。例えば戦後に日本人は国家主義を放棄してマイホーム主義に転じたと言われるが、それでも男たちの多くは、会社のためと言われれば、海外にだって単身赴任する。そして給料よりもむしろ仕事の業績をあげることそれ自体に生甲斐を見い出すべく奮闘する。高度成長経済を支えたのは正に、青年時代に『宮本武蔵』を愛読した層の武蔵ばりの精神のためかも知れない。

宮本武蔵はもとは講談種の話であったが、剣豪を主人公にした講談というのは、ひたすら、主人公の強さと忠孝や武侠などをうたいあげるものだった。講談が大衆小説に進化したとき、そこに愛の苦悩とかニヒリズムとかいった近代的、心理的な要素が加わったが、この新しくつけ加えられた分は、外国の文学あるいは映画の影響だといっていいであろう。小説『宮本武蔵』におけるお通さんのような、純潔でしかも能動的で、ヒーローに対していつもなにか心の導き手であるような聖処女というキャラクターを、日本の伝統文化の中に見い出すことはむずかしい。日本の伝統文化の中では、男の心の導きになる女性は、まず母親、ついで姉で、場合によっては妻や妹がそうなるが、聖なる恋人というのはちょっと思い当たらない。心中ものの恋人というのは、死んで意地を通すという意味では精神的であるが、本来破滅的な存在で、男に希望と勇気を与える者ではない。

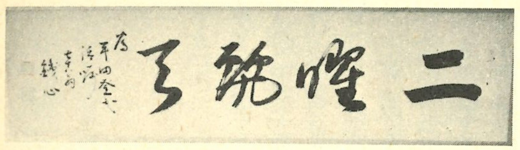
言うまでもなく、その愛の気高さによって男に限りなく道徳的な勇気を与える恋人の女性というイメージは、西洋の騎士道物語から生み出され、精練され、西洋のメロドラマの欠かせぬ伝統となったものである。色恋沙汰といえば遊女と客の情痴の果ての心中というようなとらえ方しか持たなかった日本に、明治以後、小説や芝居や映画のロマンスというかたちで、騎士道物語的貴婦人崇拝の女性観がどっと入って来て、この新しさが若者の心をとらえた。講談的な剣豪小説から出発してそうした影響をもっとも巧みに消化したもののひとつが『宮本武蔵』であったと思う。ただ、ここで武蔵が、自分の武勇をお通さんの幸福のために発揮しようとするならば、彼は完全に西洋の価値観に身をゆだねたことになってしまう。ところが彼はそうはしない。お通さんにはどんな苦労をさせても、男はひたすら修羅の道を歩まねばならぬときめてかかっている。この小説がベストセラーになっていた戦争中に、よく酒の席などでこんな俗謡が歌われた。

〽腰の軍刀にすがりつき
連れてゆかんせどこまでも
連れてゆくのはやすけれど
女は乗せないいくさ船（戦車隊、その他）

ほんとうは女のいるところに残りたいのに、そう言いきる勇気がないから、女をふり捨てて戦場へ行くんだと肩ひじ張って言っているような、まことにみれんたらたらの歌であるが、お通さんを何度も何度もふり捨てては死地におもむく武蔵の姿も基本的にはこれと変わりはない。

結局のところ『宮本武蔵』は西洋的なロマンス文化のありかたに深くひかれながら、ついにぎりぎりのところでそれをふりきって、男は文化によって軟弱化してはならぬという国民的要請に屈したか殉じたかした作品だったといえよう。

小説『宮本武蔵』には、直接的には軍国主義礼賛の要素はない。しかし、太平洋戦争が敗戦で終わったとき、武蔵のような人間像は戦後民主主義の時代に似つかわしくない、という気分があったことはたしかだ。そしてその時、武蔵に代わる戦後的な人間像を登場させたのが、村上元三の小説『佐々木小次郎』だった。『宮本武蔵』の中で、己の天才を過信している驕慢な人物として、武蔵の禁欲的な刻苦精励ぶりと対比される意味で否定的な人物として描かれていた佐々木小次郎が、この小説では、己の野望のままに、生きたいように生きて死んだ、愛すべき悲劇的ヒーローとして肯定的に描き直されている。


武蔵真筆といわれる書（平田家蔵）

村上版の小次郎も、武蔵とおなじように生まれながらの天才的剣豪である。そして彼には、もっと精神的文化的になれと忠告するような先輩はいないし、彼自身、強いだけでは何か足りないのではないか、などと悩みもしない。女性にも積極的であり、おおいに恋の歓びを享受する。婚約者のある武家の娘兎禰とかけ落ちをやり、出雲のお国一座の女役者まんから愛され、そして琉球の王族の美女奈美にあこがれる。武蔵のように、恋などしていたら武芸者として弱くなるなどという常軌を逸した固定観念にとりつかれてはいない。その点では彼は、よほど明るくノーマルである。しかし、恋は積極的に愉しむが恋人のためにつくしたり苦労したりすることはまっぴらごめんらしい。その点では結局、武蔵と五十歩百歩の違いでしかないかも知れない。

女役者のまんは、決闘につぐ決闘でいつも怪我ばかりしている小次郎を介抱しぬき、つくしぬく。そして小次郎の愛を独占しようとする。

「わたしを連れて、どこぞ人に知られぬところへ逃げて下さりませ」
と、まんは、何べんもくり返した。
「おれを世に埋もれた人間にしたいのか」

小次郎が語気を荒くすると、まんは泣きながら、
「わたしたち二人だけの夢を、見とうございます。かえって、わたくしは、あなたを世の中へ出したくありませぬ」
「わからぬのか、そなたも、おれが」
「わたくしの生甲斐はあなた一人」
（「いのちひとつを」の章）

小次郎は彼女の強い束縛をこばみ、それに絶望して彼女は自殺する。小次郎はこれを深く悲しみながら、兎禰との再会や奈美を追い求める新たなロマンスなどに忙しい。つまり小次郎にとって彼女はいとしい存在ではあるが、自分の身も心も捧げるほど高貴な存在ではない。自分に夢を見させ、また自分につくしてくれるという範囲でいとしいと思うが、自分を束縛するようになってくれては困るし、残念ながら彼女はそうした女性だということになっている。だから、べつにドン・ファンではないのだけれども、女から女へと夢を追うことになる。その奔放さ、自由さが、異常な禁欲主義者である武蔵より新しいと見られ、戦後的であるとして共感されたのだった。しかし、この小次郎が、結局は禁欲主義者武蔵に破れる運命になっており、兎禰や奈美とのロマンスをつうじて小次郎の内面的なものが豊かになってゆく可能性は所詮は果敢ない夢なのだった。武蔵の禁欲は否定しても、まだ西洋ふうのロマンスは果敢ない夢としてしかつかめなかったのであろう。（評論家）

夢声の「武蔵」

三國一朗

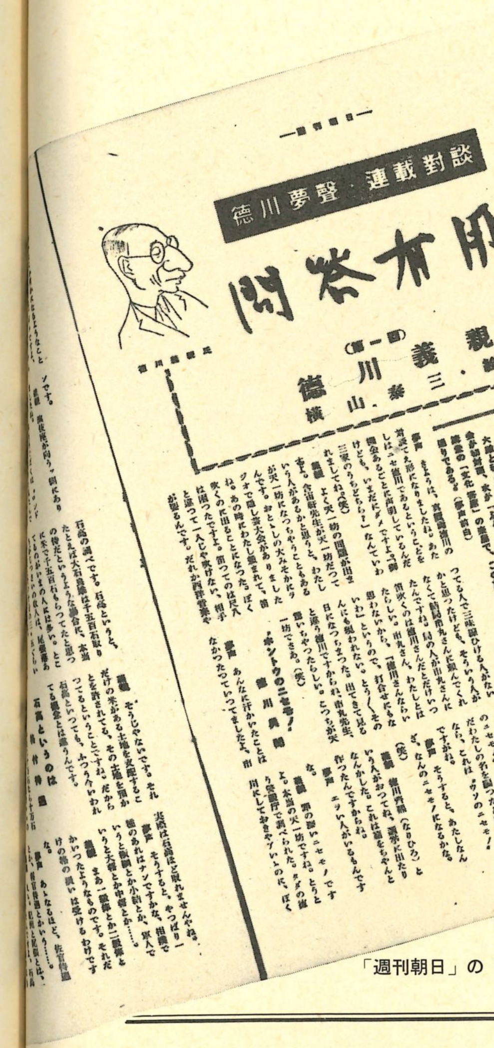
私は大正十年の生まれだから、そろそろ還暦が近い。自分ではそれほど老人になったような気もしないのだが、年を数えれば、まさに還暦直前なのだから、他人から見れば、もう立派な老人、とくに若い同業者などの目には、さぞうす汚い爺さまに見えていることであろう。

この二、三年、思うところあって故徳川夢声の生涯を少々調べてみた。ためしに現在の自分と同年齢のころの夢声が、どんな働きをしているかを見たところ、さすがに夢声だけあって、なかなかの働きぶりである。

まず彼が満五十七歳になった昭和二十六年、この年の一月から、例の「問答有用」という「週刊朝日」の対談が始まっている。この対談は好評で、収録して出版された本が十巻以上に及ぶほど長続きしているし、やはり同じ年の秋からは、民間放送が次々と開局し、引っ張りだこの忙しさになる。勢いというのは恐ろしいもので、週刊誌の「問答有用」の対談料を、民放の出演料と同率に引き上げ、一回が五万円、地方出張は十万円と、一方的に決めて「週刊朝日」をねじ伏せている始末である。今から三十年近い昔の値段だから、大した金額だ。昭和二十八年になると、こんどは民放テレビがあちこちで始まり、多忙にもなるが、収入も急増する。この状態が、やがて七十歳の古希になるころまで続くのだから、実にもって恐れいる。とても真似のできたものではない。

ところで、その昭和二十八年の一月に、内幸町のNHKのスタジオで、夢声が初めてテレビジョンに出演したときの番組はなにかといえば、それが「宮本武蔵」、もちろん吉川英治作の『宮本武蔵』の「茶漬」のくだりであった。開局早々のNHKテレビでもあり、念には念を入れて作ったプログラムの中の「武蔵」であるにちがいない。すでにもう「夢声」の「武蔵」は、NHKにとっては「極め付き」のデラックス番組であったはずである。

では、テレビ以前の「徳川武蔵」は、いつから始まったか。これについては夢声自身が各所


徳川夢聲 連載對談
問答有用
(第一回)
徳川義親
横山泰三・絵

「週刊朝日」の「問答有用」第1回(近代文学館提供)

にはっきり書いているから疑う余地もないことで、それは戦前の昭和十四年九月十九日のことであった。もちろんNHKからの依嘱で「物語」のマイクに向かったのだが、その時の夢声本人の心境は、決して「大乗り」というものではなかったようである。いやむしろシラけにシラけた状態、今私たちタレント仲間が使う陰語で「どっチラケ」という、それほどにシラけた心境であった。

当時吉川英治の『宮本武蔵』は「朝日新聞」に連載中で、夢声本人も自宅の新聞でちらちらと見て知ってはいたが、「二度か三度走り読みしただけで、通読してみようという気にはなれなかった」という。

「第一に私は『宮本武蔵』なる表題を見ただけで、下らなく思えたのであった。今更、こんな大衆的、講談的、浪花節的なる人物の伝奇小説を、日本の第一級新聞なる朝日紙に載せることはあるまい。書く作者も作者だが、載せる新聞も新聞だ、と実は大いにケイベツした次第だ。――吉川英治も、いよいよネタに困って、とうとう講釈種にまで手をつけた……と、当時ある批評家が云ったそうだが、私なども当時は同感であった。」(『放送話術二十七年』白揚社)

ざっと、こんな調子である。当時夢声は、矢田挿雲作の『太閤記』をラジオの連続物語として朗読しており、気の乗らない「武蔵」などよりは「太閤記」のほうをやらせてもらいたい、という気持であった。だから放送(当時はすべて生放送)当日も、妻子を伴って四谷見付のグラウンドへ出かけ、素人野球をのんびり見物していったん帰宅し、風呂に入り、栗飯の夕食をゆっくり食べ、やおら放送局へと出かけて、ろくに事前の稽古もせずスタジオのマイクに向かった、と前に掲げた文章につづけて書いている。

ところで、その当時の「武蔵」(放送の)は、実は夢声の独演ではなく、第一回は歌舞伎の坂東簑助(八世坂東三津五郎)が主に「武蔵」の活躍するところを、第二回は夏川静江(のち静枝と改名)が「お通」が主役のくだりを読み、三回目の夢声の受け持ちは、「沢庵和尚」が活躍する段になっていた。その後、毎回朗読者を変えるという方針に手直しが加わって、やはり歌舞伎の市川八百蔵と夢声との交替制になり、それぞれにファンもついて好評を得たので、放送は十五年四月まで続いた。この期間のNHKの「武蔵」には、放送時間やら出演者やらの点でいくらかずつの変更が加えられ、放送局としても「試行錯誤」の時期であったらしいが、夢声本人の取りくみ方はどうだったかというと、回を追って「シラケ」ムードは消え、「乗り」ムードに変わってきている。昭和十五年の二月ごろになると、「夢声好評」が局内でもはっきりしてきて、それまでは「とびとび」の連続であったものを、三十分ずつにくぎり「二週間ぶっつづけ」で毎日放送して見るというプランも出たほどであった。本人の夢声も、そのころ講談社が出版した『宮本武蔵普及版』の付録パンフレットに、版元から依頼された感想文を寄せていて、「私としても、これほど愉快に放送したことは稀である」とか、「武蔵の心理描写を朗読する瞬間、私は一時武蔵になったような気さえする。その時こそ、無念無想聴取者もなく、マイクロフォンもなく、私自身もなく、無限の大宇宙に、ただ『物語りする』心があるのみだ」などと、大サービスの「感想」を書いている。しかし、その真意はどうかと言えば、これは「提灯文」(心にもない讃辞)だから「多少の割引きをして読んで頂きたい」とか、放送の一段落で「武蔵とはもう完全におわかれだと思っていたので、無念無想だの、剣の道と芸の道だのと、一寸エラそうなことが書けたのである」と、同じ『放送話術二十七年』の中に、てれくさそうに述懐しているのである。

この間に時代の舞台は大きく回転して、「戦前」から「戦中」になる。物語「宮本武蔵」を時局に無関係の娯楽番組と見て自粛を迫られた「戦前」から、一挙に「大東亜戦争」に入り、逆に「武蔵」が「戦意高揚」に役立つ「戦時向き」のラジオ番組と見られるようになったのである。

戦争に入ってからの、いわば「第二次」宮本武蔵放送は、夢声の記憶によれば昭和十八年九月五日、おりから食糧節約のため上野動物園の動物たちが殺され、その慰霊祭があった日の翌

日であった。この時期になると、従来使われていた「伴奏音楽」や「音響効果」が、夢声からの希望でいっさい廃止され、「素ばなし」でやることになった。「どうせ演るなら自分一人で功罪ともに責任を負いたい。台本も、勿論私自身で作る」と、NHK側に声明する。いよいよ話術というか話芸というか、放送芸能人徳川夢声が、この「武蔵」に自分の「芸」の全力を投入する気になった。昭和十四年秋の当初とは、別人のような「乗り」方である。その代わり、この「第二次」の「武蔵」からは、恋に悩む「お通」も、ダラシのない道楽男である「本位田又八」も、完全に退場してしまった。夢声自身が物語の中から追放してしまったのである。のちに夢声が、「茶漬」とか「芍薬の使者」とか、「巌流島」とか、「武蔵」からの抜き読みを自分流の話芸に練り上げ、劇場の「名人会」などに足を運ぶ「聴き上手」の客を相手に、卓越した口演を披露するに到る端緒が、このあたりに認められるのではないだろうか。現に、戦後の昭和二十六年、夢声は三越名人会における「宮本武蔵」風車の章で、「芸術祭賞」を受けている。

さて、話を前に戻すと、戦争中の「武蔵」は、空襲下の厳しい状況下も、つぎつぎに物語を進めて行き、昭和十九年の九月七日には、「銭」のところを、初めて「録音」した。「武蔵」の録音盤が作られたのは、これが初めてで、その再生はその月の二十二日夜に放送されたが、その夜夢声は北海道の名寄へ、鉄道従業員の慰問に行っており、ラジオを聴いた名寄の人たちは、録音などが行われていることは露知らず、「今夜のムセイは偽物」という噂がもっぱらだったというエピソードもある。いよいよ「巌流島」の決闘に入ったのは昭和十九年、つまり敗戦の前年の一月十二日夜、そして三日後の十五日夜に、「最終回」が放送された。

やはり「巌流島」は、「武蔵」全編の中でも最高の聴きどころで、演者の夢声本人も、どんなにか工夫に工夫を重ね、苦心を積んだことであろう。この條りだけを、とくに海外放送の電波にのせて、在留邦人向けに放送したこともあるそうである。

とにかく、本人も言うように、三十年に及ぶ夢声の放送生活で、「宮本武蔵」ほどの人気番組は他に一つもない。武蔵といえば夢声、夢声といえば武蔵ということになり、ついには「徳川夢声は、剣道の名人だってね」という噂までが飛んで、夢声自身の耳にも入り、大いに「恐縮汗顔」であったと、自著の中に書いているほどである。

戦争中の東京空襲で、NHKのラジオ番組は何度も中断の目にあっているが、夢声の「武蔵」だけは、最後まで一度も「中断」されることなく、「巌流島」のフィナーレまでこぎつけた。最終回の時は、ちょうど雪の夜で、放送を終わった夢声は、「雪の夜長き武蔵を終わりけり」と所懐を句に作った。放送の担当者であったNHKの大岡龍男は「ホトトギス」の俳人で俳文も巧みな人であったが、度重なる東京空襲下なので、前々から「警報に宮本武蔵切られけり」という川柳を作ってひそかにあたためていたが、ついに事実にはならず、大岡氏は「さすがは武蔵ですなあ」と笑いながら感服したという挿話がある。

さて、敗戦後、民放の時代になり、夢声には、またまた「武蔵」を民放ラジオで朗読する機会が訪れた。まずラジオ東京（現在のTBSラジオ）、これがつまり三回目の「武蔵」。ここでも「巌流島」までつとめて、やれやれこれで「ムサシ」とも縁が切れたかと思っていると、民放ラジオで新しく開局したラジオ関東から、こんどは日曜日を除く毎夜連続で、「全編省略なし」の「武蔵」を朗読してくれとたのまれる。初めはしりごみしていた夢声も、「全編ノーカット」に心が動き、これを引き受けた。夢声のいう「丸ゴカシ」の「宮本武蔵」がこれである。

この放送が始まって数か月後、作者の吉川英治氏がガンで入院する。その病院生活のあいだ、吉川氏は枕もとのポータブル・ラジオで、夢声が朗読する「丸ゴカシ」の自作「宮本武蔵」を、毎夜たのしみに聴いていたという話である。しかし、このラジオ関東の「武蔵」が「巌流島」にまで到達するのを待たず吉川氏は長逝された。

夢声にとっても最後の「武蔵」になったラジオ関東の放送は、昭和三十八年九月十七日まで一年九か月続き、その内容は完全なレコード版になって今も残っている。

（放送タレント）



柳生宗矩木像（柳生・芳徳寺蔵）

大目付但馬守宗矩

柳生家菩提所・芳徳寺の本堂に、肉厚でしたたかな顔容の柳生但馬守宗矩の木像が祀られている。

この男、三代家光の家臣、一介の剣術指南役にすぎなかったが、但馬守に任ぜられ、寛永九年に知行六千石大目付を襲職、諸大名を監察する幕閣の要に位置することとなった。寛永十三年には所領一万石の大名に列し、後遂に一万二千五百石を領した。名実ともに権勢を恣にしうる地位であった。

一介の剣術指南役が、尋常でない出世を遂げ、徳川家中枢の職責を荷うに至るには、それなりの裏があったのではないのか…。



笠置山上城元弘戦図　この時、柳生は吉野方に加勢して戦ったという（芳徳寺蔵）



内に鎖帷子がほどこされている忍びの具足（芳徳寺蔵）



秋の柳生の里

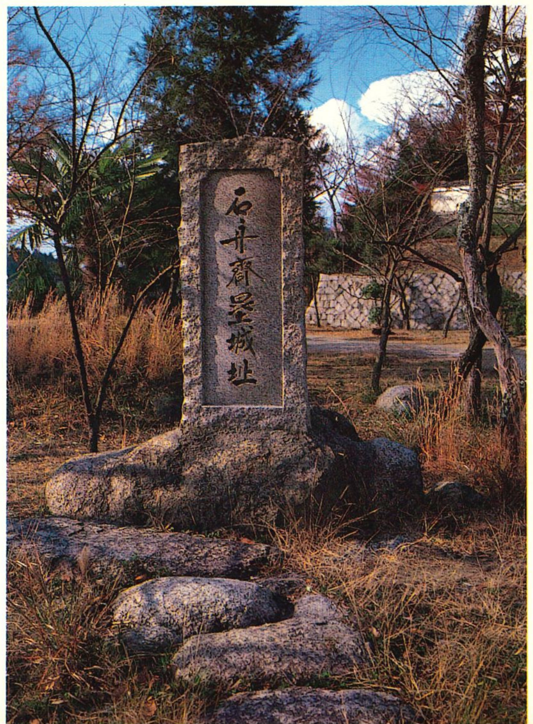
乱世の海を渡りかねる戦国の柳生

大和、山城、伊賀三国の接点に位置する柳生の庄――関白藤原頼道が、氏神春日神社に社領として寄進した地である。この時、郷の管理者と定められた大膳永家が柳生の祖である。天下麻のごとく乱れた戦国時代、柳生もまた筒井を松永を馳走し、離合集散の苦汁をなめた。

柳生中興の祖、石舟斎宗巌（むねよし）は、世の辛酸をなめつくした自らの人生を詠い込んだ、

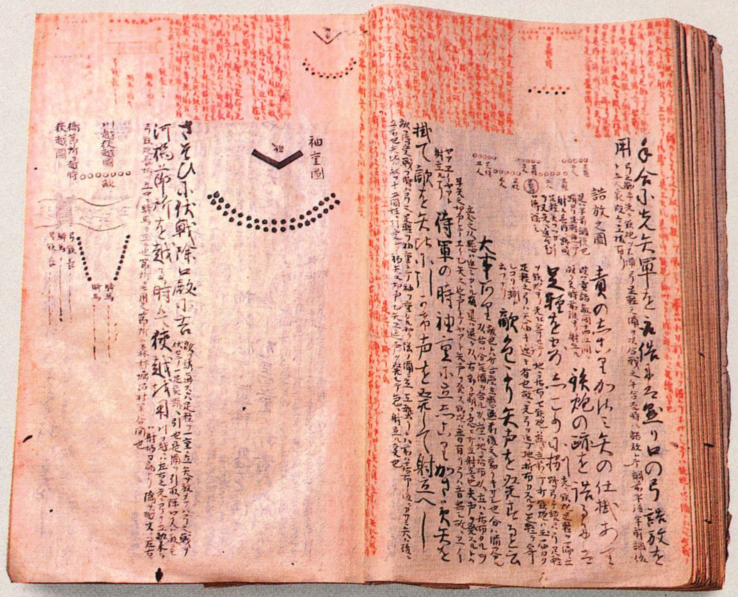
兵法の舵を取りても世の海を
　渡りかねたる石の舟かな

織田信長の覇権とともに、柳生は強大な勢力下に雌伏を余儀なくされてゆく。



柳生中興の祖・石舟斎の塁城址





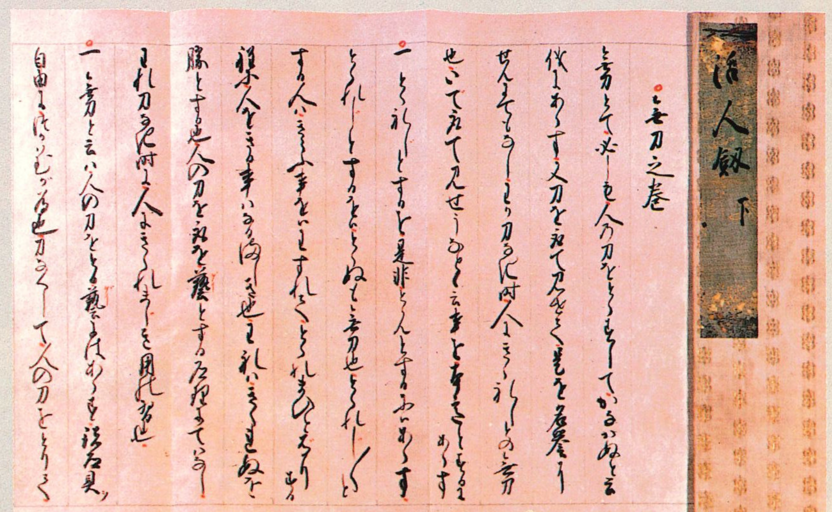
『武門要鑑抄』（芳徳寺蔵）

家康に組した柳生家

「文禄三甲午の年、聚落紫竹村にて宗巌公の剣術始て神君上覧」。関ヶ原合戦の六年前、秀吉がまだ伏見城を築造中のこの年、石舟斎・宗矩父子は、京都鷹ヶ峰の家康陣屋に招かれ、新陰流の極意「無刀取り」を披露した。家康この時手ずから新陰流入門の記請文を書き与え、若冠二十四歳の宗矩を二百石で召し抱えたのである。

天下経営の行く手に危険信号がちらつき始めた秀吉時代の末期に、柳生をおさえた家康には、隠れ里柳生を大和方面の情報収集の拠点にしたい目論見があった。

やがて、関ケ原の戦いに当たり大和で豊臣方の後方撹乱に勲功を樹てた宗矩は、将軍家剣術指南となり、柳生新陰流は留流となった。三代家光の治世ともなると、柳生流は沢庵禅師の薫陶を受けて、剣禅一如の境地に辿りつくことになった。禅師の説く『不動智神妙録』は、柳生の真髄とされた。

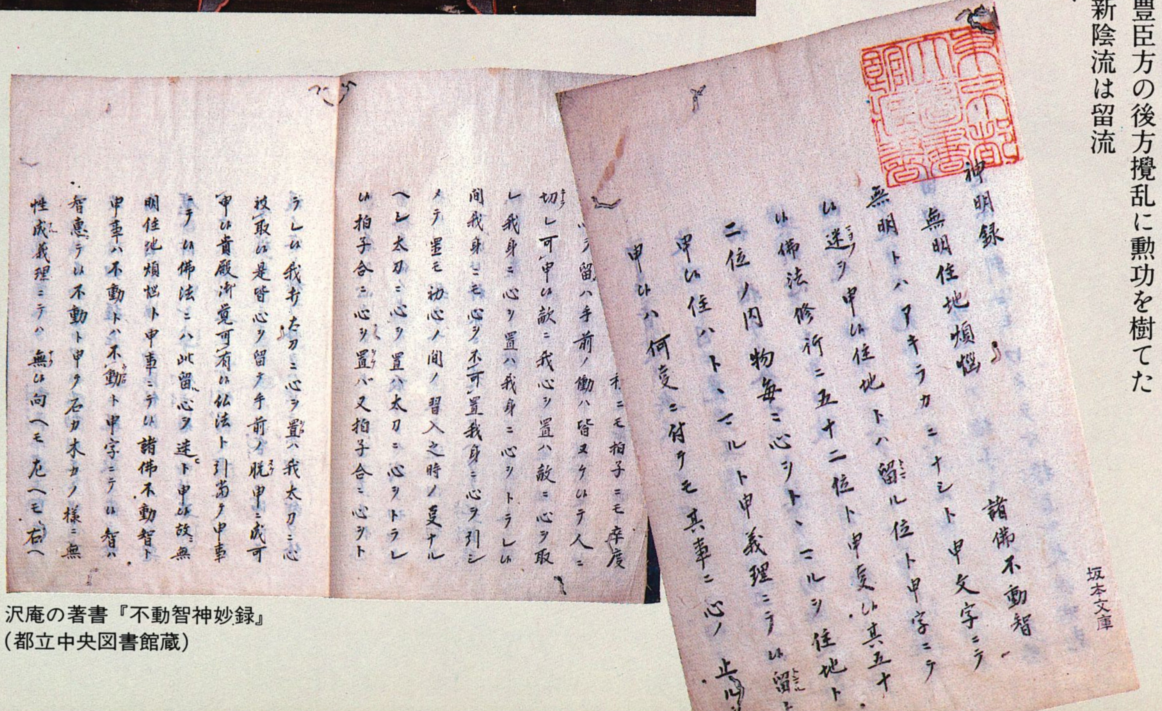


『兵法家伝書』（柳生家蔵）

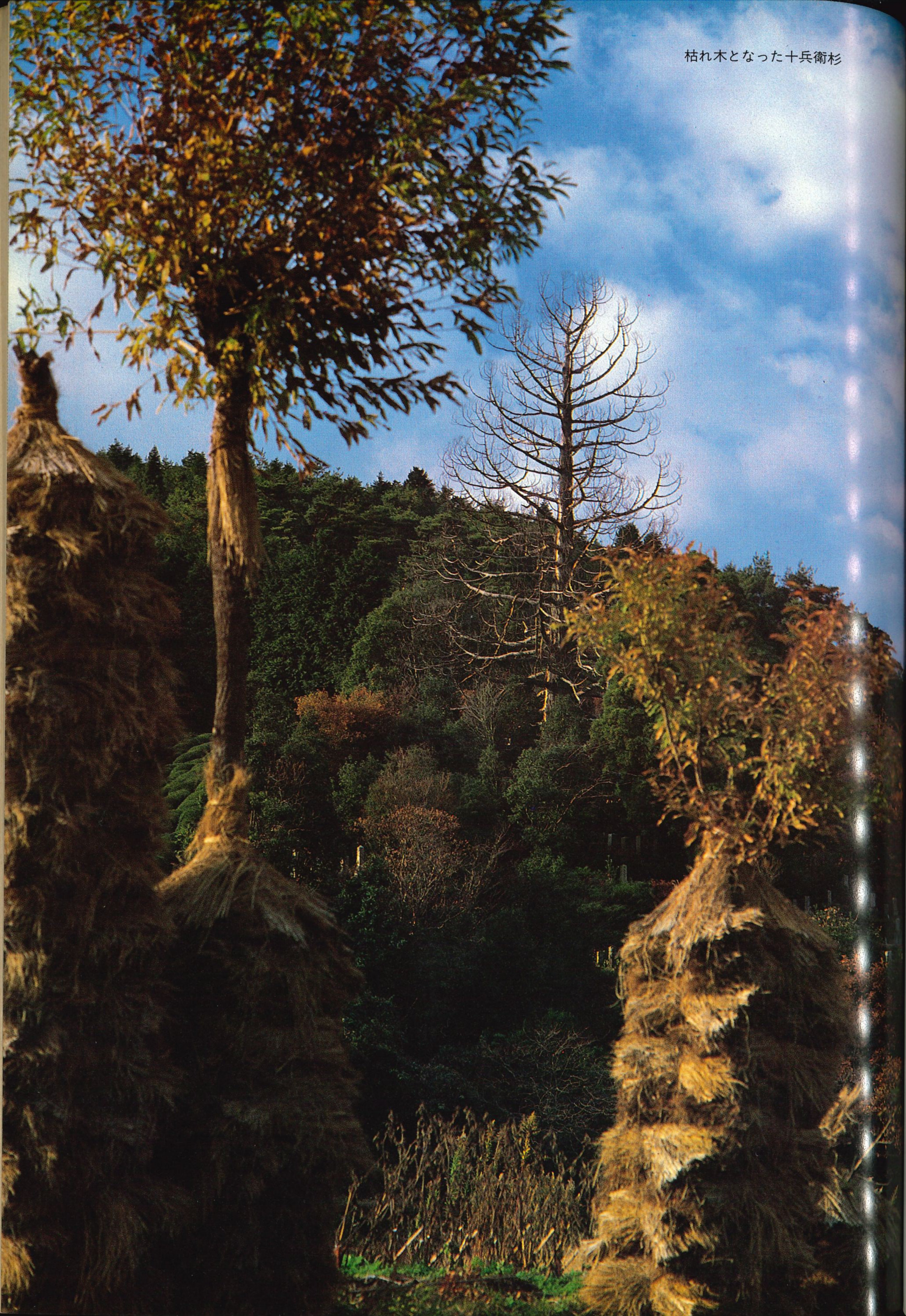
「柳生石舟斎絵目録」（生駒山・宝山寺蔵）



剣禅一如の精神を宗矩に教えた沢庵宗彭禅師木像（芳徳寺蔵）

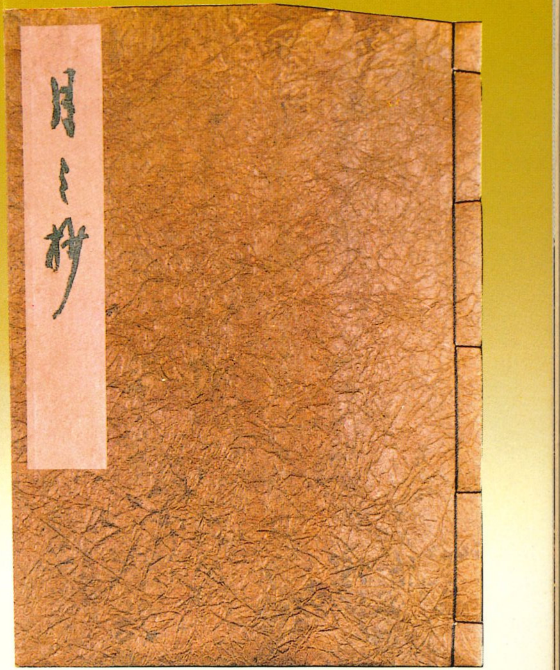


沢庵の著書『不動智神妙録』
（都立中央図書館蔵）


枯れ木となった十兵衛杉

十兵衛三厳の陰

宗矩の長子、十兵衛三厳は、剣を執っては父宗矩よりも強かったとも伝えられる。本来、父の職・将軍家指南役を継ぐべき彼は、しかし、父の跡を継ぐことはなかった。江戸幕府の基礎が漸次固まり、外様の西国雄藩の動向を探る隠密が各地に跳梁していたそのころにあたっていたが、十兵衛の著書『月之抄』の冒頭に、「さることありて君之御前を退いて、私ならず山にわけ入り…」とある。二十歳の三厳が家光の勘気を被り江戸を去ったことを指している。これ以後、御書院番として江戸に戻るまでの十二年の軌跡は、杳として不明である。ここに彼が命を亨けて、雄藩の動向を探るため隠密として西国へ潜行していたのではないかという推測がなされる背景がある。十兵衛の悲劇は、柳生家の陰を一身に背負って消えて行ったところにあるのだろう。



柳生十兵衛三巖の著書『月之抄』（芳徳寺蔵）



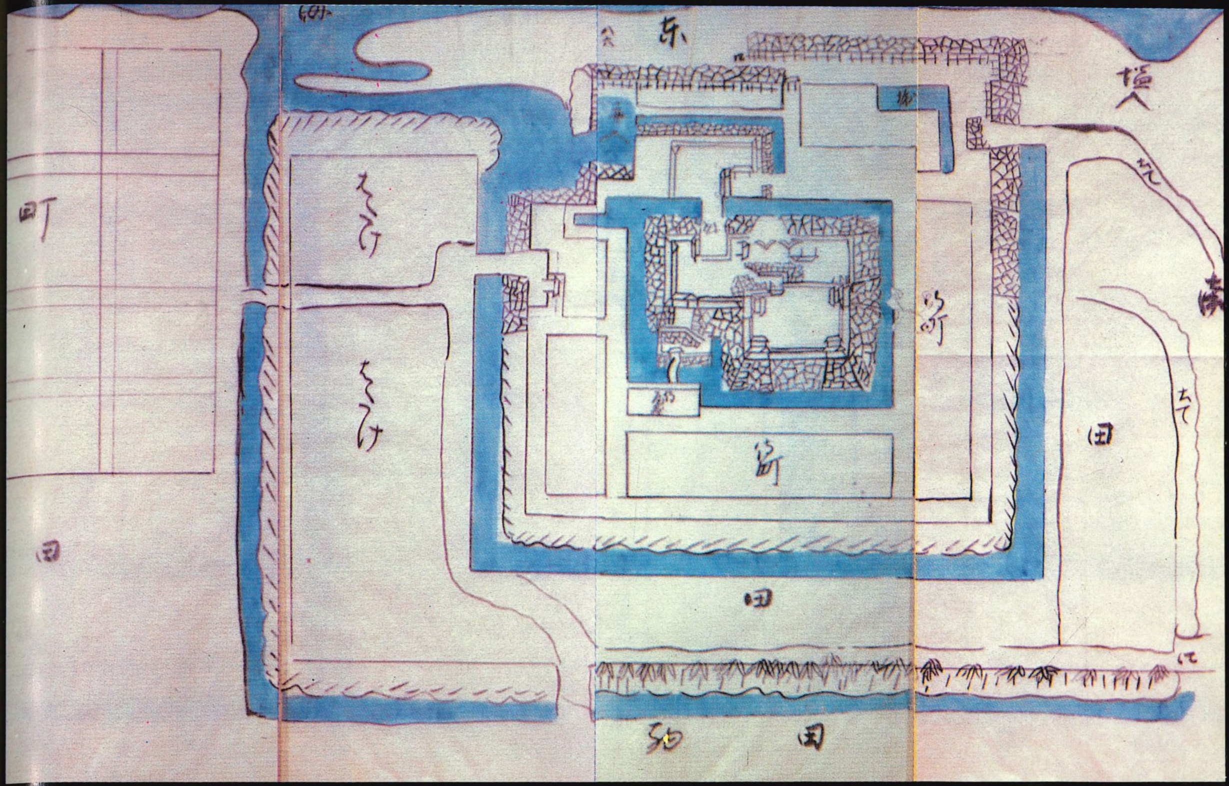
十兵衛三巖像（『史伝部類名家像』より大坪指方氏提供）と鉄製の十兵衛杖（芳徳寺蔵）

柳生一族の謎

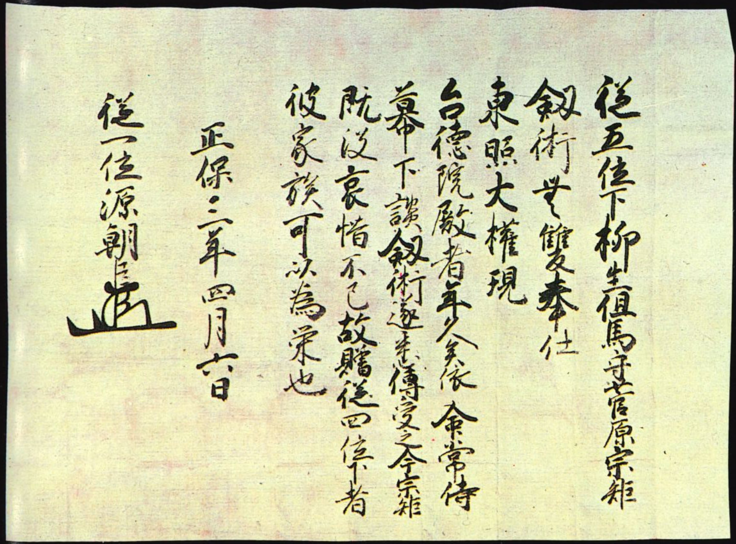
邦光史郎

■くにみつしろう
作家　大正11年東京生まれ　推理作家協会員　著書『社外極秘』『小説楠木正成』『邪馬台国の謎』(共編)『幕末創世紀』『幻の騎馬王朝』『柳生の里』(共著・保育社)

NHK 中澤俊明



隠密が四国・松山城を探った絵図面(『四国探索書』より　影写本　東京大学史料編纂所蔵)



従五位下柳生但馬守菅原宗矩
剣術世襲奉仕
東照大権現
台徳院殿者年久矣依　命常侍
幕下謀剣術遂得伝受之今宗矩
既没哀惜不已故贈従四位下者
彼家族可以為栄也
正保三年四月六日
従一位源朝臣

宗矩の死後、家光は彼の功績をたたえて「従四位下」を贈った（柳生家蔵）

裏芸『探索書』の存在

寛永期、四国・九州諸藩を偵察し、その模様を家光に報告した文書『探索書』が残されている。組織的諜報活動が行われていたことを歴然と示す資料である。この活動の中心には大目付柳生宗矩がいた。巧みに幕閣の政治を泳ぎ、兵法家にして大名にまで昇りつめた宗矩の背後に、十兵衛はじめ多く無名の隠密の暗躍があった。隠れ里・柳生の表芸と裏芸を巧みに使い分け、ＣＩＡ長官として天下ににらみをきかせた柳生宗矩は、寛永十六年、七十六歳で世を去った。家光は、彼の生前の功績を讃えて、「従四位下」を遺贈した…。



兵法家にして大名にまでなった柳生宗矩（芳徳寺蔵）

将軍に対して異常な権力を持った男

「柳生但馬守は、決して尋常一様の剣客ではない。剣法の指南役で、但馬守に任じられ、寛永九年（一六三二）には六千石をもらう大目付になっている。大目付というのは、全国の大名を取り締まる監察長官のようなもので、とても単なる剣客に勤まる職ではなかった。低い格であったけれど、三代将軍に対しては非常な権力をもっていたらしい。ぜんたい、だれでも表立って権勢の地位に座ると、大勢の人が始終注意するようになり、したがって種々な情実が出来て、とてもほんとうの仕事の出来るものでない。柳生は、この呼吸を呑み込んで居ったと見えて、表向きはただ一個の剣法指南役の格で君側に出入りして、毎日お面、お小手と一所懸命にやっていたから、世間の人もあまり注意しなかった。しかしながら、実際この男には非常な権力があった。島原の乱が起こった時将軍は直ちに板倉内膳正重昌に命じて征討に向かわせた。ところが柳生は、この時ちょうどある大名に招かれて、御馳走になっていたので、知らなかった。ところがその席へ他の大名が、島原征討の役目を内膳正に仰せ付けられたが、彼では禄高も低く経験もなくあまりに軽過ぎるといって、非難しているのを耳にして、びっくりした。そこで柳生はその大名の馬を借りて、すぐに内膳正を追いかけて六郷川まで行ったが、とても及ばないと悟って後返りして、すぐその足で将軍の御前へまかり出て征討の指揮官が不適任である、これでは内膳正を殺す結果となりますといって、将軍に諫言したといわれている。ぜんたいが、将軍がすでに厳命を下して、江戸を発たせたものを、一家臣の身でしかも独断でもってそれを引き留めようというのなどは、とても尋常の者では出来ないことだ。おれはこの一事で、柳生が将軍に対して、非常な権力を持って居たことを見抜いたのだ。」

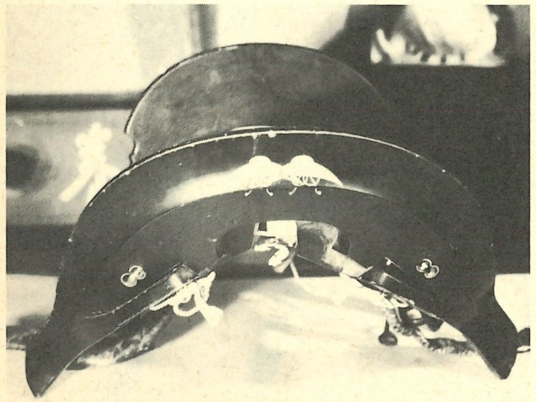
幕末の雄、勝海舟はその著書『永川清話』の中で、柳生の本質をこう指摘している。将軍の剣術師範が柳生一族の表芸だとすれば、その「陰」の姿はいったい何だったのであろうか。

――三代将軍家光と剣術の指南役であった柳生宗矩とは、どのくらい親密だったのでしょうか。単にお師匠さんと弟子というだけだったのでしょうか。

邦光　そうですね、家光と但馬守の関係は、ただ単に剣道師範と弟子というだけではなかったのです。勝海舟は、指南役と弟子としか見ておりませんが、幕府の役職を記した公文書によると、柳生は、寛永元年に従五位下の但馬守に任じられ、寛永九年には六千石をもらう大身に出世している。しかも同年十二月彼は大目付に任じられている。大目付というのは、老中や若年寄の部屋の近くにいて、全国の大名にお触を出したり監督したりする幕閣の要のような職責でして、全国ににらみをきかせているわけです。

こういう重要な任務をもっているから、島原の乱で、将軍が禄高の低い板倉内膳正を司令官に任じたとき、それでは西国の大名がとても彼の命令に服すまい、このまま放っておくと、征討も失敗に終わり、板倉も生きておれまいというので、引き留めにすっ飛んでいったのです。これは譜代の家柄でもないのに、幕閣の重要な任務についている柳生として、忠誠心の見せどころだったと思いますね。

もともと柳生は、家康に仕えた当初から、剣道指南役という表芸と、



柳生の紋所・二蓋傘のついた鞍（芳徳寺蔵）

情報収集や特殊工作係としての裏芸とを、二つ兼ね備えておりまして、その両面の奉公でどんどん出世していったものです。

特に三代将軍家光の場合は、幼少のころから但馬守宗矩に接していて、人一倍親愛感をもっていましたから、父の秀忠に言わないことでも、宗矩には打ち明けていたでしょうね。

だいたい、家光は、父の秀忠に愛されていないという被害妄想をもって育った人物で、むしろ宗矩のやさしさに慈父に対するような親近感をもっていたと思います。だから、正保三年（一六四六）、宗矩が病気になると、家光みずからわざわざ見舞いに行っておりましてね。もちろんそれ以前にもたびたび柳生邸へ出かけているんですが、たいへんな厚遇を与えております。そして宗矩が亡くなると、「従四位下」の感謝状を贈って、その後折あるごとに、「吾天下統御の道を宗矩に学びたり」と周囲に洩らしていたというんですね。贈位書にはこう書かれています。

「贈位　御書

従五位下柳生但馬守菅原宗矩

剣術無雙奉仕

東照大権現

台徳院殿者年久年依命常侍

幕下談剣術遂悉伝受之今宗矩

既没哀惜不已故贈位従四位下者

彼家族可以為栄也

正保三年四月六日

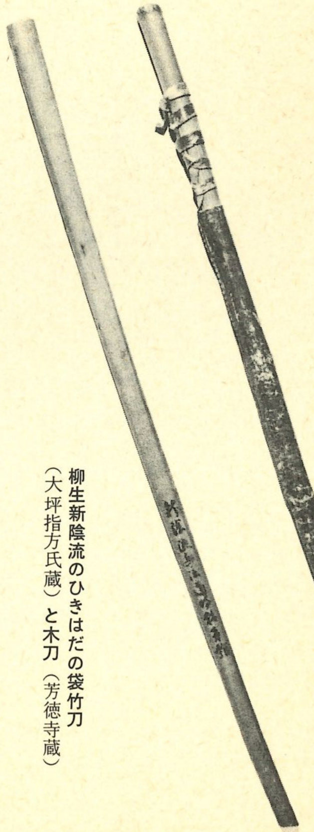
従一位源朝臣（家光花押）」

結局、家光にとって宗矩は、剣道の先生というだけでなく、人生全般の教師であったわけです。それが政治的な相談役となり影の顧問役のようになっていった。

何分、徳川もまだ初期の時代でして、豊臣の残党が各地にひそんでおったり、外様（とざま）大名の中には、隙あらば取って代わろうとする者がないでもなかった。つまりうっかりできない時期なんですね。

そこで、諸国の動静に通じて、諸大名ににらみのきく人物、ということで柳生但馬守がうってつけだというので、初代の大目付になっているんですね。

特に彼は西の方の大名ともつき合いがあって、各藩のやり方をよく知っている。しかも家康、秀忠、家光と三代にわたり将軍の側近に侍してきて、武家政治や人脈の裏表を知り抜いている。おまけに柳生の門弟が全国に散らばっているので、情報を集めさせたり、調査をさせたりするのに最適であるわけです。そこで裏工作や情報活動を仰せつかってきたのです。


柳生新陰流のひきはだの袋竹刀（大坪指方氏蔵）と木刀（芳徳寺蔵）

その裏工作というのは、当時、非常に大名の取りつぶしの多い時期で、幕府は、少しでも叛意があったり扱いにくかったりする大名を廃絶して、幕府が統制しやすいように、領地の組み替えをやっておりました。その情報収集と調査や工作に手柄があったのでしょう。

こういう裏面の歴史は全く伝わっておりませんから、想像をたくましくするよりしょうがありませんが、よほど功績があったとみえて、寛永十三年に、四千石の加増を受けて一万石の大名になっているんですね。これはとても剣一本ではじき出せる禄高ではない。そこで恐らく柳生は、徳川幕府のＣＩＡ長官のような役割を果たしていたのではないかと思うんです。


奈良と柳生を結ぶ柳生街道を、かつて無数の武芸者が往来した

隠密の隠れ里・柳生

古来、柳生の地は、剣と隠密に生きた柳生一族の「隠れ里」にふさわしい所であった。

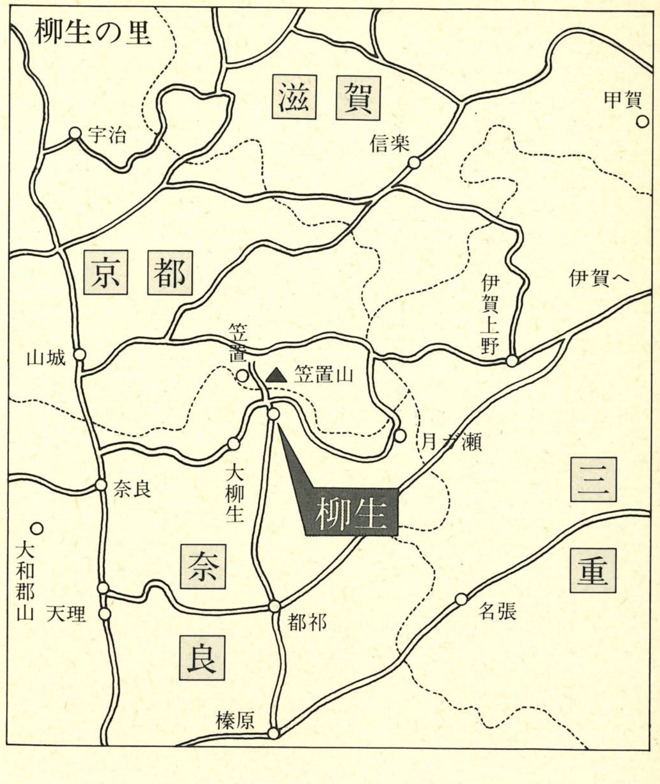
奈良から柳生へ抜ける往還を柳生街道という。杉の老木に覆われて、昼なお暗い川沿いの坂道を登ると、いたるところに石仏を見ることができる。足下は石畳である。無数の武芸者が踏みしめたであろうこの石畳は、柳生家が大名に進んで奈良に蔵屋敷を置いたとき敷いたものである。今も旅籠（はたご）風の茶屋が残る峠を越えてしばらく行くと、四囲を山々に囲まれて、水田が帯のように続く山

村に出る。そこが柳生の里である。

奈良へ十六キロ、京都へ三十六キロ、伊賀上野へ二十キロ――、大和、山城、伊賀三国に通じる接点に位置している柳生の庄は、正に畿内の要衝といってよい地の利を占めている。

だからこそ逆に、戦国動乱の中にあって、柳生一族は多年あちこちの有力者につき、離合集散の苦い歴史を繰り返してきた。

もともと柳生の地は、大化の改新（六四五）に柳生（やぎゅう）の郷として成立したものであるが、仁和元年（八八五）には、関白藤原基経がこの地方を荘園とし、さらに長暦二年（一〇三八）関白藤原頼道





筒井順慶（同）



松永久秀（『英名百雄伝』より　都立中央図書館蔵）

が氏神である春日神社に社領として寄進したものであった。この時、朝廷から管理者として定められた大膳永家なる人物が、柳生の先祖とされている。そして五百年後、柳生家中興の祖として石舟斎宗巖（むねよし）があらわれたときは、正に天下麻のごとくに乱れた戦国の代であった。天文十三年（一五四四）、筒井軍一万によって、柳生の城を落とされたとき、石舟斎宗巖は十六歳であった。やむなく筒井氏に臣従することとなったものの、永禄二年（一五五九）、松永久秀と筒井順慶の戦いが始まるや、宗巖は筒井に叛旗を翻す。そして、時に筒井に、時に松永にという世渡りを何度か繰り返したあと、やがて織田信長の強大な勢力下に組みこまれていくこととなる。

石舟斎宗巖は、世の辛酸をなめつくしてきたみずからの人生を、こう詠んでいる。

兵法の舵を取りても世の海を
　渡りかねたる石の舟かな

家康の入社試験に合格した石舟斎と宗矩

文禄三年（一五九四）、柳生一族はようやくにして徳川家という有力大名と結びつく。関ケ原合戦の六年前のことである。秀吉がまだ伏見城を築造中のこの年、石舟斎・宗矩父子は家康から京都鷹ケ峰の陣屋に招かれ、新陰流の極意「無刀取り」を披露する。

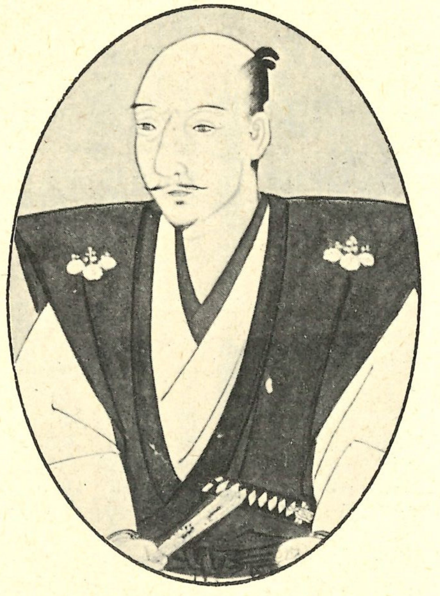
この時の様子を、柳生藩の旧記『玉栄拾遺』は次のように述べている。

「文禄三甲午（きのえうま）の年、聚落紫竹村にて宗巖公の剣術始て神君上賢、木刀を持玉ひ、宗巖是を執るべしと上意あり。即ち公無刀にて執り給ふ。其の時神君後ろへ倒れ玉はんとし、上手なり向後師たるべしとの上意の上、景則の刀を賜ひて誓詞を辱（かたじけな）くす。……」

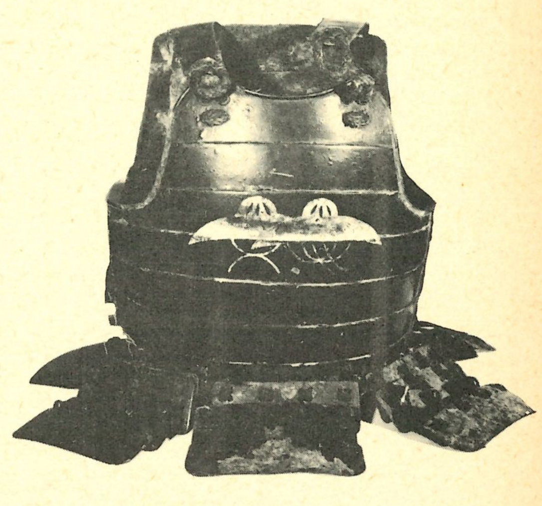
時に家康五十三歳、手ずから新陰流入門の起請文を書き与え、二十四歳の宗矩を二百石で召し抱えたのである。

――当時は剣豪と呼ばれていた人たちが、掃いて捨てるほどいたわけですね。その中でなぜ石舟斎・宗矩父子が家康に近づくことができたか、単なる偶然だけでしょうか。

邦光　それについてはいろんな見方ができましょうね。と言いますのは、徳川家康という人は非常に剣道が好きなんです。信長は、これ



戦国の覇者・織田信長
（愛知・長興寺蔵）



柳生の鎧（芳徳寺蔵）

は弓なんですね。もともと弓というのは大将の表芸なんです。東海の弓矢取り、弓矢の道、弓矢とる武人、というようにね。一方、剣の方はお互いに斬り結ぶ下級武士の兵法なんです。どちらかと言うと、身分の低い人が剣を取っていたわけで、大将になるとみずから剣を抜いて戦うなんてことはめったにないわけです。そういう意味で、秀吉はまったく武道はだめでして、これは弓もだめなら剣の方もだめなんです。

ところが、家康は非常に剣道が好きだった。そこで、柳生石舟斎の評判を耳にした家康が、一夕、石舟斎を招いて剣談をしようというので、陣屋へ呼んで、実際にどれだけ強いのか試してみたわけです。その時にまだ少年だった宗矩を連れて来て、家康にお目見えさせるんです。これも石舟斎から工作して巧く家康に売り込んだのだという説もあり、その辺になるとよくわかりません。

当時、石舟斎は柳生の里を追われておりまして、浪々の身なんですね。これは太閤秀吉の厳しい検地によって、隠し田を発見され、所領を没収されてしまったのですが、彼としては何とかして、もとの柳生の里へ帰りたくてしょうがないんです。ところがそれにはどこかでいい主人を見つけないといけないわけです。もともと柳生の庄は小国で、戦国時代を生き抜くためには、これまでから隣国の、例えば筒井についたり、あるいは強力な織田信長の配下に入ったりというようにして、何とかして保身の術をやって来たわけです。しかし不運にも隠し田を密告され浪人になり、諸国を流浪する羽目になりました。その時に、何とかしてここで就職したいというので、家康に近づいたのでしょう。つまり、家康の側から見れば就職試験ですし、石舟斎の方から見れば入社試験と言えるのですが、ここで石舟斎は無刀取りの秘術を披露して、家康の心をすっかり捉えてしまいます。そして、自分はもう年をとったから息子の宗矩を召し抱えてもらいたいと申し出たわけです。つまり就職に成功しまして、宗矩が家臣になりましたときに、家康の方から見れば単なる剣道の師範を一人ふやしただけのことのようなんですが、家康という人物は読みの深い人でして、柳生の里の立地条件と、柳生家の立場をやはりある程度考えに入れていたと思うんです。

柳生を隠密に仕立てる家康の思惑

邦光　当時、天下は豊臣秀吉のものでしたが、すでに秀吉も老いて、その天下経営の行く手に危険信号がちらつき始めているわけですね。だから、家康にすれば、何百年もの間柳生の地にあって人望の高い柳生一族を、大和方面の探題にしたい目的があったのでしょう。なぜそう言えるかといいますと、それからあと関ケ原の合戦が起こったときに、ちゃんと柳生をそういう役割に使っているんですよ。



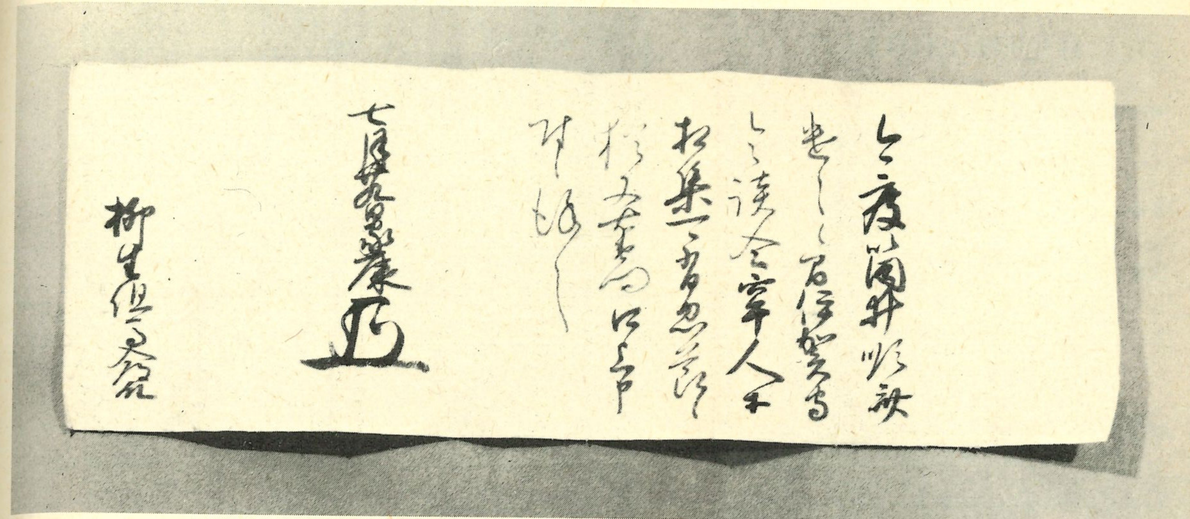
徳川家康は柳生の立地条件のよさに目をつけた（徳川恒孝氏蔵）

この関ケ原の一戦というのは、家康が天下を取るために必要な関門でして、豊臣方の勢力、それも秀吉の謀臣石田三成を討ち滅ぼしておきたいというので、なんとかして石田を挙兵に踏み切らせようと、家康は苦労しましてね。石田と結んでいる奥州の上杉景勝を攻めるのだといって、諸将を率いて、いったん東へ遠征に向かいます。そのくせ家康は、下野の国の小山に陣をとったまま、そこから先へは行こうとしません。というのは、ほんとうに奥州へ攻め入ったら、その留守に石田が西の方を固めてしまって、こんどは反対に自分が上杉と石田の挟み討ちになってしまう。

その辺の所はまことに際どい駆け引きでして、小山まで行って石田の出方を待っていると、はたせるかな、石田が兵を挙げて、家康の部将

柳生一族の謎〈年表〉

天文13(1544)	大和の筒井順昭の一軍、柳生の城を攻め落とす　柳生は筒井と主従関係を結ぶことになった
永禄2(1559)	筒井順慶と松永久秀相争い、柳生は筒井に叛旗を翻す
文禄3(1594)	密告により柳生の隠し田が摘発され、領主豊臣秀長に所領を没収される　失意の柳生宗厳歌を詠んで「兵法の舵を取りても世の海を渡りかねたる石の舟かな」　宗厳は剃髪して石舟斎と名のる　拾う神ありて、宗厳の息子宗矩が徳川家康に200石で召し抱えられる
慶長5(1600)	天下分け目の関ケ原　石舟斎と宗矩など柳生一族は、西軍の動きを探る　その働きにより宗矩は旧領2000石を与えられた
慶長6(1601)	柳生に1000石の加増　宗矩は次期将軍徳川秀忠の兵法師範となる
元和1(1615)	大坂夏の陣　豊臣氏滅ぶ
元和5(1619)	13歳の柳生十兵衛、徳川家光の小姓となる
元和7(1621)	宗矩、家光の兵法師範となる
元和9(1623)	家光、将軍職に就く
寛永3(1626)	十兵衛、家光の勘気をこうむって出仕をとめられ、江戸を去る
寛永4(1627)	大徳寺の沢庵、紫衣着用の勅許を無効とした幕府に抵抗して、出羽の国へ流罪となった
寛永6(1629)	宗矩、家光から、従五位下但馬守に任ぜられる
寛永9(1632)	宗矩、最初の大目付の一人となる　沢庵、宗矩の尽力により赦免され江戸に出る　肥後熊本の加藤忠広陰謀の容疑で52万石召し上げ
寛永11(1634)	伊予松山城の蒲生忠知、24万石を取り上げられる
寛永13(1636)	宗矩の所領1万石に達し、大名の列に加わる
寛永14(1637)	島原の乱
寛永15(1638)	十兵衛、御書院番として再び出仕
寛永17(1640)	宗矩、1万2500石を領有
寛永18(1641)	十兵衛、『月之抄』を著す
正保3(1646)	宗矩死す　3男宗冬が家督を継ぐ
慶安3(1650)	十兵衛、突如として謎の死をとげる　以後柳生家は衰亡していく



徳川家康が柳生但馬入道（石舟斎）に与えた後方攪乱の命令書（柳生家蔵）

が入っている伏見城を攻めました。

それっというので、家康は全軍をこんどは西へ向かわせます。しかし、上杉に対する備えがいる。大軍のことなので陣払いに暇がかかる。この時、家康は大和の筒井定次と柳生宗矩の二人を呼んで、一足早く大和へ行って後方攪乱をしてこいと命じます。この筒井は伊賀の国の城主で、もともと柳生とは、時には敵となりある時は主従となってきた昔からの隣人同士です。

伊賀、甲賀という所は、もともと小領主がたくさんいてお互いに争い合っていた所で、そのため忍者が多く、忍びの技術が発達しています。そこで後方攪乱部隊を編成するのにもってこいというので、特命を授けました。

家康が宗矩に托した石舟斎宛ての手紙の文面ではこうなっています。

「今度筒井順斎遣之候間、伊賀守令談合　牢人等相集、可有忠節候、猶又右衛門尉口上申付候。」

要するにまったく諜報機関の扱いなんですね。後方攪乱をやれということで宗矩を先へやるわけです。

ところが筒井といっしょに大和の近くまでまいりましたら、すでに伊賀の城は落ちたという情報が入るわけです。そうすると、筒井の方は、もう帰ってもやられるだけだから、自分はここにとどまって、家康の西上して来るのを待っていると言うのです。そうか、それならしかたがないというので、宗矩は敵中を突破して柳生へ帰って来ました。何しろ柳生は山に囲まれた隠れ里でして、柳生一族もやはり忍者的素質をもっていたから、他国人の知らない間道や抜け道をよく知っております。そして父子久々（ひさびさ）の対面をいたしました。ところで柳生にいた石舟斎が、ただぼんやりと隠居していたかというと、そうではありません。彼は彼で近畿一円の情報を集めていた。すでに七十一歳の老人ではあるけれど、『新陰流兵法目録』の著作をしたり、門弟に剣を教えたりしている。

「又右衛門、いよいよ天下分け目の戦いだな。」

石舟斎は又右衛門宗矩の心中を見透かしたようなことを言います。

「はい、父上、どちらに分（ぶ）がありましょう。」

彼ら父子は、柳生の里を守るために徳川家についたのであって、柳生の里を捨てて徳川家康に殉じようという肚はなかったのです。

そこが徳川譜代の臣と違うところです。

「又右衛門、家康公は強運の持ち主じゃ。」

石舟斎は諸情勢を判断して、すでに先を見通しておりました。

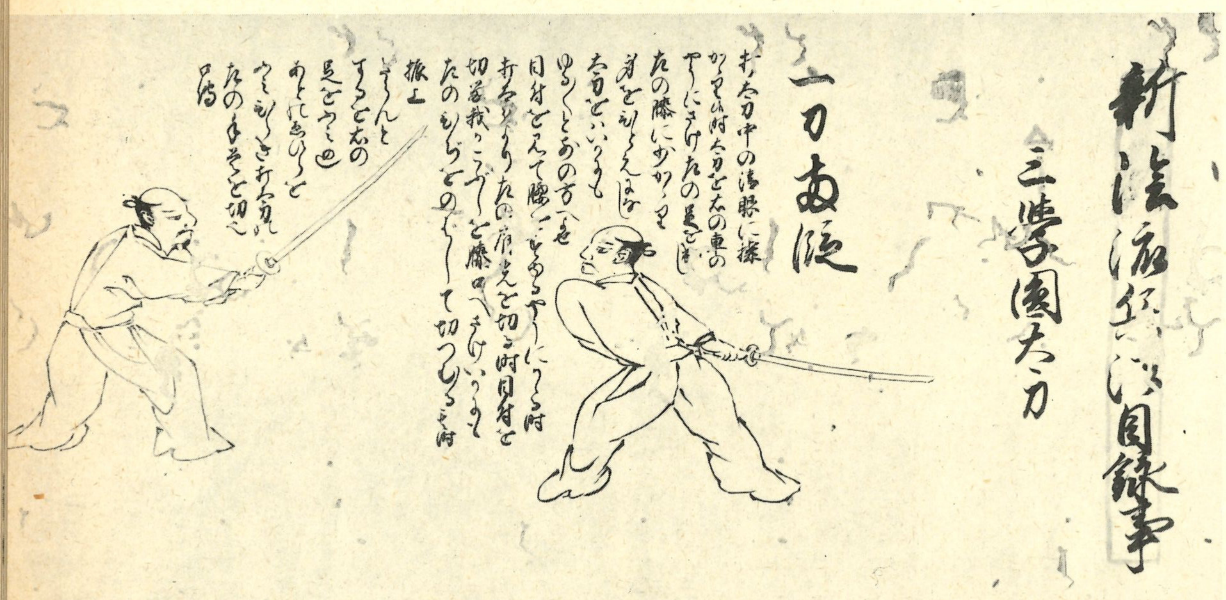
「ではこの度の合戦も……。」

「七分の勝運があると思ってよかろうのう。所詮石田は小才子にすぎぬワ。」

父の判断によって、宗矩は方針を決めます。この父子は、すでに石田三成の家中に太い情報パイプを持っておりました。

というのは、石田三成の重臣島左近という部将は、もともと筒井順慶の家臣で、そのころ一時、石舟斎も順慶の部将をしており、いわば同僚同士です。

その上、長男の厳勝（よしかつ）の妻は島左近の娘で、実は姻戚に当たっている。石田三成は今でいう官僚、文官であって用兵術はまったく不得手だったから、合戦はすべて島左近に任せている。その島と姻戚関係があったから、西軍の最高機密を知りうることができたはずです。それが関ケ原の戦いに非常に役に立ったというので、重く用いられた原因の一つになるわけですね。



「新陰流兵法目録事」（生駒山・宝山寺蔵）

ということは、初めから単なる剣道指南として扱われていないわけです。むしろ政策的な面とか政略的な面で働きを現した。そしてまた合戦となると戦略上いろんな役に立った。それが柳生を大名に押し上げた原動力であり、柳生家の運命というものの基盤をなしていたと思います。

破格の出世をとげた将軍の兵法指南役

関ケ原の合戦における諜報活動の功によって旧領二千石を与えられた柳生一族は、翌慶長六年、さらに一千石の加増を得て、次期将軍秀忠の兵法師範になるに及んで、表芸の剣術家としても、破格の出世をとげる。

将軍の兵法指南役という地位は、有力大名家への仕官という戦国剣客の夢を最高に達成したものであった。

―― 柳生新陰流という流派は、当時たくさんあった流派の中で、特にこういう点が違っていたというところはあるのでしょうか。

邦光 そうですね、もう一人将軍の指南役としては、先任者の小野次郎右衛門忠明という禄高六百石の人物がいるわけです。この小野忠明の方は、もと神子上典膳といって、代々安房里見家の家臣であった人なんですが、小野派一刀流という流派を編み出しましてその流祖となったたいそう強い剣客なんです。この人は若い時に、水がめに入っている相手を水がめごと斬ったといわれているほどの剛剣の持ち主です。人柄は剛直一点張りで、およそ融通の利かない堅物でして、要するに関東の武骨者の典型といった性質の剣道家なんです。そこでたとえ相手が将軍であっても少しも遠慮しません。秀忠に教えたときなど

は遠慮会釈なく、まだまだと言ってビシビシと打ち据えました。そうすると、将軍の方はたまらんわけですよ。秀忠は、時として不機嫌の余り、謹慎や蟄居を命じたりしているのですが、大きな目で見ますと、将軍ともあろう人がまいったと言って逃げ回ったり、勘弁してくれというようなところを部下の前で見せることは、将軍のマイナスにこそなれプラスにならないわけですね。

その点、人生の機微に通じた柳生はうまくさばきましてね。将軍にそんな下級武士のような剣術は不必要である、どうせ将軍が刀を抜いて戦うわけではないから、技術よりたいせつなのは剣の心である、いわば剣禅一如といった精神さえ知っていればいいんだ、という教え方をするんですよ。柳生新陰流は将器の剣、帝王学だというわけですね。

そうすると将軍としては、小野忠明の稽古は、さんざん打ち据えられてヒーヒー言わなければいけない。これはつらいわけですよ。柳生の方は実に温かいわけです。さあ、いらっしゃいというものだから、どうしてもそっちへ行っちまうんですね。その点、柳生は実に賢明だった。まったくのところ、剣道自慢の将軍などは迷惑なだけで、家臣を負かして喜んでいたってしょうがないんです。

ところでそれまでの剣道は、所詮一対一の格闘手段であるから、精神力が大いにものをいうというので、鹿島・香取の神様を神棚に祭って神道無念流などというふうにやっておりました。要するに日本神道を、精神的な基盤にしていたわけです。

ところが日本神道は皇室につながるというので、徳川幕府は神道より仏教を重んじました。そこで柳生は、神道を基礎に持って来たのでは時代遅れだというので、宗矩は仏教の中でも武士が好んだ禅宗を持って来ました。京都の大徳寺に有名な沢庵禅師という方がいますね。こ





柳生新陰流の武術（演武　大坪指方・武藤正雄氏）

の沢庵と彼は青年時代から親しくしていました。そこでこの沢庵から禅の心というものを学びまして、禅をうまく取り入れて剣禅一如ということを言い出した。剣と禅は一つのものだ、剣の道は禅に通じる、だから禅修行をすれば精神修養として剣道にも役に立つと、そういう一つの理念を立てるわけですね。その辺が並みの剣道家とまったく違う点だと思うのです。

沢庵から剣禅一如を学んだ宗矩

邦光　ところで宗矩と沢庵禅師の関係なんですが、沢庵という人は、武士の子で、三十五歳で大徳寺という名刹の住職になっております。この沢庵が住職の時に、紫衣(しえ)事件が起こったのです。これは家康のブレーンの一人で金地院崇伝(こんちいんすうでん)という人物が、全国の寺院を幕府の支配下に置こうとして、紫衣を朝廷から許されている大徳寺に、寺院諸法度を押しつけてきたため、大徳寺が抵抗しまして、幕府の命令を拒んだことから起こった事件で、そのため沢庵は出羽の国へ流罪となりました。



もちろん宗矩は、親友を救おうとしましたけれど、自分が幕閣の要職についているので、反幕府的な行為をした沢庵をむしろ責めなくてはならない立場にあった次第で、なんともならなかった。

一方、沢庵の方は無欲の禅僧で、出羽の国へ行こうがどこだろうがいっこうに苦にしていませんでした。人間本来無一物というのが沢庵の信念で、流罪になっても平然としているんです。

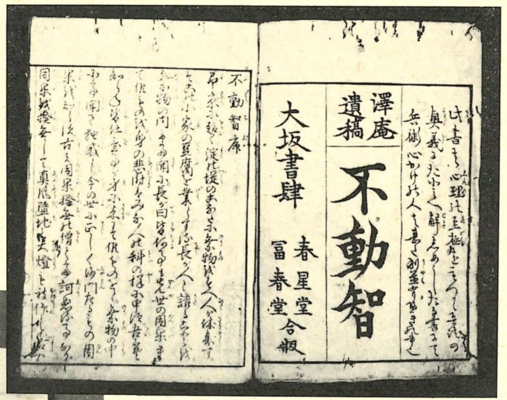
この沢庵に、『不動智神妙録』という著作があります。その一節をのぞいてみると、

「心をいずこに置こうぞ。敵の身の働きに心を置けば、敵の身の働きに心を取らるるなり、敵の太刀に心を置けば、敵の太刀に心を取らるるなり……」

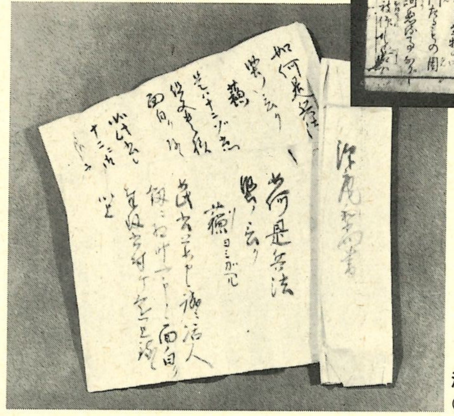
というように剣禅一如の境地は、無心にあると喝破しております。そこで宗矩はそれを基にして、『兵法家伝書』を著述しました。その中で、彼は、病気を去ろうと思い詰めることも病気の一つであるから、すべて病気に任せ、病気と交わることによって病気を去るようにすることがたいせつだと説いております。

こうして柳生以後の剣道家は、剣禅一如をその指導原理とするようになりました。

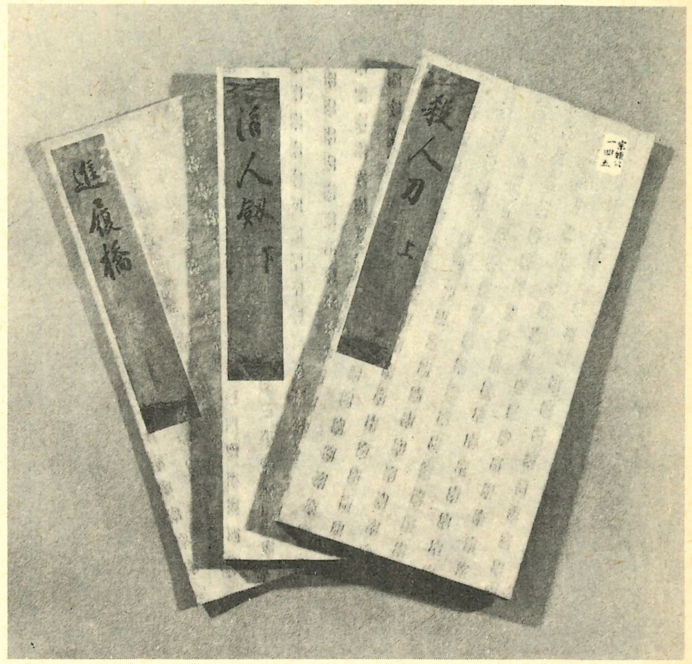
家光は、宗矩から、『不動智神妙録』を見せられて、沢庵に興味を覚え、城内に招いて会ってみましたところ、なるほど、行雲流水のごとく無欲でさばさばしております。権勢欲の強い金地院崇伝とは大違いで、なんでも思ったとおり正直に話したり行動したりする無心の人物で、その人柄に打たれて、家光はしばしば会って話を聞くようになりました。こうして、将軍、大目付、禅僧、といった肩書を抜きにして、家光、宗矩、沢庵といった個人的な交友関係が出来上がりました。宗矩は、ただ剣の上手というだけでなく、政治家としても精神的指導者としても、家光にとってなくてはならない存在と言えましょう。



沢庵和尚の遺稿『不動智』（綿谷雪氏蔵）



沢庵の書状
（柳生家蔵）



柳生新陰流の『兵法家伝書』(柳生家蔵)

「兵法は、人をきるとばかりおもふはひがこと也。人をきるにはあらず。悪をころす也。一人の悪をころして万人をいかすはかりごと也。」

剣禅一致を説いた柳生新陰流の『兵法家伝書(上)』の言葉である。沢庵禅師なくして、柳生新陰流の完成はなかった。沢庵宗彭は武士の子であるが、十五歳で出家して、三十四歳にして臨済宗大徳寺の首座となり、三十五歳で住職となったが、たった三日でこの栄位を蹴ってしまった異色の僧である。この沢庵と宗矩は、年齢もほぼ同じでよく気が合ったものとみえ、青年時代からまことに親しくつきあっていた。ところが、寛永四年(一六二七)、沢庵は寺院諸法度に抵抗したいわゆる紫衣事件に連座して、出羽の国へ流罪となる。宗矩は沢庵の赦免に尽力する。赦されて江戸に帰った沢庵は、宗矩の推挙により、将軍家光とも親しくなっていく。家光は沢庵に深く心を寄せ、老中さえ呼ばれない二の丸の能見物にも呼びよせたり、夜、奥座敷で二人きりで話し合ったり、はては、沢庵のために品川に東海寺を建立してやるほどの傾倒ぶりであった。宗矩は、この名顧問沢庵の教えから、将軍兵法にふさわしい思想的裏付けをして、柳生新陰流を完成したのである。

巧みに幕閣の中枢にたどりついた秘密

柳生の政治的巧みさは、新陰流と柳生新陰流とをうまく使い分けたことにも表れている。新陰流の正統は、但馬守宗矩には伝わらず、長男厳勝に伝えられ、その子兵庫介利厳が尾張徳川家の兵法師範となって、後に稀代の剣豪と称された柳生連也斎を生んでいる。これは、宗矩が将軍指南役となったため、新陰流が勝手に流派を広めることのできないお留め流となることを恐れて、別に柳生新陰流をたてて、その方をお留め流にしたためである。

大和の小さな豪族にすぎなかった柳生家は、家康・秀忠と二代にわたって将軍剣術指南役をつとめるが、元和元年(一六一五)大坂夏の陣での大坂城落城に際し、家康の孫娘千姫を救出したといわれる坂崎出羽守が乱心した折、柳生宗矩がこれを取り鎮めた功によって、将軍家より出羽守の家紋であった二蓋笠を副紋として賜わっている。そして、元和七年(一六二一)には、二年後に将軍職を継ぐ西の丸の家光の兵法師範となり、寛永六年(一六二

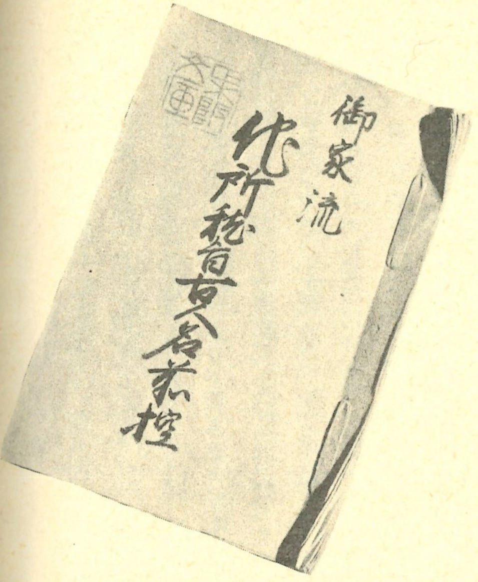
大名になった柳生1万石の行列図(芳徳寺蔵)



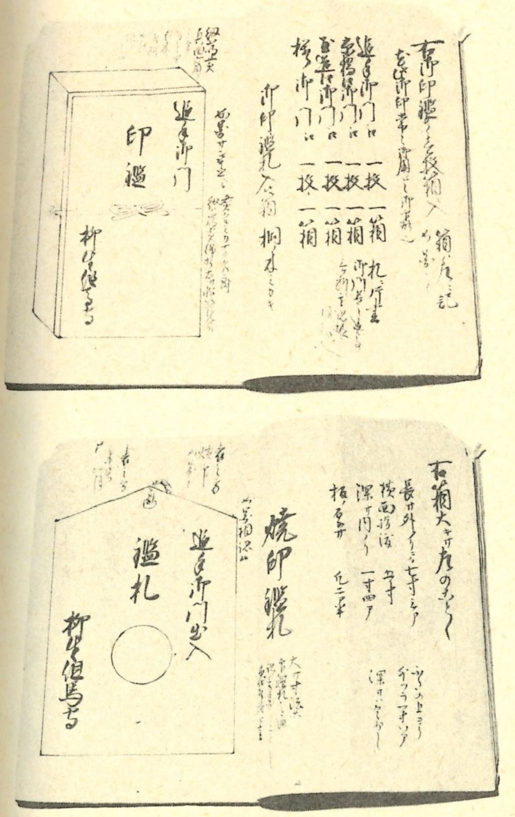
九）には、従五位下但馬守に叙任され、寛永九年（一六三二）には、水野河内守宗信、秋山修理亮と共に幕府最初の大監察（のちの大目付）を命ぜられ、三千石を加増されて、政治の中枢へと近づいて行く。さらにこの四年後の寛永十三年（一六三六）には所領一万石に達し、大名の列に加わることになり、最終的には寛永十七年（一六四〇）に、一万二千五百石を領有するようになるのである。

およそ兵法家にして大名の地位にのぼった者は、柳生をもって嚆矢とするが、この時代はどういう時代であったかと言うと、中央統一政権の下で五つの街道が整備されたり、あるいは諸大名の参勤交代が明文化されたりしている。

しかしながら、次のようなことがその背後に起こってくる。それは慶長八年、つまり徳川家康が征夷大将軍となり、幕府を開いた一六〇三年から、慶安四年、徳川家光がなくなる一六五一年の半世紀の間に、全国で廃絶あるいは国替えになって減封になった大名が百三十余りに及んだことである。ということは、諸大名の中には、まだ徳川家に異心を抱く者もいれば、全国には浪人があふれてしまっているという難しい時代であった。

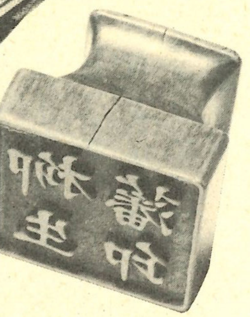


御家流他所稽古人名控（芳徳寺蔵）


江戸城出入りの時の柳生藩の鑑札（芳徳寺蔵）

こういう時に柳生宗矩が大監察惣目付になる。この大監察というのは、いわゆる大目付、大名を監察糾弾する仕事である。そして将軍にも直訴が出来るというたいへんな権限を持った重要な職であった。そして、宗矩の上には、どういう人がいたかというと、例の島原の乱を板倉重昌にかわって鎮圧した知恵伊豆といわれた松平伊豆守信綱、さらに老中土井大炊守利勝、この人は後に徳川幕府最初の大老となる人物であるが、ここにもう一人、前述の沢庵という人が登場して来る。そしてこの沢庵と柳生宗矩と家光、この二つの線と、表向きの大目付、若年寄、老中、そして将軍という、この二つの線の交わるところにいたのが柳生宗矩ということになる。いかにこの柳生がたいせつな役目を背負っていたか、陰の部分を担っていたかということが浮かび上がって来る。


柳生藩の藩札（芳徳寺蔵）


柳生藩の印鑑（同）

柳生十兵衛の謎の部分

それを証明するのが、柳生十兵衛である。しかし、十兵衛の晩年の肖像画を見て不思議だと思うのは、講談や映画などでは、柳生十兵衛はまだ小さい時に稽古中、父宗矩の木刀が当たって、あるいは闇夜に、その技を試そうとして投げた石のつぶてが当たって、右の目がつぶれたということになっているはずである。しかし、この肖像画はちゃんと両眼があいているのである。それほどに謎の多い人物である十兵衛は十三の時に、家光の小姓になった。家光と十兵衛は三つ違いで、家光が年上であるから、家光にとってはちょうどいい話し相手であり、剣術の相手であった。ところが十兵衛が二十歳の時、寛永三年に、突然家光の勘気を被って江戸を去ってしまう。そしてその後、十兵衛が再び御書院番として戻って来るのが、物の本によると寛永十五年の九月である。

そうすると、疑問点の第一は、この十二年間いったいどこで何をしていたかということである。そして疑問の第二は、宗矩にはこの十兵衛のほかに飛騨守宗冬、それから例の柳生家の菩提寺の最初の住職であった列堂、この三人の子供が宗矩の亡くなるときにいたわけだが、没後この三人にその一万二千五百石が分配されている。ということは、柳生家は大名でなくなってしまったということになる。なぜ十兵衛がその家を継ぐことができなかったかということ、そして三番めには、剣をとっては父宗矩よりも強いといわれた十兵衛が、なぜ将軍指南番の役目を継げなかったかということである。

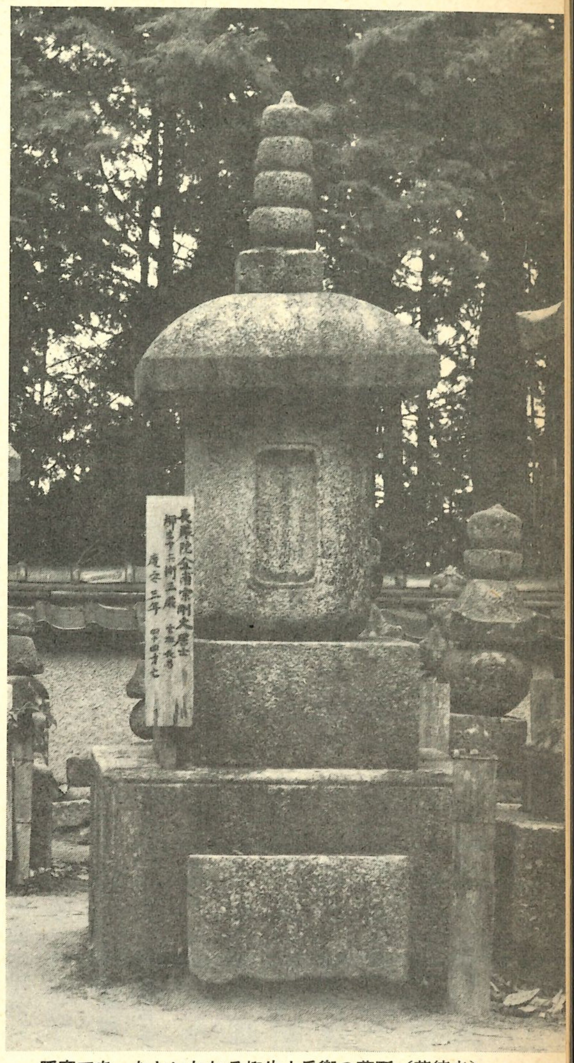
——この疑問に答えていただきたいのですが、まずその第一点、十二年間何をしていたかということと、なぜ勘気をこうむったか、それがどんなものであったのか……。

邦光 そうですね、寛政時代に編まれた武家たちの家伝を集めた書物がございまして、これを『寛政重修諸家譜』と呼んでおります。それを見ますと「ゆえありて御勘気をこうむり」としか書いてありません。理由は明確でないわけですね。当時は理由というものをほとんど書かないんです。ところが、ここに柳生十兵衛が三十五歳の時に書いた『月之抄』という武芸の本がありまして、その冒頭にこういうのがあるんです。

「寛永三年十月日、さることありて君之御前——というのは家光のことです——を退いて、私ならず山にわけ入りぬればみづから世をのがるると人は言めれど、物うき山のすまひ、柴の庵の風のみあれて、かけひならでは、つゆ音のうものなし。……」

とこう書いてあるわけですね。

ここに「私ならず」という言葉があるわけです。これは二通りのことが考えられるんです。といいますのは、一つは、私の用でなくて、公



隠密であったといわれる柳生十兵衛の墓所（芳徳寺）

用を帯びてという、暗にそういうことを示しているとも考えられる。もう一つは、自分はほんとうはこういうことはしたくなかったんだけれども、私ならずこういうことをした、心ならずもこういうことをしたと、そういう二つの意味がこめられているような気がするんです。そしてさらに、ではその十二年間彼は何をしていたのか、柳生にじっとしていたのかということになりますが、これが謎なんですね。そこで巷間いわれている、柳生十兵衛は隠密であるというような説が浮かび上がって来るわけです。さらに、ただ単に勘気を被ってと記してあるだけなんですが、いかになんでも、十二年間の勘気というのは長すぎるんですよ。それも、柳生が日の当たらない落ちめの一族とでもいうのなら、それは十二年間でもほうって置かれたかも知れませんが、何しろその間父親の宗矩の方は大目付になっているんですからね。たいへんな出世をしているわけです。しかも一万二千石の大名に出世しているんですからね。こういう家柄で、しかも将軍家光とは非常に親しいわけでしょう。家光になんとかしてくださいとたのめば、そんなものはすぐ解けるわけですよ。ところが、大目付でありながらそれをしていない。ではそんなに重大な失態を十兵衛がやったのかというと、そういうことではないはずです。なぜなら、重大な失敗があって勘気を被ったものなら、そういう息子を持っている宗矩が大目付にはなれないわけです。

—— なるほどね。自分から辞職するかも知れない。

邦光 そういうことですね。とても大目付の役を、はい、かしこまりましたと言って受けることはできないわけです。しかも自分の長男でしょう。それが十二年間という長い間どこへ行っていたのか、さっぱりわからない。

表に出られなかった隠密十兵衛の悲劇

邦光 『日本剣道史』という書物がありまして、著者は山田次郎吉さんですが、この人の書いた各流派の剣豪列伝をみますと、十兵衛の履歴の中に、九州へ隠密に行っておったと記されています。なぜ九州へ行ったかと言いますと、島津をはじめ、加藤清正だの小西行長などという九州諸侯は、もとは徳川家と同格の大名なんです。それが徳川の天下になったために家臣になっているのです。それも心から家臣になり切っておとなしくしているのならよいけれど、島津などでは、関ケ原の戦いで敗れた口でしょう。これまた復讐するのではないかと、そういう疑いの目で、幕府の方も油断なく監視していた。そこで絶えず隠密が出ておった、その役目を十兵衛が帯びていたのではないかと、『日本剣道史』は言っているんですね。原文では、「若い時病気という立てて、十か年ばかり九州にあって、島津家の動静を探った。これは家光治世の初め、先代まで大小藩の外様・譜代を区別待遇し来たった旧例を一掃して、皆参勤の臣下視した扱いに改めたに、表面は唯々として内心野望を懐く向きもあるだろうかとの懸念があったので、間諜としてその挙止進退を窃に捜索させたという、その間諜の一人に十兵衛も入って居たのである」と書かれております。

—— そうすると、徳川に敵対するところを歩いていた、あるいは歩かされていたかも知れないという推測は成り立ちうるわけですね。

邦光 ええ、しかも柳生流というのは全国に門弟が散らばっておりまして、例えばさきほどもちょっと申し上げたように、柳生一門では石舟斎の長男巖勝の系統でいいますと、その子の兵庫介利巖が、加藤清正に召し抱えられて後、尾張徳川家に再仕官して、禄高八百石の兵法師範になっているわけですね。さらに、越前には出淵平兵衛が、紀州には木村助九郎が、肥後には田中甚兵衛が、越後高田には庄田喜左衛門がというように、それぞれ腕の立つ門弟たちが送りこまれておりまして、十兵衛が彼らを訪ねて行くのは、師弟の関係上、至って自然

柳生新陰流

柳生一族は古代末期から柳生の里を中心に栄えた。遠祖は奈良・春日大社の神領、小柳生庄の管理者であった。南北朝時代には南朝に味方して領地を没収されたが、後に笠置・行在所の後醍醐天皇のもとに加わり、建武の中興が成ると旧領を回復する。

戦国の世に入って——永禄六年（一五六三年）柳生宗巖（石舟斎）三十五歳の秋。奈良宝蔵院で関東一の兵法者。新陰流の上泉秀綱と三度竹刀を合わせて三度敗れた。宗巖はひたすら兵法の鍛練にはげむ。そして二年後、秀綱から「一国一人」の印可。翌年に燕飛・猿回・三学・九箇の太刀目録を伝授された。

足利幕府が滅び、織田信長の天下。この戦いの中に五十の坂を越えた宗巖は柳生の谷に身をひそめる。三十年の戦陣で経験したものは権謀術数と人間葛藤の醜さであり、弱小一族の悲哀であった。鉄砲の登場も、戦場における剣の非力を痛感させたに違いない。だが、乱あれば平あり、動あれば静あり。やがて戦いおさまれば兵法もまた新しい意味を持つことを予感していただろう。つまり活人剣、修身の剣、治国・平天下の剣である。

新陰流は、愛洲移香斎の陰流に始まる。愛洲氏は熊野水軍に属する家系だが、移香斎は三十六歳の時に日向・鵜戸神宮に参籠し、その啓示によって剣法を自得したといわれる。その子らが関東に至り、常陸・太田の佐竹家に仕えたころ、上州大胡の城主上泉伊勢守秀綱と接したと考えられる。当時は、上州には神道流が広まっていたので、秀綱はこの一流をおさめた上で新陰流を編み出したのであろう。

秀綱の新陰流は宗巖に伝えられて、さらに鋭いものになる。それは剣の修練と戦場体験によって生死を超えた自由無碍、不動智の境地であり、正に剣法修行の極致であった。

そして、続く但馬守宗矩、三巖、兵庫助利巖、連也斎巖包らは、すぐれた禅僧との思想的交流によって禅の影響を強く受ける。

「夫れ兵法は芸能の兵法にあらず。一の心得道を以て兵法とす。一の心は即ち道也。道に習あり、習は行によりなる也。」（「宗冬印可状後文」）

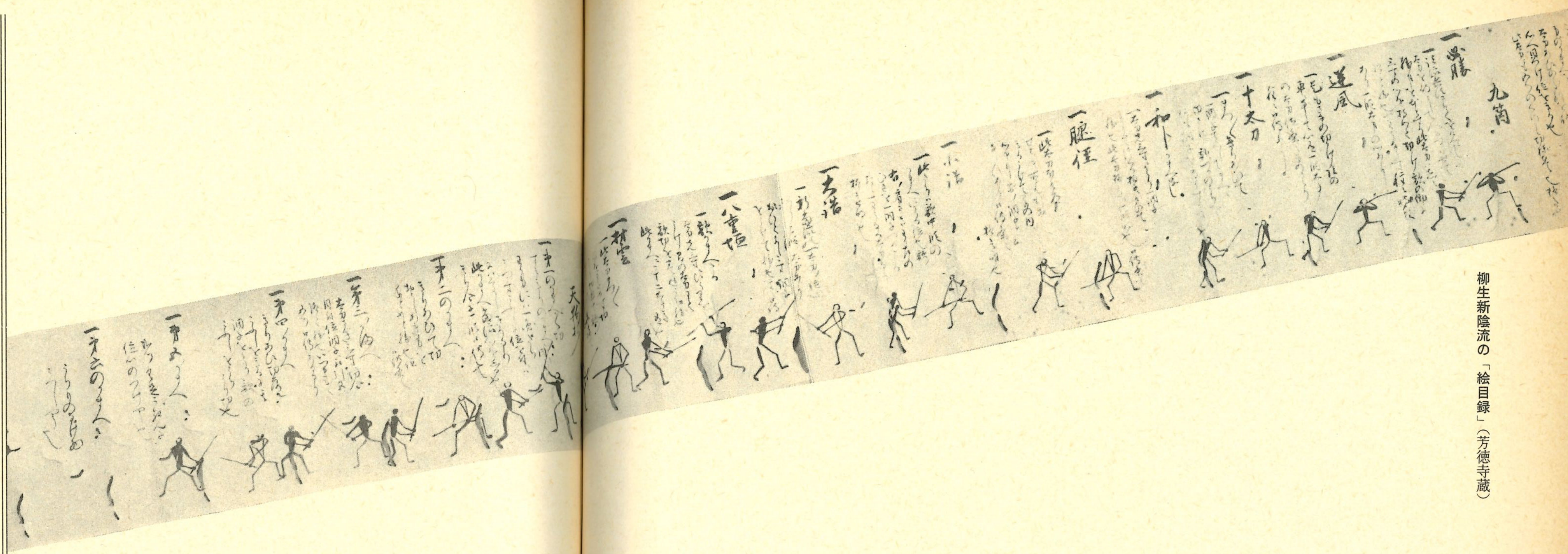
剣禅一致（一味）——この柳生新陰流の最盛期は、石舟斎宗巖が宗矩を連れて徳川家康と会った文禄三年（一五九四）から、連也斎巖包が死んだ元禄七年（一六七四年）までの百年間であった。

なわけですね。そこで各地の情報を取ることができたはずです。

『柳生藩旧記』などによれば、諸藩に召し抱えられた柳生宗矩の門弟は次の通り。

仙台伊達家	柳生権右衛門（宗矩の甥）
	狭川新三郎
会津保科家	小瀬源内
古河土居家	萩原栖左衛門
高取植村家	西江織部
淀　石川家	野殿定右衛門
柳川立花家	戸塚治太夫
上野廐橋家	辻茂右衛門
尾張徳川家	柳生兵庫助利巌
伊勢藤堂家	柳生源太夫
	津田武太夫
大和狭川村	狭川甲斐守
紀伊徳川家	木村助九郎
越後榊原家	庄田喜左衛門
加賀前田家	笠間九兵衛
越前前田家	出淵平兵衛
長州毛利家	馬木家六
阿波松平家	佐々木藤左衛門
伊予久松家	松下八郎左衛門
	松下源太夫
	松下小源太
土佐山内家	小栗仁右衛門
肥後細川家	田中甚兵衛

邦光　当時の大名というのは、要するに領地を治めているというだけであって、土地を所有していたわけではありません。ですから、どんどん移し替えられるんです。ある藩が山形におった。藩主に何か不都合があると、こんどは九州の片隅にやられるというぐあいにどんどん大名は移動させられます。そこで大名は植木鉢といっしょで、棚の上へ持っていこうが庭へ持っていこうが自由だと、そういうことさえ言われておりましてね。そういう意味で、柳生家というのは大目付になりまして、大目付の職というのは、大名を監督する役目ですから、それだけの実力が伴わなくてはなりません。それも表の権力を陰で支える縁の下の力持ち役がいるわけですから、その縁の下の力持ちを柳



柳生新陰流の「絵目録」（芳徳寺蔵）

冬日の星

初冬の陽を浴びて真紅に燃えるカエデの古木がある。星霜にさらしぬかれた太い幹はほとんどが白いが、いっぱいに広げられた枝は錦華妖婉。散り敷く葉が分厚い絨毯になっている。横の家の玄関に小さい看板が出ている。「少年野球クラブ　柳生リトルタイガース　球団事務所。」

そばの赤い橋は、このカエデにちなんで沢庵和尚が「楓橋」と名付けたというからこの錦のありさま、ざっと四百年変らず続いていることになる。

橋を渡って霊源坂を登ると、芳徳寺である。車なら白梅橋を渡り、正木坂を登る。

芳徳寺境内の紅葉もまた見事だ。本堂には本尊釈迦如来をはさんで左から宗矩、沢庵、列堂の木像。宗矩はこの寺を建立し、沢庵は開山し、列堂は第一世住職である。

本堂の裏、柳生家墓所の並ぶ墓塔は八十四基。拝座正面奥に宗矩、手前右に三巖、右に宗冬。風に竹林が揺れ、松籟は空を渡る。

そろそろと団体がやって来た。マイクを手にした人がやわらかい調子で説明する。

「春光院殿というのは宗冬の奥さん、ここでは人気が高い墓です。樽に盃にトックリの形になっている。私もこんな墓を作りたい。そっちの端の景福院殿は、宗矩が六十六歳で列堂を産ませたという、お藤さん。頭がよくてベッピンでね。洗濯しているところを宗矩が見そめた。波の数はいくつかと宗矩が問うたのに、お藤さんは二十一ですと答えた。わかりますか。ナミ、七三、二十一ですな。これも怪しい話ですが……頭のよさにあやかろうと墓石を欠いていく人が多いんです。」

お婆さんたちが「いちばん端っこでかわいそうに、しかも欠けてしもうて」と、うなずきあう。

石壇を積んだ家老屋敷は、山岡荘八氏が買い取っていたが、山岡氏が亡くなって村に寄託された。管理は芳徳寺である。そのすぐ傍に、これまた新しく、すばらしい石壇を積んだ家がある。正月用の大根を抜いているお婆さんの話では、やはり家老の子孫らしい。

「ここも民宿だったんだけどなあ。観光客もぐんと減ったな、あんまりもうからんさかいな、やめてまったんだわ」

「春の坂道」のブームのころにくらべると、訪れる人は減った。民宿もひとところ半分の八軒になった。だが、静けさがもどった里の道こそ柳生にふさわしい。

生十兵衛が引き受けていたのではないかと思います。ところが、柳生十兵衛は悲しいことに家を継げなかった。

―― そうですね。二番めの疑問点がそれですね。

邦光　なぜかといいますと、そういう陰の役目をやっていた人間は、表へ戻るわけにはやはりいかないのですよ。そうでしょう。あまり裏の事情を知り過ぎていると表へ出て政治をするのに不都合なことが起こりやすい。ですから、彼は一生やはり陰で終わらなければならなかった。そこに柳生十兵衛の悲劇があると思います。

組織的諜報活動と産業スパイ

今、石油コンビナートの街で知られる山口県徳山は、かつて西国の雄、長州毛利家の支藩、四万五千石の城下町であった。この徳山藩にも柳生の門弟は送り込まれている。

大野八之丞直之。

三代藩主毛利元次の剣術指南役として七冊の『柳生伝書』を献上するほどの地位にあった大野八之丞は、元禄十二年、突然切腹を命ぜられる。

その理由は、いままでたびたび不届きなことがあったにもかかわらず、兵法指南役でもあったので許してきたが、こんどはわがままにも藩士をやめて浪人したいと言い出したからだ、というのである。たったこれだけの理由で切腹というのはどうであろう。

当時の藩主元次は、親藩主吉元とうまくいかず、対立状態が続いていた。

実は大野八之丞は毛利家の内紛を探索し、情報収集を終えて退去しようとしたのではなかったか。

大野八之丞切腹の十七年後、徳山藩は改易の運命をたどっている。

ここに公儀隠密の手になると思われる『探索書』がある。

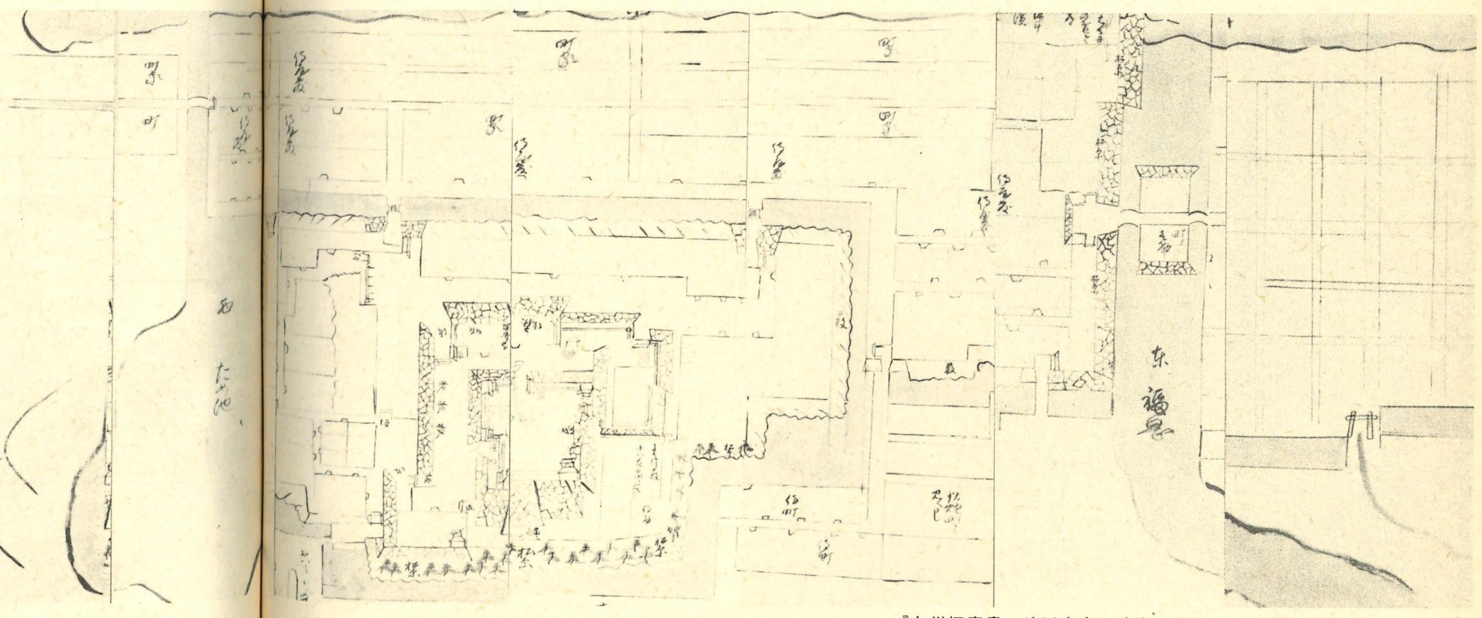
時、正に三代将軍家光治世の寛永期、四国、九州諸藩を偵察し、その模様を幕府へ報告したものである。

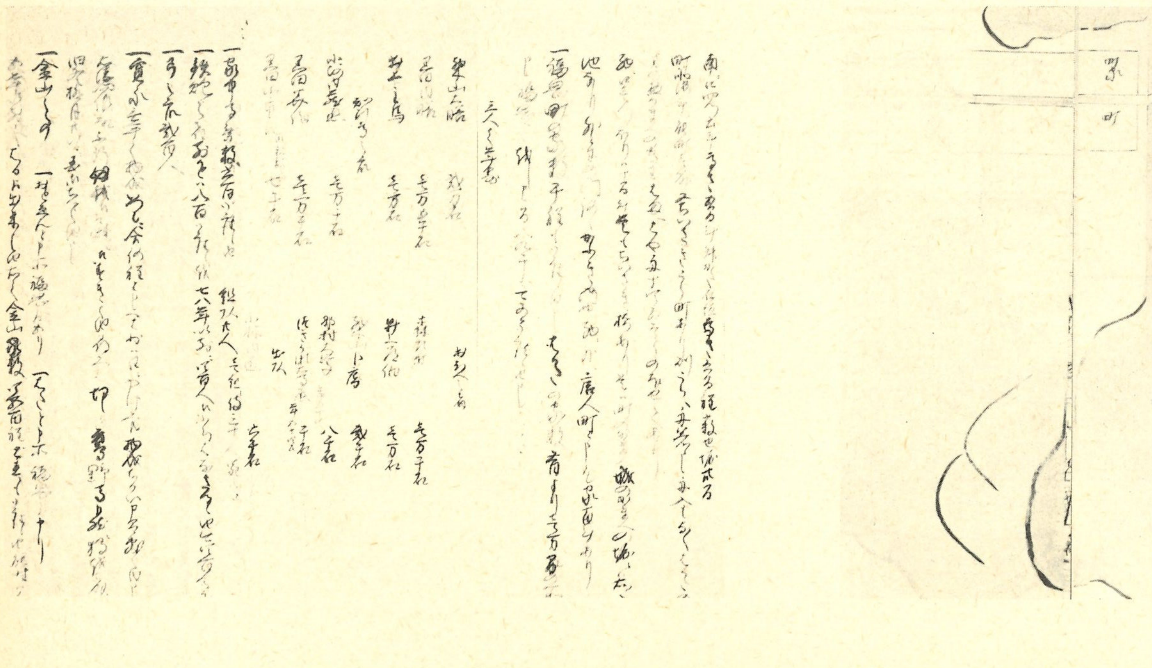
城と城を取り巻く周辺の地形、建物のありさまなどを記した詳細な絵図面、みずからの歩幅で実測したものである。

おもだった家臣の名まえとその給料、そして馬の数、鉄砲の数、弓組の人数などの軍事機密、さらには藩主や藩士、町人の性情から、天候と農作物の関係についてまで言及している。正に組織的な諜報活動が必要とされる時代であった。

―― 相手の裏を探るのを、今日われわれは時には忍者といったり、隠密といったり、御庭番といったりするんですね。やはり時代的に役割の変化というのはあったんでしょうね。

邦光　忍者が大活躍したのは戦国時代なんです。戦国時代の忍者は、例えばだれでもいいですが、織田なら織田の家臣というように決まった身分を持っていません。ですから、きのうは織田のために働き、きょうは徳川、豊臣のために働く。要するにお金で動くわけです。その点、さきほど柳生の諜報機関と申し上げたんですが、これは要するに幕府直属で、幕府のためにだけ働いているのですから、傭われ忍者の持って来る情報と質が違うと思うんです。一時的な傭われ忍者がどんな情報を持って来るかというと非常に怪しいものです。例えば相手に都合のいいことをうまく情報の中に組み入れて持って来るか





『九州探索書』徳川家光の時代、隠密に九州諸藩を偵察させ、城下の様子などを幕府に報告させたもの（影写本　東京大学史料編纂所）



二蓋傘の紋所がある紋服（芳徳寺蔵）

も知れないでしょう。要するにどこで寝返るかもわからないという危険性があります。中には二重スパイもいるでしょうし、あまり信用できない者も多かったことでしょう。しかしその点、柳生の集めて来る情報というのはまったく政治的なものですから、その正確さと内容が違うわけです。ですから柳生の方は、現代風にいうと産業スパイ、あるいはＣＩＡ的な方ですね。大名を企業としますと、企業間の機密を探っているわけですから、一般の忍者のように暗殺を請け負ったり、敵の後方に火をつけたりといった安っぽい仕事はしなくていいわけです。ですから、探るべき情報の質も違っています。そうすると、かつての忍者では役に立たない。しかも政治的な高度な判断を必要とするわけでしょう。あの大名はつぶすべきか、助けるべきかというような。忍者にはとてもそんな判断力はありませんし、またそういう政治的機密をまかせるわけにもいかないでしょう。それで柳生がその役割を果たしたと思うんです。

温室の花に堕した大名柳生一族の剣法

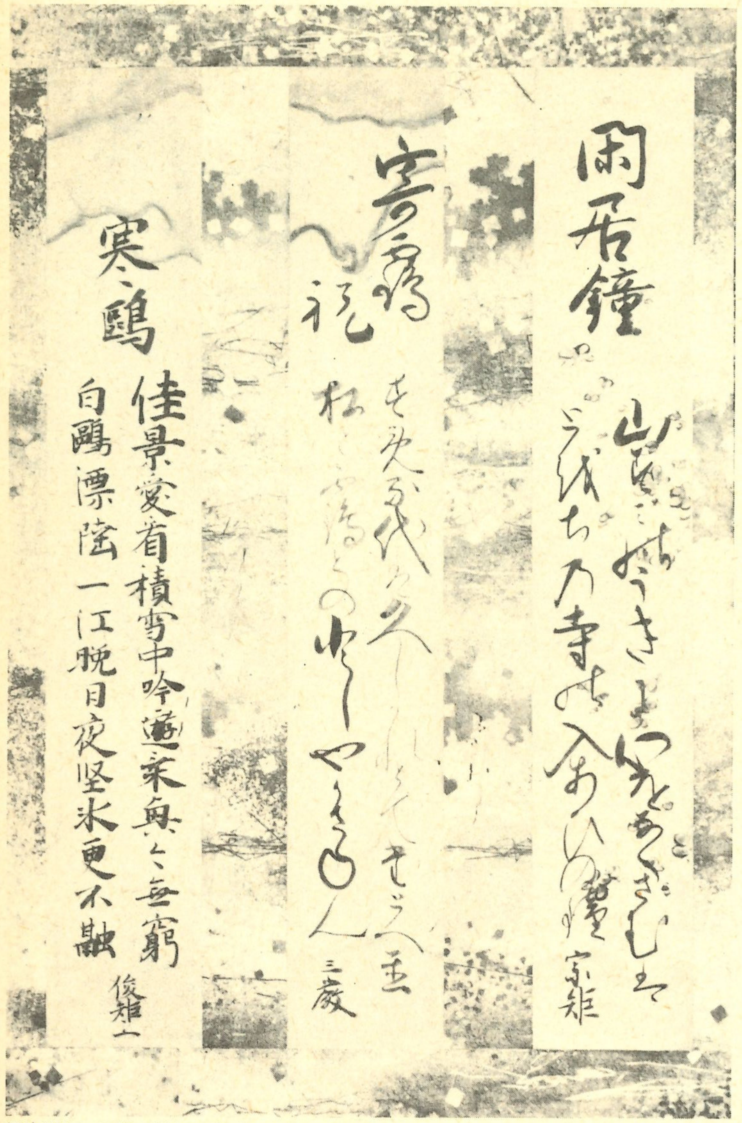
最盛期門弟一万数千を誇り、諸大名ににらみを利かせた柳生の春も、石舟斎からおよそ百年でその坂を登りつめる。

宗矩・十兵衛亡きあと、あとを継いだ飛騨守宗冬が旗本生活二十三年めにしてやっと柳生家を一万石の大名に復したのも束の間、その子宗在には男子なく、ここに石舟斎以来の直系の血は絶えることとなる。

徳川将軍として柳生新陰流に誓紙を入れたのは、六代家宣までである。家宣が対馬守宗在に対して誓紙を入れたのが最後であった。

そして以後、柳生新陰流は、時に応じて将軍に兵法を上覧したり、その剣術相手をするだけで、その実力は次第に低下し、幕末に到っては、新興の諸流派に圧倒されて、見るべき剣士は一人も生み出されることなく衰退していった。

邦光　そうなるのは当然のことでして、世の中が太平になると、武道はほんの飾りもの、形だけのものに堕落して行きます。さらに柳生家は譜代の大名になっています。そうなると、生まれて来る子供はすべて大名の子なんですね。初めから大名の子ですから、世の辛酸をなめてどうこうということはまったくありません。これでは武芸者が生まれて来るわけがありません。武芸の達人などというものは、山へ分け入って修行したり、諸国を武者修行に回ったり、より強い者を求めてぶつかって行かなくては、とても腕を磨いたことにはなりません。ところが大名の子弟は、世間の風にも当たらず、お守り役に育てられた温室の花でして、これでは弱いわけですよ。剣道家や剣士というものは、これは一種のハングリー・スポーツだと思うんですよ。ハングリーだから強くなるわけです。しかも世の中が一応落ち着いて徳川幕



柳生宗矩・三厳・俊矩の和歌（芳徳寺蔵）

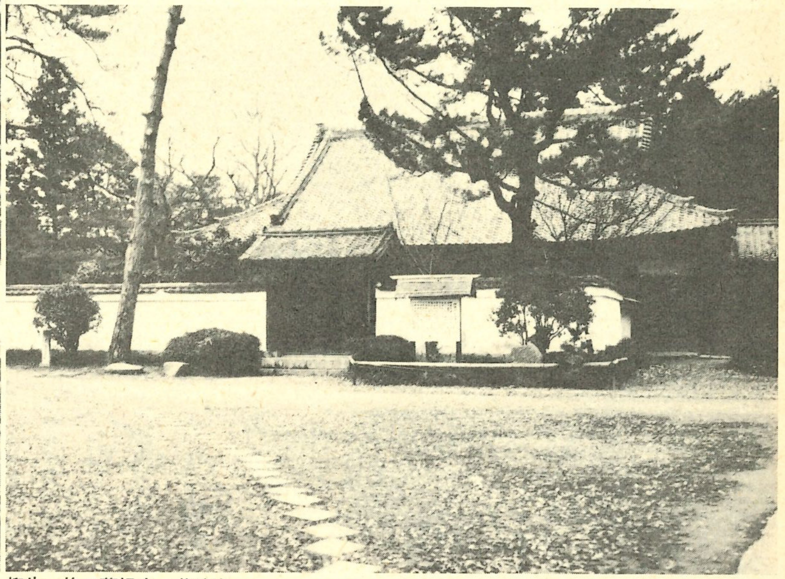
府の基礎もどうにか固まった。したがって大名の方もあまり動きがなくなる。つまり要するに幕藩体制が整うわけですね。太平になってしまう。そうすると、柳生の陰の役割もなくなってしまいます。ですから、陰の役割もないし、表の方の剣道指南もたいしたことがないということで、すべて落ち着いてのんびりしてしまったのです。ですから、皮肉にも柳生がみずから努力して世の中の体制を作っておきながら、こんどはその体制が出来たために自分の方は没落していったといえますね。次第に活力を失っていったのです。そこに人間の限界、人間の運命の皮肉さを感じさせられますね。歴史というのは、そういう点から言うと非常に皮肉なものだなと思います。

柳生の里を見下ろす小高い丘に、十兵衛杉と呼ばれる直径二メートル余り、高さ三十メートルほどの老いた杉の木がそびえ立っている。

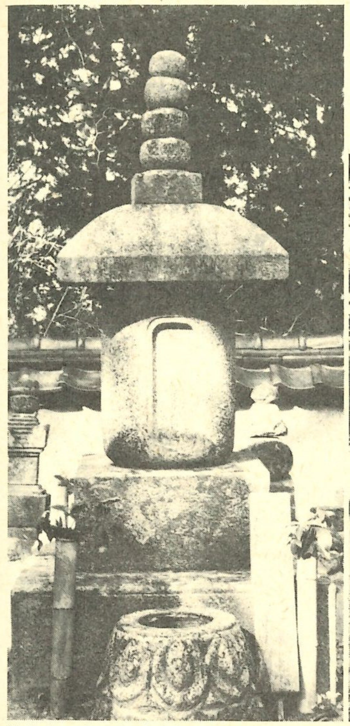
家光の命により九州、四国諸藩の探索に旅立つ十兵衛が、記念に植えたと伝えられるこの杉も、三百五十年の風雪を経て、今無残にも枯れ朽ちようとしている。

しかし、こうしてしのぶよすがのある者はまだいい。諸国に散っていったあまたの隠密たちは、正に隠密であるがゆえに、素性も定かでないまま闇から闇へと消えていったものと思われる。

歴史は常に数多くの無名の人たちの犠牲の上に成り立っているのである。



柳生一族の菩提寺・芳徳寺



芳徳寺にある柳生宗矩の墓所

柳生家の人々

江崎俊平

柳生中興の祖石舟斎宗厳は、享禄二年（一五二九）柳生に生まれた。三好長慶の臣柳生美作守家厳の子。新介、新左衛門と称し、のち但馬守を名のった。

初め三好長慶に仕え、永禄六年（一五六三）上泉信綱が上洛の途につくや、大和にこれを迎えてその門に入り、新陰流の印可をうけた。のち織田信長に仕えたが、隠田を発見されて柳生に閑居した。文禄三年（一五九四）徳川家康に剣術を言上、家康は宗厳に入門、これより柳生家と徳川家とは深いきずなが結ばれるようになった。

慶長五年（一六〇〇）関ケ原役には、宗厳は老年のために出陣せず、宗矩が代わって従軍、戦後柳生は宗矩に与えられた。一生を剣術にささげ、慶長十一年（一六〇六）柳生において没した。年七十八。宗厳には五男六女があったが、その子たちはそれぞれ自活の道を選んで諸国に散っていった。

嫡男厳勝は新次郎と称した。天文二十一年（一五五二）生まれ。初め大和の領主筒井順慶に仕えていたが、戦傷して浪人、諸国を経歴し、元和二年（一六一六）四月五日六十五歳で没した。その子孫が柳生の嫡流で、尾州柳生家となるのである。

二男は僧となり、瑞雲院久斎と称した。慶長十二年（一六〇七）三月二十五日没。三男も僧となり龍蔵院徳斎と称したが、のち備前岡山の池田侯に仕え、寛永元年（一六二四）七月二十五日没した。

四男五郎右衛門宗章は、初め小早川秀秋に仕えていたが、のち致仕して伯耆国米子の城主中村伯耆守忠一に仕官しようとして、その老臣横田内膳村詮の館に身を寄せていた。村詮は柳生の門人だったのでその縁を頼っていったのである。丸山の出丸を内膳が預かっていたので、「内膳丸」と呼ばれていたが、宗章が身を寄せたのはこの内膳丸の館であった。米子城主中村忠一はまだ年若く、家中の実権は内膳がにぎっていた。忠一の御側衆に安井清次郎という者がいたが、忠一が内膳を除きたいと思っていることを察して、道家長右衛門、同長兵衛、天野宗葉らとはかり、慶長八年（一六〇三）十一月十四日、本丸で内膳を殺してしまった。

この凶報をうけた内膳の嫡子主馬助は、討手が向けられることを覚悟し、むなしく死を待つよりも、一族を集めて合戦することにした。横田屋敷には三百余人が集まり、篝火をたき、防備をかため、討手を待った。この時横田屋敷にいた宗章も、武士の義理から横田一族とともに討手をむかえることになった。



柳生の里にある石舟斎橋

翌日、中村家では隣国松江の城主堀尾帯刀の援軍を得て攻めて来た。合戦が始まったのは夕刻に近かった。宗章は門を開いて敵の中へおどり込み、幾人もに傷を負わせたが、やがて門は破られ、主馬助は切腹した。『藩翰譜』には、「是より柳生が兵法、天下に顕はる」と述べている。宗章の奮戦も空しく、ついに藤井助兵衛(一説には矢野助之進)に討たれた。

五男が江戸柳生の開祖となった但馬守宗矩である。初め又右衛門と称した。元亀二年(一五七一)柳生に生まれた。父石舟斎のもとで剣術の修業にはげんでいたが、慶長五年(一六〇〇)関ケ原役には父に代わって家康に従軍、のち柳生を与えられて、ようやく家康直属の家来となった。宗矩三十歳の時である。慶長六年(一六〇一)九月徳川秀忠は宗矩に誓紙を差し出し、一千石の加増を与えた。元和四年(一六一八)九月二十四日、宗矩の室が没した。下野烏山城主三万石松下石見守重綱の女である。重綱は太閤秀吉が若いころ仕えた松下嘉兵衛の孫であった。

元和七年(一六二一)宗矩は家光の兵法師範となった。家光は歴代将軍の中でも指折りの暗君であったが、三代将軍になる人物であるから、徳川政権安定のために名君に作り上げねばならなかった。土井利勝をはじめ、閣老たちは家光を名君にするために相当の苦労をしているが、そのかげに宗矩の活躍があったのは想像に難くない。

元和九年(一六二三)将軍秀忠は将軍職を家光にゆずって西丸に隠居した。寛永六年(一六二九)三月、宗矩は従五位下但馬守に叙任した。五十九歳である。この年家光に印可の書を献上、その褒美として正宗の短刀を与えられた。

寛永九年(一六三二)十月、宗矩は三千石の加増をうけた。これは惣目付(のちの大目付)になるので、宗矩の身分を引き上げておく必要があったからであった。

寛永十三年(一六三六)宗矩は一万石となってようやく大名に列した。六十六歳であった。この時尾張にいる兵庫助に通知したが、賀詞もなかったので、それから両家は絶交になったという。これについては種々の話が伝えられているが、江戸柳生家が将軍家光の師範として大名にまで立身し、新陰流の正統のように云々されることに対して羨望と嫉妬があったのは否定できない。

寛永十七年(一六四〇)九月、宗矩は五百石を加増、さらに二千石を加増されて、すべて一万二千五百石を領するようになった。この年宗矩は柳生陣屋の設営にかかっている。正保三年(一六四六)四月二十六日江戸で没した。年七十六。遺言により火葬して下谷広徳寺へ葬られた。墓は現在移されて、練馬区桜台六丁目の広徳寺別院に残っている。

女は六人あった。長女は和州狭川村主福岡孫左衛門の妻、二女は伊賀国士大塩九左衛門の妻、三女は大和国士丹生平蔵の妻、四女は加茂茂斎の妻、五女は城州瓶原村の郷士安井喜左衛門の妻、六女は和州邑馳村の郷士吉岡仁右衛門の妻となっている。

これから柳生家は江戸と尾州に分かれるのだが、まず江戸柳生家。

宗矩には四男二女があった。嫡男は十兵衛三巖。講談で有名な人物である。慶長十二年(一六〇七)生まれ、初名七郎。長じて十兵衛と称した。元和二年(一六一六)秀忠に仕えた。寛永三年(一六二六)家光の勘気をうけて職を退き、家を出て諸国修業の旅へ出たという。寛永十五年(一六三八)許され、のち書院番となる。正保三年(一六四六)父宗矩の遺領のうち八千三百石を賜り、柳生家は再び旗本となった。家光にうとまれ、生涯叙任しなかった。晩年は柳生に退隠し、慶安三年(一六五〇)三月二十一日城州大河原で鷹狩中没した。年四十四、男子はなく、二女があった。長女は幕臣跡部民部良隆の妻、二女は幕臣渡辺久蔵保の妻となった。

二男友矩は妾腹の子であった。慶長十八年(一六一三)柳生に生まれた。左門と称す。兄十兵衛が家光の勘気をうけた翌寛永四年(一六二七)家光の小性にあがった。兄十兵衛と違って美少年であり、たちまち家光のお気に入りとなり、寛永十一年(一六三四)従士頭となり、従五位下刑部少輔に叙任、二千石を賜った。しかし寛永十六年(一六三九)六月六日、二十七歳で早世した。

三男宗冬は慶長十八年(一六一三)柳生に生まれた。十兵衛の同母弟である。正保三年(一

六四六)父宗矩の遺領のうち四千石を与えられたが、慶安三年(一六五〇)兄三巖が没し、嗣子がなかったので、その遺領をつぎ、八千三百石を領した。父についで将軍指南役になり、明暦三年(一六五七)従五位下飛驒守に叙任、寛文八年(一六六八)加増されて一万石を領し、再び大名となった。延宝三年(一六七五)九月二十九日六十三歳で没した。室は京極主膳正高通の女である。

四男は僧となった列堂和尚義仙である。母は宗矩が洗濯しているところを見染めて愛妾としたというおふじである。寛永十三年(一六三六)生まれ、宗矩はこの時六十六歳であった。幼名六丸。父宗矩の遺領のうち二百石を賜り、柳生芳徳寺の住職となった。

女は二人あり、長女は幕臣武藤清助安信の妻、二女は伊賀国士中小路助九郎の妻となった。

宗冬の嫡男大膳宗春は、父についで門弟に教授していたが、延宝三年(一六七五)二月四日疱瘡にかかり、二十七歳で没したので、二男宗在が家督をついだ。宗在は従五位下対馬守に叙任、元禄二年(一六八九)四月十三日三十六歳で没した。室は五條大納言為庸の女。宗冬には女子が三人あった。長女は幕臣小出瀬兵衛尹重の室、二女は同じく朽木周防守則綱の妻となったが、のち離婚した。三女は同じく曽我又左衛門近祐の妻となった。

宗在には二男があった。長男隆久は摂津三田城主九鬼長門守副隆の養子となり、二男縫殿介は早世。兄宗春の嫡男俊方に家督をゆずった。俊方は従五位下備前守に叙任、享保十五年(一七三〇)四月四日五十八歳で没した。

俊方は男子がなかったので、松平越中守定重の十一男を養子として家督をつがせた。飛驒守俊平がこれである。これより江戸柳生家の血統は絶えることになり、名まえだけが残ることになった。が、江戸柳生の剣術は、せいぜい飛驒守宗冬までであったようである。

一方尾州柳生家は代々剣術を伝えた。石舟斎の嫡男新次郎巖勝には、三男二女があった。

長男は久三郎某。府中城主浅野長政の嫡男幸長に仕えて五百石を領していたが、慶長二年(一五九七)二月二十二日朝鮮蔚山の籠城で討ち死にした。

二男が新陰流の道統をついだ兵庫助利巖である。天正六年(一五七八)に生まれた。初め長巖、兵助、伊予と称した。幼い時から石舟斎に剣術を学び、天才児とうたわれた。石舟斎は利巖を手許においておきたかったが、加藤清正のたっての要請で肥後に下ることになった。慶長八年(一六〇三)のことである。が、その年に起こった百姓一揆討ちに出かけたが、伊藤長門と意見が合わず、長門を斬って一揆を滅ぼし、肥後を立ち退き、諸国修業の旅へ出た。慶長十年(一六〇五)石舟斎より新陰流の一子相伝を残らずうけついだ。利巖は再び諸国修業の旅へ出たが、元和元年(一六一五)尾州義利に仕え、代々剣術指南として子孫へ伝えた。慶安元年(一六四八)二男利方に家督をゆずって隠居、如雲斎と号したが、同三年(一六五〇)正月十六日七十三歳で没した。

三男権右衛門某は、伊達政宗へ仕えて三千石を給された。女は三人あって、長女は初め伊賀国の山崎惣左衛門に嫁していたが、不縁になり、柳生宗矩が引きとっていたが、のち老職柳生主馬の妻となった。主馬は朝鮮からの帰化人であった。二女は城州笠置村の郷士森鳴市介の妻となった。三女は明らかではない。

利巖には三男四女があった。嫡男新左衛門清巖は寛永十五年(一六三八)正月一日、島原の役で二十四歳で討ち死にしたので、利巖の家督は二男茂左衛門利方がついだ。が家督の五百石をついだだけで、兵法師範を弟兵助にゆずり、一般の藩士として過ごし、貞享四年(一六八七)八月二十二日六十八歳で没した。

三男が不世出の天才といわれた連也斎巖包である。幼名新六、七郎兵衛、兵助、兵庫と称した。慶安二年(一六四九)父利巖より一子相伝をうけ、兄利方にゆずられて尾州家剣術師範となったが、貞享二年(一六八五)隠居、兄の子巖延に家督をゆずり、剃髪して浦連也と号した。一生妻をめとらず、元禄七年(一六九四)十月十一日七十歳で名古屋に没した。

尾州の柳生家は、代々剣術指範として受けつがれ、新陰流を伝えたが、江戸柳生家が大名となり、日の当たる道を歩いてきたのに比べて、陰の存在になった。宗矩と利巖の差が、こんなところに現れているということができる。

(作家)

陰の系譜

戸部新十郎

陰の発生

〝陰に生きる者〟ないし〝陰の一族・一党〟という言葉には、字義通り、暗い、姿を見せない、不気味といったイメージが常につきまとう。

〝陰〟とはしかし、元来、光を受けてできたものである。どこかに光があたれば、どこかがかげになる理屈で、相対的に不幸な部分なのである。その意味で、彼らはおおざっぱにいって〝陽の目を見ない〟〝世に容れられない〟連中だと考えていいだろう。

〝隠れ里〟と呼ばれるところがある。柳生の里もかつてそうだったが、たいがい深山幽谷に位置し、容易に人を近づけない。合戦に敗けたか、圧政から逃れたかした一族一党が、外敵を防ぐにも、食糧を得るにも便利な村里を設け、独特の風俗習慣、ときには厳しいオキテやら、優れた技芸やらを保って、ひっそりと暮らしたといわれる。

終始そうやって、外界と交渉を絶って暮らすことができれば、これはもう一種の桃源郷のようなもので、特に〝陰〟とはいえない。事実、近年までそれに近いいくつかの秘境を数えることができた。

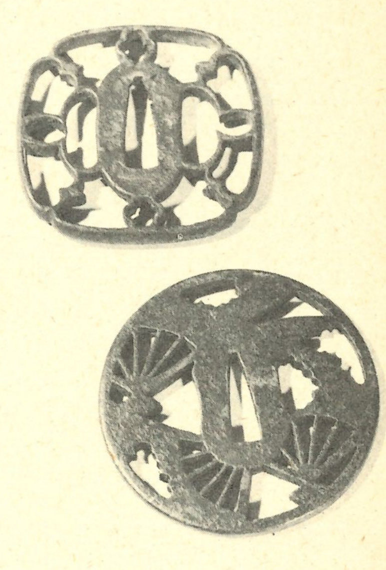
けれども、ある日突然、社会が入り込んできて、隠れ里が隠れ里でなくなることが起こる。住人たちは余儀なく、それまで絶ってきた外界と交わるようになるが、彼らには長年なじんできた習俗がある。社会からいえば〝異風〟である。そんなものを身につけて現れれば、疎外されても仕方がない。つまり、陽の目の下で、陰の生活を強いられることになる。

そこで彼らは、むしろ彼らの〝異風〟を守って団結する。復権を願う心と、少なからぬ怨念が入りまじり、一見暗く、陰密な生態が生まれる。これが、陰の一族・一党といわれるものの一つの発生過程なのである。

上古では〝鬼〟だった、畏れられ、疎外されたに違いないそれは、折口信夫説によれば、「おにとは、大人のことであり、征服された先住民のこと」である。

例えば、天孫族によって征服された出雲族から土蜘蛛までを想定してよく、その社会との関わり合いの姿は、大江山の酒顚童子伝説にみられるように、たいそう反秩序、反体制的でもある。

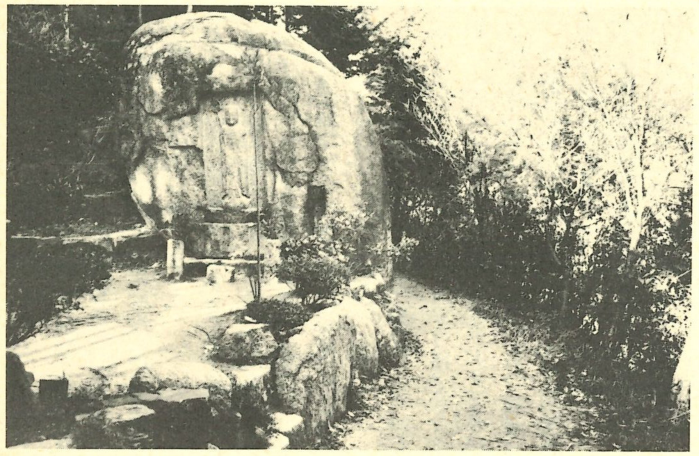
一方で、渡来者がいる。具体的には大陸、半島からの帰化人だが、そのすべてを指すわけではない。問題はそのおそはやであって、早い帰化人は選良になり、遅れてやって来た者は、陰にひっそくする。



柳生の刀の鐔（芳徳寺蔵）

例えば、早期にアメリカへ移住した白人のアングロサクソンが選良となり、遅れて移住したイタリア系は、暗黒街を形成せざるをえなかった、というようなものだ。黒人問題もまた、無縁ではないだろう。

この渡来者たちは、技術や芸能をもたらした。金掘り、医薬の技術や歌舞音曲、軽業手品の類など、多種多様にわたるが、公けにとり入れられたもの以外は、集団を作って山にこもり、あるいは諸方を流浪した。



なぜか柳生街道に地蔵が多く遺る……

その典型的なものに、傀儡子がある。もとは遙か西域にあったものと考えねばならないが、大江匡房の『傀儡記』によれば、

「傀儡子ハ定居無ク、当家無シ。氈盧氈帳、水草ヲ逐イ、以テ移従ス。スコブル北狄ノ俗ニ類ス」

というわけで、丸天井のテントを張り、あちらこちらを流浪した。剣を投げ、マリをもてあそび、木偶を舞わし、砂石を金銭に変え、草木を鳥獣に化してみせたりしたそうだ。

やがて、それぞれ定住し、住民とないまぜになっていって、その奇怪な風俗は消えるが、形を変えた流浪の技芸集団は、次々と現れてあとを絶たない。陽の下を流浪して歩くのもまた、ほかならぬ〝陰〟の暮らしなのだった。

伊賀忍者の生態

これらの系譜を、もっとも具体的なかたちで示すものの一つは、いわゆる〝忍者〟だろう。忍術そのものは、必要に応じどこにでも発生したが、『万川集海』ほか、体系的忍術書が編まれたことでもわかるように、一つの職能にまで高められたのは、伊賀者、甲賀者をおいてない。

伊賀はたかだか八里四方の小国だが、東は鈴鹿、西は笠置、北は信楽、南は布引、室生というふうに、ぐるりと山にとり囲まれている。いくつかの険しい峠が、他国との関門になっていて、国そのものが秘蔵である。

大和、近江、伊勢、どこへでも出ることができ、京都へは遠くもなく、近すぎるということもない。だから上下する軍勢の通路になり、中央からの敗残者が亡命し、潜居し、再起を期するのに都合のいい位置だった。

国人・土豪は、そんなところでひしめくように割拠していた。『三国地誌』に見える砦や館跡は、計二百六、七十にもおよぶ。かなりの密度だが、これら諸豪は、互いに抗争を繰り返し、しかし外敵や国主に対するときは団結して反抗する。だから国主は居着かず、ふたたび抗争を始める、というあんばいだ。

彼らの日々の暮らしはこうである。

「平常、未明より午ごろまで、午後から日暮れまで、農・工・商の仕事に精出し、武芸弓馬の道を研究したが、ことに古来の伊賀の遺風というわけで、細作・密諜の通力を相伝し、いかなる要害といえども、忍び込めないということはなかった。他国でも、これら伊賀者を忍びと称して、重宝した。」（『伊乱記』）

ここに出てくる細作・密諜が忍術である。つまり、諸豪間の抗争がはからずも忍術という技を生んだわけだが、日ごろはちゃんと家業についている。国主がいなくて、そんな社会を作るのは、一種の自治体といっていい。実際、国中の才智ある人物十二人を選出し、理非を評議した時代もある。

戦国のころ、伊賀には服部保長、藤林長門、百地丹波という三人の上忍がいたといわれる。上忍というのは「人ノ知ルコトナクシテ、功者

ナル者」(『万川集海』)で、彼らがそれぞれ北部、中部、南部を差配していた。

その下には下忍がいた。平時には小作人の意味での下人であり、兵農一致の暮らしをしていたものと思われる。そして求めに応じ、近隣諸国へ出動して、忍び働きをした。

ところで、これら上忍三家とも服部氏である。服部氏は伊賀の大姓、大族で、呉服部・漢服部の渡来に始まる諸蕃系と、熯之速日命十二世の孫を祖とする天神系が、混然として一系統のようになって広がったものである。

「庶疏、盛りに盛りて、府内に蔓延す」(『伊乱記』)というが、その盛大さを示すものは、俗に「クロトウ祭り」と称する伊賀一ノ宮敢国神社の祭礼だろう。十二月の初卯の日、服部川原にお旅屋が設けられ、神輿が出る。この神事を勤めるのは、服部氏族にかぎられていたという。費用は千石もかかるので、「苦労当祭り」という字を当てるが、参加者はみな黒装束といういでたちなので、「黒党祭り」とも書く。

いずれにしても、服部氏の勢威をしのばすが、この神社の主神はいま大彦命とされているものの、中世の記録では、小彦名命と金山比咩命が祭神である。両神は服部氏の祖神である。小彦名は養蚕、造酒をつかさどり、金山比咩は鉱山をつかさどる。

いずれも外来神だが、この神をかつぐことにある暗示を与える。機織と採鉱である。いわば伝来の文明である。水銀の採掘から錬金、錬丹の法も伝わっていたろうし、火薬の製造、使用、つまりドロンドロンの用法など、もっとも早く会得していたに違いない。

服部氏はまた、歌舞音曲も差配した。織物をあつかう服部統率者は、酒君という所伝があるが、酒君は秦氏であり、散楽から昇華した能楽は、酒君の子孫、秦ノ河勝直系のもの(『風姿花伝』)だといってある。

観世も服部氏だが、おもしろいことに、観阿弥が楠木正成の甥に当たるらしい伝承がある。正成自身、出自不明の人物で、建武期に突然、登場する。顕われた歴史とは別個に、陰がしだいに広まっていると思わねばならない。

忍者の出世

天正九年(一五八一)の九月、信長は伊賀に攻め込んだ。二年前に信雄が攻め、伊賀諸豪の忍者的防戦に敗退しているので、こんどは面妖な輩を根絶やしにすべし、といって、四万四千の大軍を差し向けた。

「神社仏閣を焼き払い、僧俗男女を弁えず殺害」(『伊乱記』)というしだいで、ほとんど焼土殺戮だった。

服部宗家を名乗る服部保長や伜の半蔵正成は、早いうちに伊賀を出て、三河の徳川氏に仕えていたが、在地の藤林、百地両氏をはじめ、諸豪のほとんどが滅んだ。生き残った者も、ようやく国外に脱れて四散した。

それらがぼつぼつ戻って、焦土にひそみはじめた翌天正十年六月、本能寺の変が起こった。ときに家康はわずかな供まわりをつれ、堺にいた。戦さの常で、野盗山賊が蜂起していたし、ぐずぐずすると明智の反乱勢が迫る恐れがあった。

家康艱難の第一、といわれる難儀だったが、供の中に半蔵がいた。半蔵は伊賀衆や甲賀衆を招集し、一行を先導して、無事三河に帰ることができた。

「このおり、伊賀路まで御供せし輩は、のちの召出されて直参となり、加太越えまで供奉し、半途より帰京せし二百人のものどもは、服部半蔵に属せられ、伊賀同心とて諸隊に配せられしなり」(『徳川実紀』)

というわけで、これが伊賀者、甲賀者の由緒である。

甲賀も伊賀も同じように、入り組んだ山地である。そこに住む武士団はまた、「郡中惣」と称する一種の共和体制を作っていた。領主六角氏はこれを認め、介入はしない。そのかわり、万一の時甲賀武士団は、六角氏に協力するというものである。長享中の鈎の陣では、神変奇異の働きをして、天下に名を上げている。

こうして彼ら伊賀者、甲賀者は、与力・同心として徳川氏の一組織に組み入れられた。むろん、彼らのもつ特殊技能を期待してのことだったが、軽輩ながら武士として世に顕われるとともに、その働きは止み、技能も消える。やがて彼ら本来の陰の仕事は、紀伊系統の〝お庭番〟にとってかわられることになる。これがはたして〝陽の目を見る〟結果であったかどうか、わからない。

(作家)

重兵衛三巌

大坪指方

徳川将軍兵法師範家であった東京柳生家に伝わる、数百点の資料の中に、紺色金模様ちらしの薄い布表紙で、『武蔵野』と題した本がある。

慶安三年(一六五〇)巳丑七月朔日に歿した柳生重兵衛の真筆で、菅原三巌と署名爪印がある。三百三十年前、四十四歳でこの世を去る九か月前に書いたものと思えぬほど生々した感じで、

「むさし野に、折りへい花はえ羅あれど、露ほくておられない。

童しきたとへ物語なから、ひそかにおもふ心にかない侍りつる此書を武蔵野と号。御尋に随 捧げ奉る留書」

から始まり、新陰流武道の心法(理論)、刀法(技術)の解説から、禅の境地に入り、

「揆云父母懐胎ノ時、チヤツト一滴ノツユヲウケテヨリ、ハヤ身モ心モ生クルモノヨ、タトエバ袖ノ上ニツユカアレバ、月ノウツリ、草ノ上ニツユカアレバ、チヤツト月ノウツル如クヨ、……父母未生以前面目弁本分也。下語月白風清コンポンニ至ツテハナンニモナイトミタ処ガ面目ヨ。ナンノ道理モナキ也」

と結んでいる。

宮本二天玄信が、老齢になってから、

理もわけも尽してあとは円明を
　知らぬ昔の無一物なり

と、詠じたのに比して興味深いが、この三巌は何かと問題?の多い、柳生一族の中でも、いちばん広く世に知られながら、なぞの多い生涯を送っているので、いささかその足跡を調べてみよう。

柳生重兵衛三巌、初名七郎、祖父石舟斎宗巌が歿した翌年、慶長十二年(一六〇七)に誕生、父は又右衛門宗矩(後の但馬守)、母は松下石見守重綱の女、嫡男だが柳生藩記録『玉栄拾遺』には

「弱冠ニシテ天資甚梟雄、早ク新陰流ノ術ニ達シ、其書ヲ述作シ玉フ。」

〝甚梟雄〟すなわち悪く秀でていた、とは恐れ入るが、とにかく幼少から柳生の山河を暴れ回っていたけれど、文筆の才があり、相当理屈屋でもあったろう。

父宗矩が不在がちな柳生には、幸い石舟斎以来の、優秀な門弟たちが居って、指導に当たったので、メキメキ上達し、十歳の時出府して後の三代家光将軍に拝謁、やがて元和五年には十三歳で、正式に出仕し武道のお相手となった。家光は三歳の年長である。

今まで大和の山峡に、自由に飛び回っていたのが、窮屈なお城づとめの上、わがままな若殿の下での生活は、堪えられぬ苦しさ、この御奉公も、寛永三年まで八年間続き、様々お暇が出た。それから先については



柳生三巌肖像(国立国会図書館蔵)

「一旦有ㇾ故而相模国小田原ニ謫居シ玉ヒ、尚諸州ヲ経歴アリト云。寛永年中父君ノ領地武州八幡山ノ辺山賊アッテ旅客ノ愁ヲナス。公彼土ニ到、微服独歩シ、賊徒ヲ懲シメ玉フ。亦山城国梅谷ノ賊ヲ逐玉フモ同時ノ談也。其他諸邦里巷ノ説アリトイヘトモ、未ㇾ見二其証一、故略シテ不ㇾ載」

と、何となく諸国漫遊を示唆し、山賊退治の武勇談など、芝居話のようだが、実は父宗矩の指令で、すでに動き出していたと思われる。

この辺で三巖の隻眼説に触れて置く。父の宗矩像は三巖みずから描いて、大徳寺の天祐和尚の賛を乞い、現在東京の柳生家にあるが、三巖の像は少なく、明治四十一年発刊の『好古類纂』の第一冊に見い出しただけであったけれど、何と両眼明らかに描かれている。

巷説には父宗矩が投げた礫に、片眼を打たれたが、直ちに一方を蓋ったと言うが、両眼盲せば敵に当することができぬ、恐らく講談師などの創作ではあるまいか。

さて、『武蔵野』と同じく、三巖の著作に有名な『月之抄』がある。

これは大作で寛永十九年（一六四二）三月に完成しているが、紙数スミツキ百四十一枚と自書（芳徳寺本）している。序文に曰く

「寛永三年拾月日、さることありて、君の御前を退テ、私ならず山にわけ入ぬれば、みつから世をのかると人は云めれと、物うき山のすまい、柴の庵りの風のみあれて、かけひならては、つゆ音ノウモノナシ。」

普通に読んでいると、行いすました世捨人よろしくの姿を思わせるが、その引き込み先が小田原である。当時の城主は宗矩と三代家光の傅育に当たった、春日局取り立ての、稲葉家が城主であり、関東防備の最重要基地で、箱根山を押える場所であった。すなわち徳川初期に情報関係に当たった柳生家の動きを、裏付けする史料が、ほかに『東照宮御実紀』付録巻十にある。

「九月十三日岐阜につかせ給ひ（家康のこと）、翌朝御出立ありて御陣押の様を敵に見せまじとて、大垣の方をよきて、長柄川呂久川を渡りこし、西の保山をへて、赤坂の後なる虚空蔵山と南禅寺山との間なる余地越を通らせ給ふとき、諸大名途中まで御出迎ひて謁し奉る。この時お輿のうちより南宮山（毛利軍陣地）につづきし敵のさまを御覧じ、御輿の傾く程御頭を出され、御またたきもなく見つめぐらしておわせしに、柳生又右衛門宗矩近よりて、此度御上意めでたし。いづれもこれにさぶらふと申せば、はじめて御心づかれ、おの〳〵大義に思し召さる。明日早々戦はしむべし。」

まさに天下分け目の関ケ原戦の前夜である。徳川家康下野小山引きかえしのおり、柳生石舟斎宛、筒井と組んで西軍の、後方でゲリラ戦を行えとの指令を故郷へ持参して、すぐ戻り家康の輿側に在って、諸将の着到を知らせている宗矩の、張り切った姿が目に浮かぶ。

このころからすでに柳生の任務は決まっていたのであろう。

平時は二代将軍秀忠の武道師範として、黙々剣の道に隠れ、やがて大坂の陣の火蓋が切られるや、夏の陣のごとき秀忠将軍危急と見て、はじめて、新陰流の奥儀をあらわし、大坂方の勇士七人を斬り伏せた事が、『徳川実紀』に書き残されている。

柳生重兵衛三巖が、本格的に父の手足となって働き出したころ、宗矩は徳川政府の初代惣目付（後の大名目付・大目付）に任ぜられた。

時に寛永九年（一六三二）十二月七日。

かつて幕末の名士勝海舟が嘆じて、

「柳生宗矩は大したものだと、密かに驚いている。段々調べても、証跡が無い……暴くれで誰の手にもかからぬ三代将軍を、子供のやうに扱った手風がよくわかる。」

徳川初期の幕府の体制造りに、どれほど陰の力を要し、また大きな犠牲が出たか。

大和柳生の芳徳寺内、六百年の祖廟の裏を樹叢の中に下りた辺り、大きな一基の石塔がある。

昔から〃一ツ墓〃と称し、魔所とて村人も近づかぬ場所、その塔に数多くの人名が刻み込まれてあると言う。

三巖は佯狂となって、諸国を漫遊したと伝えられている。

但馬守宗矩は、上泉武蔵守秀綱の来柳以来、新陰〃無刀の位〃すなわち不殺の剣、活人刀の理想境を夢みて、あらゆる苦難の道を突破し



柳生宗冬、ぼうふらを見て悟るの図（柳生家蔵）

て、新しい武家政権確立に、すべてを捧げた。

長男三巖はもちろん、柳営第一の美男であり、英敏といわれた二男刑部少輔友矩も、故あって柳生に引きもどされ、夭折する運命となった。

肉親はとにかく、数多い家臣、伊賀、甲賀の人々も、再び故郷の土を踏めなかった。

宗矩の家臣は全国の大名に懇望されて、仕官して行った。これは先方は保身のためであり、当方も情報収集活動に都合がよろしいからである。

この連絡にあたった連中も戻らぬこともある。

そのすべての犠牲者の供養塔が、〃一ツ墓〃ではなかろうか。

正保三年（一六四六）三月二十六日、柳生但馬守宗矩逝去。行年七十六歳。その前見舞のために来邸された三代将軍家光に、病床からの遺言があった。

「家禄、武具悉く返納し奉る。只父石舟斎菩提の為に建立の芳徳寺に、旧領柳生下の地二百石を付して、香華料と致し度く、あとは御心の儘にと。」

家光は希望のごとく、芳徳寺二百石、三巖に八千三百石、弟主膳宗冬（後飛騨守）に四千石を賜り、遺領一万二千五百石は、欠ける事なく、また武具はいちおう収公し、再び下賜の形を取って、柳生家に贈られた。また特に宗矩は贈従四位の栄に浴した。

家督を継いだ三巖は人柄が変わった。

「父君在日、公強勇絶倫、家従匇巖畏ス。家秩を継承アッテ寛仁也。政事質直、家法純一ニシテ、奴婢ニ至マデ終世嘗テ罪ヲ獲タル者ナシト云。」

それから五年目、慶安三年（一六五〇）庚寅三月三十一日、柳生を出た三巖は、側近数人を従えて、笠置を通ったか、飛鳥路へ抜けたか、木津川畔にそって上流へ、山城国（京都府）相楽郡北大河原村の弓ケ渕付近で、鷹狩中に突然発病、急逝した。

直ちに奈良から馳せつけた、奉行中坊長兵衛が検死の上、柳生に移し中宮寺裏山に埋葬したと記録されている。

この丘は、かつて三巖が秘命を帯びて離郷の日、もし還らぬことあれば、わが墓標にせよと、植えた杉の木のある場所、後にこの杉は重兵衛杉と称され、村人の愛護の下に生育し、亭々たる巨木となって、柳生の表徴といわれていたが、惜しくも近年枯れた。

三巖の死因について諸説があって、病気、狙撃、毒害など、いずれも不明。

今は亡き柳生芳徳寺の橋本定芳老師曰く、

「晩年の重兵衛先生は、剣哲とも申すべきか、禅の悟道の境地になられたのよ。いくら天下のためとはいえ、数多い大名を潰して、人の恨みを購われたからのう。しかしだいたい世の中も治まり、おれの仕事も一段落じゃ、よい加減にそろそろ休ませてもらおうかい、位のところで、もし毒茶をすすめられたとしても、知っておって呑んだじゃろうなあ。おれはその心に惚れて、この柳生に骨を埋める気になったのだ」、と。

三巖の夫人は、大和の秋篠氏（今の秋篠寺付近の豪族であろう）の娘、女子二人を生んだ。長女松は旗本跡部民部に嫁し、次女は渡辺久蔵に嫁し、この方は寡婦となって戻り、石川氏を養って、渡辺家を継がしたという。

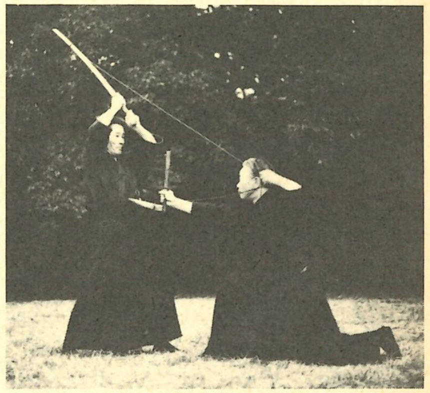
伝説によれば、三巖が鹿児島に潜入したおり、女子二人を生ませたというが不明。ただし父宗矩は島津光久と親しく、刀を贈られたが、金に困って売却したところ、島津家が買い戻して、また贈り直した珍談があるほど、懇親であったのは事実である。（柳生正木坂剣禅道場師範）

騎士道と武士道

木村尚三郎

日本とヨーロッパは、互いに地球の反対側に位置しながら、不思議な共通性を持っている。城の性格というか、機能がよく似ているのである。戦国時代ないし江戸初期の十六世紀、十七世紀初めに建てられた大名の城、つまり姫路城、松本城その他、今日名城とされるものは、平城といわれ、それまでの山城と対比されるが、この平城はその名の通り平地の、交通の要衝地に建てられている。本丸からは、秋ならば黄金の穂波が見える地点であり、しかも足下に城下町を抱えている。当時の城はつまり武装された県庁であるといえる。

この平城と同じく、城主すなわち地方的な政治権力者が常時住まいとし、城を中心とした一円内支払権を行使して、農村の防衛と秩序維持に当たった城は、世界ひろしといえども、西ヨーロッパの十一、二、三世紀にしか出現しない。つまり時間的なずれはあるが、西ヨーロッパと日本だけが、堅固な城によって防衛するに値する、組織的な農村社会を形づくったということになる。その他の時代と地域にある城は、古代メソポタミア以来の都市の城壁、万里の長城のような城壁の連なり、西部劇に出てくる一時的な軍事施設としての砦、インドの王城のような権力者だけを守る城などである。



日本古武道の１つ、一心流鎖鎌術
（演武　神之田常盛・米野光太郎氏）

封建制（封建的主従関係）も武士道・騎士道も、これまた日本にヨーロッパに特有の発達をとげた、その共通性と相違点について考えてみよう。

ヨーロッパの騎士道といっても、別に明文化されたものがあったわけではない。ただ、十二世紀フランスの代表的な武勲詩（シャンソン・ド・ジェスト）である『ロランの歌』は、戦場の倫理としての初期騎士道を表したものとして有名である。この『ロランの歌』の校訂、ならびに、『騎士道』という著書で知られるレオン・ゴーティエ（一八三二〜九七年）は、封建社会の騎士が守るべきであった初期騎士道を、つぎの十か條にまとめている。

一、すべて教会の教えるところを信じ、その命ずるところに従え。
二、教会を守れ。
三、すべての弱い者に思いをいたし、その保護者となれ。
四、生まれた国を愛すべし。
五、敵を前にひるんではならない。
六、異教徒は、徹底的に殲滅せよ。
七、主君に対する封建的諸義務は、それが神の法に反しないかぎり、正しく果たすべし。
八、嘘をついてはならない。自分の言った言葉に誠実であれ。
九、すべての人に自由寛大であれ。
十、つねに、またどこにおいても、不正と悪を憎む正義と善の戦士であれ。

この十か條のうち、敵に対してひるまず、正々堂々と戦う、などは日本の武士道とも共通する。というより、これはおよそ戦いに生きる為であればいつどこででも妥当する、普遍的な戦士の倫理というべきであろう。

ところが、ヨーロッパの騎士と日本の武士とのあいだには、一つ決定的な相違があった。わが国には「忠臣は二君にまみえず」といった単旋律的な生き方が良しとされ、今日でも企業につとめるサラリーマンが、サイドワークを営むと、白い眼で見られたりする。副業に投じるエネルギー分だけ、会社に貢献していない、と見

倣されるのである。

ところがヨーロッパ封建社会での騎士は、主君が何人もいるのが当り前であった。数人から数十人、ときには百何十人もの主君をとった例



手柄をたてて出世する「武芸高名出世双六」（都立中央図書館蔵）

があることが報告されている。つまり主従関係は、主従双方にとっての相互安全保障、平和條約の関係であり、したがってその数は多ければ多いほど、それぞれの騎士の安全度が高まるとされた。もっともこれは、城を構えるような貴族、上級の騎士のことで、館しか持てないような弱小平騎士は、主君が一人とか二人の場合が多かった。

さて、主君を何人も取るのは結構として、主君同士が戦争を始めたらどうなるか。どちらに味方すべきであろうか。これについて決まりはない。しかしアメリカとイランが緊張状態におかれて日本政府がオロオロする、というような状態は、ヨーロッパの場合、すでに一千年近くものあいだ繰り返し経験してきたところであった。

戦い合う主君のうち、より親しいほうに味方する場合もあったろうし、より早く主従関係を結んだ方に味方する場合もあっただろう。しかし個々の場合に働いている最小限の配慮は、「バランスをとる」ということであった。そしてまたそれが「正義」とされたのであった。

主君のうち片方が強く、片方が弱い場合、強いほうに味方したほうが、自分にとって当面有利であることは間違いがない。しかしその結果、強い者がますます強くなっては、同国の貴族たちが圧迫を受け、自由独立の状態を保てなくなるから、何かの機会に結集してその強者を倒すという事態が起こりかねない。そうすれば、強者と一蓮托生の自分もやられてしまう。これを考えれば弱いほうがもし邪までないのなら、こちらに味方したほうが得だ、と一人一人が計算するのがヨーロッパである。

つまり、自分の生き方を主張するには他人の

生き方をも認めねばならず、相互の生き方が認め合えるためには、権力のバランスがとれていなくてはならない。これが彼らのいう「正義」であり、先述した騎士道第一條の、教会の言うことに反しない限り、この観点が貫かれた。わが国の心情的な武士道、つまり主従が戦場にあっても平時においてもつねに一体化することを良しとする態度にくらべれば、おそろしくドライであり、国際政治的な感覚である。

日本の代表的な武士道書に、『葉隠』がある。十八世紀のはじめ、佐賀藩士の山本常朝が、今様にいえば「脱サラ」し隠棲してから筆録させたもので、読んでみるとじつに興味深い。

さいきんの家来たちは眼のつけどころが大変に低い、まるで巾着切り（きんちゃく）のような眼つきをしている……。昔は脈にも男女の違いがあったものだが、いまは世も末となり、男の気質が衰えて女同様になってしまったものらしく、いかにも女脈に違いないと思われるものが多く、あれは確かに男だと思われるものは少ない……。奉公人には、急だらり、だらり急、急々、だらりだらりの四つの型がある。急だらりは呑みこみは早いが用事を済ませるのに時間がかかる者、だらり急はその反対、急々は呑みこみも用を済ませるのも早い者だが、大半は「だらりだらり」型である。

これらの指摘は、何か現代日本の批判そのものでもあるようで、江戸後期いらい日本人の体質が、じっさいはほとんど変わっていないことを思わせる。

しかしながらこの『葉隠』には、西欧的な生き方と共通する点も多く見受けられる。もっとも有名な巻頭の「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり」も、ただ死ね、死ね、といっているのではない。武士たる者はいつ死ぬことになるかわからぬから、今日を最高に生きよ、と説いているのである。

そのためにはつねに身じまいを正す必要があり、姿・形・態度が立派であるよう修行せねばならない。というわけで、著者の山本常朝は、自分が若いときはいつも鏡を見て顔付きを直していた話を紹介している。ヨーロッパ人が「顔じゃないよ心だよ」とは言わず、心の通わせえぬ戦う人として、つねに自分を崩さずキチンとしているのと共通しているといえよう。

話をするときは相手の目を見ながら話せ、うつむいて話をするのは不用である……。酒の座ではとくに気を抜くことなく、思いがけぬ出来事が発生してもすぐ対処できるように心がけるべきである……。宴席で酒を断るときは、「身体に障り（さわ）ます」といって、盃の酒を二、三度捨てて見せよ……。酒盛はきびしくなければならない。大ていの連中はただ飲んでいるだけだが、仕舞いをよくしてこそ酒である……。身分の高い人などに招ばれたときは、重い気持で行くと席が落ちつかないものだ。とてもありがたいことだ、きっと面白いことがあるぞと思いこんで行くがよい……。武士は、その場での一言が大切である。

これらの教えはそのまま、ヨーロッパ人のパーティの思想であり、言葉に生きる日常の生活態度である。武士道は軽率なくらいガムシャラに突き進む覚悟が必要だ、武士道とは死にもの狂いそのものである、とも述べており、これまたヨーロッパ中世の騎士道精神と共通して面白い。つまりは、猪突猛進ということである。

にもかかわらず大きな違いは、やはり主君に仕える態度である。ひたすら主君への御奉公のみを考え、衆道（しゅうどう）（男色）はほどほどにせよ、幽鬼のごとくなるまで主君のことを思えという、すさまじい許りの忠誠心は、ヨーロッパには存在しない。葉隠ないし日本の武士道が狂的な心情主義を秘めていると、欧米人に見られる所以である。それに、ヨーロッパにも英雄・豪傑は数多くいるが、日本のようにひたすら剣に生き、剣そのものに自らの人生を託す剣士、剣豪といった存在は珍しい。

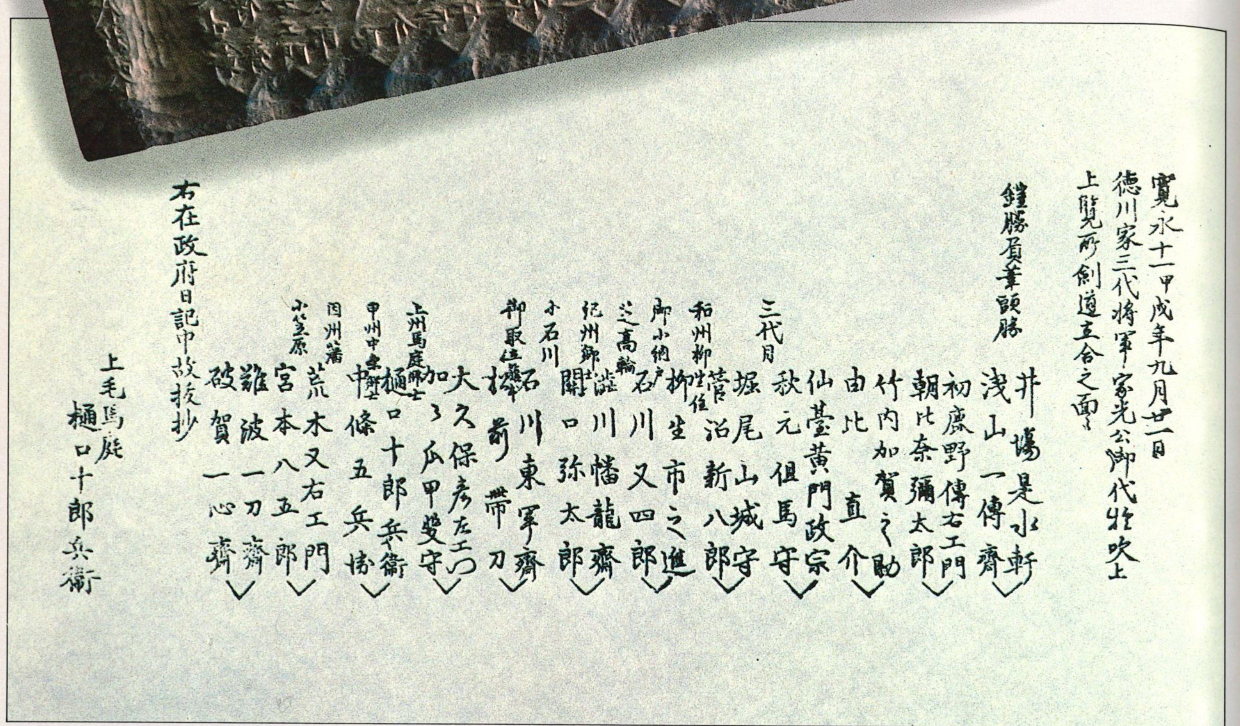
十四、十五世紀以降、ヨーロッパ各地の貴族が政治的な独立性を弱めて国王・大諸侯の官廷に伺候するようになると、騎士道もまた、戦場の倫理から官廷儀礼としての愛の騎士道に変化する。官廷で貴族がひたすら女性（貴婦人）に奉仕する態度をとるのはマゾヒズム的で、十六、十七世紀の魔女狩りに見られるサディズムとともに、男が女に対し平静でいられないヨーロッパ人の特性が露わに表現されている。

ヨーロッパの騎士道が脂身の沢山入った濃厚ポタージュとすれば、わが国の武士道は、お茶漬けの味というべきであろうか。

（東京大学教授）

上毛馬庭の樋口家に遺る、寛永11年、家光公上覧の「剣道立合之面々」の版木（樋口家蔵）




寛永十一甲戌年九月廿一日
徳川家三代将軍家光公御代於吹上
上覧所剣道立合之面々
鎗勝負筆頭勝
井場是水軒
浅山一傳齋
初鹿野傳右エ門
朝比奈彌太郎
竹内加賀之助
由比直介
仙臺黄門政宗
秋元但馬守
三代目 堀尾山城守
菅沼新八郎
和州柳生住 柳生市之進
御小納戸 石川又四郎
芝高輪 諸川幡龍齋
紀州御 關口弥太郎
小石川 石川東軍齋
御取立 梶前帯刀
上州馬庭郷士 樋口十郎兵衛
大久保彦左エ門
加々爪甲斐守
甲州中条郷士 中條五兵衛
因州藩 荒木又右エ門
小笠原 宮本八五郎
難波一刀齋
破賀一心齋
右在政府日記中故抜抄
上毛馬庭
樋口十郎兵衛

おなじみ寛永御前試合

日本晴れの空に、大太鼓の音高々と轟き渡る江戸城吹上庭苑に、続々と集まって来る武芸自慢の面々。

おなじみ講談『寛永御前試合』は、古今無双の武芸者連が、一堂に会して試合う一大壮挙と言うべきであったが……。

時は尚武の将軍三代家光公の御代。寛永十五年、渋川伴五郎なる武芸者が、父蟠龍軒の仇をうったことを伝え聞きし家光公、武道ますます隆盛なるを嘉し（よみ）給い、この際、名人上手と謳（うた）われる高名の武芸者を集め試合を催したなら、さぞや武道の奨励となり、前代未聞の壮観を呈し、と仰せ出されたのが御前試合の発端。上毛馬庭の樋口家に、寛永御前試合の版木が遺る。

さて、御前試合の虚実は如何、というのが本篇の主題。



古今の武芸者が勢ぞろいする「本朝武術名誉鏡」（綿谷雪氏蔵）

『陸軍歴史』に記載された…

古来、香取の飯篠長威斎家直をはじめとして、愛洲移香斎久忠、松本備前守政信、塚原卜伝高幹、上泉伊勢守信綱などの剣聖・剣豪と呼ばれる武芸者が出た。その後、柳生石舟斎宗厳や伊藤一刀斎、小野次郎右衛門忠明から宮本無三四、荒木又右衛門など数なす名だたる武芸者が続くが、これらすべての武芸者のうち、いったいだれが一番強いのかという庶民の関心は、いつの時代でも同じであった。

ところが、明治二十三年、陸軍省の懇請により、勝海舟を中心に旧幕臣が編集した『陸軍歴史』に「三代将軍家光公御代寛永十一年甲戌年九月二十二日於吹上上覧所剣道立合之面々左之通」と前置きして、十二組の勝負付が記された。寛永御前試合の記録が歴史書に掲載されたのは『陸軍歴史』が唯一の例である。

しかし、武芸者の荒唐無稽の組み合わせは、正史もどきに扱われた寛永御前試合の真憑性を疑わしめる契機となった。



寛永御前試合が行われたという吹上庭苑は、千鳥ヶ淵対岸の皇居内にある



「千代田之御表・武術上覧」の図を見ると、武術稽古の様子がうかがえる（渡辺一郎氏蔵）

武道最盛の御世

寛永という時代は、どのような時代であったのだろうか。

元和偃武と幕府の諸藩取り潰しの政策によって浪々の身となった浪人たちは、食を得る手段として、武芸による仕官を求め、自己宣伝をかねた諸国修行の旅に出る風潮にあった。しかし、かえって治安の乱れにつながる恐れが出て、柳生宗矩らの武道哲学の確立により政治的配慮がなされたのである。家光は宗矩を剣道指南役としていたが、武芸を好み、競技的となってゆく武芸試合を幾度か催したほどであった。

家光死後に起きた由井正雪の乱は、浪人に対する大弾圧を呼び、他流試合を禁ずるきっかけとなったが、後に武芸の復興とともに、道場剣法の流行を見、この時、武芸の手本として常に返り見られたのが、家光時代だった。



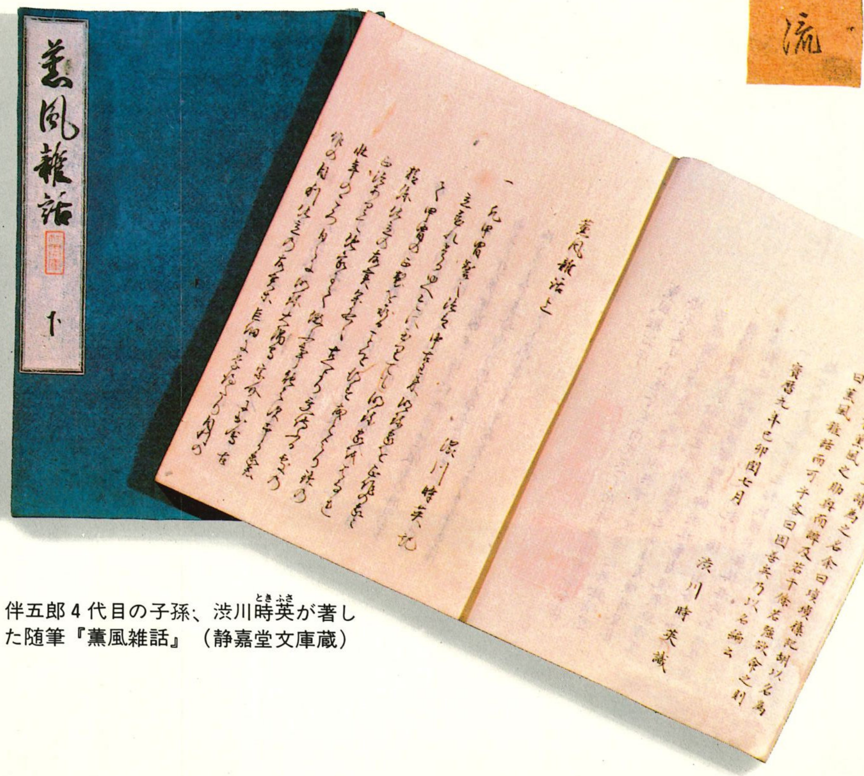
徳川３代将軍家光の肖像（徳川恒孝氏蔵）



武者振りも勇ましい渋川伴五郎（綿谷雪氏蔵）

武芸とは教養なりと…

「柔弱に成長したる輩多く、武芸の稽古を危ながりて勤めず」と、渋川伴五郎四代目子孫渋川時英は、『薫風雑話』の中で武芸のすたれを嘆いた。泰平の世、生花、茶の湯を習い収めて上がりとなる「武芸立身館双六」に見る如く、武術が武士であることの基本ではなくて教養の一つになり下ったのであった。原徳斎は、その著『先哲像伝』で、寛永御前試合の偽作説を唱えたが、家光公の御代、武芸振興の時こそが、御前試合をねつ造するにふさわしい時代であった。



伴五郎4代目の子孫、渋川時英が著した随筆『薫風雑話』（静嘉堂文庫蔵）



剣術のほかに、生花、茶の湯、そろばんなどを身につけて上がりとなる「武芸立身館双六」（都立中央図書館蔵）



原徳斎著『先哲像伝』（国立国会図書館蔵）

寛永御前試合

尾崎秀樹
宝井馬琴

※おざきほつき
文芸評論家　昭和３年台湾台北市生まれ　『大衆文学論』で芸術選奨受賞　文芸家協会常任理事　著書『伝記吉川英治』『生きているユダ』『大衆芸能の神々』

※たからいばきん
講談師　明治36年愛知県生まれ　昭和46年紫綬褒章受章　「寛永三馬術」「加賀騒動」などの講談が十八番　『定本講談名作全集』(講談社)

NHK 西田禮一郎



立川文庫『寛永御前試合』『塚原卜伝』
と大正文庫『宮本武蔵』(足立巻一氏蔵)

大衆の夢を満たす御前試合

講談『寛永御前試合』のクライマックスは、柳生飛驒守宗冬と由井正雪の対決。検分役は大久保彦左衛門となる。これら有名な話の数々も、松平定信が行った寛政の改革の重苦しい雰囲気の中で、文武振興の令達に合わせて、茶坊主たちが悪戯(いたずら)にねつ造したものではないかとみられる。
太平の世のスーパーマンに、大衆は夢や願望を仮託する。講談の世界をはじめ、立川文庫、大正講談など、後世、大衆を楽しませ続けてきた『寛永御前試合』は、荒唐無稽であるがゆえに、大衆の夢と願望を満たしてきたのだと言えよう。



寛永御前試合での宮本武蔵と荒木又右衛門の対決(大正文庫『宮本武蔵』より　足立巻一氏蔵)

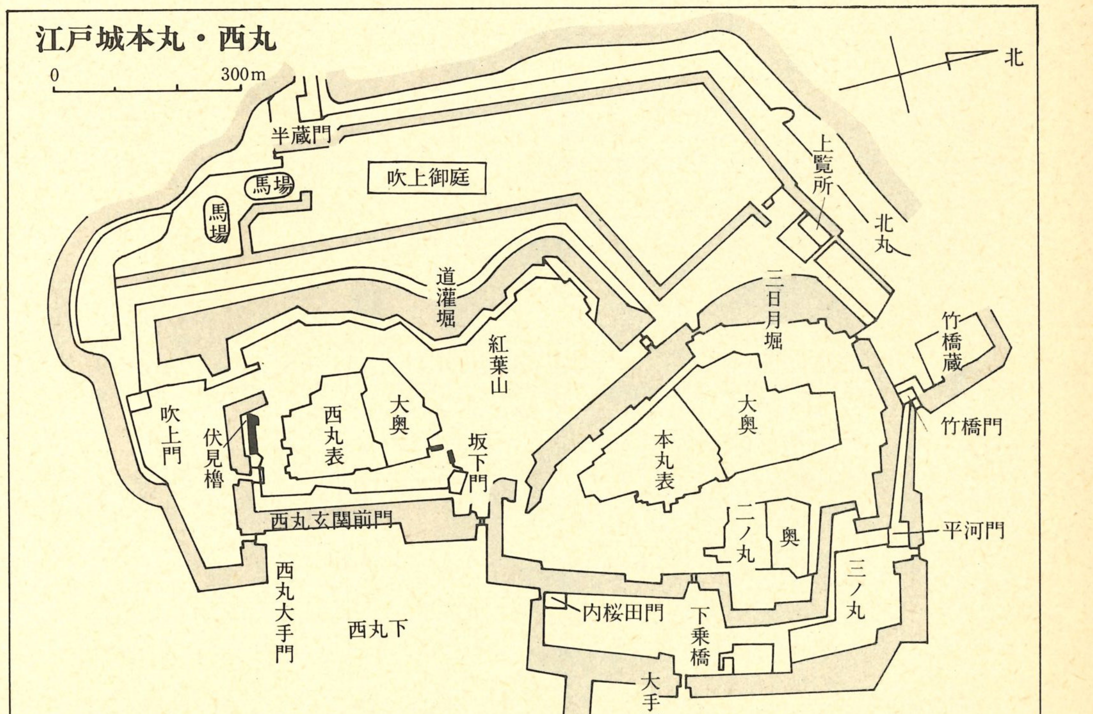
吹上庭前に参集する武芸自慢

そもそも徳川の天下は十五代およそ三百年間にわたって泰平を謳歌したものでございますが、この磐石のごとき土台は実に三代将軍までの間に築き上げられたと言われております。

初代家康公は智謀を以って天下を統一し、二代秀忠公は仁徳を以って下を率い、三代家光公は勇武を以って天下に臨まれました。この智仁勇の三徳備わって徳川の天下は安泰になったことと思われます。就中この家光公の武道奨励に力を用いられたことは大したもので、したがってこの時代には武士はいうまでもなく、百姓町人に至るまで面籠手を担いで道場に通うというありさま。いかに尚武のわが国でも、この時代ほど、武芸の盛んに行われたときはございません……。

さてこの名君家光公がなにゆえに吹上庭前に上覧試合を催せとおおせいだされたかと申しますると、時は寛永十五年の三月十四日、渋川伴五郎という武芸者が、青山六道の辻において、野州烏山の浪人水上六太夫秀虎を討ち取って、父蟠龍軒の恨みを晴らした。それを見届けて参りました大久保彦左衛門が、将軍家御前において、その武者振りの勇ましいありさまをば仔細に申し上げました。家光公はこれをお聞き遊ばして武道のますます隆盛を喜ばれ、この際この時それら名人上手と謳われる高名の武芸者をことごとく一堂に会して盛大なる試合を催したなら、実に前代未聞の壮観であろう。やがては武道の奨励の上に大いなる助けと相成る次第と思召されました。

もっともそのころは名人達人雲のごとく、伊東弥五郎、塚原ト



村井益男著『江戸城』（中公新書）より

伝、浅山一伝斎、羽賀井一心斎のごとく、剣聖の域に達せし元老を始め、若手の渋川伴五郎、樋口十三郎、荒木又右衛門、宮本無三四、また弓術においては日置民部、槍術においては宝蔵院覚禅坊、棒術の鷲津七兵衛、馬術の曲垣平九郎、手裏剣の毛利玄達、その他全国には各流各派の名人勇士いちいちあげるいとまはないほどでございます……。

当日は日本晴れの青空に、轟きわたるのは太鼓の音、高々と響きわたるこの江戸城へぞくぞくとして集まってまいります武芸自慢の人々。

いよいよ寛永御前試合の始まりでございます。

講談の〝御前試合〟の作られ方

―― この御前試合の講談を終わりまでやりますと、時間はどのくらいかかるものでございますか。

宝井 だいたい大ぜいの組み合わせですから、一人の一生涯、どう剣道を修業した、槍を修業したということをやると、二か月や三か月はかかりますから全部で五、六年はかかるんではないですか（笑）。

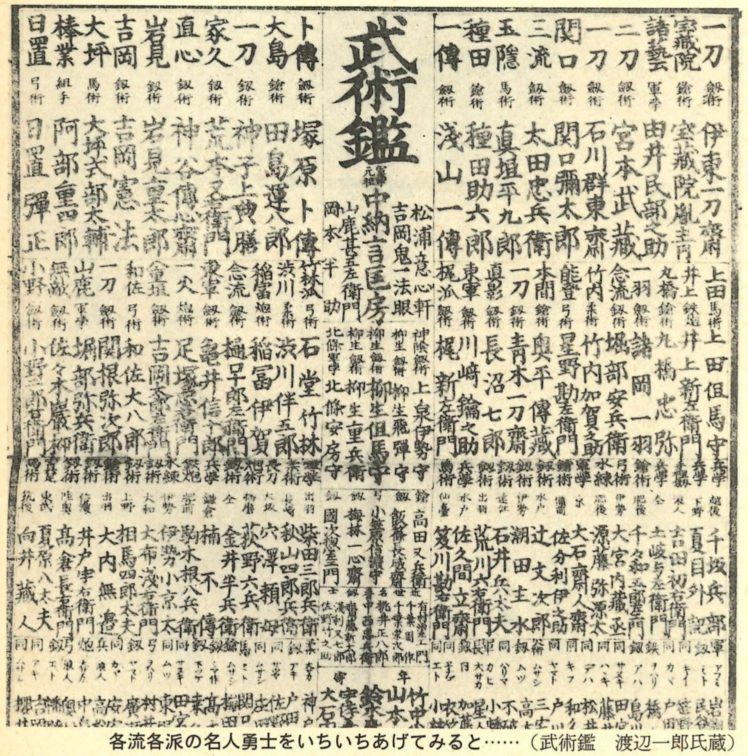
―― なるほど。一つの勝負をやる場合でもその一人の人について詳しく人物描写をやるわけですね。

宝井 そうですね。しかしいよいよ勝負となると、そんな二日も三日もかかりません。一瞬にしてすむのですが、人間の話をずっとしてこないと勝負のおもしろさがわからないわけです。

―― この寛永御前試合が講釈の世界に登場したのはいつごろからでしょうか。

宝井 そうですね、これは私もその最初に立ち会ったわけではない


渋川伴五郎（武者修行英勇双六より　綿谷雪氏蔵）


武術鑑

各流各派の名人勇士をいちいちあげてみると……（武術鑑　渡辺一郎氏蔵）

ですからよくわかりませんが、とにかく寛永以後ですね（笑）。寛永前でないことは間違いないですね（笑）。実際には、恐らく徳川の真ん中以後ではないですか。なにか強い人が出て来て欲しいと思うような一般の望みに乗ってきたのが、こういう勇士豪傑の話ではないかと思います。あれとこれを一ぺん勝負をさしたらどうなるだろう、などという声に応じて生まれて来たのではないかとも思いますね。
これが講談のおもしろい一面で、実際にはありえないことでも、講談だからと安心して受け入れます。もちろんそこは、講釈師の技量にも大いに関係があるわけですが、とにかく聴いている間はなんの疑念もはさまず、話にひきいられて、手に汗をにぎってしまいます。
それに出場選士の銘々伝が、いずれも天下の武芸者のことですから、苦心修行、諸国遍歴、仇討ち助勢、山賊退治、美女に恋慕されるなどの波乱曲折、これだけでもたんのうできるのに、最後は将軍家の御前で晴れの試合を演じるのですから、受けないはずがありません。
寛文のころ、御前試合の講釈が出来た時分には五組の試合であったものが、時代とともにだんだんにふえて七組、十組となり、明治に入ると十五組、三十人の豪傑、名人、達人が腕を競う大がかりなものとなったわけです。
―― そうすると、武芸者の一人一人についても組み合わせも講釈の派によって全部ちがうわけですか。
宝井　これは全部ちがう。ですから、なかには弁慶と清正を一騎打ちさせてくれなんていうような大衆の声があれば、やらせようかというような講釈師も出て来ますね。だから、とにかくめったやたらに強い人が出て来る。するとこんどまた片っ方から強いのが出て来る。そいつとやらせたらどうだろう、というような夢が実現させたのではないかと思うんですね。
―― それでは、終わりまでやったら五、六年かかるのはあたりまえですね。
宝井　いや、五年や六年ですまない場合があります（笑）。人気に乗ってくれれば話を伸ばしますから。剣術の修行だといって何年でも修行させていますからね。
―― 講談による寛永御前試合の組み合わせを見ましても、大久保彦左衛門が出て来たり、宮本武蔵が出て来たり、それから由井正雪が出て来たりして、これだけ見てもいささか眉ツバではないかという気がしないでもありませんね。はたしてこの寛永御前試合というのは史実としてほんとうにあったのか、あったとすればいかなる試合であったのかということですね。

講談『寛永御前試合』組み合わせ

結果	選士	選士
負	竹内加賀之助	渋川伴五郎（負）
合打	大久保彦左衛門	加賀爪甲斐守
負	寺西閑心（負）	関口弥太郎
合打	浅山一伝斎	伊庭如水軒
合打	樋口十三郎	穴沢主殿助
負	羽賀井一心斎（負）	磯端伴蔵
負	山田真竜軒	井伊直人（負）
合打	荒木又右衛門	宮本無三四
負	覚禅坊胤栄	大蔵院宮内（負）
合打	丸目蔵人	疋田文五郎
負	大橋茂右衛門	大崎玄蕃（負）
負	柳生飛騨守	由井民部之助（負）


大正文庫の口絵に描かれた宮本武蔵
（足立巻一氏蔵）

正史『陸軍歴史』に登場

『陸軍歴史』は、天保十一年から明治元年に至る幕府の陸軍建設に関する重要記録を集めたものである。
明治二十三年、陸軍省の懇請により、勝海舟を中心に旧幕臣が編集したものである。
陸軍改制の端緒、砲銃鋳造、沿海警備、講武所創設、陸軍編制などの綱目からなり全三十巻。布令、告達、建白書類は、いっさい原文により、全文を採録している。
この中の巻二十八に、慶応四年正月、遊撃隊当番所が発令した撓の長さや稽古槍の丹甫の大きさ等の制式に関する記事に続いて、前後の関係もなく、

「撃剣の技は往時我邦林の最崇尚する処にして上侯伯の貴より下擔石の士に至る迄皆之を研磨せざるはなし　家光将軍には殊に比技を好まれ柳生家を師とし　日夕練究せられたりと　亦以て当時其奨励の厚を想ふべし、
今該時の日記を得たれば左に録す
三代将軍家光公御代寛永十一甲戌年九月二十二日於吹上上覧所剣道立合之面々左之通」
という前置きで、十二組の勝負付が記されている。
いわゆる歴史書にあらわれる寛永御前試合の記録としては、この『陸軍歴史』は唯一のものである。

鎧勝負

下谷御徒町住人 井場泉水軒
負 浅山一伝斎

初鹿野伝右衛門
負 朝日奈弥太郎

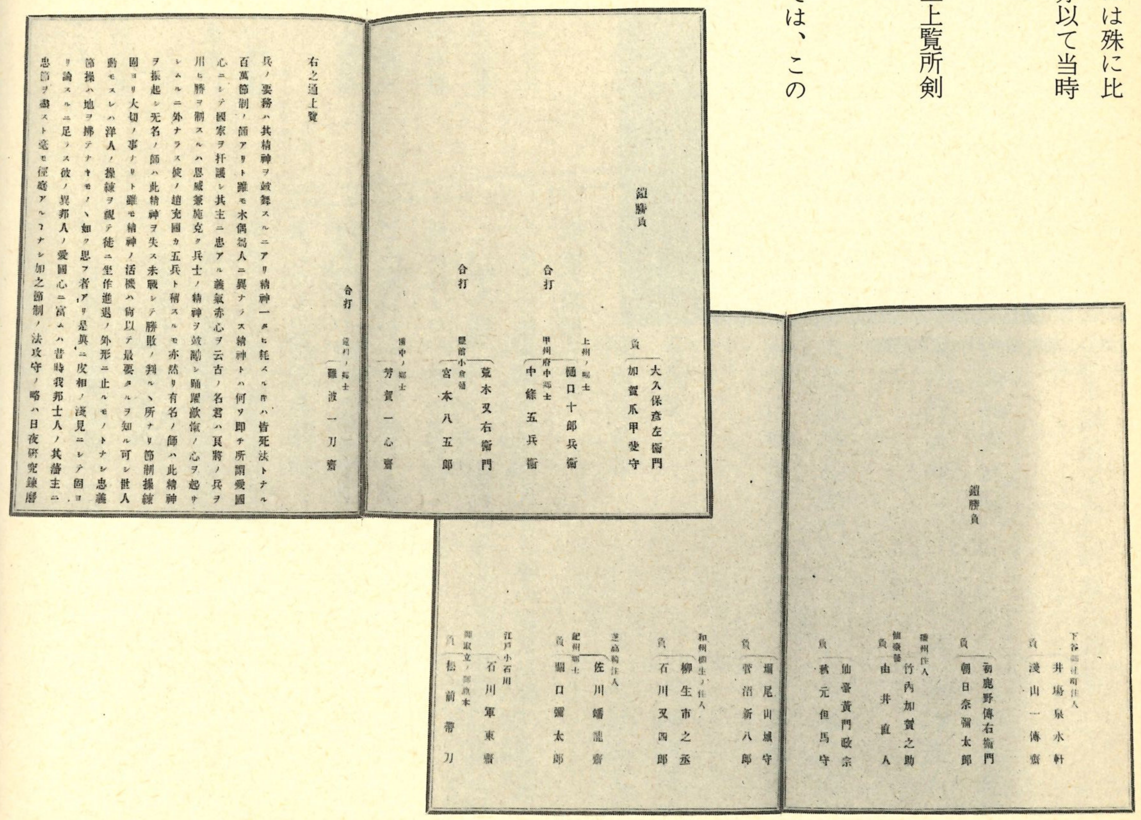
播州住人 竹内加賀之助
負 仙台藩 由井直人

仙台黄門政宗
負 秋元但馬守

堀尾山城守
負 菅沼新八郎

和州柳生の住人 柳生市之丞
負 石川又四郎

芝高輪住人 佐川蟠龍斎
負 紀州郷士 関口弥太郎


『陸軍歴史』に、「該時の記録」に基づいた寛永御前試合の記載がある（国立国会図書館蔵）

鎧勝負

江戸小石川 石川軍東斎
負 御取立の御旗本 松前帯刀

大久保彦左衛門
負 加賀爪甲斐守

合打
上州の郷士 樋口十郎兵衛
甲州府中郷士 中條五兵衛

合打
荒木又右衛門
豊前小倉藩 宮本八五郎

合打
備中の郷士 芳賀一心斎
遠州の郷士 難波一刀斎

右之通上覧

――勝海州の『陸軍歴史』に登場する寛永御前試合の登場人物及び組み合わせは講談のとはまたちがっておりますね。はたしてこれの真偽のほどはいかがでしょうか。これによってきたる所以(ゆえん)というのはどこにあるとお思いになりますか。

尾崎　「該時の日記を得たれば」といったかたちで、公的な資料に基づいた記載のように書かれておりますが、これがどうも疑わしい。幕府の公的な記録といえば『徳川実紀』がありますね。この寛永十一年九月二十二日は、『徳川実紀』の中でどのように記載されているかをみると、この寛永十一年九月二十二日の箇所はあいにく空白で、書かれていないのです。その前の九月十三日に将軍は日光に参詣に出かけて行く。そして二十日にご帰城になったという記載があります。そしてその次は二十八日に飛んでおりまして、ここでは勅使、院使にご


勝海舟

対面ということで、それからまた新たな記録が続きますが、その間の一週間ほどがなぜか空白になっている。そこへうまくこの寛永御前試合の記載がすっぽり入ってくるわけですね。

―― では「該時の日記」というのはこの『徳川実紀』と考えてよいわけですか。

尾崎　どうもそうらしいんですが、残念ながらそれの裏づけが取れません。

―― その『徳川実紀』の中にはぜんぜん書いていないわけですね、御前試合のことは。

尾崎　この件に関しては出て来ない。

―― すると、だれかが記載の全くない部分にうまくあてはめたということも考えられますね。



伊達正宗　68歳でなおかつ、武将としての力を失っていなかったか（仙台市博物館蔵）

尾崎　ええ。

荒唐無稽な組み合わせ

―― 次にこの組み合わせをどうお思いになりますか。

尾崎　なじみ深い名まえもいろいろあります。しかしどうもおかしなことが多い。例えばここへ出て来る紀州郷士関口弥太郎、これは関口柔心の三男にあたる実在の人物ですが、彼は残念ながらまだ生まれていない。確か生まれは寛永十五年だと思いました。生まれていないのだから、この試合はちょっとぐあいが悪い。

―― 生まれる四年前に試合は終わったわけですね。

尾崎　その逆に、もう亡くなってしまった人も入っているようです。この朝比奈弥太郎の場合は、青山播磨守忠成の三男、朝比奈泰勝の養子だったと思いますが、これは確か寛政九年、つまり二年前にすでに没しているんですね。おまけにかなり高年齢の人が、この中に入っておりますが、おなじみの大久保彦左衛門、これが確か、この年には七十五歳です。ちょっときつすぎますね。

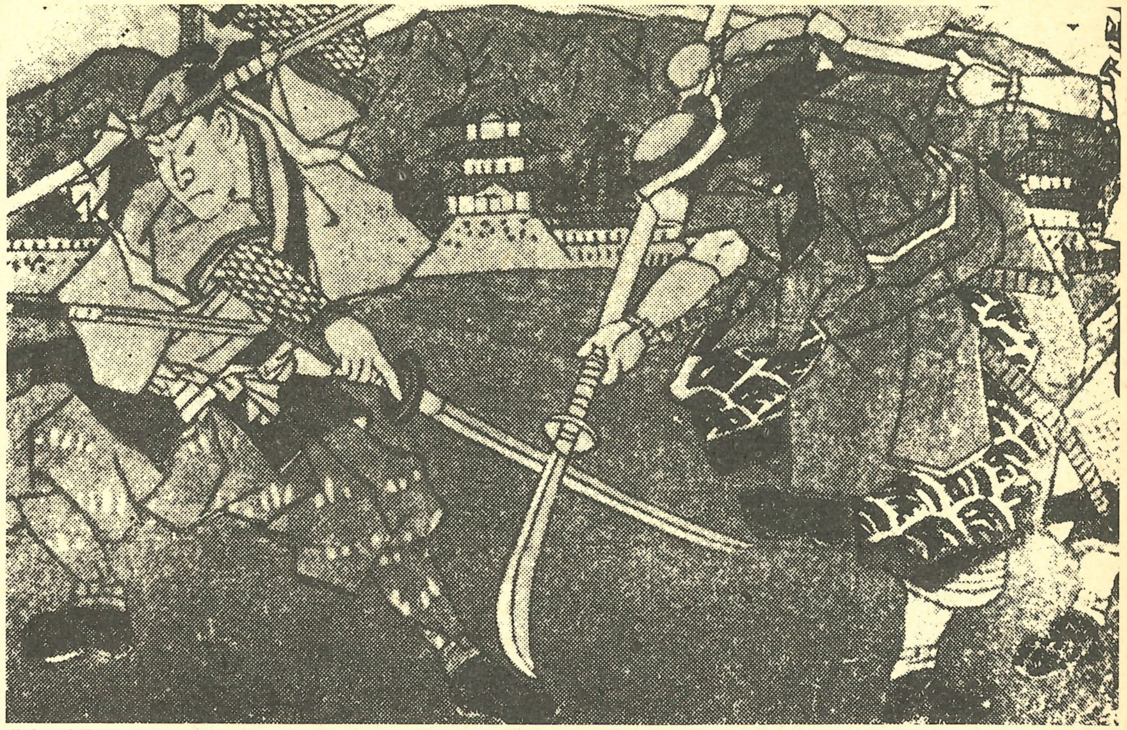
―― とても御前試合という、年ではないですね。

尾崎　それから仙台の伊達政宗ですね。これが亡くなる二年くらい前でしょうか。六十八歳になります。かなり元気で夏の上洛に随行していますがそれにしてもたいへんですね。政宗の相手をする秋元但馬守、これはもちろん実在の人物ですけれど、一万八千石ぐらいの小大名で、関ケ原の役などに出陣してはおりますが、武功のほまれ高い人とは言いがたいですね。この人物も五十五歳、当時としては隠居格で、どうもこの辺は、高齢、あるいは今言ったような条件で失格ということになりそうです。

宮本八五郎と対戦する荒木又右衛門、これは伊賀の鍵屋の辻の決闘で

寛永御前試合〈年表〉

元亀2(1572)	柳生但馬守宗矩、生まれる
天正12(1584)	宮本武蔵、生まれる
慶長3(1598)	荒木又右衛門、生まれる
慶長9(1604)	徳川家光、秀忠の2男として生まれる
元和9(1623)	家光、20歳で将軍となる
寛永9(1632)	「風俗画報」(明治26年発行)に、この年の11月11日に寛永御前試合が行われたことが書かれる
寛永10(1633)	家光、軍船安宅丸を品川沖に浮かべるデモンストレーション、観艦式を行う
寛永11(1634)	勝海舟著『陸軍歴史』に、この年の9月22日に、御前試合が行われた、と書かれる 江戸城西丸全焼、荒木又右衛門、伊賀上野の仇討
寛永12(1635)	鎖国令、出される
寛永13(1636)	日光東照宮大造営完成
寛永14(1637)	江戸城の改築竣工する 島原の乱
寛永19(1642)	幕府、譜代大名に参勤交代を命じる
寛永20(1643)	荒木又右衛門、死去
正保2(1645)	宮本武蔵、死去
正保3(1646)	柳生宗矩、死去
慶安4(1651)	徳川家光、しばしば上覧試合を催す　4月、病死 由比正雪、陰謀露顕して駿府で自殺　丸橋忠弥らも江戸で捕縛さる(慶安事件)
文政3(1820)	講武、調練機関として築地講武所が開場　その武賀として将軍上覧の他流試合行われる
天保13(1842)	江戸城白書院で上覧大試合が行われる
明治20(1887)	20年代初期に講談番付つくられる
明治28(1895)	田辺大龍口演『寛永御前試合』速記本出される
明治32(1899)	宝井馬琴口演『寛永勇士武術の誉』速記本出版される
明治44(1911)	大衆講談本のシリーズ「立川文庫」出版される



荒木又右衛門　鍵屋の辻で義理の弟の仇をうったのも寛永11年である（綿谷雪氏蔵）

おなじみの人物ですが、この又右衛門にしても、時間的には疑問が残る。

―― 三十六番斬りで有名ですね。

尾崎　ええ、ただし三十六人斬ったかどうかわかりませんが。

―― そうですか。あれはほんとうはどのくらいなんですか。

尾崎　桜井半兵衛と河合甚左衛門の二人らしい。まあ、その話は置くとして、この又右衛門が決闘をするのが寛永十一年十一月七日ですから、九月二十二日の時期には、河合又五郎をつけねらって関西辺りをいろいろ探しまわっている計算になる。だから、九月二十日過ぎの時点で江戸表（おもて）まで行ってまた伊賀上野へ取って返すとなると、新幹線でも利用しないかぎりちょっと無理だということになりますね。

―― 当時は新幹線なし（笑）。宮本八五郎というのは、これは武蔵ではないんですか。

尾崎　武蔵の養子の伊織をおそらく想定したのだろうと思います。豊前小倉藩となっておりますからね。しかし八五郎ではいかにもガラッパチの八五郎という感じで、どうもサマになりません。

―― なるほど。そうするとこの組み合わせもだめ。……ところに、郷士という肩書きの人がおりますね。

尾崎　いろいろおりますね。しかし郷士が、上覧試合に招かれて出場するというのは、いささか当時の條件からいって無理ではないでしょうかね。

―― ああ、なるほど、身分的にですね。

尾崎　しかもこの中には完全に虚構と思われる人物がおりますね。石川軍東斎（ぐんとうさい）だとか、佐川蟠龍斎（ばんりゅうさい）というのはほかの文献に出て来ない名まえですから、そこら辺もいささか眉ツバではないかと思いますが。

―― 家光の病床のおなぐさみとして……

―― 実在しない人物も多いとすると、これほど多くの矛盾のあるものがなぜ歴史書にまで出て来たのでしょうか。

尾崎　そうですね。『徳川実紀』は後の編纂ですが、それなりに信憑性のあるものともいわれております。この『徳川実紀』の中で上覧試合の記述がしばしば表れるのは、慶安四年なんですね。ちょうど三代将軍の家光が亡くなる年ですが、この時にはいろいろと繰り返し上覧試合が行われている。

―― それは何のためにやっているんですか。

尾崎　恐らく、病が次第にあつくなってきた家光のために、病床のおなぐさみというか、慰安の目的で催されたのでしょうね。もともと家光は武を好んだし、自分でもいろいろこころみてますからね。そして、この時は実際いろいろな人物が出場しているんです。当時の武芸の名高い人では、柳生新陰流の柳生宗冬、尾張の柳生連也斎、田宮流居合の田宮平兵衛、無雲流を開いた松林遍也斎なども出場しています。あるいは菊池寛の『忠直卿行状記』に出て来る山崎兵左衛門などという人も出て来るし、あるいは無辺流の槍術指南山本加兵衛も出ており、かなり有力なメンバーが顔をそろえていて、そちらを並べればまだまだ信憑性が生まれたはずだけれども、『陸軍歴史』の記述も講談の張扇も残念ながら、そうは仕組んでいませんね。

―― 仮にそれがもとになったにしても、なぜ慶安を寛永にしたかということですね。その裏側の事情をどういうふうにご推察になりますか。

尾崎　講談の世界の組み合わせの中に、それに答える一つの鍵があるような感じがいたします。

―― それは、どの辺にあるのですか。

尾崎　講談の寛永御前試合のクライマックスにもなっている、柳生飛騨守と、由井正雪の取り組み。この勝負の中にどうやら鍵があるように思えます。そのくだりを馬琴師匠に伺いましょう。

柳生飛騨守と〝逆賊〟由井正雪の対決

（馬琴師講釈）

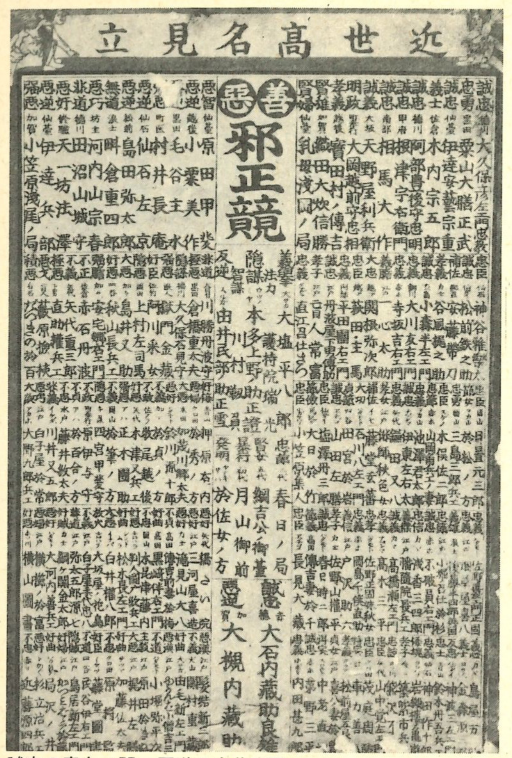
御前試合の最後の組み合わせ。

これは将軍家にお手をとっての御指南番柳生飛騨守。相手になりましたのが牛込榎木町に道場を持ち、上は天文、下は地の利、農六芸、伊尹の行道あらゆるものの指南をする、当時天下に名高い由井民部之助正雪、この組み合わせでございますから、一同の人々はかたずをのんで見守っておりますなかに、検分役の大久保彦左衛門、声高らかに両名の名を読み上げる。

この時のお掛り御老中松平伊豆守殿、何かお考えがあったものと見えて、お行司役の小野次郎右衛門先生にお尋ねの上老巧の大先生をお選みになって、相撲なれば四本柱へ座る検査役のような格で、検分役として、この立ち合いについて、間近の四方へお席を設けはっきりと勝負を見分けるようにと仰せ渡されて、おつけになりましたが、伊藤一刀斎、羽賀井一心斎、磯端伴蔵、高田又兵衛の四先生、いずれも仰せをかしこんで四角になって固唾（かたず）をのんで見ておられます。されば上様はじめ諸侯方、その他お旗本の面々にいたるまで、いずれも肩肱（かたひじ）をいからして、前に乗り出してま



由井正雪（野口昴明画）



誠忠の彦左エ門、反逆の由井正雪
（善悪邪正鏡　宝井馬琴氏蔵）

たたきもせず見物しておられる。武芸者の人々もまたお幕張りの中からこの勝負いかがならんと見つめるようなわけ。柳生飛驒守殿はもっとも大切(だいじ)の試合、双方木剣を取って大久保彦左衛門の呼び出しに応じて前に進み出で、たがいに我が名を告げ合いました。

柳「お手やわらかにお相手を願いたい」

民「御同様にございます」

静しずと立ち出ました両人、お互いにていねいなあいさつをして、ピタッと身構えました剣は相正眼、相手をジッとみつめております。由井正雪というのは二つ瞳があったという不思議な目をした人物でございます。これが相手をジッとみつめている。柳生飛驒守も身構えたままみつめている。どちらも隙がないから打ち込んでまいれません。めちゃめちゃにたたき合うのは下手にかぎります。

そのうちにいかなる隙を見い出したか由井正雪、ケッ、ヤオーとともに打ち込んでまいりましたのを、ヤッという声で受けてサッと左へ流したみごとなはじめての太刀合わせ。これがきっかけとなりまして、上・中・下段、上・下段、上・中・下段と打ち合うことや三十七、八合、一同の者が固唾をのんで見守っておりましたこの時に、検分役の大久保彦左衛門、扇面を高くサッと上げて、「勝負あった。飛驒守の勝ちでござる」。しかるに他目から見れば、飛驒守はどうしても民部に打ち込まれた形であったからだれも必定民部の勝ちであろうと思いしに、意外にも勝ちは飛驒守に帰しましたれば、一時にワッと声がかかった。しかしどこをどう打たれたかわからない。飛驒守はダラダラ汗を流している。民部も汗を流しているが、飛驒守ほどではないように思われる。検分役のこの声に由井正雪は不満の色ありありとあらわれたが、これは審判に苦情は言えないのは今も昔も変わりなく、それだけ審判というものは権威を持っておりました。

この勝負のつけ方について、大久保彦左衛門は何か深く期するところがあったのは、この由井正雪は後に、えらい大それた事件を起こす。それをなんとなく察した大久保彦左衛門の采配ではなかったかと思います。この時もっとも民部へ目をつけたのは、お掛りの御老中松平伊豆守殿でございます。浪人剣者の身であるにかくまで諸侯一同が、彼を信じおるというのは、よほど人望を得るに妙を得ておる。しかしこれが正当の者であれば仔細(しさい)はないが、万一謀叛心でも含んでおるその時は、まことに容易ならん一大事を後目に惹き起こさん、こりゃ油断のならん奴と、こう思召しましたから、上様へ、

「民部をお召抱えになりますのは、御無用になすったほうしかるべく」

と申し上げました。

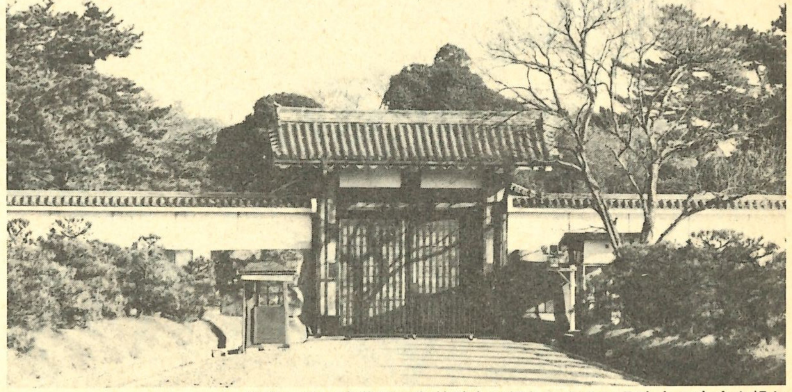
そのころ御老中のうちでも、知恵伊豆と評判のあるお方から、こう申し上げたので、上様も彼を召抱える思召しは御断念あそばした。されば民部之助も、この松平伊豆守殿を、恐るべき御人であると、この時に目をつけたのでございます。もう民部の心中には、謀叛の企てじゅうぶんにあって、その時機をうかがっておったのでございますが、この立ち合いの際親しく上様を見上げ、かつは伊豆守殿の容易ならん御人なるを悟りましたから、この将軍のお側にこの伊豆守あり、いわゆる名将の下に愚臣なしとのたとえ、他の御老中とても、皆ひとかどのお方がそろっておられるから、この将軍御繁昌のうちは、大事を発しても成功は覚束ないと察しましたゆえ、この三大将軍の御他界に相成るを待って、いよいよ慶安の四年四月二十日、将軍御他界と同時に、徳川の天下を覆えそうと、ここに事を発したのだと云われています。

しかるに事成らずして、駿州府中の脇本陣梅屋勘兵衛方において切腹いたし、相果てるような事になったのは後のお話。

柳生飛騨守と由井正雪の御前勝負の一席でございます。

―― 決め手は由井正雪ですか。

尾崎　そういうことになりそうですね。時期的に見まして、由井正雪の乱は慶安四年七月、将軍家光が亡くなったのがその少し前にあたる同じ年の四月、この間わずかに数か月しかないわけです。それだけに天下の治安はおだやかでない。なにしろ由井正雪の慶安の乱自体が当時の浪人問題の一つのあらわれでもあるわけですから、それだけに将軍家晩年の上覧試合を拡大して虚構化したのでは、ぐあいが悪いということもあったでしょうね。



千鳥ケ淵と半蔵門　御前試合が行われたという吹上の方向を望む

―― 政治的な配慮ですね。そうすると、その時期をはずすのには、徳川家の基礎がかたまってきた寛永の方がよかったという判断ですか。

尾崎　そうですね。だいたい寛永期は、徳川の幕藩体制の基礎がためが出来た時期だし、この時期ならば、そういう変な勘ぐりだとかは起こって来ないだろうという読みがあったのでしょうね。そしてちょうどその時期は剣に対する意識も変わっていく時代でもあり、それなりの意義もあったわけです。

―― そういう配慮をいったいどこのだれがいつごろしたか、ということになりますが……。

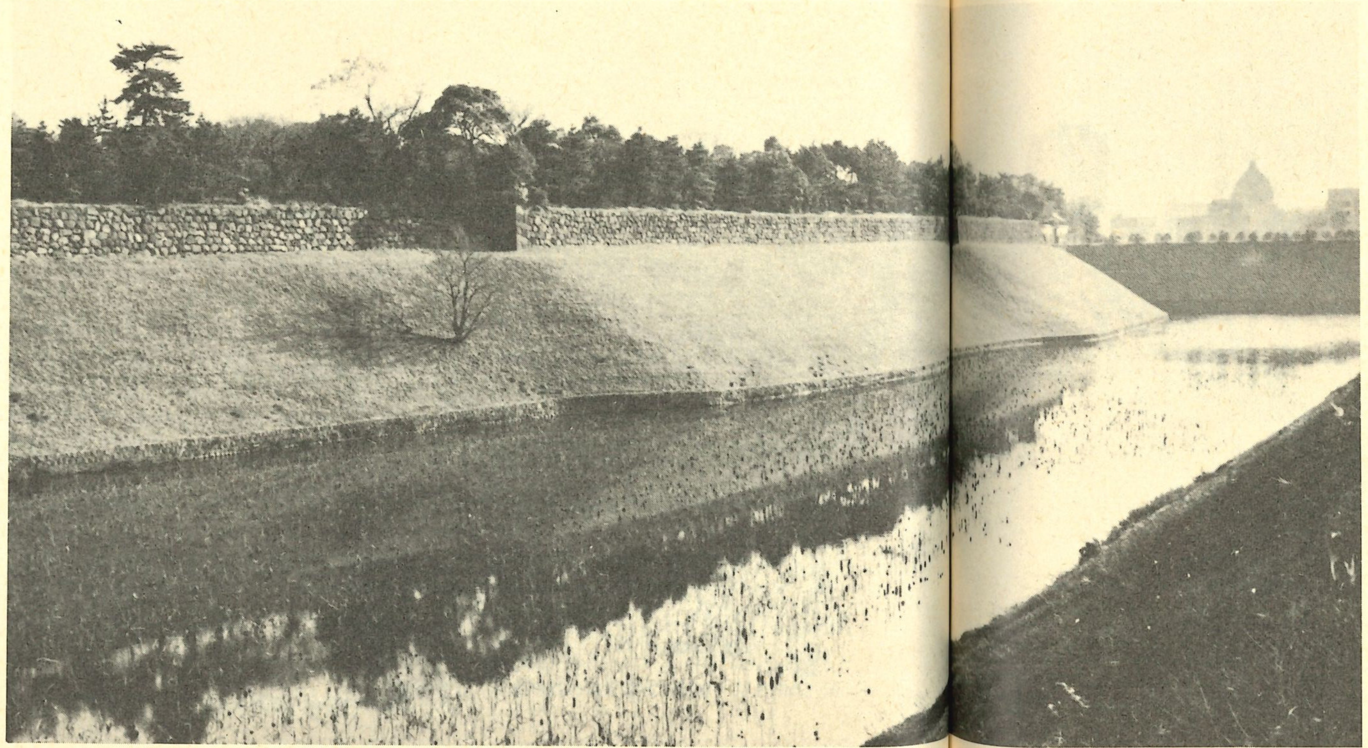
尾崎　たいへんむずかしい問題なんですけれども……。

―― だれか知恵のある人がそういうふうに考えたのでしょうね。

尾崎　そうですね。いわゆる知恵者というより、かなりいろんな史料を読んで、記録の空白のページにそれをうまく生かし、さも実在であるかのごとく、あるいは出て来てもある程度不自然でないような実在の人物をうまく組み合わせていくあたりは、なかなかの作り手だという感じがいたしますね。

―― そうすると、寛永期というのは、こういう御前試合が行われて不思議ではなかったという時代なんですね。

尾崎　そうですね。ごく自然に受け取れます。それに今もちょっと申し上げたように、時代が落ち着くにつれてそれまでの殺人剣的な剣に対する認識が改まり、活人剣といいますか、いわば剣の形而上学のようなものが次第に強まって行く時期です。その最後の時期、ちょうど古い時代の殺人剣がぎりぎりのところで煮詰まって来る時期でもあるわけですから、武道ゆかりの人物が一堂に集まり、試合をすることは、考えてみるとそれなりの必然性があるように感じられるわけですね。



「教養」になりさがった武術

江戸時代も寛永を過ぎるころから天下泰平の世となってゆく。そして華やかで退廃的ないわゆる江戸文化は、武士たちから尚武の気風を奪っていったのである。

由井正雪の乱がきっかけとなり、幕府は武術の他流試合を禁止した。

武芸各派はみずからの流派の中に閉じこもり、ただひたすら型だけを重んじるものになってしまった。

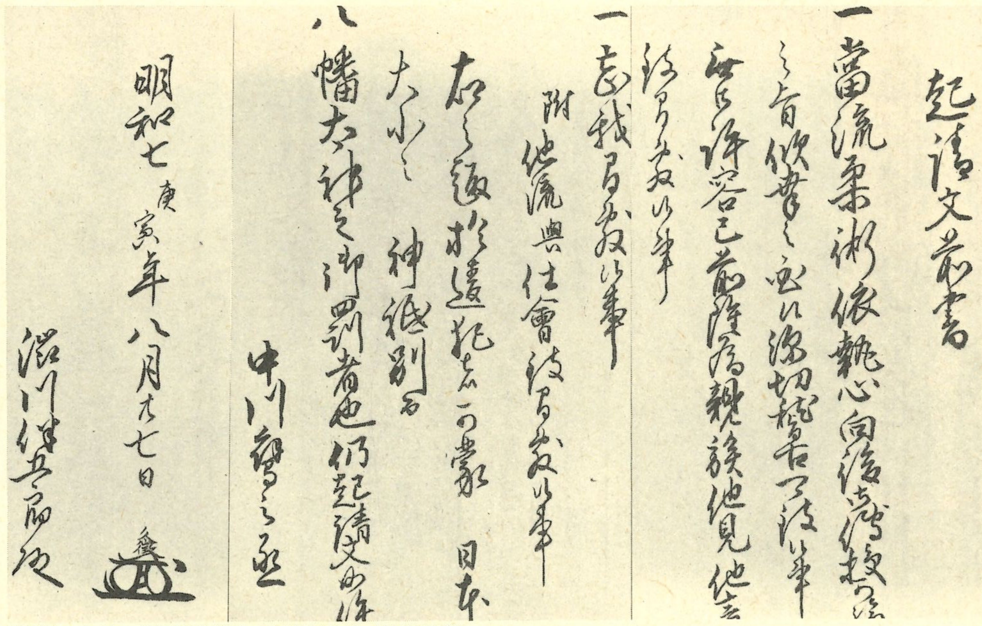
柔術家渋川伴五郎は寛永御前試合の出場者の一人とされている名だたる武芸者であった。

その四代目の子孫渋川時英は、随筆『薫風雑話』の中で武芸のすたれた姿をこう嘆いている。

「凡そ今の諸大夫はもちろん中人以下の者にも、柔弱に成長したる輩は多く、武芸の稽古を危ながりて勤めず、少しは勤めても、時として打撲、打損じ等の怪我などあれば、必ずそれに懲りてひしと稽古を打ち止むる者あり。是れ又国家太平久しの姿といひながら、余りなる事なり」と。

歴代将軍はどのくらい剣術の試合を見たであろうか。

武道史研究家の今村嘉雄さんが『徳川実紀』などをもとにして出された統計をみると、まず、家光の時代になんと七十九回も行われている。これ以前、つまり家康が幕府を作った一六〇三年あたりは、徳川草創期で、上覧試合どころではなかった。上覧試合の記録は家光の時代から始まり、四代の家綱も多くやっている。ところが、泰平の世が続くと急に数が少なくなって来る。ここか

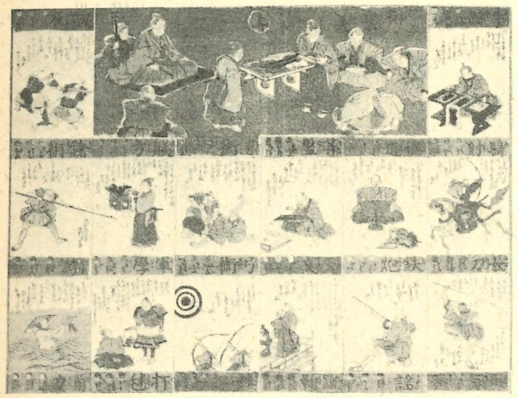

起請文前書
明和七庚寅年八月廿七日

渋川流の免状　他流試合禁止の記載がある（鈴鹿家蔵）

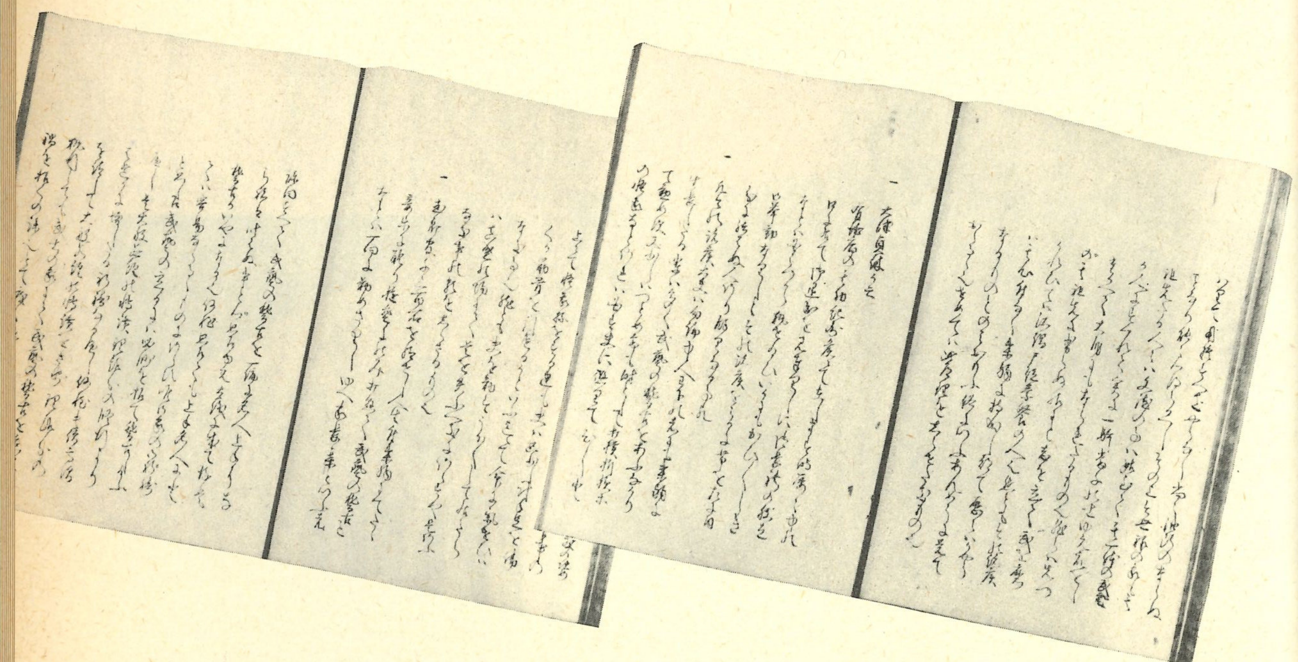
ら剣術というものが全面的に衰退して来るが、しかし幕末になるとまた盛んになる。外国からの圧力などにより、侍がまた武術に対して目を向けて来たということがいえる。

こうして徳川三百年をずっと通覧してみると、明らかに家光の時代のあと、武術というものが急激に衰退して来たということがはっきりする。

幕末に出来た「武芸立身館双六」を見ると、当時武士が何に関心を持っていたかが、一目瞭然である。この双六の振出しからたどっていくと、まず碁をやり、それから、生花、茶の湯、狂言、お香、さらに将棋、相撲、これは男として、あるいは侍としてやったかも知れないが、反対に、けまりや謡があったり和歌を詠んだりしている。そして、さらに薙刀、乗馬、儒学の勉強。ところが、そろばんも画いてある。武士は食わねどとも言うが、そろば



武芸立身館双六（都立中央図書館蔵）



『薫風雑話』(静嘉堂文庫蔵)

んも、ちゃんと習わざるをえなかった。それから、柔術、槍、そして最後に剣術が描いてある。剣術の他に、今まであげたことをいろいろ身につけてやっと上がりとなるわけで、ごほうびが戴けるというような段どり。つまり、こうしてみると、いかにこの武術というものが、武士であることの基本ではなくて単なる教養の一つになり下がってしまったかがわかる。

茶坊主が悪戯でねつ造した作り話

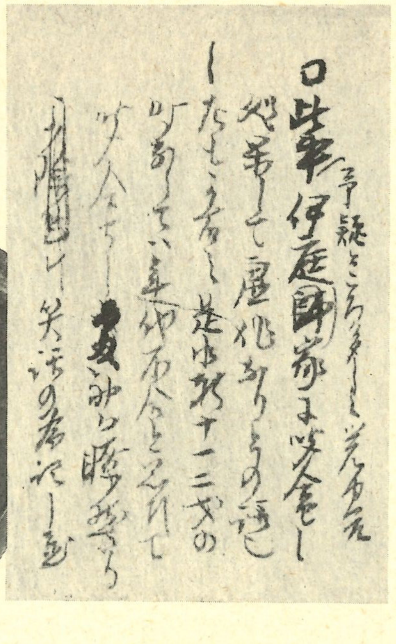
群馬県吉井町馬庭。

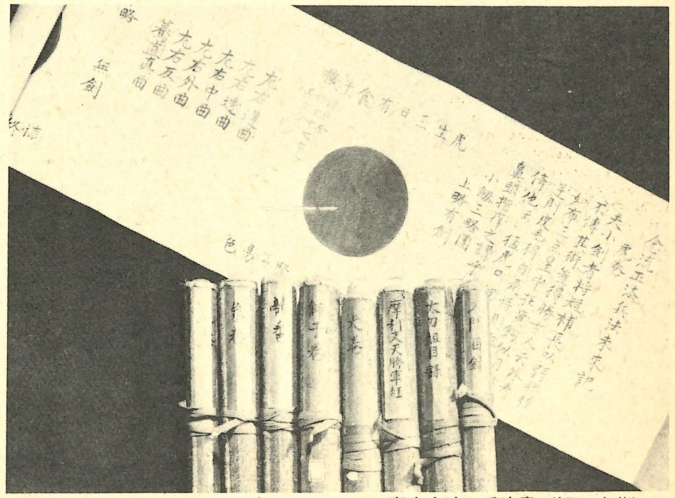
その馬庭の樋口家に代々受け継がれて来た馬庭念流は、関東の代表的な剣法として知られる。そしてこの樋口家十一代の樋口十郎兵衛定勝は、寛永御前試合に召され、甲州郷士中條五兵衛との勝負で勝ちをおさめたと伝えられて来た。樋口家には寛永御前試合の勝負付を彫った一枚の版木がある。それによると、御前試合は寛永十一年九月二十一日に行われたとし、登場人物は勝海舟の『陸軍歴史』の顔ぶれとほとんど同じである。

しからばなぜ、樋口家にこの版木が残っていたのだろうか。また「寛永御前試合」という虚構はいつ、どのような状況で誕生したのだろうか。

北海道在住の武道史家、青柳武明氏は、この辺の事情を見事に考証しておられる。以下、青柳氏の論文「寛永御前試合誕生記」を紹介しながらその謎を解くことにしよう。

寛永十一年九月二十一日に将軍家光の前で、伝えられるような御前試合があったということは、さまざまな角度から見ても矛盾だらけであり否定的であることは、先に尾崎秀樹氏が見た通りである。





真庭念流の兵法書（樋口家蔵）

しかし、こうした矛盾に気づいていた人は過去においても無かったわけではなく、原徳斎は、弘化元年の序のある『先哲像伝』で、相当手厳しくやっつけているのである。

『先哲像伝』武林伝の柳生三巖の項に次のような記述がある。

「近頃撃剣師に名を得る、樋口重郎兵衛塾生某より、予が好事の資とて送らる古書一葉あり。真疑ハしらず、珍らしけれハ此に記す。三巖の門人又右衛門（荒木）の名氏あれハなり。其書左のごとし」と前置きしていわゆる寛永御前試合の勝負付を載せている。

ところが著者の原徳斎は欄外に「此事、予疑ところ多しと覚申候故、伊庭家に聞合せし処、果して虚作なりとの話也。左も可有之。是水軒、十一、二歳の時ならでは年代不合と思ひて聞合せし

老雄彦左の勝ち名のり

御前試合の主宰者家光公とくると、なくてはならぬ存在は天下の御意見番大久保彦左衛門である。寛永御前試合の講談では、彦左衛門がしばしば登場し、狂言回し的役割で、笑いをよぶことになっている。

そして、例の前口上、

「この彦左衛門などは、永禄の二年五月の三日に生まれて、天正の三年五月の二十日宵暗に乗じて、鳶巣山の武田左馬之助信豊の守っているお陣城を、城攻めに及んだとき、此の方はいまだ平助と申し、十六歳のあげまきであったが、一番乗りをいたし、一番槍を入れ、甲州の浪人組頭、和田兵部という者の眼をつらぬいて、一番首をあげ、大功をあらわして以来、戦場往来のこの彦左衛門じゃ……」

を、登場するたびにのべて、客をよろこばせることになっている。いくら大言を吐いても、おやじ、またはじまったでだれも相手にする者はいないのだが、寛永御前試合では、旗本奴で有名な加賀爪甲斐守と手合わせする。彦左、この時七十二歳、さすがに厳めしく甲冑、陣太刀を帯びてあらわれた。講談に沿って語ると、

「双方互いに抜き放し大上段に構え、しばらくにらみ合いしが、やがて大久保正眼に直し、ヤッと声掛け、十文字に合わせ、また別れて乱れの太刀はらはらとかげろう稲妻のごとく斬り込み、打ち込み、相争うさまは飛鳥のごとく、加賀爪が大力ゆえ、引き組まんとすきをうかがい、彦左は取り組みては面倒なりとすきまもなく打ち込み、打ち込み相戦う。

げに戦場往来いかがあらんと見えにけり」

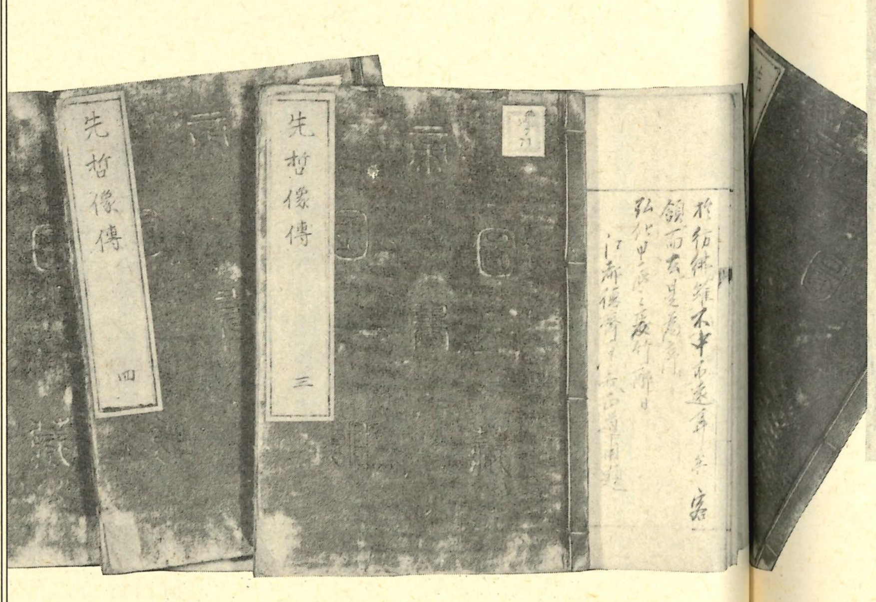
と、正に張扇の音ピシリと鳴る感じ。このあと、

「彦左すきを見て、加賀爪が後ろへ回りしとみえけるところに、鎧の上帯と首筋とってヤッと声かけ、指しあげて、ウンという て五、六間ばかりもんどり打って投げつければ、家光公をはじめ列座の面々したりしたりとほめにけり」

ということになっている。このあと彦左、加賀爪を次の間に呼んで説教するには「そちでさえそのざま、まして旗本奴の他のチンピラどもなどの腕しれたもの、早々と引き上げい」

といって、赤面した加賀爪をスゴスゴと退出させてしまう。

その後まもなく、チンピラやくざの集団白柄組は解散したという。



『先哲像伝』とその欄外の書き込み（右）（国立国会図書館蔵）



老中松平定信（松平家蔵）

処、初而瞭然たり。可笑話の為、記し置」と細字の書入れをし、みずから紹介した一文を、「果して虚作なりとの話也」ときめつけ、「笑うべき話のため記しおく」と片付けている。「正保三年生れで、寛永十一年は生前十六年となる伊庭是水軒を〝十一、二歳の時ならでは年代不合〟とした調査の粗雑さは有るにもせよ、その炯眼はさすがである」と、青柳氏は徳斎の考証を高く評価しておられる。原徳斎の紹介した寛永御前試合の史料が馬庭念流の正統樋口家から出たことは、記述の通りであるが、ではどのようにして元の史料が樋口家に渡ったのだろうか。樋口家では、大正十一年、家史『樋口武勇伝』を編述、昭和十一年にはその改訂版、『念流の伝統と兵法』を上梓しているが、その両書とも馬庭念流十一世樋口定勝の項に『先哲像伝』と同じ組み合わせ表を掲げ、「右在政府日記中故抜抄」と添え書きしてある。

これは、樋口家の家系図の定勝の項の記述、及び版木が元になっていると思われる。そこで青柳氏は昭和十一年、『念流の伝統と兵法』が刊行された直後、樋口家の高弟某氏に、御前試合の記録に関する何か言い伝えがないかを尋ねてみたという。

樋口家の十四代定暠（さだたか）が、たいへんに松平定信に愛せられ、しばしばその私邸に招かれたが、ある日、昨今珍らしいものを入手したからと言って、あの勝負付を示されたので、特に許しを得て手写して来たものだとの答えを得たとのことである。

それ以来、勝負付版木が樋口家に代々伝わって来たものと考えられる。さらに言えば松平定信は「文武と言うて夜も寝られず」と当時の人士に悲鳴をあげさせた人物である。ここに、こうした寛永御前試合という虚構が生まれる素地があったわけで、しかも注



武術はしだいにスポーツ化していった（綿谷雪氏蔵）

目すべきは、松平定信が老中時代の寛政三年十月に出ている次のようなお達しにピントを合わせた可能性が強いと青柳氏は力説する。

「此度布衣以下御役人并寄合之面々武芸、且御番衆小普請迄、鎗剣柔砲術之内、上覧可被遊旨被仰出候。尤御目見以下之者ハ若年寄衆御見分有之候旨、対馬守殿（安藤）被仰渡候。右ニ付別紙書付之通、皆伝免許印可之分御取調、否十一月中、拙者共江御申聞可有之候。此段不洩様取調御差出可有之候以上

十月

中川勘三郎
森山源五郎

（別紙）

此度鎗剣柔術上覧并御見聞ニ付、左ニ御達申候。

一、上覧ニ罷出候もの、平服着用可有之候。但御身分に罷出候も

どっちが勝ったの？ 名人対達人

五味康祐の名を高からしめた剣豪小説『柳生連也斎』のクライマックスで、主人公連也斎と、達人綱四郎の死闘の描写は、活字を読み流しただけでは、いずれの勝ちとは決しかねるように書かれて読者の話題をさらったものだが（むろん、小説中にうまくタネが仕かけられてある）、寛永御前試合にも、似たような話がある。

登場人物は、老人ではあるが天下無双の名人同士、対決するのは、磯端伴蔵と羽賀井一心斎である。

老人同士の対決は見た目には迫力がなく見物人も、ただにらみあっているだけの二人に、「やっぱり年よりだけある、あくびが出るわ」と笑われた始末。

「この勝負は、どっちかが笑い出した方が負け、だるまさんのにらめっこじゃ」

と、ひやかしながらの高見の見物。そのうち、

「おやおや、双方とも顔が真っ赤になってきた」

「今度は青くなってきた」

といっているうち、ひと太刀の打ち合わせもないまま、一心斎が「参った」と声をあげ、それと同時に伴蔵もよろめいて尻餅（しりもち）をついた。

審判役の大野治郎右衛門すかさず、「勝負あった」と声をかけ、軍配を伴蔵へ上げた。見ていた家光公にはいっこう要領をえないなりゆき。治郎右衛門、家光公にこう答えた。

「恐れながらこの試合こそ今日中の試合の白眉にて、真の気合試合と申すべきでございましょう。双方老巧、無双の名人でございます。にらみあいましたるときは、どちらにも兎の毛でついたほどのすきもない。すきがなければ打ち込むことができません。双方面色変じ気が充ちてまいります。負けとなった羽賀井先生の偉いところははや気合が充分となり、この上立ち合っておりますれば、気合充ちまして、すでに生命にもかかわるところ、それがために及ばざるを知って、『参った』という声をかけてみずから太刀を引きとりました。磯端先生の方はまだ気合いが少しだけ残っておって尻餅をつきました。その分、気合いがわずか残っている分だけ、磯端に軍配を上げたものです。」

この話に家光深く感じ入り、両人に過分の賜物を等分に贈ったというお話し。

でも見ていておもしろくなかっただろうなあ。

のも同断。

一、打太刀ニ罷出候もの、寄合小普請、御目見以上之悴、次男三男厄介、并御目見以下、上下格以上之者、御徒迄罷出候事、尤不依何役、麻上下着用可有之候。若打太刀ニ罷出候もの　差懸り難罷出節は、上覧に罷出候ものの内、打太刀いたし不若候。其節は平服着用可有之候。

但御見分之節も、打太刀之者、前條之振合に相心得、其外以下之者并陪臣浪人にても不苦事。

一、道具之儀は、有来（ありきたり）を相用ひ、尤血附候類は、洗磨可被相用候。新規に申付候ニ不及候。

但御見分之節は、洗磨ニも不及候。

一、鎗術柔術共、時宜に寄、仕合等も上覧并見分共有之候間、差支無之用意いたし可被罷出候。

一、打太刀に罷出候もの、役名書付可被差出候。

右之通御心得可有之候。依之御達申候、以上。

十月

」

つまり、このお達しに合わせてお城坊主が悪戯に一枚の「剣道上覧之写」といった紙切れをねつ造したのではないかと言うのである。こうした悪戯の犯人は、ほとんどがお城坊主だと言われているそうである。「田沼時代のヌルマ湯暮らしから、松平定信となって、急に水風呂に叩き込まれたような激変ぶりに、心中おもしろからぬお城坊主どもが、『御記録中、斯様（かよう）なものがございます』などと定信グループを担いで嬉しがらせ、陰では舌を出し、溜飲を下げていたものだろう。

寛政五年、定信が隠退し、文化文政の爛熟時代を経て、今度は定信の私淑者、水野忠邦の出現によって、名だたる天保改革が断行され、武芸熱が再び高まると、一時好事家の書庫に眠っていた『上覧之写』がまた珍重され始め、そしてついには、天保十三年の上覧試合を機会に、これを土台にした、芝居気沢山の『寛永武術御上覧之記』までが、誕生することになったものであろう」と



水野忠邦（都立大付属図書館蔵）

いうのが青柳氏の結論である。「さるにても、かかるものが生まれたのにはそれなりの時代背景があったわけで、多少の皮肉をこめた、洒落気のいたずらがこのような形となって、長く生命を保ち続けようなどとは、『剣道上覧之写』の作者は、想いもよらなかったことであろう」と結んでおられる。

この青柳武明氏の考察こそが、実際にはありもしなかった寛永御前試合が、いかにしてそれらしく仕立てあげられていったかということを、もっとも納得のゆくかたちで表したものではないだろうか。

しかし、この「上覧之写」がもとになり、講釈の世界で寛永御

将軍剣術上覧一覧表(『徳川実紀』による)

家光 1622－1651	鞭(掩) 46(1)	剣法 17(9)	兵法 1	撃剣 8	居合抜 1	剣術 4	剣 1	刀(抜) 1					79(10)
家綱 1651－1680		剣法 3(3)	兵法 17(17)	撃剣 10(10)		剣術 24(22)			刀法 4(2)				58(51)
綱吉 1680－1709		剣法 1(1)				剣術 1(1)							2(2)
家宣 1709－1712		剣法 1				剣術 1							2
家継 1712－1716													
吉宗 1716－1745						剣術 1				闌入撃剣 1			2
家重 1745－1760													
家治 1760－1786				撃剣 1									1
家斉 1786－1827		剣法 1(1)		撃剣 1		剣術 2	剣技 3(2)				武技 15	芸技 1	23(3)
家慶 1827－1853							剣技 2(1)			武術 1	武技 27		30(1)
家定 1853－1858						剣術 2(1)	剣技 1(1)			武術 2			5(2)
家茂 1858－1866					馬上剣術 1	剣術 25	打割剣術 19	野試合剣術 4		武術 3	槍剣試合 2		54
慶喜 1866－1868													

(　) 内の数字は将軍自身行ったもの。例、17（9）は17回のうち9回は将軍自行。

前試合が語られ出したのか、はたまたその逆であるのかについては、今後の研究をまたなければならないようである。

太平の世のスーパーマン

―― この御前試合の組み合わせを見ておりますと、私ども子供の時にチャンバラをやりましたが、一人が宮本武蔵になると、もう一人が近藤勇になったりいたしましてね。あれとなにかよく似た感じですよね。

尾崎　そうですね。時代だとか状況をごっちゃにかきまぜて、強い者同士でぶつかるという、そういう感じがいたしますね。

―― 強い者への憧れというのは、いつの時代でもあったのでしょうね。

宝井　それはもう勘定もできない昔からあったのではないですか。今だって同じだと思うんです。

―― それも強ければ強いほどいいわけですね。

宝井　強いほどいいですよ。どんなに強くてもいいんですね。大ぜいの目から見ると、後にも先にも考えも及ばないほど強いのがいいと思うんです。

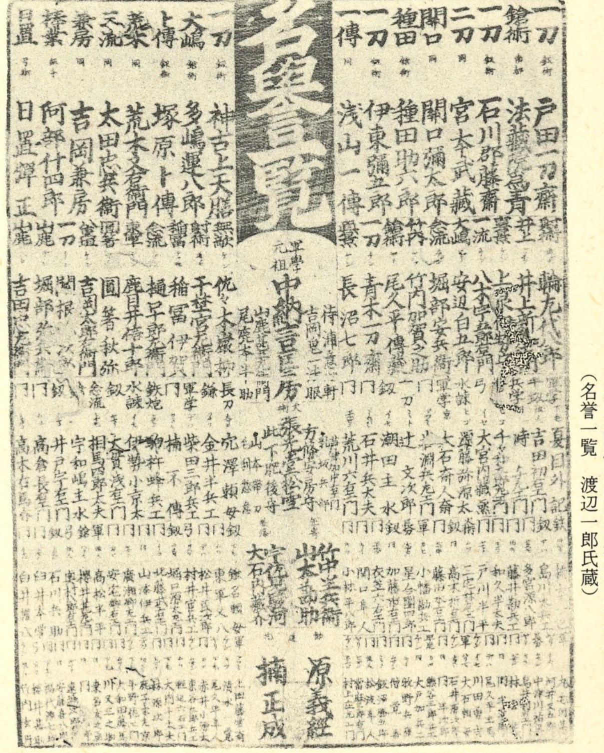
尾崎　講談の張扇なんてのは、ずいぶん強い者を生んできた……。

宝井　一つテンとたたけば、これはたいへんに強くなっちゃう。

―― この話が出て来たのは、仮りに徳川の中期からあとくらいのいちばん太平のところといたしますと、世の中が太平だから逆にそういうものが欲しいということになるわけですか。

尾崎　そうですね。ご存じのように太閤の刀狩り以来一般の民衆は刀を持てなくなる。それで士・農・工・商という社会的な身分制が出来て来る。そうすると、一般の大衆は抵抗しようにも武器がないそのかわり舌先三寸の魅力みたいなものによってやっぱりスーパーマンを作り出し、それに自分自身の夢だとか憧れを仮託していくということになります。だから、剣のスーパーマンに憧れ、武の世界に憧れるのは、かえって太平の時代だということになる。つまり抵抗の武器を奪われ、訴える手段もないような場合には、案外舌先三寸の芸に代替物を求めることになるのではないでしょうか。

―― その講釈にしても、あるいは勝海舟のにしても、登場して来る人物に悪人はいないですね。



いつの時代にも強い者へのあこがれはあった（名誉一覧　渡辺一郎氏蔵）

尾崎　そうですね。由井正雪のような叛逆者もまじっていますが、それはたとえ当時の権力者にとって悪であっても、今の民衆にとっては決して悪ではないわけですからね。

―― だから実際に強いという人は、悪の道で強いんではだめなんですね。

宝井　それではいけないですね。これは昔ばかりではなくて、現在でも悪で強いやつがあっても、みんなそれについては行かんと思うんですね。

講談というのも、今は一般に講談といわれていますが、講談というい方は明治以後で、それまでは講釈といっていました。そして、講釈



中山（堀部）安兵衛は、高田馬場の十六人斬りや赤穂浪士として、講談の世界で大活躍する（綿谷雪氏蔵）



赤穂浪士討入りで堀部安兵衛に斬られる清水一角（綿谷雪氏蔵）

の「こころ」とは、
一、俗談平語を語り
二、座興の笑いを結び
三、猛勇の知弁を振るう
ということを、私の師匠、先代の馬琴からよく聞かされたものです。「駄弁、粗弁は一切禁物」とか、むだな言葉は講談にあってはならない、なども耳にタコが出来るほど聞かされたものです。

また、講談の「講」とは、歴史を意味するものであること、「談」とは、わかりやすく語ること、これが講釈というものであり、講談というものだと、強く体の中に叩き込まれてこの世界で生きて来たわけです。そして、講釈師は気位を高く持たなければいけないともよくいわれました。いやしくなってはいけない、下郎になるな、貧乏は恥ではない、自慢はせんでもよいなども教えのうちで、今考えてもわかったようなわからぬような、結局なんとなく納得したものでした。こうした人の道を、自分の体で覚えていって、初めてほんとうの講談を語ることができるようになるんです。人の道をわかりやすく語るのが講談、それも正しい道を笑いの中に伝えるわけです。どこかの国の悪い政治家に大衆がそっぽを向いてしまうのもあたりまえなんですね。

―― 大衆というのは、そういうところをかぎ分ける力というのはたいへん強いのでしょうね。

尾崎 民衆には無意識というか、本能的にそれを見分ける力がありますね。

宝井 それは、私は大衆の学問だと思います。学校で習う学問ではなくて、世の中から体得してきたほんとうの生きた学問だと私は思うんです。また大衆の見た目は狂いがないんですね。これはあだ名などでも、なるほどりっぱなあだ名をだれがつけるともなくつける。それが私は偉い学問だと思うんですね。

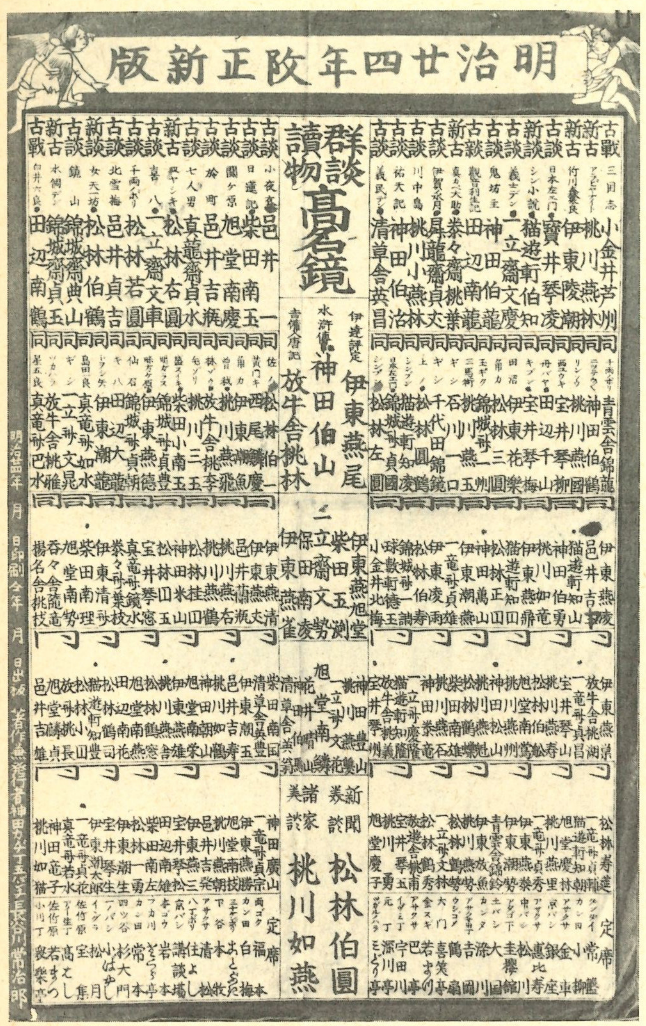
尾崎 この御前試合を見てみますと、下からのそういった大衆の願望と合わせてもう一つ、いろいろ出て来る不満を何かにすりかえてゆく、そういう上からの政治のコントロールが働いて、それがうまくクロスしたところに、御前試合の夢が培われていくような感じがしますね。

―― 当時の上からの考えというと、例えばどういうことなんでしょうか。

尾崎 前にもいろいろ出ているように、浪人などの間にはそれなりの不満が醸成されていた。同じようなことはいつの時代にもあります



武術者の総覧『武者修行巡録伝』表紙（綿谷雪氏蔵）



大衆に生きがいを与えた講釈師たち、高名鑑（宝井馬琴氏蔵）

ね。それを上から政治の力で押さえていく。下の方からは抵抗に代わる何かが求められる。それがうまく合うところに、いろんな名勝負物語の夢が、虚構化されて出て来るのではないですか。

―― そうすると虚構というのは、単に一人の人の頭の中で作られるというものだけではなくて、大衆が作っていく……。

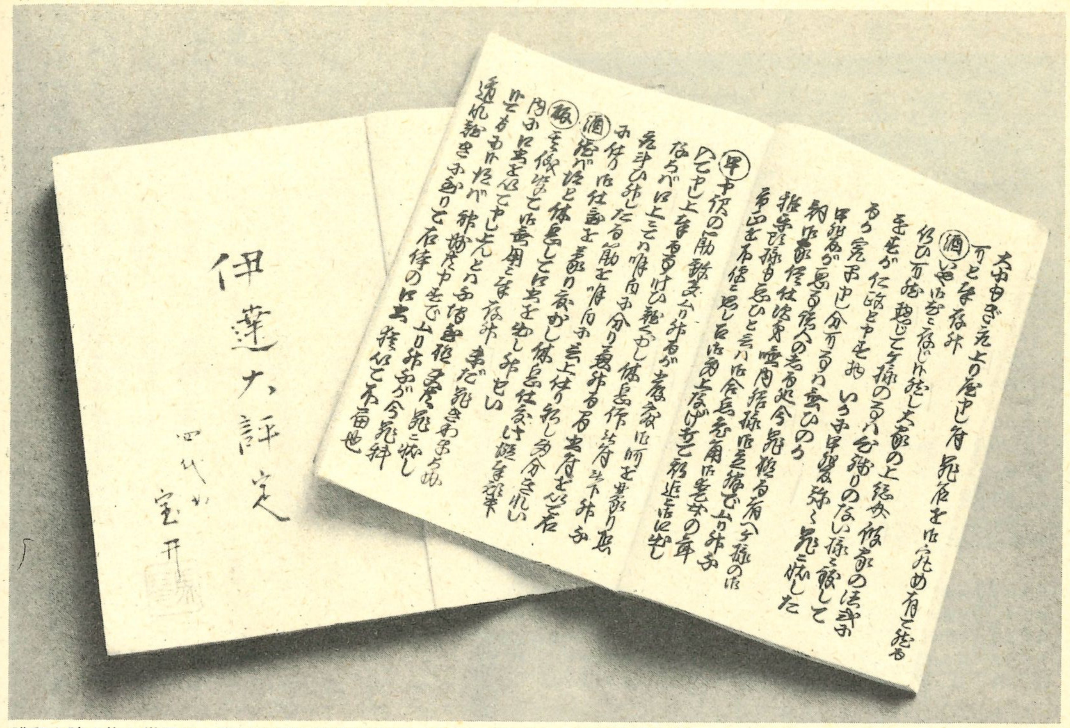
尾崎 一人の創作もありますけれども、しかし、大衆が、自分の願望や夢をそこへ仮託する、いわば大衆の集団創作みたいなものが働くのではないんでしょうかね。

―― そして、それを続けてくれ、続けてくれっと、どこまでもゆくわけですね。

宝井 つまりそれは、この人はそんなに強いのかって、好きになってまた聞きに来ますね、おしまいにするわけにいかないですよ。口先三寸の芸ですから、強さはどんなにでも、いとも簡単に強くなってゆきますから、またおっかけて聞きに来るんです。そういうようなことを、私は現在でも大衆は望んでいるのではないかと思いますね、そういう強い人を。

―― ただ、今はひとり、放送しますと、何百万という人にいっぺんに聞いていただけますね。ラジオもテレビもない昔、寛永御前試合という講談をどれくらいの人が聞いたのでしょう。

尾崎 いわゆる口コミ的なものや、話芸というものが持っていた牽



講釈や読み物の世界は、庶民の夢や願望に根ざしている（講談本　宝井馬琴氏蔵）

引性とか伝達性とかは、当時は非常に大きなウエイトを持っていたはずですから、それを通して大衆はそこから生きがいを得ただろうし、憧れや、願望をそれに託したでしょうからね。

——尾崎さんの、全く私見で結構なんですが、この寛永御前試合を、時代的にも違うし、登場人物も違う、だからこれは、間違いなんだと、学説的に言ってしまうか、そうではなくて、こういう夢こそ大切なんだという、二つのうちどちらをおとりになりますか。

尾崎　そうですね。この夢こそ大切だという方をとりたいですね。

——そうですか。それは、どの時代でも、人間の中に、そういう願望があるからですか。

尾崎　この試合は、真剣勝負で相手を倒してしまうといった血なまぐさいものではなく、やっぱり一つの名勝負になっている。そこら辺に剣による殺しの美学のようなものがあるのではないですかね。

宝井　絵なんですよね。ですから、絵はなるべくきれいな美しい大きな絵を見るのが楽しいですからね。

ですから、それは胸に描いて消えないんです。消えると思うと何かの拍子にひょいとまた思い出すんですね。

——耳で聞く絵巻物と思っていればよいわけですね。

宝井　そういうことですね。

江戸時代以来、講釈や読み物の世界を華やかに彩った寛永御前試合——。

そこに登場する武芸者たちは、今も庶民の夢とともに生き続けている。

（講談の引用は『定本講談名作全集第七巻』〈講談社〉による）

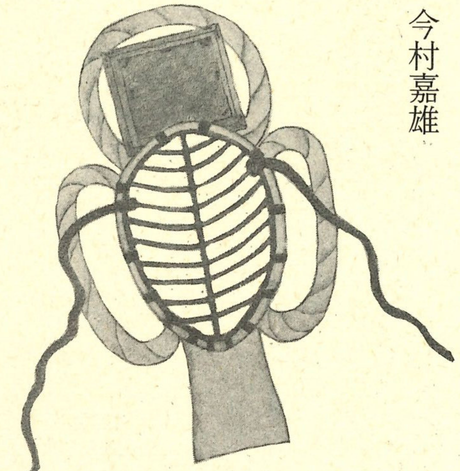
元禄以降の武芸の流れ

今村嘉雄

江戸時代の武道——ここでは、武道を武術、武芸と同義としておく——は元禄以後目だって衰微するが、一般的にみれば、幕藩体制という固定された階級社会の中で、長く平和が続いたこと、そのため次第に士気がゆるみ、諸事ぜいたくになり、前後二十八回にものぼる倹約令（『徳川禁令考』）にもかかわらずいっこうに効果がみられず、ついには貧困に追い込まれ、ますます綱紀のゆるみをみるようになったことにあると言えそうである。

このような武道の衰退をくいとめ、士風を刷新するために、各藩ともいろいろ方法を講じた。主要な方法としては、子弟怠慢の責を父兄・師範に負わせて子弟を督励するとか、降格・減知の罰則を課するとか、到達標準を定めてそれを達成させるとか、成績抜群の者を加俸・抜擢・褒賞するなどの方法がとられたがどれだけの効果があったかは疑問である。

総体的に衰退を続ける士風についても、若干の起伏はあった。最初の落ち込みは元禄から享保の初めごろまで、次は、八代吉宗が他界した宝暦から天明の終わりごろまで、最後は文化・文政から天保のころまで、その間に八代吉宗の享保の改革、松平定信の寛政の治、天保の改革などがあるが、巨視的に見れば、武道は変容の一途をたどる。


『武稽百人一首』より（綿谷雪氏蔵）

山本常朝は『葉隠』の中で「元禄以来風規が変わって、若い武士が集まると、金銀の噂、損得、内証事、衣裳の吟味、色欲の雑談のみで、そのような話をしないと、座が白ける状態だ」というふうに述べている。

吉宗が死んで間もない明和のころになると、累代武を誇る鹿児島藩でさえ、弓や鉄砲で賭をする風潮がみられ、藩庁からきつい達しがみられる（日本教育史資料鹿児島藩制）。

以上のような士風の推移は、幕末変動期を迎えることによって、大きく軌道を変え、武道も目だって振興するようになる。

元禄以後の武道の推移を要約してみると、師家の種目別分化と流儀の分派化、華法（スポーツ）化、武道の理論化等があげられる。

まず武道は、武芸十八般といわれるように種目ごとに宗家や師家が分かれるとともに、流派が流派を生み、元禄以降には、その数、数千にものぼるようになった。それらの中には祖流の名称を守り通したものも若干はあるが、特定の流派から分派したもの、数流から新流を興したものが大多数を占めた。

このような分派活動は、それぞれの伝派活動とともに、相伝段階を重層化させた。また幕府や雄藩の保護をうけるものもあれば、情実や金銭、義理によって免許を与え、生活の資とするものも増加した。もっとも、金許しや義理許しは、慶長以前にも稀にはあったらしい（『月之抄』）が、それが一般化してくる。だいぶ時代がさがって天保八年（一八三七）富山藩主松平

淡路守利幹は『履行約言』の中で、伝書、伝巻に色をつけ、模様をかざり、気に入りの門人に優先して与え、切紙・目録・印可・免許・口伝など、相伝段階を多造して、それぞれ多額の謝礼をとることをきびしくいましめている。

武道の華法化は、元禄時代よりもはるかに古い。武蔵は『五輪書』の中で、小田切一雲は『夕雲剣法書』の中でそれぞれ華法をいましめている。吉宗が将軍になって間もない享保のころ、松下郡高は、当節の武道は畳の上の水練で、その動作は能役者の手ぶり足ぶり、公卿の「けまり」と変わらない。腹べらしの遊芸だと酷評している（『神武権衡録』）。

これは、一つには他流試合が幕府の禁止にあい、諸藩も大半これに準じたため、型本位の対人的な組太刀に変わったこととも無関係ではない。本来単純であるべき基本型が、手をかえ品をかえ、太刀数をふやし複雑化していったわけである。しかし反面それは武道を体操化し無味乾燥なものにした。こうした中で、江戸初期からそのほとんど全期を通じて、その競技性を発揮したのは、京都、江戸の三十三間堂や、奈良東大寺の回廊で行われた通し矢である。安全な対物武道として弓術が王朝時代から競技化されていたことは周知のことであるが、江戸時代のそれは、握りの太い短弓に軽い差し矢をもって行われたため、「武用にあらず」「見せ物・戯射にして、名を売り禄を求むるためにする芸也」（伊勢貞春）などの批判はあったが、今日でいう選手権種目も多くなり、未成年の参加もあり、弓道の振興には少なからず貢献した。

武道の競技化に革命的ともいうべき変化をもたらしたのは、防具用具の開発である。それは、マンネリズム化した武道に生命の息吹きを与えようとする一武芸者の生活の知恵の生んだものとも言える。

元禄を下ること十数年の正徳年間、高槻藩士山田平左衛門光徳の三男長沼四郎左衛門国郷が、父の工夫した防具を改良して面籠手を完成させた。初めには異端視するものもあったが、次第に好評をうけ追随者がふえた。それからさらに四十年後の宝暦年間（一七五一～六三）に一刀流中西派の中西忠蔵子武が、「胴」を新たに考案して、いっそう完全な防具の開発に成功するに及んで、組太刀武道は、たちまちその主役の座を、いわば実戦式の打ち込み武道（試合武道）にわたさざるをえなくなる。これはいわば、近代武道、特に近代剣道への夜明けを意味した。他流試合もそれと並行して活発化し、前記直心影流に加え、心形刀、神道無念、北辰一刀、甲源一刀、鏡新明智、天然理心、大石神陰などの新興流派の活躍が著しく、幕府の講武所や、諸藩立の文武学校（藩学）を中心に、流派を越えて、その実力を競うようになる。同様の傾向は、他の種目にもみられ、槍術では大島、種田、風伝、無辺無極、樫原、本心鏡智流、砲術では萩野、武衛（ぶえ）、高島流、柔術では揚心戸塚、天神真楊流などが抬頭する。その背景には幕末とともに、幕藩体制が弱体化し、内憂・外患が年を追って増幅された事実とも無関係ではなかった。しかし皮肉なことには、社会的な変動とともに盛り上がりをみせた武道も、ついにはその変動のために、ほとんど全面的変容を余儀なくされるのである。

天保十二年（一八四一）五月九日、武州徳丸原（東京都板橋区内）で高島四郎大夫茂敦（号秋帆）が演じた西洋式銃隊調練、やや下って嘉永六年のペリー来航、同七年一月の再来航、同三月の日米和親条約の締結調印などを機として、在来の兵制から次第に歩・騎・砲三兵組織の西洋兵制に移行する。その過程で在来の武道は、一つ消え二つ消え、ついに戦列から後退する。その幕引きをつとめたのは、幕府の講武所であり、諸藩の文武学校であった。まず弓術、柔術が脱落し、和流の砲・馬術は洋式のそれに、槍は剣付き鉄砲、すなわち銃槍（ゲベール銃）に変わり、槍術は銃槍術（後に銃剣術）に代替される。弱冠十七歳の吉田松陰は、万邦無比、神国至利の槍を、外夷至鈍の武器に代えるとは何ごとぞと慨歎したが、時の勢いには勝てなかった。

ただひとつ、剣道だけは、日本刀とともに遊撃隊にうけつがれ、近代軍隊の中で、太平洋戦争の終わりまで残る。つまり剣術は、明治以後は実用戦技とスポーツの両面をもちながら終戦を迎えるわけである。

武道が左文右武として文とともに武士の必須の教養視されるにつれて、体系的、思想的、理論的な裏付けが要求されてきた。初期の流儀は、その秘密主義とも関連して、神道、仏教、道教、陰陽五行説などの援用がみられた。それらは多くの場合、技法そのものの奥秘を極めたり、流儀を奥ゆかしくするためのものであったが、石舟斎、宗矩、沢庵などの伝書や兵法書には、古歌、中国の兵家の思想、儒教思想などをもとり入れて、儒教を中軸とする江戸幕府の政策への同調がみられる。これに対して、純粋に儒教的な武道論を試みたのは、藤樹、羅山、益軒、一斎などの儒学者であり、それは、彼らの武士道論の中に見ることができる。また武備、国防の立場から武道を論じた徂徠や子平、信渕などもある。武芸者としても一流、学問教養でも群を抜いた人物の武道論としては、静山などがあげられよう。



明治のころの撃剣会（綿谷雪氏蔵）

よく引用される山本常朝の『葉隠』は、武士道書には違いないが、むしろ大久保彦左衛門の『三河物語』のごとく、元禄以後の軽薄化し、世俗化した鍋島武士に対する教戒書である。文中に柳生宗矩に関する説話の散見されるのは、常朝の伯父村川専右衛門が、鍋島家支藩、小城藩主元茂の家老であり、元茂が妾腹ながら佐賀藩主鍋島勝茂の長男で、十五歳から宗矩の指導をうけ、宗矩門下大名中の逸材として、その子弟関係は三十余年に及び、父勝茂とともに宗矩から、「兵法家伝書」を与えられていて、柳生新陰流は鍋島本・支藩を通じての御流儀であったためであろう。常朝は、武道は「げす流」でもよい。端的に用にたてばじゅうぶん、仏聖の教えなどをかりて、工夫をこらす必要はない。ただ「歯がみをして踏み破る」覚悟だけでじゅうぶんと言っているが、禅僧湛念に師事した常朝は、宗矩の剣禅一如の思想を否定したわけではなく、むしろ宗矩の精神主義の武道観に同調している。

さて益軒等儒者の武道論は、武徳と武芸の両全を理想とし、それがかなわぬときは武徳をとれとしている。このような武道観は、そのまま、藩学や幕府講武所の「掟」として指示されている。

万延元年二月三日、江戸小川町の講武所の剣槍稽古場に掲げられた「掟」には、

一　武を講ずるの肝要は、弓・剣・槍の芸を学び、礼儀・廉恥を基として、武道専可㆑致㆓研究㆒事

一　生質不器用にして、武芸を習熟する事能はず候共、五倫の道に叶、行状正敷（ただしく）候得ば恥辱とすべからざる事

と、今日流に言えば、武道は道徳であり、よい人柄を身に付けることが第一であるとしている。

今日、かつての対人的型武道は、古武道と総称されて保存振興がはかられており、講武所や藩校から、姿を消した柔術は、嘉納治五郎によって近代化され世界的な発展をみる。また嘉納が見送った柔術の一領域は、植芝盛平により合気道として体系化され、さらに大塚博紀によって空手と融合され、和同流として発展する。弓道、薙刀、杖道、居合道などは、いずれも古流とともに現代武道として幅広い組織のもとに行われている。

（日本武道学会会長）

「寛永御前試合」のウソとマコト

青柳武明

まず九年説

大師は弘法、祖師は日蓮の類で、御前試合といえば「寛永」と、大方の相場は決まっているが、実は、これがはなはだ怪しい存在なのである。

明治以後の講談本は論外として、江戸期における「寛永御前試合」の種本には二種あり、試合の日取りも寛永九年十一月十一日と、同十一年九月二十一日とに分かれている。

順序として九年説の方から片づけるが、こちらは『寛永武術御上覧之記』と称するものが種本で、これは明治二十六年発行の「風俗画報」五十六、七の二号にわたり「寛永剣術上覧」なる題名で、活字化もされて居り、あえて珍とするには足りないが、念のため、最初の部分だけを掲げておく。

「寛永壬申年（九年）十一月十一日、武術御撰広芝にて上覧、御稽古場間口五間、奥行拾間なり。上面大久保彦左エ門殿、左之方柳生但馬守殿、右は小野次郎右エ門殿、白の釆を持、上下なり。

上覧人名

御菓子頂戴の上、御庭の雀口はしの根へ針を打込

伊庭如水軒（身丈六尺一寸）

同雀の右の足を小松の木へ縫付る

浅山一伝斎（同六尺）

伊庭、浅山両人扇面を持出る。互に要を指（さし）暫らく白眼合（にらみあい）居る。如水軒持たる扇をはらりと一間開く、また暫してはらりと一間開くとたん、一伝斎の扇開く。伊庭はヤッと云て打、一伝斎身を替して後へぬける。如水軒まけなり。」

以下

（竹内加賀之助　（朝比奈弥太郎
（井伊直戸　初鹿野伝右エ門
（荒木又右エ門　（仙台政宗
（宮本無佐四　（秋元但馬守
（中條五郎兵衛　（大久保彦左エ門
（樋口重郎兵衛　加々爪甲斐守
（難波一藤斎　羽我一心斎
（金井半兵衛　吉田一刀斎
吉田初右エ門
石川軍刀斎巖龍
松前帯刀

と組合表を掲げ、そのおのおのに居住地、年齢、身長から勝負の詳細を、伊庭・浅山の場合と同様の筆法で記している。

この書は、観戦記の奇妙さを問題にするまでもなく、だいたい、寛永九年なる年は、正月二十四日に前将軍秀忠が他界し、家光は服喪中ゆえ、かような派手な催しは行われるはずがなく、日取りの設定からして無理で、出場者に至っては、いまだ誕生せぬ伊庭、関口、渋川や、故人となった朝比奈、実在せぬ井伊、石川、吉田一刀斎などを平然と並べる無神経ぶりで、取るに足らぬものであることは、一目でわかる。ただし、興味を主体とする講談は、もっぱらこれによっているようだ。

十一年説の謎

さて、次に十一年説の方だが、これは「剣道上覧之写」と呼ぶ、至極簡単なものが土台になっている。内容は

「寛永十一甲戌年九月二十一日
徳川家御三代目将軍
家光公御代於吹上
上覧所剣道立合面々

負（下谷御徒士町）井場是水軒　負（三代目）堀尾山城守
浅山一伝斎　（同断）菅沼新八郎

負（播州之住 仙台藩中）竹内加賀之輔　負（芝高輪 紀州郷士）渋川幡龍軒
由比直人　関口弥太郎

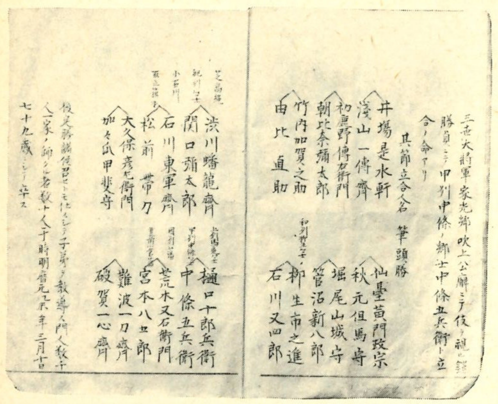
鎧勝負 仙台黄門正宗　打合（因州藩中浪人）荒木又右エ門
負 秋元但馬守　（小倉藩中浪人）宮本八五郎

負（和州柳生之住）柳生市之進　打合（上州間庭之郷士）樋口十郎左エ門
（御本丸御小納戸）石川又四郎　（甲州中条之郷士）中條五兵衛

打合（江戸小石川）石川軍東斎　打合（備中之住郷士）芳賀一心斎
（御取立御旗本）松前帯刀　（遠州三雲之郷士）難波一刀斎

鎧勝負 大久保彦左エ門
負 加賀爪甲斐守

以上」



「樋口家系」に載っている「御前試合立合人名」（樋口定広氏蔵）

とあるだけで、観戦記はなく、一見素朴な感じを与えるだけに、かえってもっともらしく映り、日取りの方も一応無理なく出来ているが、既記のごとく、いまだ胎内にも居らぬ伊庭（井場）や関口が出場しているし、宮本八五郎にいたっては、実録本の作者が作り出した武蔵の庶子で話の外である。相手の荒木も、このころは仇を追って近畿の各地を転々の身で、はるばる江戸まで出張の余裕などはない。

こうした矛盾に気付いた人は、過去において も無かったわけではなく、志賀理斎の子で、原念斎の養子となった徳斎などは、その先達と看てよかろう。彼は弘化元年自序の『先哲像伝・武林伝』中の柳生三厳の項に「近頃撃剣師に名を得る、樋口重郎兵衛塾生某より、予が好事の資とて送らる古書一葉あり、真疑ハしらず、珍らしけれハ此に記す。三厳の門人又右エ門（荒木）の名氏あれハなり、其書左のごとし」と前置きして「剣道上覧之写」とほぼ同様の勝負付を載せているが、ただ人名の点に多少の差異が見られ、由比直人を直介、渋川幡龍軒を幡龍斎、石川軍東斎を東軍斎、樋口十郎左エ門を十郎兵衛とし、最後の「以上」が「右之通御日記有之」と、恐ろしくいかめしい文句に変わっている。

ところが、著者徳斎は、欄外に「此事、予疑ところ多しと覚申候故、伊庭家に聞合せし処、果して虚作なりとの話也、左も可有之。是水軒、十一、二歳の時ならでは年代不合と思ひて聞合せし処、初而瞭然たり、可笑話の為、記し置く」と細字の書き入れをしているのである。せっかくの好意として一応紹介はしたものの、彼は最初から疑問を持っていたのだ。それにしても「笑うべき話のため記しおく」は手厳しい。正保三年生まれで、寛永十一年は生前十六年の是水軒を「十一、二歳の時ならでは年代不合」とした調査の粗雑さはあるにせよ、その慧眼は認めてよいだろう。

樋口家資料の出所

徳斎の紹介した資料が、馬庭念流の正統、上州の樋口家から出たものであることは、前記の通りだが、しからば、いかなる経路によって「剣道上覧之写」が同家の手に渡ったものであろうか。

樋口家では、大正十一年、家史『樋口武勇伝』を編述し、昭和十一年には、その改訂版『念流の伝統と兵法』を上梓しているが、両書とも、十一世樋口定勝の項に『先哲像伝』と同じ組合表を掲げ、末尾は「右在政府日記中故抜抄」となっている。

この『政府日記』また『先哲像伝』における「御日記」なるものが曲者で、資料としての権威づけには、すこぶる効果的な文字だが「上覧之写」には単に「以上」とあるだけで、他の記載は、いっさいない。恐らく、二、三の手を経る間に、書き加えられたものと思われる。日記ならば、月日を追う形式が普通で、ことさらに「三代目将軍家光公御代」と断る必要はないはずである。

昭和十一年『念流の伝統と兵法』が刊行された直後、筆者は樋口家の高弟某氏に、御前試合の記録について、何か言い伝えはないか尋ねてみたところ、同家十四代定喬は、いたく松平定信に愛せられ、しばしば、その私邸に招かれていたが、一日、昨今奇なるものを入手したからと、あの勝負付を示されたので、特に許しを得て手写したものだとの回答を得た。定信といえば「文武と言うて夜も寝られず」と、当時の人士に悲鳴をあげさせた本人である。そこに、こうしたものの誕生する素地があったわけで、しかも、彼が老中時代の寛政三年十月には、左のような、お達しが出ているのである。

「此度布衣以下御役人并寄合之面々武芸、且御番衆小普請迄、鎗剣柔砲術之内、上覧可被遊旨被仰出候。尤御目見以下之者ハ、若年寄衆御見分有之候旨、対馬守殿（安藤）被仰渡候。右ニ付別紙書付之通、皆伝免許印可之分御取調、否十一月中、拙者共江御申聞可有之候。此段不洩様御取調御差出可有之候　以上

十月

中川勘三郎

森山源五郎

（別紙略）」

どうやら寛永十一年説の方は、この「お達し」に焦点を合わせた可能性が強い。

家光将軍は、柳生の薫陶よろしきを得たこともあって、すこぶる武芸を好み、御前試合もたびたび行ってはいるが、最も頻繁だったのは、彼が没する慶安四年で『徳川実紀』によれば、病中の気分転換が目的であったという。もし多少でも事実らしく見せる気があるならば、作者は「慶安御前試合」とすべきを、ことさらに「寛永」としたのは、幕藩体制が安定期に入った歴史的背景を考慮してのこともあるだろうが、存外「寛政」と「寛永」が音感的にすこぶる似かよっているところからする、江戸人の洒落っ気によるものかも知れない。

古老などの話によると、こうした悪戯の犯人は、ほとんどお城坊主どもであったというが、彼らは「濁れる田沼今ぞ恋しき」の落首が示すごとく、温泉暮らしのような田沼時代から、定信となって、一気冷水へ叩き込まれたような激変ぶりに、忿懣やるかたなく、せめてもの腹いせに、こんなことで定信らを担ぎ、陰では舌を出して、わずかに溜飲を下げていたものだろう。

天保御前試合

寛政五年、定信が隠退し、文化・文政の爛熟期を経て、今度は定信の私淑者、水野忠邦の老中就任により、町人天下から武士天下に引き戻そうとした彼が、意識的に武芸熱を煽ったこともあって、御前試合も、かつて例を見ないような、大がかりなものが、天保九年（二回）を皮切りに、同十二年（二回）、同十三年、同十五年と挙行された。中でも十五年のものは、三月七、八の両日にわたり、剣術十八流四十三組、槍術十四流三十五組、柔術六流八組、外に居合、杖、捕縄、十手、手裏剣各一組という空前の豪華陣で、後に講武所で鳴らした男谷精一郎なども出場し、巷の噂もなみなみでなかった。

こうした情勢を睨んで、久しく好事家どもの書庫に眠っていた「剣道上覧之写」に、不断な扮飾（ふんしょく）をほどこして登場したのが『寛永武術御上覧之記』で、それが市井に広まったのは、多分、貸本屋などの手によったものと思う。ここに、ただ注目すべきは「上覧之記」には出ていない、反体制側の大立物由比正雪の股肱、金井半兵衛と吉田初右エ門が、忽然「御上覧之記」に姿を現したことで、これは水野内閣に対する、声なき声の表現と受け取れぬこともない。

さて、寛永十一年説が云々される場合、必ず引き合いに出される資料に、勝海舟編するところの『陸軍歴史』巻二十八に「今該時の日記を得たれば」として、紹介している御前試合の取組表がある。日時に一日のズレがあり、伊庭を井場泉水軒としているが、これは転写の際の誤りと見るべきで、明らかに樋口家のものと同系統である。

『陸軍歴史』は海舟を主任に、旧陸軍奉行浅野氏祐、旧大坂奉行竹内帯陵、旧奥右筆山下文斎、旧軍艦奉行木村芥舟、旧軍艦頭伴鉄太郎等の協力により完成したものであるが、以上の人たちは、肩書の示すように、いずれも、かつての御歴々であるだけに権威には弱い面がある。恐らく彼ら「御日記」の文字に眩惑されて、何らの疑念をも抱かず、考証を加えず無條件に採用したものであろう。才物勝といえども、所詮は幕臣である。

（史家）

立川文庫と少年講談

尾崎秀樹

立川文庫の創刊

誰にでも思い出の書物というものはある。それは一冊の本であったり、雑誌であったり、人それぞれによって違うが、世代による共通の書籍や雑誌であることも少なくない。

戦後の世代にとっては、それは子どもまんがだ。昭和前期の子どもたちは「少年倶楽部」を愛読したことに共通の思い出をもっているし、大正期になると立川文庫がそれにあたる。

立川文庫は正確にはタツカワ文庫と読むらしい。その発行者の立川熊次郎もタツカワである。しかし一般にはタチカワでとおっており、発行元の立川文明堂も呼称にはあまりこだわらなかった模様である。

この立川文庫は明治末年から大正十年代へかけて、関西を中心に四国、九州から、関東地方に到る地域で、ひろく読まれたポケット本だった。タテ十二・五センチ、ヨコ九センチの小冊子で、巻頭に長谷川小信の口絵を入れ、本文は二、三百ページ、六号の総ルビを用いているのが特徴だった。

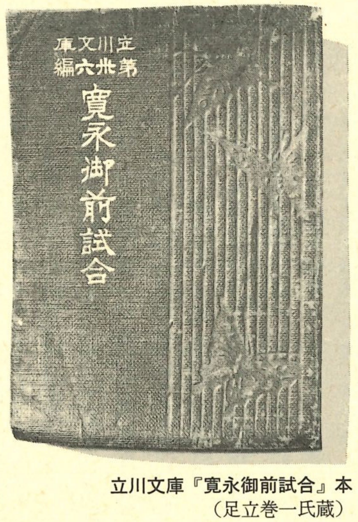
表紙は七色の布クロースで、各篇によって色を変え、右の半分に揚羽蝶の紋様をカラ押し、左半分に題名などを白で刷り、背文字を金にしただけでなく、天金を打って、子どもむきのポケット本としてはやや不相応なこしらえだった。

定価は一部二十五銭、ただし旧本にいくらかの金をそえてもどすと、新本と取り替えてくれるシステムになっており、小遣いの少ない少年店員でもつぎつぎに愛読することが可能だった。

すでに述べたように、大正期に少年時代を過した世代にとっては、忘れることのできない豆本で、明治四十年に生まれた湯川秀樹は、つぎのようにその思い出を述べている。

「中年以上の人なら、たいていの人が思い出を持っているであろう、立川文庫。今日の文庫と同じくらいの大きさだったろうか。紙質のひどく悪い本だが、表紙は人目をひく鮮やかな色刷り。『真田十勇士』とか、『猿飛佐助』とかいう本が何十種も、全部表紙を見せて並べられていた。——立川文庫は家の近くの縁日でも、売っていた。時々友だちから借りては、読んだものだ。」（『旅人』）

湯川秀樹のような中産階級の子弟も読んだが、どちらかというと学校など行けない貧しい家庭の子どもで、給仕づとめやいわゆる丁稚奉公をしていた少年たちが多かった。彼らはとぼ



立川文庫『寛永御前試合』本
（足立巻一氏蔵）

しい小遣いの中から本代をひねり出し、それで立川文庫を買いもとめて、むさぼり読んだのである。それは大人たちに強制されたものではなく、自分から選んだ本だけに、禁断の木の実を味わう喜びさえあった。大正教養主義の影響のつよかった子ども雑誌や児童文学にくらべれば、〝毒〟さえふくまれていたのだ。

立川文庫の第一篇は『諸国漫遊・一休禅師』、以後二百篇近いものが続刊された。著者は雪花山人などの署名を用いているが、個人ではなく、山田敬を中心に、彼女の長男の阿鉄、三男の顕、四男の唯夫、それに孫にあたる蘭子、また敬と同郷の海軍中佐の息子、中年の失業者などまで加わった集団創作だった。

山田敬は四国今治の回船問屋日吉屋の一人娘だったが、旅まわりの講釈師・玉田玉麟（後の二代目玉秀斎）を愛し、四人の子どもをおいてその後を追った。そして貧乏講釈師の妻としてつくし、速記者との結びつきを密にするため、長女の寧を郷里からよびよせ、その速記者に嫁がせたりしている。しかしうまくゆかず、窮余の策として思いついたのが書き講談、つまり速記者をわずらわさずに直接、書き下すやり方だった。

はじめは玉秀斎の語るのを阿鉄が筆記したが、やがてプロットをもらって書き下すようになり、一日五、六十枚のスピードで集団創作したという。

猿飛佐助の誕生

立川文庫の魅力は何といっても講談などでおなじみの英雄豪傑が、縦横無尽に活躍する内容にあった。『一休禅師』を皮切りに、『水戸黄門』『大久保彦左衛門』『荒木又右衛門』『真田幸村』『岩見重太郎』とつづき、戦国時代の武将、江戸期の剣豪、頓智咄、武勇伝、漫遊記など、いろいろあるが、なかでも人気をあつめたのは、猿飛佐助など忍術名人の活躍篇だった。

『猿飛佐助』は立川文庫の第四十篇に収められている。刊行されたのは大正三年だが、これは虚構の人物だった。真田十勇士のうち、由利鎌之助、三好清海、為三入造などの名は『真田三代記』に出てくる。また文政八年書写の大坂夏陣図中に、真田大助、根津甚八、由利鎌之助と並んで、佐助の名も記されているといわれるが、それはともかく、猿飛佐助の名まえが広く知られるようになったのは、立川文庫による虚構化以後であろう。

山田阿鉄らを中心とした創作集団は、『真田三代記』と『西遊記』をミックスし、『西遊記』の三蔵法師を幸村に、孫悟空を佐助に、猪八戒を清海入道に、沙悟浄を霧隠才蔵に見立てて、真田三勇士、さらには十勇士をつくりあげた。

この過程は敬の孫にあたる池田蘭子の自伝的小説『女紋』にくわしく述べられているが、大正中期以後の忍術ブームはこの立川文庫の猿飛佐助誕生によって火をつけられたといっていい。

立川文庫の中の佐助は、信州鳥居峠のふもとに住む浪人・鷲尾佐太夫の息子という設定だ。やがて戸沢白雲斎について忍術を学び、真田幸村に仕えて紀州の九度山へこもり、幸村の命令で三好清海入道と二人で諸国の動静をさぐるために漫遊に出たりする。真田党の一員として関東方を悩ます話は、今さら紹介するまでもないが、真田十勇士の活躍篇をはじめ、立川文庫にはアンチ徳川の意識がつよく感じられる。これも豊臣方にたいする大阪人の判官びいきのあらわれだろうか。おかげで徳川家康は以後ながく〝狸おやじ〟の異名をつけられることになる。

また剣豪ものをふくむ武勇伝もかなりな数にのぼる。すでにふれた荒木又右衛門や岩見重太郎のほかに、宮本武蔵、堀部安兵衛、柳生十兵衛、塚原卜伝、関口弥太郎など、有名な武芸者がつづいており、寛永御前試合、豊公御前試合など御前試合ものもふくまれる。

あとになるにつれて既成の人物以外にさまざまな新しい虚構の人物が加わり、次第に話自体もパターン化してゆくが、忍術名人佐助を創造しただけでも、立川文庫は意義があった。

東京の下町に生まれ、そこで育った清水幾太郎は、小学校へ入ってまもなく、猿飛佐助という〝偉大な人物〟に出会ったことを、きわめて印象的に回想している。「若し私が山の手の家庭に生れていたら、そして子供の教育に特別な注意を払う家族の間にいたら、忍術に凝ったり立川文庫に夢中になったりすることは到底許されなかったに違いない。併し下町の私の家庭では幸いにして誰も私に向って文句を言いはしなかった。荒唐無稽な物語を耽読したために、私が少し堕落したということもあろうが、若し反対に叱られて、立川文庫の代りに有益な科学的な、併し余り面白くない書物を与えられたとしたら、私は恐らく書物というものが嫌いになったであろう。私は立川文庫のために書物一般というものが好きになったと言うことが出来る。」（『私の読書と人生』）　立川文庫は速記講談から書き講談となり、さらに大衆文学の誕生をうながす先駆的役割をはたした。そしてこれまでの勧善懲悪的なモラルを克服して、新しい明朗型のスーパーマンを創造した上方の子ども文化だったことに特長があったといえる。

少年講談の魅力

子どもを中心とした庶民的マス・メディアだった立川文庫と別に、大人の世界ではいろいろな貸本屋向けの講談速記本が刊行されたが、それらを集大成した観があったのは、大正四年にはじまる博文館の長篇講談だった。仲間うちでは㊫の長講とよばれたこのシリーズは百数十冊にのぼり、それぞれに演者名が銘記されていた。立川文庫でおなじみの武勇伝や忠義鑑のほかに、任侠ものや騒動もの、妖婦ものなどがまじっているあたり、大人向きの趣向がつよいが、猿飛佐助なども加えられているのは御愛敬だろう。

昭和期に入って立川文庫の伝統を新しい粧いで生かしたのは、講談社の少年講談だった。昭和六年秋から太平洋戦争中へかけてつぎつぎに刊行された。

その皮切りとなったのは『塚原卜伝』で、『近藤勇』『左甚五郎』とつづいた。めぼしいものとしては『笹野権三郎』『堀部安兵衛』『孫悟空』『岩見重太郎』『寛永三馬術』『里見八犬伝』『塙団右衛門』『由井正雪』『山中鹿之助』『弥次喜多道中記』『水戸黄門』『太閤秀吉』『一休和尚』『柳生十兵衛』『猿飛佐助』『荒木又右衛門』『田宮坊太郎』『雷電為右衛門』『梁川庄八』『曽呂利新左衛門』『大石良雄』『大久保彦左衛門』などがあげられる。

立川文庫は文字どおりの消耗品だったが、少年講談は布装、ハードカバー、四六判のりっぱなつくりで、ここにも講談社の少年ものにたいする意欲が感じられた。ただ口絵を巻頭に掲げ、総ルビで組むやりかたは、立川文庫を踏襲していたが、文体はさすがに新しくなっている。立川文庫で評判になった諸人物はほとんど網羅され、猿飛佐助もぬかりなく加えられているが、少年講談で新しく登場するのは近藤勇であろう。

新選組についての評価がたかまるのは、戊辰から六十年を経た昭和三年前後のことで、平尾道雄『新選組史』、子母沢寛『新選組始末記』の二著がその先鞭をつけた。文学の分野では中里介山の『大菩薩峠』、行友李風の「月形半平太」（戯曲）などがあったが、子どもの世界で新選組がクローズ・アップされるのは、大佛次郎の『角兵衛獅子』からであり、鞍馬天駒のライバルとしての近藤勇の存在が脚光を浴びるようになる。少年講談の中に『近藤勇』が加えられ、それも第二回配本といった力の入れようがみられるのは、おそらくそうした人気と無関係ではあるまい。

しかもこれまでの俗説の中の新選組物語とは違い、一応、歴史に照らしてまとめているのは、平尾道雄や子母沢寛の研究をふまえたものと思われる。ただし芹沢鴨の暗殺のくだりは、女性と寝ていたところを殺されたと書くのははばかられたのか、島原から屯所へもどる芹沢を、近藤が待ちぶせして斬り倒したことになっている。

近藤勇の天然理心流の剣の冴えが、神道無念流の芹沢の豪剣を圧するわけだが、血煙りをあげて倒れた芹沢のとどめを刺した後、近藤勇は「芹沢氏、天下のためだ、恨まず成仏してくれよ」といって、ホロリと熱い涙をおとす。

私はむしろこの少年講談の世代に属するが、これはいわゆる「少年倶楽部」を愛読した世代であり、同誌に連載された伝奇時代小説などを熱愛したものである。吉川英治の『神州天馬俠』、大佛次郎の『角兵衛獅子』、高垣眸の『怪傑黒頭巾』などを夢中で読みながら、その一方、少年講談にも同様な興味をしめしたのだ。

大日本雄弁会講談社編とあるだけで、筆者名はあきらかでないが、高垣眸の直話によると、少年講談の一冊をひき受けたことがあるという話だったので、それから想像すると意外な書き手が覆面のまま執筆していたのかもしれないのだ。

（評論家）

武芸講談の世界

吉沢英明

ここに宝井馬琴講演・今村次郎速記『寛永勇士武術の誉』と題した講談速記本がある。本文の一節に二年越しの講談とあり、恐らく最初は新聞に連載されたものであろう。完結後直ちに一本として明治三十二年に上田屋が出版、続けて版権を譲り受けた大川屋が同三十六年に再版、翌年には三版を出した。前後編二冊、合わせて五百五十九頁ある。さらに本書は大正年間大川屋が創刊した「八千代文庫」にも収録されている。すなわちその三十二が『寛永勇士御前試合』、三十三が『御前試合武術の誉』である。

ことに前書は昭和十六年に四十版が出ており、実に多くの人々によって愛読されてきたわけである。

最初に挙げた『寛永勇士武術の誉』では次の武芸者が御前試合に登場する。中條五郎兵衛—山田真龍軒、難波一刀斎—金井半兵衛・吉田初右衛門（両者は正雪の名代）、朝比奈弥太郎—伊藤弥五郎、宮本武蔵—山田弥十郎、伊達正宗—秋元但馬守（これは番外の飛び入り）、井伊直人—竹内加賀之助、宮本八五郎—荒木又右衛門、伊庭如水軒—浅山一伝斎、宝蔵院覚禅法—大蔵院宮内、吉岡又三郎—毛利元達、樋口十三郎—穴沢主殿助、高田又兵衛—堤山城守、渋川伴五郎—山本賢東二、大久保彦左衛門—秋山修理（番外）、羽賀井一心斎—兼松又四郎以下旗本十人。

あら筋は試合の模様、各人の伝がいわば豪傑銘々伝として展開し、最後は一同が盃を賜わってめでたしとなる。これを馬琴は武術流祖録、俗に寛永名人揃であると述べている。後編の序に加藤みゝづ記として「元来寛永武勇鑑なるものは今を去る百余年前文化年間博学を以て知られたる講談師伊東苑生なる者が事実を探って初めて講談に脚色み、今日まで盛んに持囃されたもの、演劇に武術の狂言をなす其根本とする処多くは本講談に依るなり」とある。加藤みゝづとは明治期に活躍した講談速記者の一人加藤由太郎であり、講談については精通しているはずであるが、この序文はいささか疑問である。文化年間の釈師といえば彼の軍記物で知られた伊東燕晋（伊東派の祖）である。苑生なる人物はその門葉にも見い出せない。したがって苑生とは伊東燕晋に仮託したもので実在ではあるまい。また文化年間に『寛永武勇鑑』が存したとは考え難い。

この講談の成立期につき故河竹繁俊氏は、多くの講談は実録本が先行するのに、これにはそういった先行の実録本らしきものさえ存在しないとして、あるいは天保の大試合の後に考案されたものかと述べておられる（実録巷談新書『寛永御前試合』の解説による）。一方綿谷雪氏は種々の考察の後、幕末ごろか、むしろ明治に入ってからであったろうと推測されている（『続・江戸ルポルタージュ』所収「珍説寛永御前試合」）。

明治二十年代初期の講談番付の類から「武者揃」「御前試合」を演ずる釈師が散見する。講談には『享保五勇士真剣御前試合』（山崎琴書堂）もあることゆえ御前試合即寛永と決めるのは早計である。しかし後述する大龍本もあり、二十年代から盛んに演じられていたことに誤りはないと考える。下って松林知鶴は仙台の偕楽館で「寛永武勇伝」を演じている（「奥羽日日新聞」明治三十年六月九日）。同三十四年の「毎夕新聞」に桃川実の「寛永御前試合」が、三十七年の「坂東日報」に真龍斎貞水の「三十六番寛永御前試合」がそれぞれ連載されている。講談の全盛期は明治三十年前後であるが、そのころの寄席案内にも「寛永武勇」「寛永大試合」を演ずる釈師がしばしば登場しているのである。



『寛永勇士武術の誉』本の表紙

次に田辺大龍（のんのん南龍門、明治四十四年歿）講演・今村次郎速記『寛永御前試合』（明治二十八年求光閣）がある。馬琴に比し登場する武芸者が少なく、人物にも異同があるが、最大の特色は馬琴にない柳生宗冬と由井正雪の一戦である。すなわち将軍指南役宗冬と町道場の正雪との最後の一戦が講談のヤマ場として構成されており、明らかに馬琴とは異なる演出である。なお、これ以後の講談は大龍型を骨子とするのが普通である。

そもそも講談は話芸であり、時の演者により改変されつつ成長するものである。ゆえに文学作品と異なり正確な成立年代を知ることは困難である。速記本としては大龍がやや先行するようだが、成立年代も先行するとは限らぬのである。速記されなかった古い型の御前試合があったかも知れない。海舟の『陸軍歴史』所収の試合記録（今は虚構であることを問題にせず）には宗冬と正雪の一戦は見えない。講談の御前試合も正雪の登場せぬ馬琴型が先行し、後に話をおもしろくするために多くの武芸者を「追加公認」して今日に至ったものであろう。旭堂小南陵のごときは塚原卜伝、笹野権三郎、柳生十兵衛、丸橋忠弥等を含む四十数名の武芸者を登場させている。よくぞここまでふくらませたと感嘆せずにはいられぬほど豪華な番付に変身させたのである（小南陵講演・山田都一郎速記『寛永武勇伝』『天下十勇士』『徳川御前試合』『誉の太刀風』『寛永勇士揃』『寛永武勇競』『寛永武勇の魁』の七冊本を明治三十七年前後大阪の柏原圭文堂が刊行、七冊共表題に御前試合の角書を有す）。既成の豪傑伝を随所に取り入れているが、これは「つかみ込み」と称する講談の常套手段である。講談は歴史的に不自然であることは問題にしない。何に笑い、何に泣くのか——大衆の夢によって消長するものである。

大正・昭和期に活躍した大島伯鶴も速記本で見る限りほぼ小南陵の演出法を踏襲している。立川文庫で知られた立川文明堂は大正期に「立川長編文庫」を刊行したことがある。その一冊、玉田玉秀斎講演『天下剣客寛永御前試合』には新たに馬術の曲垣平九郎と弓術の和佐大八との一戦がある。

さて御前試合によって代表される武芸講談につき、神田伯鱗は各派の読物と題して次のように述べている（「講談研究」一の三、昭和二十八年）。まず入門者は修羅場の修行から始めるが、それが終わると武芸物に移る。その種類もお家の芸として決まっており、一龍斎畑は荒木又右衛門、神田畑は宮本武蔵、桃川畑は笹野権三郎、田辺畑は佐野鹿十郎……といったあんばいである。この間の修行で長脇差しもの（侠客物）に向くとか、世話物がよいとか、将来の芸風が出来上がるという。

もちろん真打、名人上手になったすべての釈師が修羅場や武芸物を捨てるわけではなく、生涯それをもって名を残した釈師も少なくない。その一人に四世宝井馬琴がいる。大正十一年三月、時の講談組合は彼の高座生活五十七年の祝賀会を挙行、それを報じた「都新聞」（大正十一年三月二十六日）は彼の履歴を三世馬琴の子で嘉永五年江戸中橋で出生、十四歳で初高座、小琴凌から小麟慶となり明治十三年琴凌、同三十年に四世馬琴を襲名したと記している。幼少より武芸を好み、剣術（直真影流）、柔術（揚心流）、弓術（小笠原流）を修得し、天覧試合に参列したとき（明治二十五年ころ）は三寸的を見事に射抜いたほどである（「読売新聞」大正十三年九月七日）。

宝井馬琴　六月一日より昼間は正午より午後五時迄は天神裏門宮崎亭にて「伊賀の実録」「伊達評定」「太閤記生立」長講三席、夜は午後七時より内本町松屋町通生立お旅境内南陵席にて「寛永武者揃」「日本左衛門」「曽我物語」長講三席を講ずべし、「日本左衛門」は馬琴が最

も得意のものの由。

これは「大阪毎日」大正五年六月二日の記事であり、武芸講談を得意とした馬琴の面目躍如たるものがある。同紙によると翌六年にも来阪し南陵席で「天保水滸伝」「俵星玄蕃」「扇の的——源平盛衰記の内」を演じている。最晩年の大正十四年には一世一代の独演会を神田小柳亭で催したことがある。この時は和漢智将伝として張良、楠公、孔明、幸村の四席を読み分けている（「都新聞」大正十四年十月二十八日）。川柳子は「講釈師見て来たような……」と揶揄するが、虚のなかにあっていかに真を描くか釈師の苦心を要する所である。ここに悟道軒円玉談「芸の創造と名人の用意、人を斬る講談の読み方」（「国民新聞」大正十四年六月十五日）があるので紹介しよう。

初代松林伯円は「吉原百人斬」を得意とし次郎左衛門の斬り方がいちいち替る所に他人の真似の出来ぬ妙味があり、世に「斬る伯円」といわれた。一方初代石川一夢はこれと反対に、斬られる所が巧みで「斬られ一夢」と並び称せられていた。円玉の師二代伯円は沢太郎左衛門に「訥弁の雄弁」といわれた程で、決して達弁でなくむしろ訥弁でしわがれ声の悪調子であった。それを巧みに応用、工夫して名人になったのである。人を斬る所などは己にあう「斬られ一夢」の呼吸を学んで、一つの芸を創造したといわれる。例えば雲切仁左衛門が六之助を殺す場面がある。最初から（刀に見立てた）扇子を釈台の上に置いたまま手に触れず、雲切が六之助を斬る段になっても刀を抜いて斬り付けたともいわず、また斬る形も見せない。いきなり「アッー」と悲鳴を挙げ、左の手で右の肩をおさえながら上半身を投げ出すように前の釈台へ俯しながら「頭ア」といって六之助が雲切に肩口を切られたことを聞かせる。次に左の手を釈台に突いて六之助をおさえた姿の雲切になり「六、静かにしろ、音を上げるな」といいながら初めて右手に扇子を持つから刀に見えて役に立つ。ジタバタ騒ぐより却って凄味があったという。佐野孝氏によるとこれは他の釈師とは逆の型であり、戦後物故した神田伯龍が踏襲した由である（「オール読切」特別大増刊寛永武術くらべ所収「講談の表現法」昭和三十二年）。

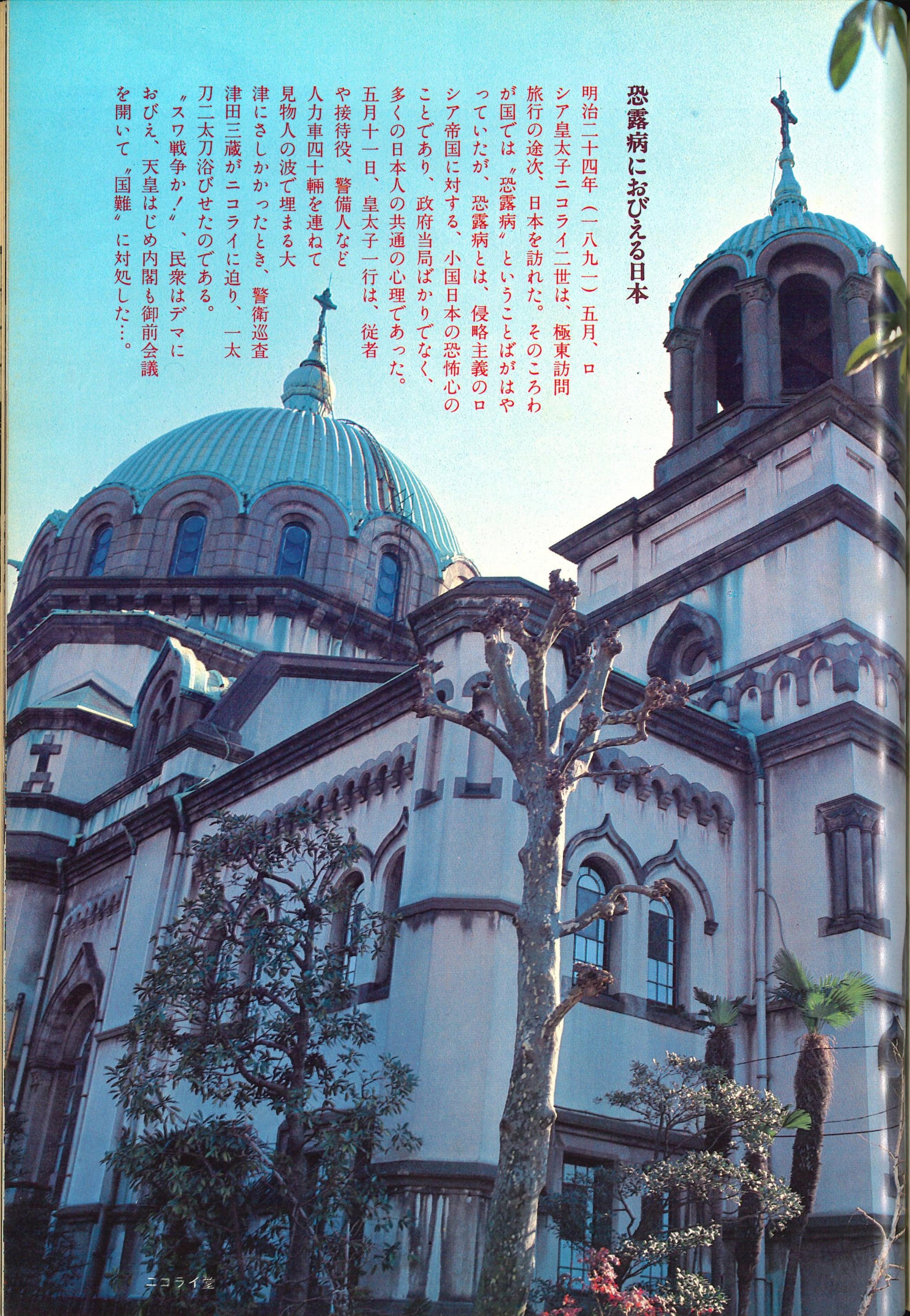
同じような苦心は大菩薩峠で知られた神田伯山（前名桃川如燕）にもある。「講談研究」創刊号（昭和二十八年）に「人を斬る苦労」を寄せているが、文中、言葉の上唯一人の人を斬るにも、その腕を考え、その前後の動きを考え唯一瞬の動きをいかにして真に迫ったものにするか、ということを常に苦労して居るのが、われわれの商売だとある。伯山の得意とした新坂下の決闘（大菩薩峠の内）平手の駈付け（天保水滸伝の内）のそのすさまじい迫力はわれわれの記憶に新しいところである。かつて馬場孤蝶は『明治の東京』で桃川如燕の「三十三間堂誉の通し矢」をある雑誌の速記で読んだが、事実に反すると批難したことがある。田辺南鶴が講談師は歴史家や考証家でないから衒学者にならぬことと「講談研究」に書いているように、「ウソ」でも「ホント」らしく聞かせるのが講談というものであり、芸の力である。またラジオやレコードでは微妙な演出はわからないし、講談速記を読んでも筋はわかるが真の感興は起こらない。あくまでも話芸なのである。

真向梨子割唐竹割、あるいは胴切り、車斬り、奴豆腐に玉露、または賽の目千六本、羊羹屑に切山椒、ザックザックと斬り捨てる……これが釈師の舌頭からほとばしるとき、初めて勇士が眼前に躍動するのである。

最後に講談は衰退しつつあった大正期においても大衆社会と極めて密接な関係にあったことを忘れることはできない。講談関係の雑誌が多数出ていたのは当然であるが、「少年講談」（八年三月号に鬼退治（翠山）田宮坊太郎（円玉）等）、「女学世界」（十四年新年号に烈女お鉄（円玉）鏡栗毛（蘆洲）等）、「主婦倶楽部」（十四年新年号に不破数右衛門の妻（貞山）更科の活躍（馬琴）等）——あらゆる階層の人々に愛読されていた。次郎長伯山の「渋川伴五郎」が「大阪毎日」に連載されたが記録破りの大好評。完結を待たずに日活は、尾上松之助一派を主演に活動化している。

かくして講談はあらゆる大衆文化の淵源として一時代を画したのである。ことに武芸講談は名も無き大衆の夢であり、力でもあった。

（上尾高校教諭）

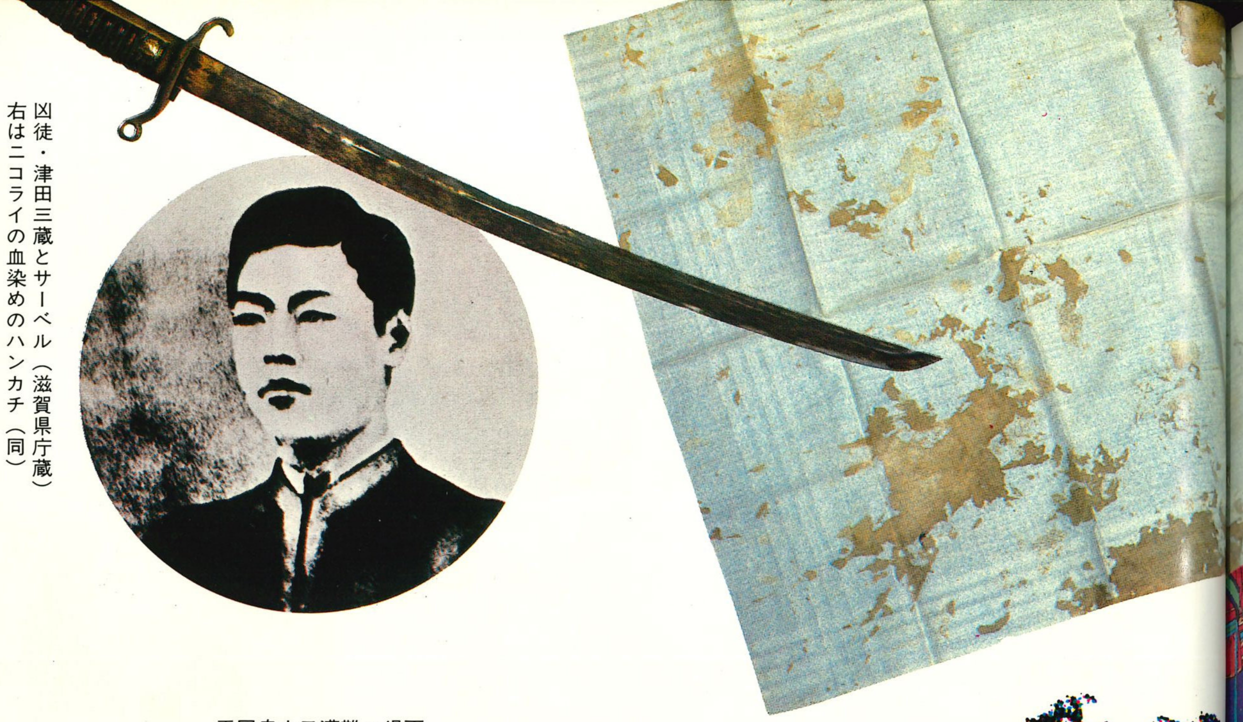


恐露病におびえる日本

明治二十四年（一八九一）五月、ロシア皇太子ニコライ二世は、極東訪問旅行の途次、日本を訪れた。そのころわが国では〝恐露病〟ということばがはやっていたが、恐露病とは、侵略主義のロシア帝国に対する、小国日本の恐怖心のことであり、政府当局ばかりでなく、多くの日本人の共通の心理であった。五月十一日、皇太子一行は、従者や接待役、警備人など人力車四十輛を連ねて見物人の波で埋まる大津にさしかかったとき、警衛巡査津田三蔵がニコライに迫り、一太刀二太刀浴びせたのである。

〝スワ戦争か！〟、民衆はデマにおびえ、天皇はじめ内閣も御前会議を開いて〝国難〟に対処した…。

ニコライ堂

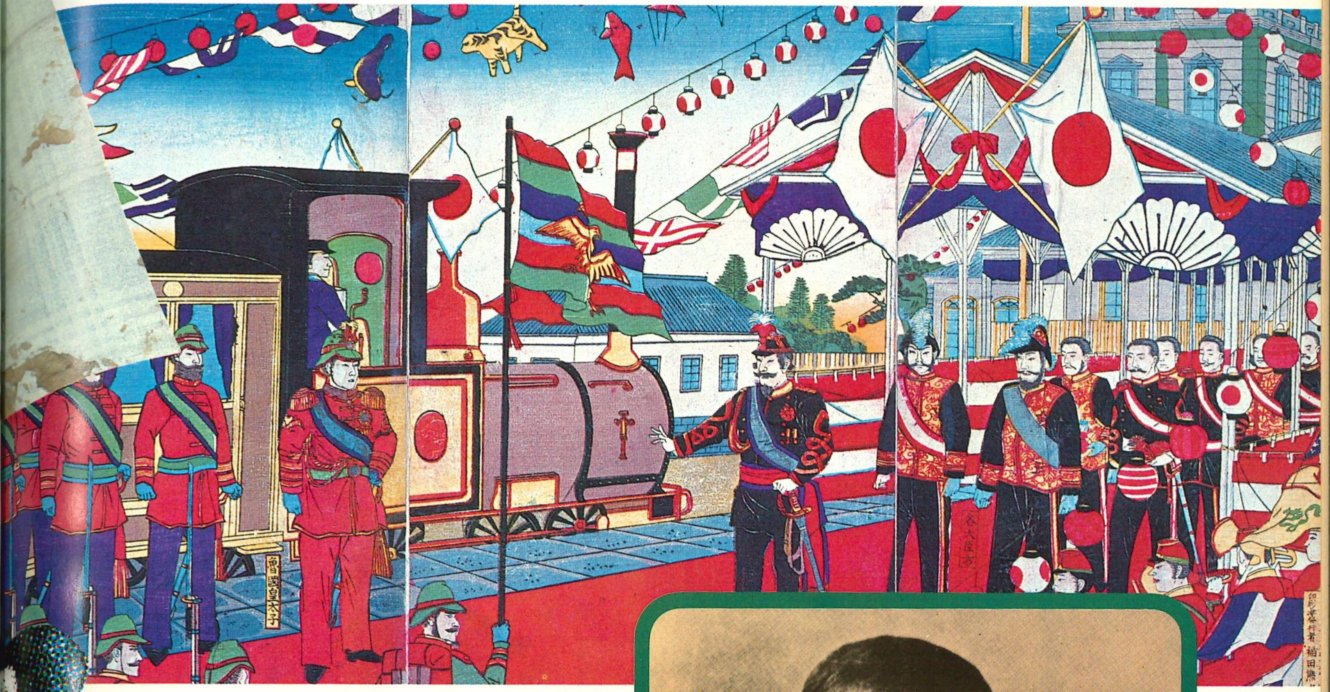


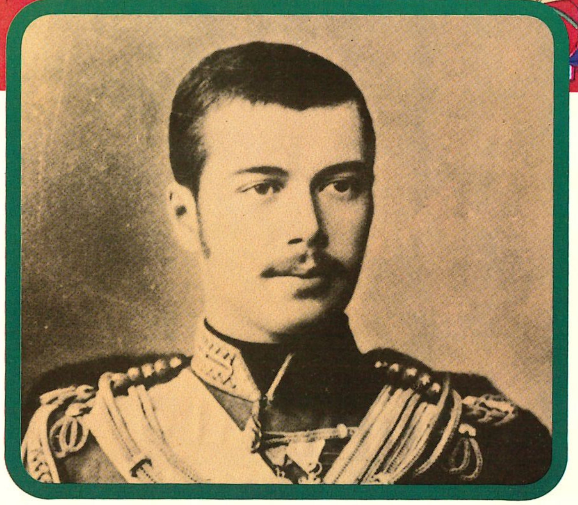
凶徒・津田三蔵とサーベル（滋賀県庁蔵）
右はニコライの血染めのハンカチ（同）



露国皇太子遭難の場面

露国皇太子御着之図（都立中央図書館蔵）





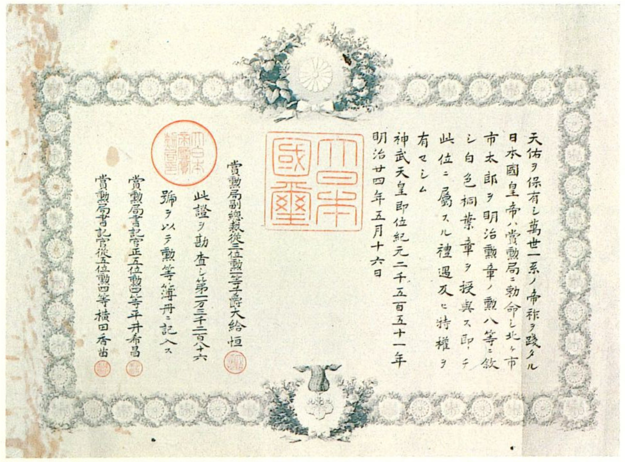
露国皇太子ニコライ

三蔵を死刑にせよ！という圧力のなかで

犯人津田三蔵は犯行の理由を、「露国皇太子は〝大逆無礼〟の人物であり、しかもわが日本を横領しようという野心を持っている。生かして帰すことはできない」と思い、日本刀の切れ味を試したと語った。一種の精神病者であったのである。

明治天皇は事件の翌朝、お召列車で京都に向かい早速ニコライを見舞ったが、皇太子が本国の指令で帰国すると決定すると、神戸まで同行し、汽車に乗るときは手をとらんばかりにし先へ乗せ、煙草の火をつけるなどして丁重にもてなした。

一方、犯人三蔵には極刑に処して応じ、ロシアをはじめ世界にお詫びをすべきだという政府当局は、法をまげてまでも、なにがなんでも死刑にしようとしたが、こうした圧力に抗して、あくまでも法の権威を守る立場をつらぬいたのは、大審院長児島惟謙である。三蔵は、結局、無期徒刑となった。


天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ践ミタル
日本國皇帝ハ賞勲局ニ勅命シ北ヶ市
市太郎ヲ明治勲章ノ勲八等ニ敍
シ白色桐葉章ヲ授與ス即チ
此位ニ屬スル禮遇及ヒ特權ヲ
有セシム
神武天皇即位紀元二千五百五十一年
明治廿四年五月十六日
賞勲局副總裁従三位勲一等子爵大給恒
此證ヲ勘査シ第一万三千二百八十六
號ヲ以テ勲等簿冊ニ記入ス
賞勲局書記官正五位勲四等平井希昌
賞勲局書記官従五位勲四等横田香苗

車夫・北賀市市太郎に贈られた勲八等の贈位書（北ヶ市哲郎氏蔵）




犯人・津田三蔵を取りおさえた北賀市市太郎（左）と向畑治三郎（永井昌二氏蔵）

事件の波紋はひろがる

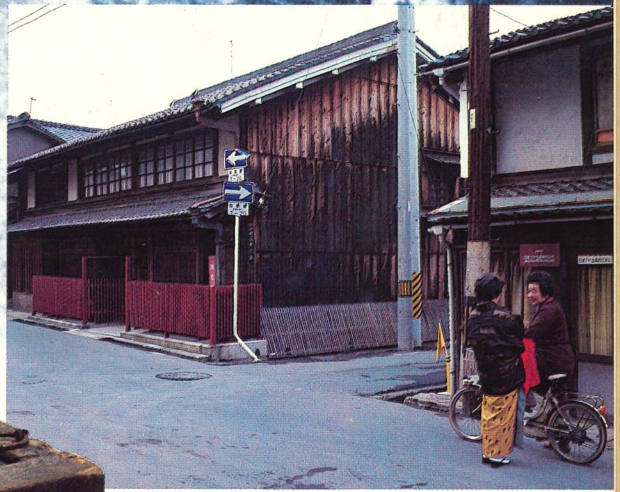
三蔵をとりおさえたのは、人力車夫向畑治三郎と、北賀市市太郎の二人だったが、彼らは日本政府から勲章、恩賜金、年金をもらってにわか成金になり、ロシアからも勲章や年金を贈られ、〝時の英雄〟となり、これがため以後、曲折した人生を送ることになる。

重傷を負った皇太子は、直ちに付近の呉服店で傷の手あてを受けたが、傷は右のこめかみ部分に長さ九センチ、深さは骨に達し、もう一個所は、後頭部に長さ七センチ、深さは骨膜にまで達していた。

事件はこの傷をめぐって展開したのである。



事件発生後に写した大津の現場



現在の大津市の現場付近

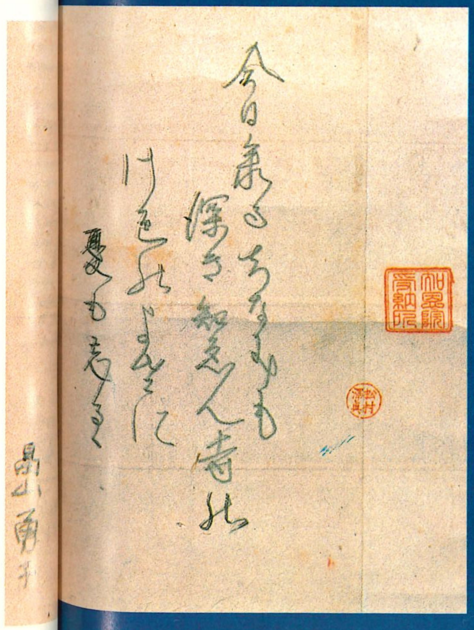


傷ついた皇太子は永井呉服店の店先にあった床几に腰かけて休んだ（滋賀県庁蔵）



京都・末慶寺にある烈女畠山勇子の墓


畠山勇子（京都・末慶寺蔵）


畠山勇子の辞世の和歌（末慶寺蔵）


各地から寄せられた見舞いの電文（滋賀県庁蔵）

国をあげての周章狼狽

全国の学校は休校となり、株式会所、劇場なども休業し宗教団体などは平癒祈願などをし、全国から見舞い電報、手紙などが殺到した。

皇太子が帰国した翌日、日本橋の魚商の奉公人畠山勇子（二十六歳）は、京都府庁の門前でカミソリにより、腹とのどをえぐって自殺した。

理由は、このまま皇太子を本国へ帰しては、日本の将来が危い、自分が死ねば、帰国途中の皇太子が戻って来るかも知れない、またそうでなくても一人の人間が命を捨てることが、贖罪の意味になれば、ということだったが勇子の死は、さまざまの論議をよんだ。

「日本国人の思ふ事小女に同じ故に、日本帝国へ此心をあらはす為此度に至り候間御察し被下度候
内外の御方様」
というのが、遺書の末尾である。

露国皇太子遭難

山本七平

❋やまもとしちへい
山本書店店主 評論家 大正10年東京生まれ 訳書『日本人とユダヤ人』 著書『私の中の日本軍』『比較文化論の試み』『「空気」の研究』『受容と排除の軌跡』

NHK 佐久間 宏



Hatakeyama Yuko

A primeira metade do anno de 1891, o actual Czar das Russias, então simples Czarewitche, visitou o Japão, chegando a Kobe a bordo de um cruzador do seu paiz. Incluía-se no programma da viagem — se a memoria me não falha — a excursão por terra até Tókyô, a capital, onde o hospede seria recebido pelo Imperador, com as altas distincções que a sua pessoa requeria. E' certo que, no dia 11 de maio, o Czarewitche e a sua comitiva iam jornadeando de Kyôto para Otsu, usando de meio de transporte o modesto *kuruma*, o carrinho puxado por um homem — no caso que aponto, por dois homens, como é do estylo em longas caminhadas. — A certa altura, um policia da escolta que acompanhava os viajantes desembainhou o sabre, arremettendo contra o principe e ferindo-o na cabeça; escapando o Czarewitche de ser assassinado, graças á dedicação dos dois homens do *kuruma*, os quaes corajosamente subjugaram o aggressor. O ferido, depois de receber o primeiro curativo, voltou para Kobe, para bordo do seu navio, desistindo de ir a Tókyô. O Imperio cahiu em consternação. O Imperador apressou-se em vir a Kobe, apresentando em pessoa ao Czarewitche a expressão do seu pesar. Logo após, o cruzador suspendeu ferro, abandonando as aguas do Nippon.

Assim se passou o facto. Como detalhes interessantes, convem notar que os humildes conductores do *kuruma*, largamente recompensados pelo governo russo e com os peitos cheios de medalhas, tornaram-se uns notaveis personagens. Quanto ao criminoso, Tsuda Sanzô, foi preso, processado, condemnado, encerrado por toda a vida n'um presidio; ligeira punição, porque morreu mezes depois.

Por mais estranho que pareça, ha quem defenda Tsuda Sanzô, que fôra, annos atraz, um soldado exemplar, um veterano da guerra civil de Satsuma, onde se distinguiu pelos seus brios. Curiosamente, Lafcadio Hearn, o delicadissimo narrador de cousas japonezas, diz n'uma carta intima, dois annos

畠山勇子

HATAKEYAMA YUKO

depois do caso que narrei e *onze annos antes* da guerra russo-japoneza, que Tsuda fôra victima por ventura de um deslumbramento patriotico, vendo no principe estrangeiro o representante do terrivel colosso do Occidente e o futuro inimigo do Japão... Como Hearn, eu assim o creio; e, se Tsuda soffreu um tal deslumbramento, não se enganava, confessêmos... Dão-se, por vezes, phenomenos de estupenda previsão, na emotividade humana; Tsuda advinhara no futuro; tivera a prematura intuição das exigencias politicas do colosso, dos enormes sacrificios da patria, da carnificina da Mandchuria; por uma differença de datas, foi justamente um criminoso, quando um heroe podera ser...

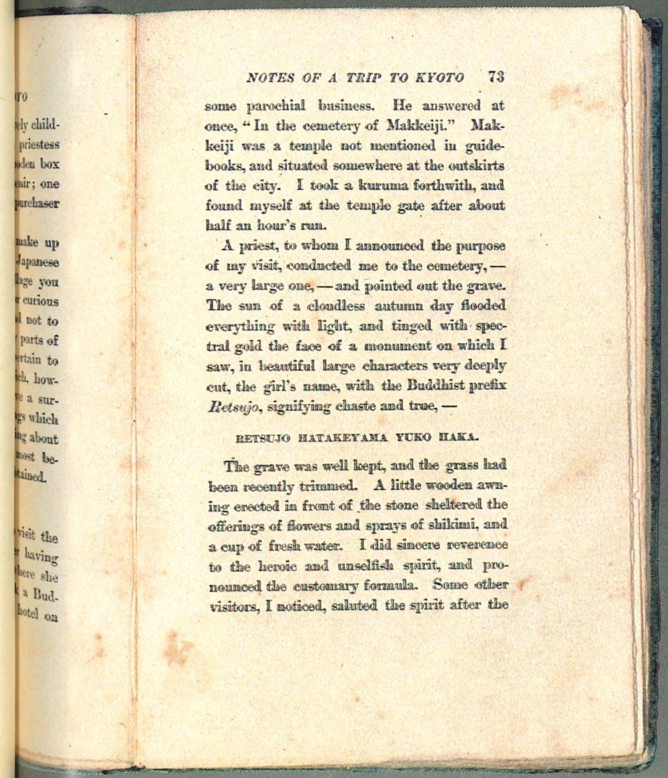
O SUPERIOR WADA JUNNEN

O crime enodoou a patria inteira, cahindo todo o peso da vergonha no representante supremo da nação — o Imperador. — Quando se considerem os melindres de cortezia, de hospitalidade orientaes, que formam como que um codigo religioso em toda a Asia e mais especialmente no Japão, poder-se-ha fazer ideia, vaga embora, da magoa do paiz, da angustia do soberano. Como se se tratasse de um lucto nacional, os theatros fôram fechados, supprimidas todas as diversões habituaes; até o *shamisen*, a popular guitarra indigena, que de ordinario se faz ouvir por toda a parte, a toda a hora, em cada rua, em cada casa, emmudecêra; pensou-se em mudar o nome da terra onde o desacato fôra feito; todos soffriam; e sabia-se que o *Tenshi-Sama*, o Nobre-Filho-do-Céo, o Imperador, era quem mais soffria...

O principe molestado sahira da terra que o offendera; voltára-lhe as costas; vingára-se — estava no seu direito. — Não se pensava n'elle. O que mortificava a turba era sobretudo a consciencia do desprestigio da nação e do desconsolo do soberano. Que fazer? Cada qual segredava a si proprio esta pergunta, na ancia de ser util, de expiar por si a falta nacional e de reintegrar o soberano em seu conforto. Mas nada havia que fazer, sentindo cada um a mesquinha individualidade de si mesmo, sem peso em tamanha conjunctura.

Então, uma mulher, por nome Hatakeyama Yuko, com vinte e nove annos de idade, exercendo a profissão de serviçal em Tókyô, a capital, perguntou tambem á sua consciencia: — «Que fazer?» — Mais compenetrada de soffrimento do que a turba, palpitando em mystico patriotismo mais intenso, poude encontrar uma resposta: — «Que fazer? Mor-

モラエスが畠山勇子のことを書いたポルトガル語の雑誌（末慶寺蔵）



some parochial business. He answered at once, "In the cemetery of Makkeiji." Makkeiji was a temple not mentioned in guide-books, and situated somewhere at the outskirts of the city. I took a kuruma forthwith, and found myself at the temple gate after about half an hour's run.

A priest, to whom I announced the purpose of my visit, conducted me to the cemetery, — a very large one, — and pointed out the grave. The sun of a cloudless autumn day flooded everything with light, and tinged with spectral gold the face of a monument on which I saw, in beautiful large characters very deeply cut, the girl's name, with the Buddhist prefix *Retsujo*, signifying chaste and true, —

RETSUJO HATAKEYAMA YUKO HAKA.

The grave was well kept, and the grass had been recently trimmed. A little wooden awning erected in front of the stone sheltered the offerings of flowers and sprays of shikimi, and a cup of fresh water. I did sincere reverence to the heroic and unselfish spirit, and pronounced the customary formula. Some other visitors, I noticed, saluted the spirit after the

ラフカディオ・ハーンの『京都紀行』（末慶寺蔵）

八雲「勇子の死は日本精神の発露」

のちに畠山勇子の行為に感動して小泉八雲は、サムライ女のあり方と、日本精神の発露を見たと、「勇子、追想記」に書いた。

また、モラエスも「ハタケヤマ・ユーコ」という一文をリスボンの雑誌『セルローズ』に寄せて、勇子の死にふれている。

「是れ烈女の烈女たる所以であって、勇子の霊魂の内に日本国民のやまと魂と称する精華を生じたのである」と、絶讃した。

勇子、法名は義勇院頓室妙教大姉である。

巡査一名、露国皇太子ニ斬リツケタリ


露国皇太子ニコライ（永井昌二氏蔵）

滋賀県庁の二階、出納局にある大金庫の奥に、梱包された一つの木箱が厳重に保管されている。木箱のふたには次のような文字が墨くろぐろと書きつけられている。

「知事、警察本部長の外、
開披すべからず。
昭和十五年十月二十八日
厳封」

昭和十五年という日付に、深い意味はない。実は明治二十四年以来、この木箱は門外不出であった。なぜならこの箱の中身が、明治二十年代の日本国家を存亡の危機に立たせ、全国民を震駭させたある重大事件の証拠物件だったからである。

「露国皇太子殿下、只今当地御立チノ途中、大津町ニ於テ、路傍配置ノ巡査一名抜剣、皇太子殿下ノ御横額ヘ切付ケタリ。犯人ハ其ノママ縛ニ付キタリ。御疵ハ横三寸余リ、御精神ハ確カニテ、供奉員ニテ取敢ヘズ繃帯シ、県庁ヘ御帰リアラセラレ、目下御療治中。犯人ノ巡査ハ、本県守山警察署詰メ津田三蔵ト云ウ、全ク精神狂ヒ、此ノ挙ニ及ビタリト恐レ入リ居レリ。御先導警部ハ巡査ノ頸ヲ一刀切付ケ縛シタリ。ナントモ恐レ入リ候次第、取敢ヘズ申シ上グ。」

明治二十四年（一八九一）五月十一日、当時の滋賀県知事沖守固から、内閣総理大臣（松方正義）、内務大臣（西郷従道）、宮内大臣（土方久元）、警視総監（園田安賢）あての事件第一報の電文である。事件が起こってから約一時間後の午後二時三十分に発せ

られている。のちに「大津事件」あるいは「湖南事件」と呼ばれる衝撃的な事件の発生であった。

では「大津事件」はどのような経過で起こったのであろうか。この年、三月十七日、ロシア皇帝アレキサンダー三世は二十四歳の皇太子ニコライ・アレクサンドロビッチに極東巡遊を命じた。最終目的は、当時ロシアが総力を挙げて建設中のシベリア横断鉄道のウスリー地区起工式への臨席である。ニコライ皇太子は、軍艦七隻で本国を発ち、途中から甥のギリシャ皇子ジョージ親王（二十三歳）を伴い東洋各地を視察の後、最後の訪問国として日本へ立ち寄る予定であった。

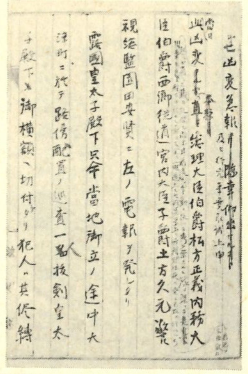
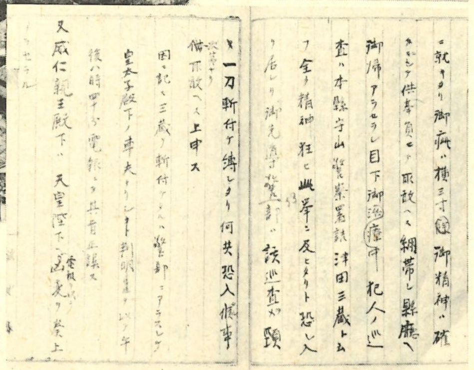
明治二十四年当時の日本はといえば、その二年前の明治二十二年二月、大日本帝国憲法が公布され、前年七月第一回総選挙が実施され、近代国家として歩き始めたばかりの東洋の小国である。その日本に超大国ロシアの皇太子が訪問するのであった。しかもこの年三月、東京神田の駿河台には壮麗なニコライ堂が完成し、当時来日中のベルツ博士の表現を借りれば、「大教会堂は、その異様な形状でほんとうに全東京を威圧」していたのであった。

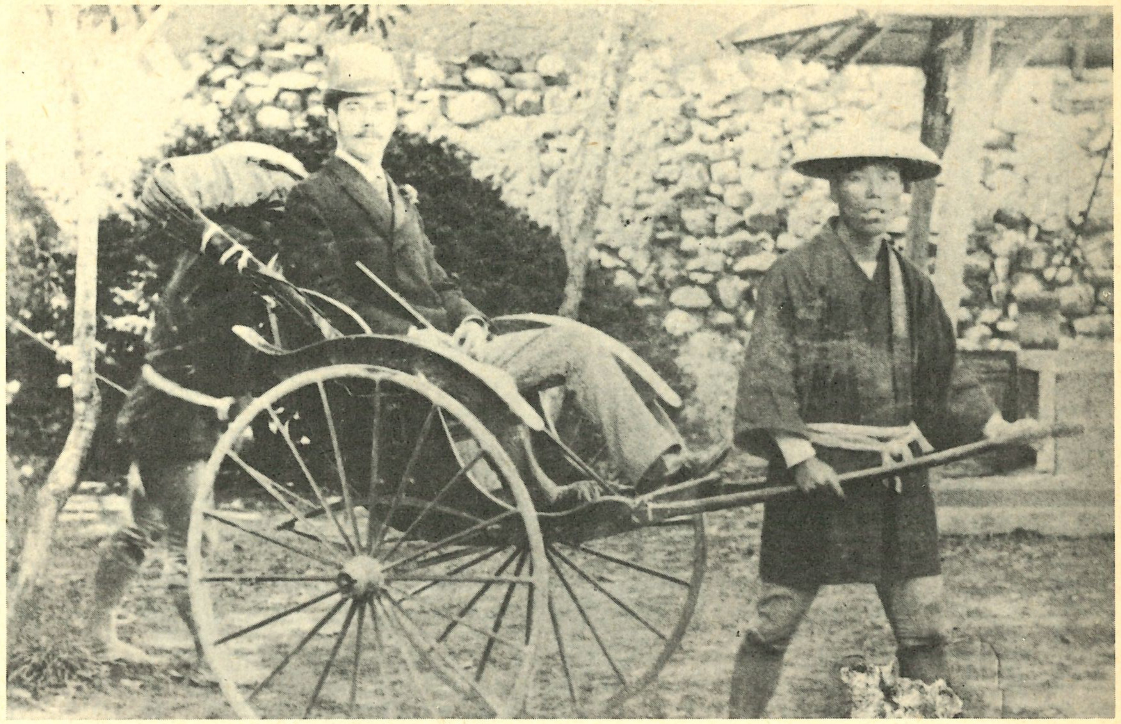
巷には次のような唱歌が流行していたという。

「西に英吉利、北に露西亜、油断するなよ国の人。表に結ぶ條約も心の底は測られず。万国公法ありとても、いざ事あらば腕力の強弱肉を争ふは覚悟の前の事なるぞ。」

ロシア皇太子の来日が決まってから、新聞、雑誌にはさまざまな風説や観測が飛びかい、その多くはロシアのシベリア横断鉄道建設を極東進出策と受けとめ、ニコライ皇太子の軍艦七隻を率いての来日は日本征服への下見であると疑うものすらあった。


当時の大津市街（滋賀県立図書館蔵）



滋賀県知事から内閣総理大臣等に宛てた事件の第一報（滋賀県庁蔵）

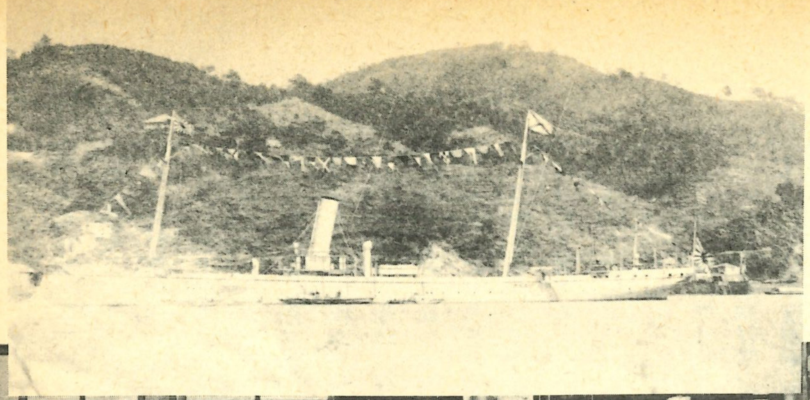


人力車上の露国皇太子（上野彦馬撮影　長崎県立図書館蔵）

しかし、その一方でロシア皇太子への国を挙げての歓迎準備は着々と進められた。最初に到着する長崎から最終出港地青森まで、ほぼ一か月にわたる滞在期間中、関係都市のほぼ全市民を動員しての歓迎行事をスケジュールとして組み、日本側の責任者は、接件委員長・有栖川宮威仁親王、接件掛長・川上操六陸軍中将であった。

四月二十七日午前九時、ロシア皇太子ニコライは旗艦アゾバ号に座乗、他の六隻と共に長崎に入港した。長崎市民による多彩な公式行事もさることながら、若いニコライ皇太子がことさら興味を示したのは、微行上陸の度にみずから車賃を払って乗った人力車と、漆器商で買い物をした際に土間にたてかけてあった番傘だったという。ニコライ皇太子は「本藤、藤田屋」と屋号の入った番傘をさし、人力車に飛び乗って波止場へと戻っていった。

五月五日、ロシア艦隊は長崎を出港。鹿児島を経て、神戸港へと着港した。上陸したロシア皇太子が京都を見物の後、琵琶湖遊覧のため滋賀県大津に入ったのは五月十一日である。この日の天候、晴れ。ニコライ皇太子はグレーの山高帽に縞背広、同行したギリシャのジョージ親王も同様の軽装であった。三井寺見学、汽船での湖上遊覧、滋賀県庁での昼食、そして二人が、京都に戻るために人力車の列を連ねて滋賀県庁を出発したのは、午後一時三十分である。沿道には、この日のために、県内から召集された滋賀県の警察官百六十八名が、十間ごとに並び、皇太子の行列の進行につれて移動していった。万が一にも皇太子の身に不祥事の起こることのない完璧な警備体制であった。しかし、その護衛の警察官の中に、巡査津田三蔵がいた。三蔵が突然抜剣し、ニコライ



長崎に着いたアゾバ号
（日本近代史研究会蔵）



京都で記念撮影した露国皇太子一行（同）

皇太子に斬りつけたのは、一行が滋賀県庁を出て間もなく、県庁から五町ほど過ぎた京町通り字小唐崎町五番屋敷津田岩次郎宅前であった。

全国に吹き荒れる「恐露病」

——津田三蔵をしてこの凶行に及ばしめた原因はどの辺にあるとお思いになりますか。

山本　やっぱり恐露病でしょうね。これは明治にずっとあるわけですが、当時の新聞を読んでみると、まず最初ロシア皇太子訪日反対が出ますね。

——それはロシアが大国だという事に対してですか。

山本　侵略をされるのではないかという恐怖心があったのだろうと思います。だから「来るな」、「怖い」という意識だろうと思うんです。皇太子は日本の地形を偵察に来るんだと、こういう記事もありますし、またデマですけれども、西郷が桐野利秋以下を従えて随行して来るというような風説が当時飛びますんですね。

——あの西郷隆盛が西南の役で死んでいないで、ロシアへ行って皇太子を案内して来る……。

山本　はい。そういうデマも飛ぶわけなんです。何か関連があると思うんですよ。まあ、そういった来日前のいろいろな世論が、来るとなるとちょっと気違いじみた総歓迎になるんです。この歓迎ぶりはちょっと異常としか言いようがないですね。全員歓迎しなくてはいけないといったような調子なんです。ほんとうに熱に浮かされたような総歓迎になる。しかしその中にどこか底流として「恐持（こわもて）」の要素があったのではないかと思いますね。

津田三蔵の供述というのはずいぶんくるくる変わっているので、なかなかわからないんですが、まず最初に、前の日に士官が二人、皇太子の巡行予定地を下見に来た。これを見ていて、やっぱり地形を偵察に来たのだと思い込んだ。これが動機の一つだという説がありますね。

―― それは翌日の打ち合わせか何か、下見に……。

山本　ただ士官が二人来ただけなんだそうです。それをニコライ皇太子とジョージ親王だとまちがえて、やっぱりひそかに日本の地形を偵察に来たんだ、とこう受けとったのではないでしょうか。

―― 確かに皇太子は長崎から鹿児島、京都、東京、青森と日本を縦断する予定になっておりますね。

山本　はい。それがまた一つの理由で、日本に来たのにまず天皇にあいさつをしないで、いきなり日本国内を歩くのはけしからん、これがあったと、こうもいわれております。失礼だという意識でしょうね。それからこれはどこまで本気に信じたのかはわかりませんが、西郷が帰って来ると自分の勲章が剥奪される、とこう言っていたという……。

―― 津田三蔵は西南戦争へ政府軍として従軍し、勲章をもらっておりますね。その勲章を西郷が帰って来ると剥奪されてしまう……。

山本　そういう気持もあるいはあったのかも知れません。もっとも、自分が三度礼をしたのに皇太子が礼を返さなかったからというようなことも言ってますが、この辺になるとちょっとわかりませんね。

「余は貴国に着いて満足のことのみ」

滋賀県庁の大金庫の中に厳重にしまわれたこの事件の証拠物件、それは犯人津田三蔵が用いた凶器のサーベルであった。

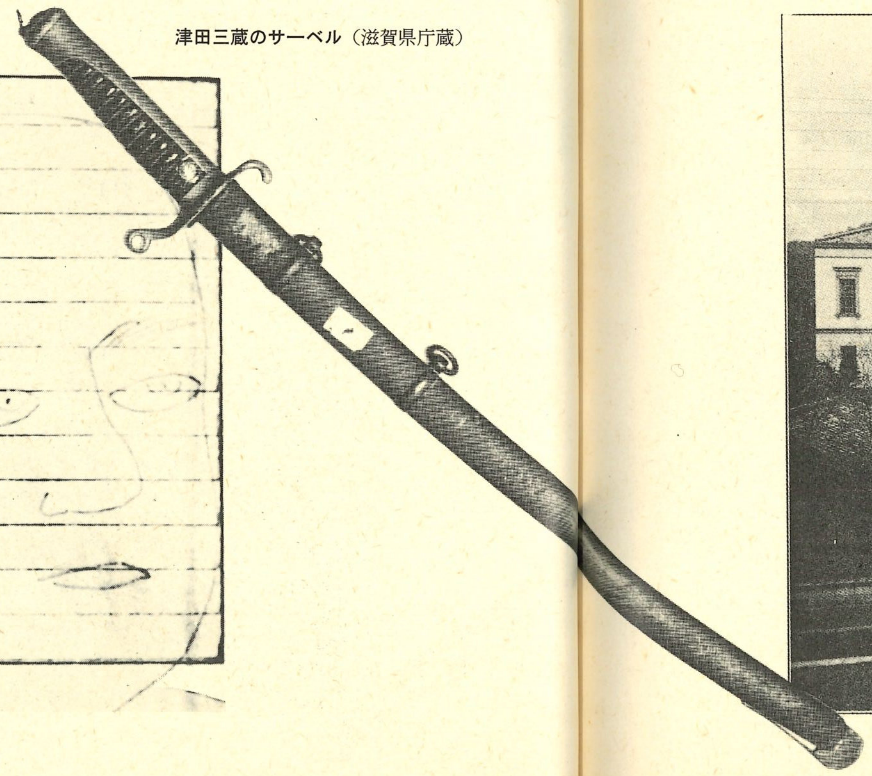


滋賀県庁（滋賀県立図書館蔵）

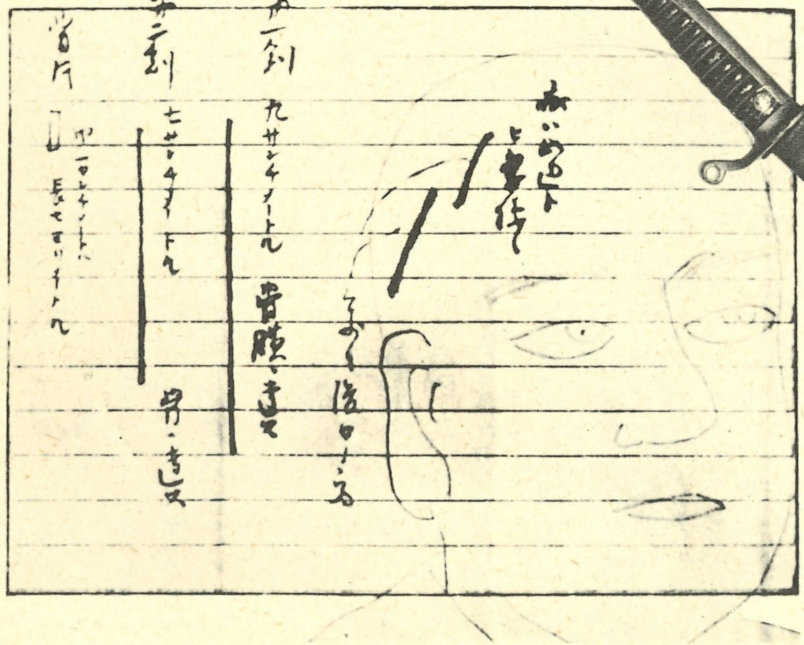
NHKからの再三にわたる要請、滋賀県側との長期にわたる交渉によって、津田三蔵のサーベルは「門外不出」の禁を破り、東京のNHKスタジオに運ばれた。県出納局の職員および滋賀県警の係官が同道した。テレビスタジオの明るいライトの下に写し出されたサーベル（元来日本刀だったものをサーベル仕立てにしたもの）の刀身には、ニコライ皇太子の頭部に斬りつけた際の刃こぼれが残り、うっすらと血のりすら感じられた。そして、サーベルとともに木箱の中にしまわれていたハンカチと座ぶとん（皇太子の傷の手当ての際に用いられた）には、現在では茶褐色に変わった皇太子の鮮血が大量に認められた。

明治二十四年五月十一日午後の大津の凶行現場――。

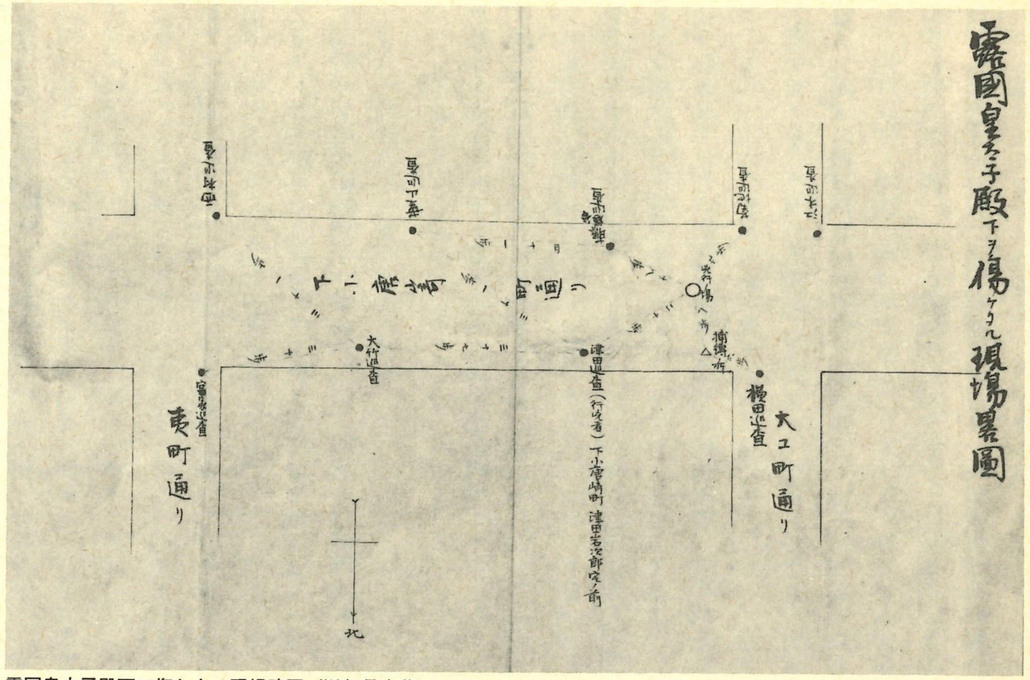
午後一時三十分、滋賀県庁を出て京都に向かったロシア皇太子一行が数分後、京町通りにさしかかったときである。沿道警備の巡査津田三蔵（三十七歳）が、皇太子の人力車が自分の前を通過するのを敬礼して一度見送ったあと、やにわに抜剣して皇太子に背後から斬りつけた。刃先は皇太子の帽子に当たり、その縁を切るとともに、右のこめかみから前へかけて傷つけ、ニコライ皇太子が悲鳴をあげて振り向く瞬間、またもや一刀斬りつけた。皇太子は人力車より飛び降り、西の方へ逃れようと走り、三蔵はなお白刃を振りかざして追いかけた。しかし、ジョージ親王が人力車より飛び降りて、持っていた竹鞭で三蔵を乱打し、三蔵がひるむところへ、皇太子の人力車の後押しをしていた車夫向畑治三郎が後から三蔵の足に組みつき引き倒した。さらに、同じくギリシャ親王の人力車の後押しをしていた車夫北賀市市太郎が三蔵の取り落



津田三蔵のサーベル（滋賀県庁蔵）



大山巌陸軍大臣に報告された皇太子負傷の個所（日本近代史研究会蔵）



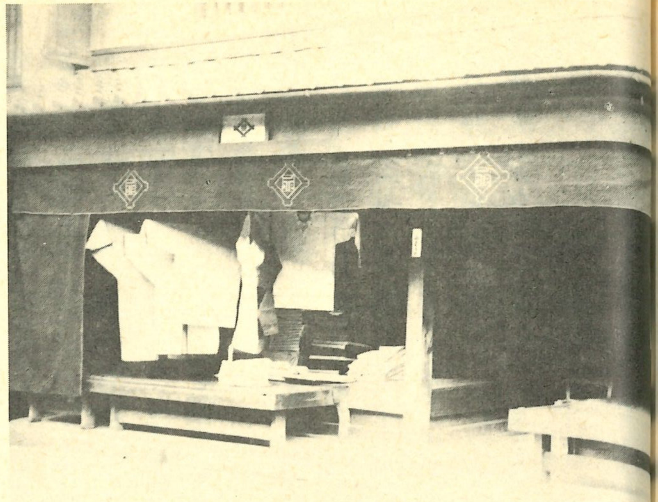
露国皇太子殿下ヲ傷ケタル現場略図（滋賀県庁蔵）

としたサーベルを拾って三蔵の背中に斬りつけて、津田三蔵は身動き出来なくなった状態で警察官に捕縛された。この間、ニコライ皇太子は数メートル先の呉服商永井長助の店内へ駆けこみ、店先に出ていた床几に座って傷の手当てを受けた。

皇太子の傷は頭部右こめかみに二か所。ひとつは前から後にかけて長さ九センチ、深さは骨に達し、長さ七ミリ、幅一ミリの骨片を斬り取られた。もうひとつはその下方で前方からあとにかけて長さ七センチ、深さ骨膜に達するものであったが、気はすこぶる確かであった。呉服商の店先の床几に腰かけて手当てを受けながら、介護のためうしろに立つ有栖川宮威仁親王に向かって、煙草を喫いながら、「余は貴国に着いてより満足のことのみ。今日図らずも一狂人のために微傷を受けたるも、決して貴国を悪しく思わず。京都にて二、三日治療せば全治するに由り、早く東京に出て陛下にお目にかかりたし」と語ったという。そして滋賀県庁では少時休息の後、ロシア皇太子一行は列車で京都の宿舎へと帰っていった。

以上が事件の経過である。ことにロシア側の対応はニコライ皇太子の言葉にみられるように、事態をあまり深刻にうけとってはいなかった。しかし日本側の反応は違っていた。事件発生と同時に、沿道に並んだ人々は「ロシアと戦争になる」と叫んで家へ駆け込み、戸を閉めきって震えていたという。人々は何よりもロシアの報復を恐れたのであった。

帝政ロシア――全世界の六分の一に達する領土と世界最強の陸軍を持つこの国が、日本に隣接していた。そして日本は明治維新によってようやく近代国家となってからわずかに二十余年、ロシアは見上げんばかりの超大国であった。その世継ぎの皇太子に傷を負わせたのである。「大津事件」は、正にこの瞬間から日本中を沸騰させた壮大なドラマを開演したのである。

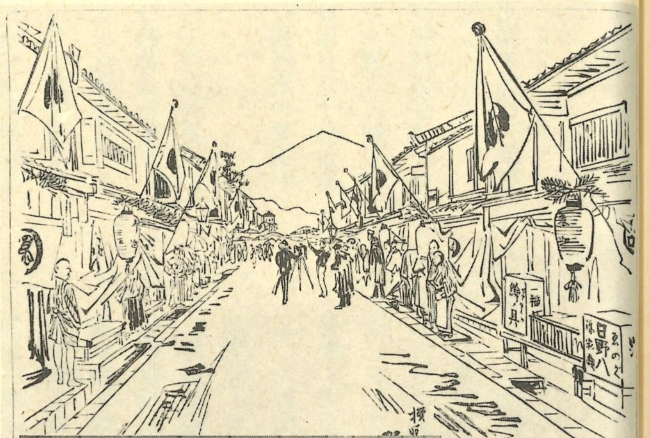


皇太子が駆け込んだ永井呉服店（永井昌二氏蔵）

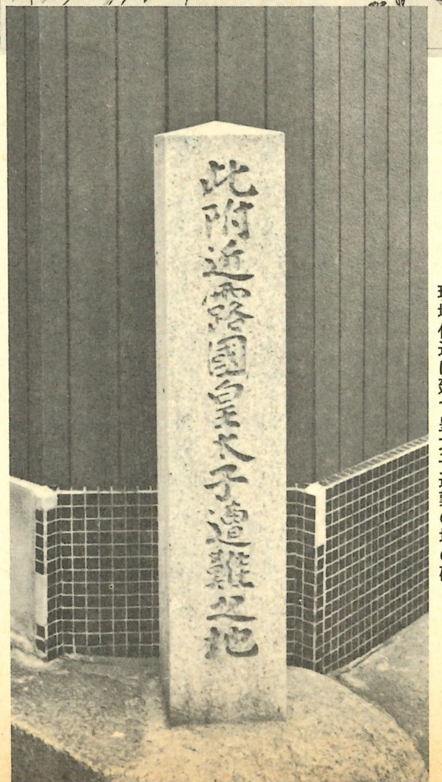
事件後「集団発熱」した日本

大津で凶変発生の報は全国に飛んだ。当時、日本は松方正義内閣が発足して五日目であったが、この内閣は伊藤博文、山県有朋の両大立者を黒幕として発足したので「黒幕内閣」と呼ばれていた。事件のもたらした壮大なドラマの第一幕はこの黒幕の一人、宮中顧問官伯爵伊藤博文が静養先の箱根で事件の知らせを受けた場面から始めるのが適当であろう。伊藤はその時の模様を次のように書き残している。

「明治二十四年五月十一日、余、塔ノ沢温泉ニ在リ。岩倉公爵電信ヲ以テ報ジテ曰、至急ノ使命ヲ帯テ小田原ニ来問セントス、須臾ニシテ松方総理大臣ノ電報ヲ接受ス。曰、大津ニ於テ、道路配置ノ巡査、其帯ル所ノ剣ヲ以テ、魯国皇太子ノ頭部ニ負傷セシメタリ、事容易ナラズ、直ニ上京スベシト。余、電文ヲ読ミ驚愕ニ勝ヘズ、晩食半ニシテ不覚箸ヲ投ジ、直ニ人力車ヲ命ジ、上京ノ途ニ上リ……。」（『伊藤博文日記』）



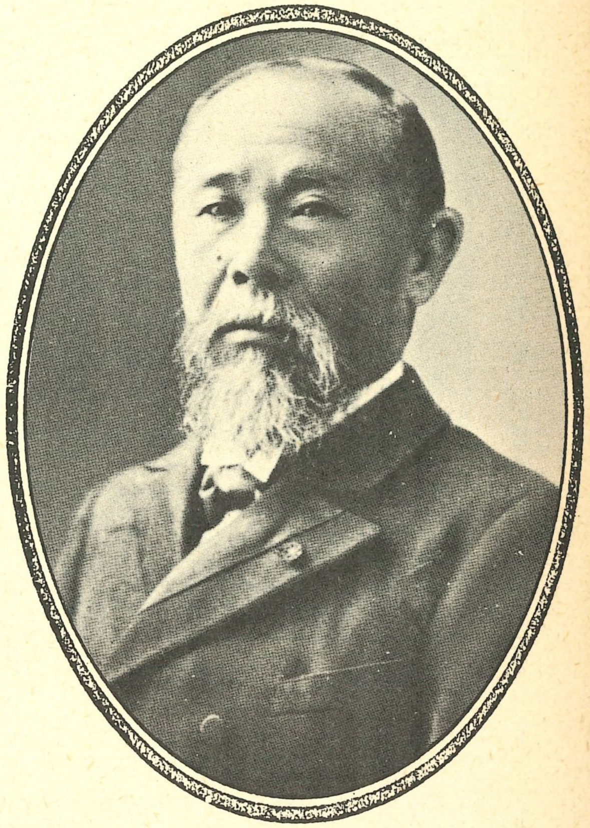
事件後の現場（『近江新報』のさし絵　滋賀県立図書館蔵）



現場付近に建つ皇太子遭難の地の碑

事件発生後ただちに明治天皇出御、御前会議が開かれ、青木周蔵外相と西郷従道内相は深夜の臨時列車でとりあえず大津へ出発した。そして御前会議の結論も、この上は天皇みずから西下され、神戸港に碇泊中のロシア軍艦に静養中のロシア皇太子をお見舞いする以外に方法はないと決まり、天皇は翌十二日午前六時三十八分、新橋駅より関西へと向かわれたのであった。

神戸港のロシア皇太子を見舞ったのは明治天皇だけではなかっ



伊藤博文

た。北白川宮、小松宮、有栖川宮など各親王以下貴顕紳士、華族代表、衆議院議員総代、そして全国から、各県知事、東京市をはじめとする主要都市の代表が神戸へと慰問に向かったのである。一般市民からの見舞状も一万通を越え、この翻訳に兵庫県庁はてんてこ舞いであった。なかでも、当時松江で中学校教師をしていたラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は市民からの要請で英文のお見舞状を代筆している。

宗教界はひたすら祈った。東京湯島の麟祥寺では臨済宗の僧侶が集まって祈禱修法、神道黒住派東京分教所では露国皇太子御負傷病魔退散の祈禱、赤坂豊川神社でも一週間にわたり毎日二回ずつ病魔退散御負傷平癒の祈禱、そしてキリスト教各派では皇太子の回復を願って長い祈りを捧げた。

謹慎のための休学、休業も多い。東京市内では正則予備校、学習院は一日ないし二日の休学、東京米商会所、株式会所、東京清酒問屋一同は哀悼の意を表して五月十二日を休業、鐘淵紡績会社は第三回起業祝典日であったが祝典を延期した。また京都市内の諸興業物は休業、東京市内の新富座も休業、吉原をはじめ洲崎、品川、新宿、板橋、千住の各遊廓は音曲を停止し、赤坂区内の茶屋料理屋芸妓とも鳴物を停止し謹慎した。なかでも洲崎遊廓などは慰問状を奉呈しようとの相談をしながら商売柄を考え、これを中止したのであった。皇太子の負傷によって、日本中が正に「集団発熱」（フィーバー）としか言いようのない状態に陥ったのである。

――幕末に生麦事件その他、外国人を斬ったというこの種の事件がありましたが、明治に入って日本が近代国家になってからは最初の大きな事件ですね。

山本　非常に大きな事件ですね。外国の元首に準ずる人を傷つけたわけですから、今でも相当大きな事件だと思いますが、特にそれがロシアとなると、みんなどうしていいかわからなくなったというのが、いちばんいい表現ではないかと思いますね。

――その結果、領土かなんかを要求されるのではないかという……。

山本　これはもう、あの当時、政府の高官が九州ぐらい割譲しろといわれるのではないかと本気で言っておりますから、そういう事をほんとうに考えたわけです。相手はどう出て来るかわからない、だからひたすら「ごめんなさい」で、なんとか切り抜けようとして。何しろ島の一つや二つぐらいはしようがないぐらいの気持まであったんですから。

――この場をだれがどういうふうに収めようという、そういう人は現れなかった……。

山本　現れないですね、右往左往という形になって。ひたすら四千万国民ことごとくが総歓迎なのに、一人の狂人のためにこういうことになったと、これが最初に出て来る発想ですね。せっかくの歓迎をぶちこわしてくれた三蔵はもってのほかだというわけです。

次に、これは一個人の行為であって、他の四千万はことごとく総歓迎しておりますと、一種の免罪符が欲しいような形でものすごく見舞状、見舞品を出すわけですね。同時にその気持を表現するためにあらゆることをやる、これもちょっと異常だと思います。歓迎の際の異常さと同時に、今度はそちらの異常さが出て来るわけですね。

――なるほど。それは日本人の特質でしょうか。

山本　ええ、やっぱり日本人の特質だと思います。これは自分の感

露国皇太子遭難<年表>

明治24(1891)	5月6日、児島惟謙、大審院長に任命される　5月9日、ロシア皇太子ニコライ2世、神戸港に上陸し京都へ向かう（極東巡察が名目の来日だったが、日本人の"恐露病"を強く刺激し、西郷隆盛同乗の噂も流れる）　5月11日、大津巡覧中のニコライ2世を、警衛巡査津田三蔵が襲撃する　急遽御前会議が開かれ、軫念の詔勅下る　西郷従道内相らを京都へ派遣　5月12日、皇太子見舞いのため天皇西下　処罰について皇室罪（死刑）か通常謀殺罪（無期）かが問題になり、大審院長児島惟謙は、法の條文通りの通常犯を強く主張　5月13日、天皇、ニコライ2世を見舞う　株式・米商・酒問屋等各界の休業・休校あいつぎ、遊廓の鳴物も停止される　全国から見舞客・見舞状が殺到する　5月15日、ロシア皇帝・皇后より天皇・皇后宛謝電来る　御前会議で極刑処罰論大勢を占める　5月16日、津田を取りおさえた車夫向畑治三郎と北賀市市太郎に、政府より勲八等と終身年金が授与される　5月18日、畠山勇子、ロシア・日本両政府宛の遺書を残して、京都府庁門前で自害する（享年27歳 後に小泉八雲とモラエスは、彼女を日本女性の鑑として海外に紹介した）　5月27日、大津地裁で大審院公判が開かれ、津田三蔵に無期徒刑の判決下る　5月29日、外務大臣青木周蔵更迭　10月1日、北海道空知監獄で服役中の津田三蔵、病死
明治25(1892)	児島惟謙、花札賭博事件で辞職
明治33(1900)	北賀市市太郎、郡会議員に当選
明治37(1904)	日露戦争勃発
明治41(1908)	児島惟謙、病没（享年72歳）
大正6(1917)	ロシア革命勃発
大正7(1918)	7月16日、ニコライ2世家族と共に処刑される
大正14(1925)	3月、向畑治三郎、少女暴行罪で逮捕される

情を相手に移入してしまうからではないかと思うんです。ですから来日が決まったときの歓迎もそうですし、事件が起こったあともいたずらに露国皇太子がどう思っているだろうかということばかり考えて、この状態に対して自分がどう対処すべきかという冷静な判断が出てこないから、その場の空気にいっさいが支配されていくんですね。見てますと、ニコライ皇太子がいちばん冷静です、あの中で。すこぶる冷静で、傷の手当てを受けるのも、それ以後のいっさいの処理がすこぶる冷静なんですが、日本人の方がてんやわんやになっているわけです。

日本的発想から出た「村会決議」

「東京市は露国皇太子殿下を奉迎するの栄を得んと日夜仰望する所に、図らずも昨日の凶報に接し誠に恐懼の至りに堪えず。一日も速やかに御快癒あらんことを祈る旨、殿下に達せられんことを請う。
右、東京市会の臨時議決を似て上請す。」

事件の翌日開かれた東京市会の臨時会で採択されたニコライ皇太子への見舞電報の全文である。事件発生を知って、全国の多くの市町村議会で臨時会がもたれ、この主旨の議決がなされた。その中で山形県最上郡金山村では、五月十三日至急村会を召集し、村条例として次のような決議を採択した。

「　条例第二号

事件後、滋賀県庁にとどいた指令の電文（滋賀県庁蔵）





日本各地からとどいた見舞状（滋賀県庁蔵）

第一條、本村住民は津田の姓を付するを得ず。
第二條、本村住民は三蔵の名を命名するを得ず。

理由書

本村は、本日十二日官報号外を以って告示せられたるわが天皇陛下の殊に親愛せられたる御国賓露西亜皇太子殿下を恐れ多くも負傷し奉りたる大逆罪人津田三蔵の名称を付するは、善良なる国民の快しとせざる所なり。

依って本村は、従来該氏名を名称する者は比際直ちに改氏改名し、永世該氏名の命名を禁止し、村民の徴衷を表彰せんとするに在り。

以上」

この村会決議によって金山村には永久に「津田さん」も「三蔵さん」も消えたはずであった……が?!

山形県最上郡金山町は、当時の金山村が町村合併なしに、そのまま町に発展したところである。林業を筆頭に、米と肉牛飼育で成り立つ人口八千人のこの山村に、村会決議のあった明治二十四年から八十七年後の今、六人の「三蔵さん」がいた。以下は金山町の三蔵さんたちからうかがった話である。

「三蔵という名まえが村会決議で無くなったっていうのは初耳ですな。ほんとうですか。」（佐藤三蔵さん、五十八歳）

「おかしいでしょう。そんな話。あるわけないでしょう。」（矢口三蔵さん、六十四歳）

「うちのジイサンに三蔵なんておかしな名まえつけてだめじゃないかって言ったら、三蔵っていうのは三つの蔵を建ててるっていう縁起のいい名まえだって言われたけどな。」（五十嵐三蔵さん、七十三歳）

「うちは三蔵っていうのが屋号みたいなもんで、ずうっと中村三蔵を使っている。私で四代目。」（中村三蔵さん、四十六歳）

五十嵐三蔵さんが生まれたのは、村会決議からわずか十四年後。そして明治の初めから四代にわたって名まえをうけついできた中村三蔵さん。そうすると、三蔵という名まえを禁止するというあの村会決議は、いったいどういう意味だったのだろうか。

――金山村のこの決議というものをどう思われますか。

山本　たいへんおもしろいですね。一つは記憶から永劫に抹殺したいということがあるのだろうと思うんです。「津田三蔵」という名まえを忘れたい、だからこの村に関する限りその名まえを消してしまおうと、こういうわけですね。これは日本的発想の典型的なものだと思います。戦後、教科書に墨を塗ったことがありますね、消してしまおうと。同時にその事によって、本質的な問題をけろりと忘れてしまう、正にこれですね。だから、しばらく経ってそういう気分が消えてしまえば、もう津田を名乗ろうが、三蔵を名乗ろうが構わないわけなんです。あの時の、あれは例外者なんだっていう意思表示なんですね。だから今でも三蔵さんがいるのは当然なんです（笑）。

もっともヨーロッパには消すと逆に記憶に残ったというのがあるんですよ。ギリシャのエラストテネス伝説というんですが、神殿の放火犯を抹殺するためにその名を口にしてはならないと民会で決議をするわけです。ところが、みんなが口にしてはいけない、いけないと言うので逆に今まで残ってしまったと。そういう現象もあるにはあるんですが、日本だとそうはなりません。ほんとうに消えてしまうんですか

ら。記憶から消してしまうと、それはもう無い事になりますね。戦争犯罪人の問題でもなんでも、同じですよ。

烈女・畠山勇子の自殺

異常な現象が続いている。事件から一週間後、東京から来た女性が京都府庁の門前でカミソリによって咽喉と胸を切り裂き死んだ。自殺した女性の名は、畠山勇子、二十七歳。千葉県鴨川町に生まれ、十七歳で結婚、しかし六年後に離別され、当時東京市内の商店で住み込み女中をして生計をたてていた女性である。日ごろから政治小説を好んで読み、事件発生とともに新聞を読みあさっていた勇子は、ついに一週間後、暇をとって京都へと向かったのであった。五月十八日、京都市内で人力車に乗り、東西本願寺、三十三間堂、清水寺、そして知恩院に詣で、午後七時過ぎ京都府庁門前に至り、人影が絶えるのを待って用意の白布を敷き、帯で足を縛り、カミソリで自殺したのであった。畠山勇子はロシアと日本の両国、家族にあてた数通の他に次のような遺書を残した。

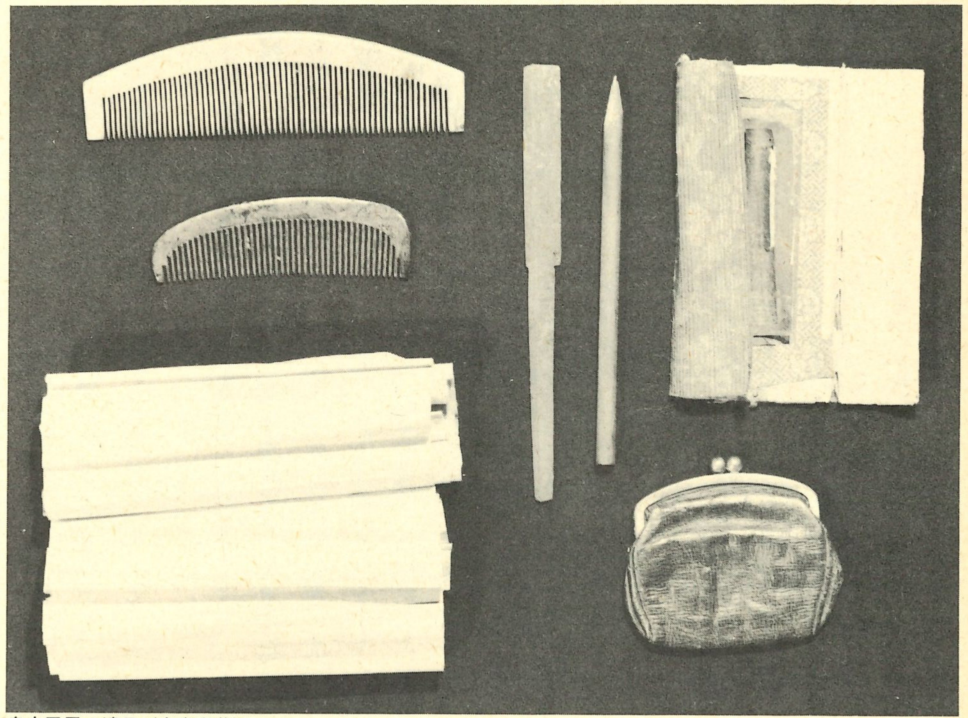
「恐入候得共、失望の余り申し残し候。此度露国皇太子御遊覧の途中御遭難に付、驚愕悲歎幾多ならず。小女(わたくし)時来り、広き世界にて如何とも致し候希望なるに、凶人の為め負傷ならせられ、痛恨悲憤此上に朝野に生きるもの骨をあらはし信実を尽すとも、狂漢の兄弟なりと信用はあるべからずと先を案じ此處に陥りしにて候。本朝四千万人のうち、かの狂漢を除く外、此度の変事誰一人も驚歎せざるはなかるべしと思へり。我、日本皇帝より給はりし尊命、愚知小神の為めに失し事、小女切望のみにあらず。日本帝国に住める者みな同意なり。皇帝の御心聊をお察しし、日本国人の思ふことは小女に同じ故に、日本帝国へ此の心をあらはす為め、此度に至り候間、御察し下されたく候。

明治二十四年五月十八日

慶応元年生

畠山勇子

内外の御方様」



畠山勇子の遺品（末慶寺蔵）

── 畠山勇子の自殺をどうお考えになりますか。

山本 当時の新聞記事はあまり彼女のことをほめてはいないんです。割合冷淡に、遺書その他を書いているだけなんですが、畠山勇子というのはいわゆる政治小説を読み、政治新聞を愛読していたそうですから、あるいは明治になって出て来た新しいタイプの女性かも知れません。もっとも幕末からいわゆる「烈女」という伝統がありますので、その伝統と明治的な政治意識がいっしょになって出て来た女性なのかも知れません。

── 彼女の中には、自分自身を犠牲にして国難を救おうという、いわゆる「滅私奉公」の気持がかなり強く感じられますね。彼女の心の中に国家というものはどの程度意識されていたのでしょうか。

山本 これはまだはっきりは無いんですよ。まず第一に、天皇は神戸港に碇泊中のロシア軍艦に、ニコライ皇太子の慰問に出かけるわけなんですが、これが彼女にはショックだったんです。何しろ天皇っていうのは、長い間京都からすら出なかったので、その天皇が外国の軍艦の中に入ったという事実が当時の人々にはショックだったらしいですね。そのまま軍艦が出航してしまったらどうなるだろうか、天皇が人質にとられるのではなかろうか、ということまで本気で心配してい

恐怖の沸騰

「西に英吉利　北に露西亜　油断するなよ国の人　表に結ぶ条約も心の底は測られず　万国公法ありとても　いざ事あらば腕力の　強弱肉を争うは覚悟の前の事なるぞ」

こんな歌が小学生まで歌わせられていた時代である。超大国ロシアの皇太子が、恐るべきシベリア鉄道の起工式のついでに日本を偵察に来るのだという噂が広まっていた。マスコミは、こぞって「魯国をして猛然として恐るべき国たらしむる者にあらずや」と書きたてた。「露国皇太子の旅行は果して無邪気なる見物旅行なる乎、若くは兵事上探討的旅行なる乎……我当に其の恐る可きの点に向て、警戒を加う可きのみ」（「国民之友」）のたぐいである。

カラフト・千島交換の屈辱感は尾を引いていた。ロシアの皇太子を歓迎するなどは仇敵を饗応するにも等しい、という論調が多かった。実際は、国をあげての大歓迎ぶりだったが、それも恐ろしさのあまりということができる。その恐ろしさが大津で噴き出した。

内閣成立後五日目の松方正義首相は、ただ狼狽するばかり。御前会議を開き、勅語をたまわった。

「今次朕カ敬愛スル露国皇太子殿下来遊セラルヽニ付朕及朕カ政府及臣民ハ国賓ノ大禮ヲ似テ歓迎セントスルニ際シ図ラサリキ途大津ニ於テ難ニ遭ハセラルヽノ警報ニ接シタルハ殊ニ朕カ痛惜ニ勝ヘサル所ナリ亟(すみや)カニ暴行者ヲ處罰シ善隣ノ好誼ヲ毀傷(きしょう)スルコトナリ以テ朕カ意ヲ休セシメヨ。」

たちまち国中が謹慎状態に入った。

皇族、元老、議会代表は見舞に出発し、学校は休校し、寺院は祈祷を行い、相撲、芝居は休業し、株式取引所も休業し、銀行は戦争の勃発を恐れて貸出しを停止。遊廓もまた音曲を自粛した。山形県最上郡金山村に至っては、「津田」姓と「三蔵」の名を禁止する條例を村会で決議した。ついには明治天皇みずから西下。神戸港のアゾバ号に皇太子を見舞った。

滋賀県知事、警察部長は辞表を出したが懲戒免職。外相、法相も辞職した。

この大騒動で、申し訳ないといって腹を切ったのは、事件にまったく関係のない女性、畠山勇子一人である。東京・日本橋の魚屋に奉公していた彼女は京都府庁の前で、ロシア政府と日本政府あての遺書をかたわらに、カミソリで腹と咽喉を切り裂いた。政治好きで離婚歴のある二十七歳の勇子は、〝烈女〟と墓に刻まれている。



ラフカディオ・ハーン
（日本近代史研究会蔵）

るわけですから、ずいぶんショックだったろうと思いますよ。と同時に、露国皇太子が予定を変更して帰国してしまったということが、彼女のもうひとつのショックなんです。東京で療養して欲しいと、彼女それを請願しているわけです。この二つなんですが、国家という意識よりもこちらの方が強いようですね。

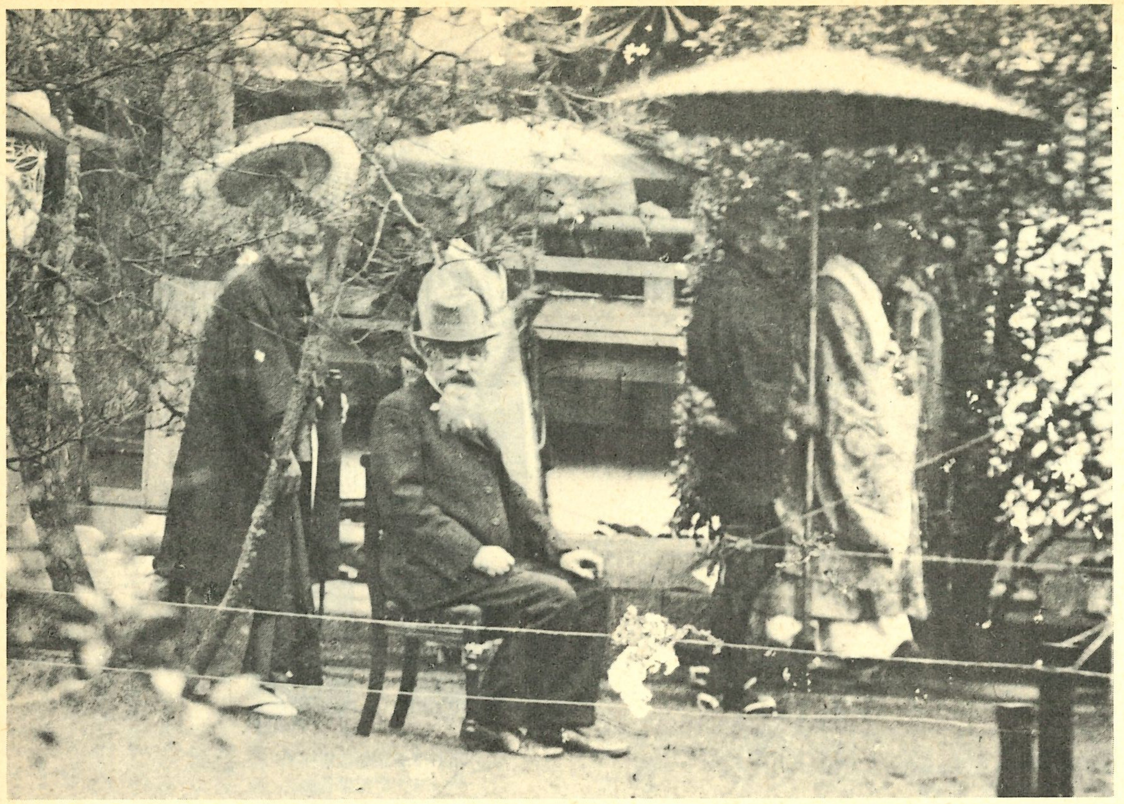
――それにしても「私心無し」という部分ではどうでしょうか。後にこれが非常に顕彰されるわけなんですが……。

山本 津田三蔵にも私心はないですね。ですからこの二人には、両極端ながら共通点があるんですよ。畠山勇子が一歩転じればロシア皇太子を傷つけることもありうるんですね。受け取り方によっては。だから、あの二人の精神状態は非常に似かよっていると思うんです。それで、ラフカディオ・ハーンとモラエスという二人の外国人が彼女に不思議な感情を示すわけです。もっとも二人とも日本を美化した人ですから――この美化の仕方というのは的はずれではないかと思う点があるんですが――何に二人が感動しているかというと、ヨーロッパの個人主義とは逆のようなものの美を見せつけられたという、これに対する驚きだろうと思います。畠山勇子の場合、自分と露国皇太子ニコライという関係はないわけなんです。両者の間がどういう関係で、どういう位置にあるかという関係が初めからいっさいない中で自殺してしまったというところが、ハーンとモラエスには非常に美しく見えたのでしょうね。まあ、あの二人は西欧に背を向けていたわけだから、特にそれが美しく見えたのでしょうけれど。

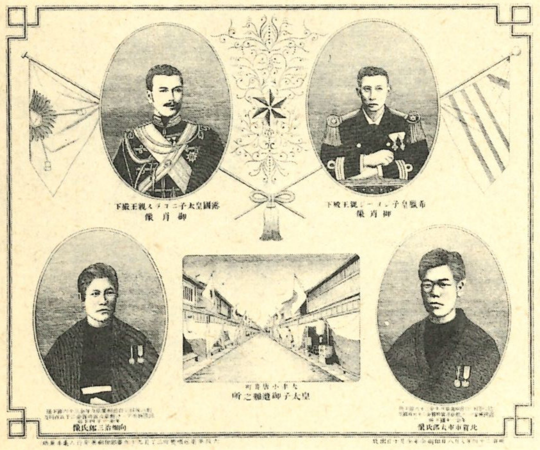
勲章をもらった車夫に対する世評

大津事件は二人の英雄を誕生させている。事件当時、ニコライ皇太子の乗った人力車の車夫をしていた北賀市市太郎と向畑治三郎である。二人は、犯人の津田三蔵に組みつき、三蔵が取り落としたサーベルで逆に斬りつけ、皇太子を致命傷から救った。二人は神戸港のロシア軍艦へ召され、ロシア側の希望で法披股引(はっぴももひき)姿のままニコライ皇太子の前に立ち、ロシア帝国の聖アンナ勲章を賜った。そして実に二千五百円（現在のお金で五百万円）というばくだいな一時金の他に、毎年千円という終身年金を下賜されたのである。二人はさらに日本政府からも勲八等・白色桐葉章を賜り、年金三十六円を給せられた。

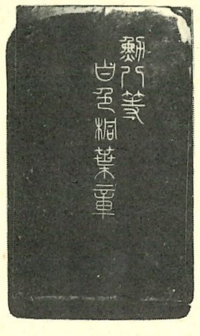
帯勲車夫となった二人は、いまや国民的英雄であった。神戸の某は両車夫に絽羽織に日露の旗章を紋に染め抜いて贈り、東京の赤坂芸者からは東京遊覧の誘いの手紙が舞い込んだ。そして、それ



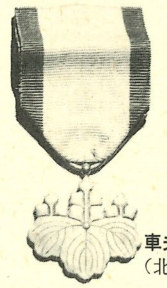
京都・末慶寺を訪れたモラエス



露国皇太子ほか３人の銅版画（山名隆三氏蔵）



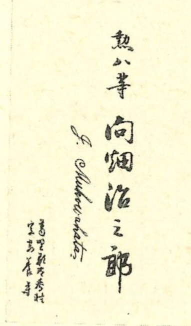
勲八等桐葉章の箱
（北ケ市哲郎氏蔵）



車夫がもらった勲章
（北ケ市哲郎氏蔵）



北賀市市太郎の車夫衣装（北ケ市哲郎氏蔵）



向畑治三郎の名刺
（永井昌二氏蔵）

以上に二人は大金を手にしていた。

その一人、独身の北賀市市太郎は車夫をやめて故郷の石川県大聖寺に帰り田畑を買った。ロシアからの恩賞金で地主になったのである。九年後、市太郎は江沼郡郡会議員に当選、ロシアからの送金と小作料収入によって幸福な人生を送っていた。

市太郎の運命を変えたのは、明治三十七年に起きた日露の戦争であった。しかも敵国ロシアの皇帝は、大津での事件から三年後に父帝の死によって帝位を継いだニコライ二世、市太郎が命を救ったあのニコライ皇太子であった。戦争が始まってからもロシアからの年金が届く市太郎を、人々はロシアのスパイを意味する「露探」と呼んだ。たまりかねた市太郎は、「そんなに露探と言うのなら、おれを兵隊にとってくれ。そうでないことを戦場で証明するから」と叫んだと、地元では伝えている。その市太郎が亡くなったのは大正三年一月、市太郎は勲章や表彰状などとともにその波乱に富んだ人生の出発点となった紺色の車夫衣装を子孫に残している。晩年の市太郎がこの衣裳を取り出して眺めるとき、どのような思いをいだいたのか、今となっては知るよしもない。

―― 時の流れで英雄にまつりあげられ、次に日露戦争が始まると今度は全く反対の国賊、非国民の立場に置かれる。本人の意思と何も関係ないところで、一人の個人の評価はどんどん変わっていきますね。

山本 ですからあそこでおもしろいと思ったのは、市太郎が勲章をもらった、一時金をもらった。それだけで済んでいれば、みんないっしょに忘れてくれたんですね。というのは、ロシア皇太子が無事に去ってホッとすると、もう世論は変化してますから。ですから一時金と勲章で終われば、いろんな決議その他と同じようにそこで忘れてくれたと思うのです。ところがたいへん困ったことに年金というものがあります。しかも終身年金です（笑）。だから、そのひとつの事件があとでどう変わろうとも年金というものはきちんと続いていくわけで、こうなりますと今度は変わらない年金のまわりでいかに世の中というものが変わっていったかということがよくわかってしまうわけです。もしも年金をずっともらっていなければ、ああいう反発は割合なかったのではないかと私は思います。その場でお互いに忘れてくれますから。

前に何かの新聞を見ていて発見したのですが、戦前アメリカの海軍にいた日本人が鹿児島におりまして、戦時中は向こうの海軍からの恩給の送金がなかった。ところが戦後になって、戦争中の分を含めて全額送金されてきたというのですね。この辺など非常に違うところでしょうね。

―― なるほど、向こうは契約社会ですからね。

山本 ですからロシアの場合もずっと払っているわけですね。いったん皇太子が約束つまり契約したものは、状況がどのように変わろうときちんと守る。帝政ロシアが続く限り払っているわけで、契約は契約としてきちんとしているわけです。で、これがもしも日本ですとそれをやらない方が逆に美徳なのかも知れませんね。状況がまるっきり変わったからいっさい御破算と。あの約束はあの時のこと、ということになるのだと思うんです。だからこの前の戦争でも、戦争が終わると例えば韓国出身の軍人、台湾出身の方、これはもう知らないというわけです。しかも、それに対してだれも不思議に思わない（笑）。だから、あの車夫の場合はむしろ年金を辞退しなければいけなかった

車夫の運命

警護の巡査がサーベルを凶刃とし、その犯人を取り押さえたのが車夫。三人挽きの人力車だから、ロシア皇太子とギリシャのジョージ親王の側には六人の車夫がついていたのだが、活躍したとされるのは二人。しかも、向畑治三郎は前科者だった。

その日暮らしが普通だった車夫稼業。日本政府からの年金三十六円はともかくとして勲八等は、彼らをたちまち名士にした。加えてロシアから一時金二千五百円と千円の年金。世間はあぜんとし、羨望しないものはなかった。

米一升（約一・五キロ）が七銭か八銭。津田巡査の月給が九円だった。

二人が詰めていた京都・常磐ホテルあてに、さまざまな手紙が舞い込んだ。東京・赤坂の芸者連中からの手紙は、

「比度の御働き万人の及ばぬ御勇子の程御優しく存じ上候、且又莫大の御褒美は当然の事にて今少し御頂戴なされても然るべき事と存じ候程に御座候、妾共未だお目もじは致さず候へども御両方様あまりになつかしきまま毎日毎夜お噂のみ致し居り、総代とか委員とか申す様な者を差し上げて御慰労申したきは山々に候へども何と申すも御承知の業体、兎角心に任せず西の空のみ眺め暮し候、あはれ妾共の心底御察し下されチと御保養がてら、東京へ御遊びにお出で下され候はば妾共の嬉しさは一方ならず有る程の限り御慰労申上げて、月は嵐山のみならず、東都八景残りなく御案内申上候。」

また、北賀市市太郎は独身だからたのもしい、何とかしておかみさんになりたいものだ、世話をしてくれる人がいたら礼金に二千五百円きっと出す、というような女性も名乗り出る始末。新聞も「余計な世話なれども」と断りながら、多額の金の使い道を取沙汰した。だが、実際は二人とも京都府知事と石川県知事の監督管理を受ける。

向畑については、よほど信頼性が疑われたのだろう。一か月の生活費が二十五円、残りは府庁で適当な利殖を取り計らう。仕事を始める場合は云々と、細かく定められた。それでも彼は要領よく金を使い果たし、あげくに七十歳を過ぎてから少女暴行で検挙されたりしている。

一方、北賀市は津田巡査を斬ったのは行き過ぎだと告発されたりする（結果は不起訴）が、故郷に錦を飾って郡会議員になり、ロシア皇太子の皇帝即位を祝って銀製香炉を献上したり、北賀市と向畑の話題はしばらく尽きなかった。

のではないかと思いますよ。「その後のロシアの態度に憤激して年金を辞退」ということになれば、これは明らかに美談になったと思いますね。市太郎が非常にうまい人間だったら、そうしたのではないかと……。そうすれば、彼はもう一度英雄になったと思います。ところが彼はそうしなかった。だから、あの場合やっぱり一時金だけにしてあげればよかったんですよね。

「司法権の独立」を守った児島惟謙

五月十九日、ニコライ皇太子の座乗するロシア艦隊は日本でのすべての予定を取り消して神戸港を出港、一路ウラジオストックへと去っていった。日本側に残された最大の問題は、犯人の津田三蔵に対する司法処置であった。ここに、ロシアへの配慮から三蔵を死刑に処せんと謀る内閣と行政府の干渉を排して司法権の独立を守ろうとする裁判所との間で、史上有名になった激烈な闘いが開始されるのである。

内閣側の主張は刑法第百十六條に拠っていた。それは、「天皇三后皇太子ニ対シ危害ヲ加ヘ又ハ加ヘントシタル者ハ死刑ニ処ス」という、日本の皇室への犯罪を外国皇室の場合に準用して三蔵を死刑にしようとするものであった。これに対する裁判所側の反論は、次の二つの條文に拠っていた。

「刑法第二百九十二條、予メ謀リ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ノ罪ト為シ死刑ニ処ス　刑法第百十二條、罪ヲ犯サントシテ巳ニ其事ヲ行フト雖モ犯人意外ノ障礙若クハ舛錯ニ因リ未タ遂ケサル時ハ巳ニ遂ケタル者ノ刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス」

すなわち、三蔵の処置は法律上「謀殺未遂罪」に当たり、無期徒刑がその最も重い刑罰であった。この時、裁判所側の最高責任者は、この五月六日に大阪控訴院長から大審院長に任ぜられたばかりの児島惟謙である。事件が発生したのは児島の東京赴任からわずか三日後、家族はまだ大阪であった。

児島惟謙と内閣側を代表する司法大臣山田顕義との論争は続いた。日本の皇室と外国皇族を法律上同一にできないと主張する児島、法律にとらわれることは国家を危くすると迫る山田、両者の主張は平行線をたどった。それに続く松方総理との会談でも児島の主張は変わらない。法律の尊重こそ日本が真の近代国家として国際社会に伍していく途だと説いた。

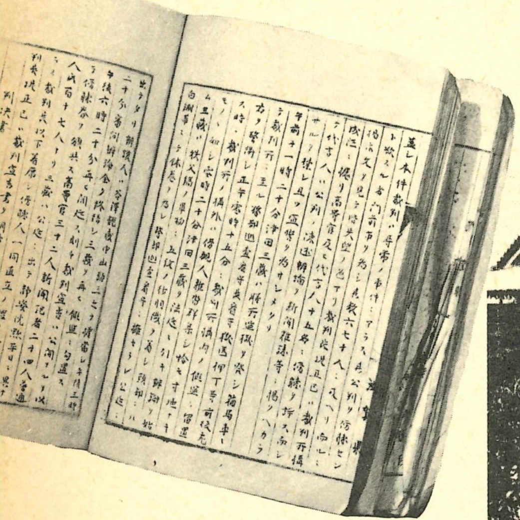
五月二十七日、大津地方裁判所に出張して来た堤裁判長以下七人の大審院判事によって津田三蔵の公判は開始された。内閣側は、



児島惟謙（大津地方裁判所蔵）



大津地方裁判所（事件の後、建てかえられたもの　大津地方裁判所蔵）



津田三蔵の判決文（滋賀県庁蔵）

この裁判にも西郷内相、山田法相を出張させ、三蔵の死刑判決をひき出すべく七判事に対し陰に陽に圧力をかけ続けたのである。この日の夕刻、公判は終わった。その判決は次のようなものであった。

「　判決書

三重県伊賀国阿拜郡上野町大字徳居町士族
滋賀県近江国野洲郡三上村大字三上寄留
津田三蔵
安政元年十二月生

右三蔵ニ対スル被告事件検事総長ノ起訴ニ依リ審理ヲ遂グル処、被告三蔵ハ当時滋賀県巡査奉職ノ身ヲ顧ミス今回露西亜皇太子殿下ノ我邦ニ来遊セラルルハ尋常ノ漫遊ニアラサルヘシト妄信シ私ニ不快ノ念ヲ懐キ居タル処明治二十四年五月十一日殿下滋賀県へ来遊ニ付被告三蔵ハ大津町三井寺境内ニ於テ警衛ヲ為シ其際殿下ヲ殺害セントノ意ヲ発シ時機ヲ窺ヒ居ル処被告三蔵ハ尋テ同町大字下小唐崎町ニ警衛シ居タリシニ同日午後一時五十分頃殿下ガ同所ヲ通行アラセラレタルニ当リ此機ヲ失セハ再ヒ其目的ヲ達スルノ時ナカルヘシト考定シ其帯剣ヲ抜キ殿下ノ頭部ヘ二回斬リ付ケ傷ヲ負ハセ参ラセシニ殿下ハ其難ヲ避ケントセラレシヲ被告三蔵ハ尚ホ其意ヲ遂ケント之ヲ追躡スルニ当リ他ノ支フル所トナリ其目的ヲ遂ケサリシモノト認定ス。

右ノ事実ハ被告人ノ自白證人向畑治三郎ノ陳述大津地方裁判所予審判事ノ作リタル検證調書證人北賀市市太郎西岡太郎吉医士野並魯吉巡査菊地重清ノ予審調書及ヒ押収シタル刀ニ依リ其證憑充分ナリトス。

之ヲ法律ニ照スニ其所為ハ謀殺未遂ノ犯罪ニシテ刑法第二百九十二條第百十二條第百十三條第一項ニ依リ被告三蔵ヲ無期徒刑ニ処スルモノ也。

犯罪ノ用ニ供シタル刀ハ滋賀県庁ニ還付ス。

明治二十四年五月二十七日大津地方裁判所ニ開ク大審院法廷ニ於テ検事総長三好退蔵検事川目亨一立会ノ上宣告ス。

大審院部長判事　堤　正己
大審院判事　中　定勝
同　土師経典
同　安居修蔵
同　井上正一
同　高野真遜
同　木下哲三郎
大審院書記　西牟田豊親
同　笹本栄蔵」

堤裁判長の朗読が「被告三蔵ヲ無期徒刑ニ処スルモノ也」と結んだ瞬間、大津事件は司法権の独立を確立した画期的な事件として、また児島惟謙はその立役者として、歴史に名を残すことになったのであった。

早々と冷めた「発熱」

山本　児島惟謙は司法権の独立を守ったと簡単に言われますけれども、これは後にちょっと伝説化されすぎているのではないでしょうか。児島惟謙が亡くなったときは、明治の終わりですが、亡くなったときの新聞記事や何かにはそういった事は全然出ておりませんね。

津田三蔵の裁判でおかしなことはいろいろあるんですが、その第一は大審院（今の最高裁）、これがいきなり裁判するわけです。これはおかしいのであって、普通の謀殺事件ならばまず大津地方裁判所が審理しなければいけない。自分がいきなり審理すべきものではありません。だから、当時は地方裁判所の上に控訴院、そして大審院と三審あるはずなんですけれども、いきなり大審院が大津に乗り込んで裁判してしまう。普通の謀殺未遂事件と同じように裁判をしたといいながら、実は津田三蔵には上訴権がないんです。これは非常におかしいんです。ですから、完全に司法権の独立を守ったという言い方をするには、大津地方裁判所に差し戻すという判決をまず大審院が下さなければおかしいですね。で、これに対する批評はすぐ新聞に出ております。そうならばなぜこういう処置をとったのか、と。これに対する大審院の反論というのははなはだ法理論的ではないのでして、大は小を兼ねていいんだというようなことを言っていますが、これはちょっとひどいのではないかと思いますがね（笑）。

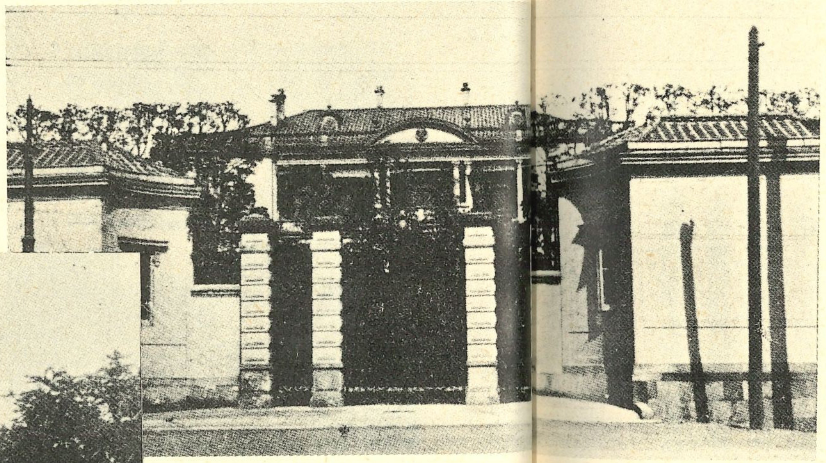
――しゃもじが耳かきになるというようなものですね（笑）。

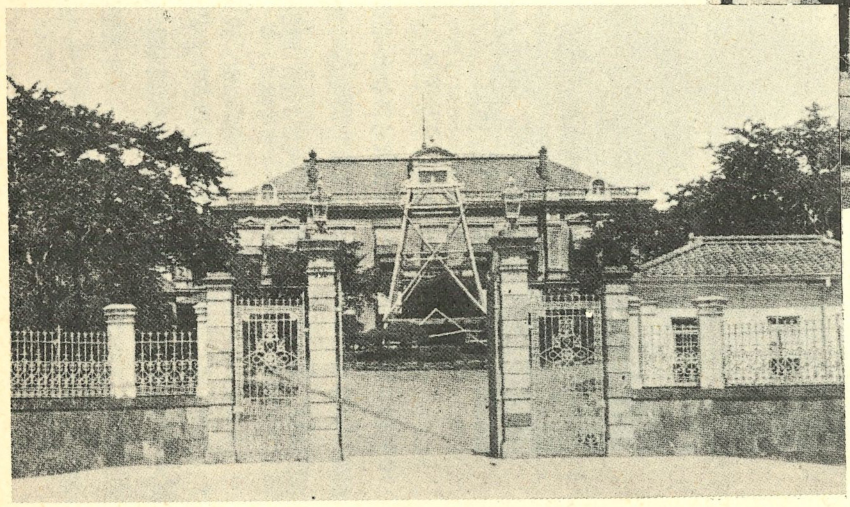
山本　山田司法大臣がおもしろいことを言っているんですよ。あの結果は「四分六だ」と、こう言っているんです。この「四分六だ」という言い方がたいへんおもしろいんですけれど。それで後からの記録を読みますと、ロシアの方もなかなかずるいんです。日本に死刑を宣告させておいて、こちらから助命を申し出ようという腹があったと私は見てるんです。一本とるつもりなんですね。日本があわてて死刑の判決を下す、するとロシアの皇太子がですね、まあまあ助けてやってくれと言うわけです。そうしますとむこうが非常に有利な立場に立ちますからね。

ところが、ロシア公使と日本側との交渉を見ていますと、日本側が何かこう、それを察知しているんですね。死刑にしろというのなら、おまえの方から要求してくれ、というようなことを言っていますから。日本にはそういう法律がないからと。これは後でたいへんに非難を浴びるんです。死刑にできないから、死刑にしろとロシアから要求してくれとは何事か、といわゆる国辱論争になってくるのですが、そんなことをロシアに言ったということは、何かそれを感じさせるんです。死刑にしろと言ったら、ロシアのシナリオは成りたたないですよ。暗黙のうちに日本側にそうさせておいて助命をする、これがいちばんかっこいいですからね。

ただ山田司法大臣の「四分六」という言い方は、ひとつロシアに対するゼスチャーがあると思うんです。これだけ一所懸命裁判所に対し政府は圧力をかけました、というゼスチャーですね。だから、あの児島惟謙との間にはある程度の腹芸があったと私は思ってるんです。だから完全な形で大津地方裁判所に差し戻しをすると身もふたもないことになりますね。だから一応国事犯ではないと言いながら、裁判はその

露国公使館（滋賀県庁蔵）





当時の外務省（滋賀県庁蔵）

形式をとって、しかも法律に適応するように処理をしている、と。やっぱり「四分六」ではないですかね。ですから、あのテンヤワンヤの中でも政府は案外冷静なところがあって、ロシア側の意図を見ぬいていたのではないかと思えるふしがあるんです。ただ、これを証明しようとしても公式記録の方はなかなかわかりません。ちょっとしたものから、そう思える点があるんです。

——世論の方はどうでしょうか。

山本 津田三蔵に対する世論の変化というのは、皇太子が去ると同時に出て来るんです。ホッとすると今度は一変します。だからあの判決の時にはもう反対はないわけですね。よく日本の法治国家である所以を示して、外国の圧迫に屈せず立派な裁判をやったと、こういう形になるんですが、むしろ当時の世論の重点は、司法権云々よりもいわゆる国辱を避け得たと、こういう発想になっております。ロシアの圧迫で三蔵を死刑にでもしてしまったということになれば、どれだけ大きな屈辱であったであろう。それをしなかったのは立派だと、出て来るのはこっちの方ですね。

ところが、それよりちょっと前ですと、皇太子への見舞電報の中にものすごいのがあります。「その肉をくらい、血を飲まんと欲す」というようなのがあるんです、津田三蔵が憎いから。それをまた新聞が心配して、そんなのをそのまま翻訳されたらたいへんだ、東洋的表現をやめろというような論説が出るんです。しかし彼を処刑してでもこの場を切り抜けたいと思っているときには、やっぱり「その肉をくらい、血を飲まんと欲す」なんですよね。ところが、皇太子が去ってホッとすると、今度は「津田三蔵には私心なし」とか、この辺が出て来るんです。世論というのは、はなはだ頼りないですね（笑）。

津田三蔵の裁判が終わった五月末、国内では各地で田植えが始まり、東京では墨田川のボートレースに人々が熱狂した。事件のため延期されていた各種式典や祭りも賑やかにとり行われた。大津事件によってひき起こされた全国的な狂乱は嘘のように消え、すでに季節は初夏であった。

この年秋、釧路集治監に送られていた犯人の津田三蔵は肺炎のため死んだ。三蔵が斬りつけたニコライ皇太子がロシア最後の皇帝として革命でその座を追われ、翌年妻子とともに悲惨な最後をとげるのは、大正七年、事件より二十七年後であった。


三重県上野市にある津田三蔵の墓（左）

露国皇太子訪日と西郷伝説

高野　澄

西郷隆盛は生きている、ロシアから帰ってくる——明治二十四年、この噂が日本人の心をはげしくゆさぶった。

噂は早くから囁かれていた。西郷に呼応する土佐の林有造や大江卓の反乱事件が未然に発覚、陸奥宗光が連座の罪で逮捕されたのが明治十一年六月である。反乱の真相は闇につつまれているが、一部の新聞は「西郷を中国に亡命させようとしたらしい」という憶測記事を発表した（「新潟新聞」）。政府のつかんだ事実が発表されていればこういう憶測の生じる余地はなかったのだが、とにかく噂の火種がついた。

数年して、西郷はインドにいるらしいという噂もおこった。インド民衆がイギリス帝国の支配からの解放をめざして苦境にあることは知られていた。苦境にある民衆の前に出現するというのが西郷伝説のパターンである。

浮かんでは消える西郷生存説が明治二十四年まで続き、ついに爆発するに至ったわけだが、その理由は何であったか。

西郷の経歴に見られる、類い稀なる強靱さが第一のものであろう。安政大獄を遁れての鹿児島錦江湾での投身からは奇蹟的に甦った。この直後、藩命によって奄美大島へ亡命するが、亡命解除のあとでも徳之島、そして沖永良部島で一年半の流罪生活を送りながらも不死鳥のように生き返り、中央の政局に復活してきたのである。

維新の元勲として国民の尊敬を集めるようになるまでは、この強靱な経歴を知るのは鹿児島藩士と一部関係者に限られていた。

しかし、明治六年に政府主流と袂を分かってからの西郷に対して民衆は、西郷は何を考えているのか、とともに、西郷隆盛とはいかなる人物であるかを問題にし、その強靱きわまりない政治生命を知って改めて畏敬の念を抱くようになったのだ。

それから四年間、政府と西郷の対立はついに九州での戦闘という事態に至るのであるが、政府は、いまなぜ西郷と闘わねばならないのか、過程と理由をていねいに説明せず、〝西郷は逆賊にして朝敵である、ゆえにこれを討つ〟という単純きわまりない態度で押し通した。

〝逆賊〟〝朝敵〟といった表現は状況説明ではなく、一個のイメージである。イメージであるゆえに説得効果は大きい一面もあるが、反面、いちど受け入れられると容易には拭われがたいというマイナス効果もある。

西南戦争は〝逆賊朝敵西郷隆盛〟を討伐する戦いとして敢行され、政府軍の勝利に終わった。西郷は殺しても死なぬほどの強い男だからという、憎悪よりは恐怖の思いが政府軍全将兵の心理を支配したであろう。戦闘の途中からすでに西郷は生き返り始めていた。それも、より強い男として生き返り始めていたということができる。

西郷隆盛戦死の意味はだれにも理解できなかった。政治人の場合、ただ死んだというだけでは不十分なのである。政治生命を抹殺し、しかも生物としての生命を断ってからはじめて十分に殺したといえるのだが、西郷の場合、あいまいさを多く残した戦死であった。

西南戦争は終わったが、日本はあまりよくならなかった。〝逆賊朝敵〟がいなくなったはずなのに世の中がよくならないという現実は、民衆に反省を強いる。西郷は逆賊などではなかったのではないか、という反省だが、そのためには西郷が生きていなければならないことになった。

自由民権運動に民衆から寄せられた熱狂的な期待は退潮傾向にあったが、明治二十三年開設予定の国会が安穏をもたらしてくれるという新

東方の夜空に現れる「西郷星」を拝する人々（中山榮之輔氏蔵）



しい期待に変わっていた。

しかし、ようやく開かれた第一国会は自由党土佐派の裏切りで軍事予算を政府の要求のままに認めてしまう。それが日本という国の将来にどう影響するかはわからないとしても、よくないことだというぐらいはだれにもわかった。

西郷隆盛が〝逆賊朝敵〟の汚名を解かれ、正三位を追贈されたのも同じ明治二十三年である。国会開設という重大な時期にあえて西郷隆盛の名誉回復にこだわらなければならぬ政府の態度が、民衆の敏感な心理に、ある予感を与えたと考えられる。

ロシア皇太子ニコライの親善訪日旅行は明治二十四年の春に発表された。

当時の日本人は、ある種の恐怖心なしには〝ロシア〟の名を口にできなかった。鎖国日本の扉を最初にこじあけたのはアメリカ合衆国使節のペリーだが、それよりずっと以前からロシアと日本は国境紛争を起こしていたのである。

自由党のあとをついだかたちで政府批判の第一線にあった世論を「対外硬」といっていたが、これは、不平等条約の改正交渉が遅々として進まない現状に不満を爆発させるもので、「対外硬」のスローガンの裏には「対外恐」の民衆心理があり、その中心はロシアだった。数年前、東京神田に建てられたニコライ堂は異様なムードで東京市民を圧倒していたが、これも〝ロシアの野心〟を思わせるのに効果があった。

ニコライ堂について、ドイツ人の医師ベルツは、こう論評している。

「奇妙なのは、ロシアの平民が一人として東京にはおらないことである。さて、この大教会堂はその異様な形状で、本当に全東京を威圧している。そこで、当然のことにロシアへの非常な憤激がおこった。これがだんだんひどくなった結果、ロシア正教の信者となったものは、ほとんど国賊と見なされるような有様に立ちいたった」（『日記』菅沼龍太郎訳）。

皇太子ニコライの訪日は、シベリア鉄道工事のウスリー地区起工式へ参列するついでのことであり、そのことは隠されてはいなかったのだが、はたしてそうなのかという疑惑が生じた。長崎から青森まで、一か月もかけて日本を縦断するスケジュールは親善旅行としては異常といえたし、明治天皇との会見を希望していないことも不安と疑惑の種子をまいた。十二年前のアメリカ前大統領グラントの訪日と同じようには歓迎できない雰囲気が生じたのである。

そこへ、ニコライの一行には西郷隆盛が随行している、いや、西郷を日本に送り届けるのがニコライの目的なのだ、という噂が生まれ、またたくまに広まっていった。新聞は賛否両論の記事を連載し、新潟の「北辰新聞」は西郷生死如何の懸賞読者投票を発表した。生ける西郷、廟堂の高官に訓示を垂れる、といった類いのパンフレットも売り出された。

ロシアやアメリカの使節が日本からの漂流民の送還を名目として介入しようとした事実は何回も幕末に起こっており、その限りでは説得性に富む噂だといえた。

西南戦争に際して鹿児島政府が発行したいわゆる西郷札は終戦後まもなく影をひそめていたが、西郷生還の噂とともに話題にのぼった。西郷札秘蔵者は心から西郷の生還を願ったのである。

しかし、心を痛める者も少なくはなかった。滋賀県の巡査をしていた津田三蔵もそういう一人である。

彼は陸軍伍長として西南戦争に従軍、軍功によって勲章を得ている。彼の今日あるは一にかかって西南戦争の勝利にある。西郷生還の噂が事実ならば、彼の根底は崩れ去る。

西郷が生きとるのであれば西南戦争の勲章は返してもらわねばならんのう——明治天皇がこう言ったという噂も出た。津田がこの噂を聞いたか否かは問題ではない。彼は自分の内にこの声を発していたのだ。

ニコライの一行が長崎に上陸したとき、西郷隆盛も、西郷らしき男も随行していないことははっきりした。しかし、そのことはニコライへの恐怖と警戒を解くものではなかった。仰々しいばかりの歓迎が展開されるのだが、これはいわば恐怖を裏返した表現であって、内実を見透かされまいとするための歓迎といったほうが真実に近い。

ニコライ一行の訪れるところにはすべて異常な緊張が漲った。

津田三蔵はニコライの琵琶湖見物を警戒する警備陣の一員に配置された。五月十一日、琵琶湖を見物して京都の常磐ホテルに帰るニコライが大津の町中を通行中、津田はサーベルを抜いて斬りかかり、傷を負わせたのである。

現場の状況からして、計画された行動とは思えない。極度の緊張と不安に耐えられなくなった津田の神経が、日本と自分とに脅威を与えるものの幻影を見、それに斬りかかったのであろう。推測にすぎないが、その幻影は〝ロシア〟と〝朝敵西郷隆盛〟のダブルイメージであったと考えるのも許されよう。

日本の朝野はあげて歓迎から謝罪に転じた。ベルツによれば、次のようなありさまであった。

「この事件があるまでは、次第に増大した外国人憎悪感が全盛の有様で、日本人の高慢さ加減には際限がなかった。この高慢さが打って変わって、今では、度はずれの卑屈さ、びくびくぶりとなった。あらゆる団体、女学校から医学会にいたるまでが、代表を京都に送った。天皇は、露帝に特に遺憾の意を表されるため、皇族一名と榎本子爵をペテルブルグに派遣される予定である。それどころか、今度は天皇自身が神戸に赴かれ、露艦上で朝食を共にされたのである。」

はじめ世論は津田を〝国賊〟と呼ばわることでロシアへの謝罪のあかしとしたが、ロシア側が何事もなかったかの態度を押し通しているうちに軟化し、大審院が死刑を科さなかったのを歓迎した。ロシアに屈服しなかったという形式上の処置において、日本の官と民とは一体になって満足した。最も真摯に謝罪を表明したのは、京都府庁門前で割腹自殺した畠山勇子だけである。

西郷隆盛は姿を見せなかった。

政治に不満を持つ民衆にとって、これは、救世主来臨が先へ延びたことを意味する。津田三蔵のサーベルにかからなかったのはむしろ幸いともいえた。

日本には、政治的に抹殺された人間が神格化して復活するというルールがある。古い話だが、藤原氏によって打倒された菅原道真は雷神と化し、御所清涼殿に落雷、かつての政敵を斃してから天満宮に祀られた。

祀られてしまうと手も足も出ないのだが、明治十年以降の日本近代史は未だ西郷隆盛を祀りきっていない。

西郷隆盛が何をやろうとしていたかについては、明治十年に早くも福沢諭吉が『丁丑公論』で鮮明に語ったのだが、福沢の死まで公刊されずにしまった。このこともまた西郷伝説に生命を与えたと思われる。

慶応三年（一八六七）十二月、庄内藩兵が江戸の薩摩屋敷を襲撃したのが京都へ飛び火して鳥羽・伏見の開戦となるが、戊辰戦争で全滅を覚悟した庄内藩は西郷の寛大な処分に驚き、維新後は大量の人材を鹿児島に送って西郷の教えを乞うた、『西郷南洲遺訓』刊行もその所産である——筆者がこの話をした某大学の学生が「自分は庄内の者だが、昔から鹿児島市と何かと交流している事実は知っていても理由は知らずにいた。いま、それがわかった」という内容のレポートを書いてくれた。

西郷伝説は、伝説としてはもちろん、こういう現実としても生きている。彼が構想した以上の政治が行われないかぎり西郷伝説は語り続けられるとしか言いようがないのだ。

（作家）

ニコライとロマノフ王朝

加瀬俊一

ロマノフ王朝は一九一三年春に創立三百年祭を盛大に挙行した。ニコライ帝一家は首都のカザン大寺院において、中世紀の盛儀を再現する華麗な祝典を行い、祝宴に次ぐ祝宴、舞踏会に次ぐ舞踏会が連日もよおされた。

首都の行事が終わると、皇帝は家族を従えて古都モスクワに赴いた。皇帝は白馬にまたがって単騎先頭に立ち、やや遅れて、銀甲白馬のコサック騎兵、続いて金甲栗毛の竜騎兵が蹄の音も高く、クレムリン宮門に向かって進むと、沿道に密集した民衆は声を限りに、万歳！を叫ぶのだった。

王朝は安定し国民は満足しているように見えた。だが、それは表面だけであって、祝典の歓呼が終わると、社会不安が増大するうちに、翌一九一四年夏には第一次大戦が起こり、敗戦が続いた結果、一九一七年早春に三月革命が誘発されて、皇帝は退位を余儀なくされ、その翌年七月には一家は配所で惨殺されてしまった。

ロシア革命の主役は、ニコライ二世、アレクサンドラ皇后、怪僧ラスプーチン、ケレンスキーとレーニンの五名である。このうち私はケレンスキーを知る機会があり、彼から種々と懐旧談をきいたのが端緒になって、『ロシア革命の現場証人』（新潮選書）を書くに至った。

ニコライは一八六八年に生まれた。祖父のアレクサンダー二世は農奴を解放したので、進歩的帝王として称讃されたが、無政府主義者に暗殺された。当時ニコライは感受性の強い十三歳の少年だったが、祖父の遺体に訣別を告げつつ、革命派に対する無限の憎悪を抱いた。これが、彼の性格形成に少なからぬ影響を与えた。

次いで帝位に登ったのは、ニコライの父アレクサンダー三世であって、彼も前帝暗殺に大きなショックを受け、反動的に専制政治を行った。専制君主制の純潔を維持するのが、神によって与えられた最高の使命であるとの確信のもとに、絶対的自負をもって、十三年の治世をつらぬいた。それだから、皇太子ニコライにも帝王神権思想を、イヤというほどたたきこんだ。ニコライは温順善良だったから、苔が水を吸うように、これを抵抗なく受け入れた。

成年に達するころには、ニコライは眉目秀麗で、温容ながら威厳があり、大帝国の皇太子にふさわしい風格を備えていた。当然に、女性に人気があったが、いつの間にか、帝室バレエ団の名花クシェンスカと浮き名を流すようになった。白い毛皮に埋まって赤いソリを走らせるクシェンスカのかたわらに、夜半、粉雪を浴びつつ白馬を走らす皇太子の姿をみかけることは珍らしくなかった。

それが余り目だち始めたので、父帝は二人の間を冷却するためにニコライを外遊させた。日本に立ち寄り大津で奇禍にあったのはこの時である。その後、彼は南独の小都ヘッセ・ダルムシュタトのアリックス王女（英女王ビクトリアの孫）と相思の間になって、結婚した。結婚式が行われたのは父帝の急死後わずかに一週間だった。

ニコライが即位したのは一年の服喪を終わった一八九六年春で、時に二十七歳だった。彼は先帝の遺風を継ごうと努力したが、父のような意力も決断力もなく、右に左にゆれ動いて定見を欠いた。ドイツ皇帝にそそのかされてアジアに進出し、日本に敗れたのもこのためだった。戦争が終わったときは在位約十年、三十六歳になっていたが、彼の習性となった専制主義では、革命情勢の成熟したロシアを統治するのは、もはや不可能だったにもかかわらず、それに気がつかなかった。つまり凡庸な皇帝だった。彼は失政の慰藉を家庭に求めた。皇后アレクサンドラを溺愛し、十年間に四王女の父になった。オルガ、タチアナ、マリイ、アナスタジアの順であって、その頭文字をとって、OTMAと通称した。皇后は皇太子を出産しようと、

祈とうにこったり秘薬をのんだりしたが、悲願成就して、一九〇四年夏、男子アレクシスが生まれた。日露戦争のさなかである。

ところが、皇太子はヘモフィリア（血友病）――いったん流れ始めると血液が凝結せぬ――だった。これが、怪僧ラスプーチンの登場をうながし、革命を不可避にしたのである。一九一二年夏、皇帝一家がポーランドの離宮に逗留しているとき、七歳のアレクシスが血友病の発作を起こし重態におちいった。十日というもの皇太子は苦痛に悲鳴をあげ、ついに危篤と報ぜられた。その時、側近の勧めによって、皇后は二千マイルも遠方のシベリアにいるラスプーチンに祈とうを依頼したところ、たちまちケロリと快癒した。これ以来、皇后は怪僧を「生き神」のように絶対信仰し、彼のみが皇太子を救いうるのであり、したがって、彼こそロマノフ王朝の唯一の守護者であると、固く信じこんでしまった。

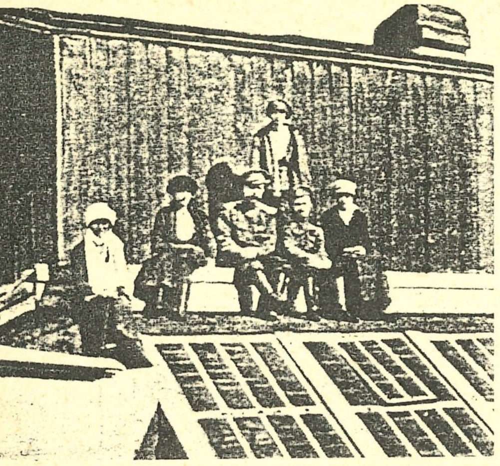
近親も知友もみなドイツに残してきたうえに、小国王室から大帝国の宮廷に移ってきたのだから、アレクサンドラは孤独だった。宮廷は冷たく、国民は親しんでくれぬので、ひとえにニコライに頼ろうとしたが、彼は良き夫ではあったが弱い皇帝だった。そこで、一途に信仰に打ち込んだ。生来、求道者の一面があったので、暗示にかかりやすかった。

ラスプーチンは放蕩者をもじった綽名であって、後にこれが姓になった。西シベリアの寒村に農夫の子として生まれ、馬子を職にしていたが、酒を飲み女を犯し財を盗む無頼の生活を送ったので、ラスプーチンと呼ばれた。だが、やがて神秘的宗門に入り、荒行を積んで修験者になり、有徳の高僧と仰がれるに至った。今で言えばオカルト（超能力）だろうが、催眠術を駆使したようで、彼の目に射すくめられると、みな暗示にかかって、半ば意識を失うらしかった。超人的精力を誇り、淫乱生活を送って盛んな話題になった。

首都ペテルスブルグに現われたのは三十代の時であるが、この大都会には、金と女と醜聞が、腐肉にむらがる蛆のようにウゴめいていた。社会道徳の廃退は、快楽の追求と姦通の公認と迷信の流行に象徴されていた。つまり、彼にとって、ウッテツケの環境だった。

かねてからニコライはロシアを真に代表するのは、貴族や都市インテリではなく素朴な農民大衆であり、彼らは専制政治を心から支持していると盲信していたから、ラスプーチンが言葉巧みに取りいると、これこそ、「ロシアの大地の声」だと錯覚した。また、皇太子が持病の発作を起こすごとに、彼は病床にかけつけ、祈とうによってたちまち苦痛を鎮めたから、皇帝とくに皇后の彼に対する信頼は、みるみる増大し、両三年の間に社交界の寵児になりあがった。貴族も富豪も高官も将軍も、みな争って彼を招き、高価な贈物をして歓心を求めたが、最大のワイロは貴夫人の貞操だった――闘牛のように精力絶倫だったから。ついには、彼は皇后を通じて皇帝に圧力を加え、閣僚の任免から利権の分配さらには軍事問題にも介入したので、多くの敵を作った。国民の間には、皇后はラスプーチンの情婦だ、という流言を信ずる者も少なくなかった。

こういう状況でロシアは大戦に突入したが、戦備が不十分なので敗戦が相次ぎ、民生が窮迫すると、ストライキが頻りに起こって社会不安を激成した。するとニコライはリベラル派に譲歩して立憲政治に移行するような態度を示すのだが、皇后が断固反対するので――背後に怪僧がいた――やむなく、また専制主義的弾圧政策を強行するのだった。ついにニコライがやりきれなくなって、前線の大本営に逃避すると、皇



トボルスクに監禁された皇帝とその家族

后はラスプーチンの「神託」に従って、閣僚高官に対して「飛瀑のように命令を下す」(皇帝宛書翰)ので、皇后とラスプーチンに対する世評は極めて険悪になった。有力皇族は皇后を尼院に押し込め、怪僧を暗殺する計画や、ニコライ二世を退位させるクーデター謀議を進めた。こうして、さすがのラスプーチンも一九一六年十二月末日にユスポフ公爵に射殺された。その前に死期を知って、彼は遺言を書いたが、それには、「皇帝よ、汝の親類が下手人だったら、汝の一族はひとり残らず、二年以内に死に絶える。彼らはみな国民に殺されるのだ」と予言している。その通りになった。

怪僧を排除しても内外情勢は少しも改善せぬので、国民は焦燥にかられた。生活は日に日に悪くなり、人心はますます荒廃した。どうでもよい、どうにかなる――これがスラヴ民族特有の処世観なのだが、極度の絶望が、彼らの破壊的衝動に点火した。

一九一七年三月八日、首都の紡績工場の女工九万が「専制政府を倒せ」「戦争をやめろ」のプラカードを掲げてデモを始め、目につく限りのパン屋を襲って略奪をした。この日、皇帝は前線に向かった。首都の状況を深く気にとめなかったのである。ところが、これが革命に発展し、数日後には国会が大衆の要請にこたえて、臨時政府を樹立し、皇帝は軍の信頼をも失って、三月十五日、ついに退位した。この間に一躍して政局の中心に踊り出たのが、三十六歳のケレンスキーである。彼は巧みに穏健派と過激派の関係を調整しつつ、立憲民主政体の樹立を目標にして、めざましく活躍した。七月には首相になり、一時は「赤いナポレオン」とまでもてはやされた。

レーニンは三月革命のニュースを亡命地のチューリッヒできいたときには本気にしなかった。四十七歳の彼はハゲ頭に悩み、生存中には革命は起こるまい、と諦めていたのである。ドイツ政府――ロシアを混乱させるために――の斡旋によって、有名な「封印列車」でレーニンがペテルスブルグに到着したのは四月十八日であり、前後してトロッキーも米国から帰国した。ここに、穏健派をひきいるケレンスキーと過激派を指導するレーニンの決闘が始まったが、しばらくはいずれが勝つともわからなかった。

この間に、廃帝ニコライは逮捕され、ツァールスコエ・セロの離宮に、家族とともに監禁された。ケレンスキーはニコライを見舞ったが、彼の温かい態度に廃帝は大いに喜んだ。「地獄で仏」の思いだった。ケレンスキーが廃帝一家のロンドン亡命を密かに工作しているのを知ったからである。だが、国内事情の変化によって、英国政府は亡命歓迎の前言をひるがえした。ロシアの革命・反革命の内戦が拡大するに及んで、ニコライらの国外亡命は次第に困難になった。ケレンスキーは彼らの安全を配慮して、八月、廃帝一家をシベリアのトボルスク市(人口二万)に移した。比較的安全な地帯で、帝政派の支持勢力が強かった。ツァールスコエ・セロ離宮には五か月いたことになる。

ペテルスブルグでは種々の曲折をへて、レーニンの過激派が実権を握り、十一月七日、臨時政府の本拠になっていた冬宮が陥落した。その直前に、ケレンスキーは冬宮を脱出し、前線に赴いて友軍をかき集めたが、首都奪回は成らず、ついにロンドンに走った。

ボルシェヴィキ革命は、しばらくは廃帝に直接の影響を与えなかった。一家はともかく安穏に単調な日々を送り、ニコライは依然として救出を期待していた。救出の計画は多数あり、なかにはレーニンが謀略に使った偽装計画さえあった。また、ドイツ皇帝が従弟のニコライをベルリンに迎えたいと申し出た――ドイツはソ連との単独講和によって広大な領土を獲得していた――ので、モスクワまで護送し始めたが、途中でエカテリンブルグの過激派が苦情を申し立てると、これを口実にして同地に連行した。廃帝をドイツに渡すとなにをされるか判らぬ――ドイツ皇帝は革命の波及を恐れていた――ので、それを避けるためにレーニンが打った芝居らしい。これが一九一八年四月のことである。ところが、この間に解放されたチェコ(捕虜)部隊が西方に進撃し、七月中旬には両三月でエカテリンブルグを攻略する形勢になった。そこで、レーニンは廃帝一家を惨殺した。

一九一八年七月十六日、ロマノフ王朝は三百五年の歴史に血の終止符をうったのである。

(評論家)

裁判官と代言人

紀田順一郎

明治政府には藩閥政府の異名があったように、維新の終結過程で主導権をにぎった薩摩・長州の両藩によって人事が固められ、これにつらなる要路の人々もまた、主としてこの二つの藩の出身者が優遇された。「薩長にあらずんば人にあらず」ということばさえ生まれたほどである。

政府に対立した自由党や立憲改進党の構成メンバーが、薩長以外の藩の出身者であったことは注目に価する。このように見たとき、「自由党圧殺の過程がそのまま明治国家の建設過程をなしていた」(服部之総)という見方に、別種のリアリティが生まれてくる。

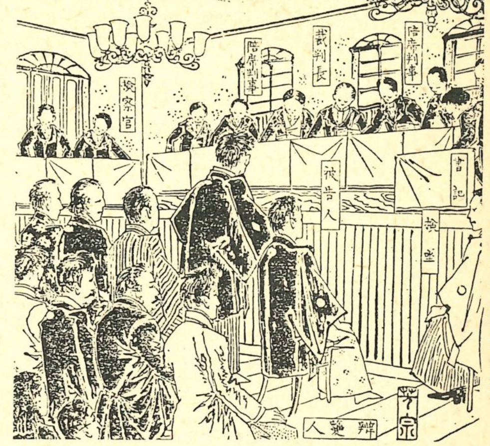
しかし、薩長以外の出身者が、まったく要路につくことができなかったかといえば、決してそのようなことはない。立法・行政の二部門をおさえた薩長は、司法分野を〝傍流〟の小藩出身者にゆずりわたした。法は自分たちがつくり、実際に運用も行う。その法の番人役はあまり重要でないと考えたのであろう。

こうして、明治年間の高名な司法官の多くは、藩閥とは無関係のところから出た。彼らは独自の気概をもって司法の領域を守り、その権威を打ちたてたが、その過程において、当然ながら藩閥政府との反目、対立を生ずることになった。大津事件における政府と大審院の対立は、まさにその典型である。〝聖代の不祥事〟といわれた異常な事件を裁くにあたって、時の大審院長児島惟謙はいっさいの雑音に耳をかさず、行政権力の猛烈な干渉圧迫をはね返して司法権の独立を貫いた。その細部については法理論の上から批判もあるが、当時の国民の成熟度を考え合わせるとき、やはり卓抜な手腕と見識を賞揚せざるをえない。

児島惟謙は天保八年(一八三七)大塩平八郎の乱が起こった年、伊予国(愛媛県)宇和島の家老宍戸弥左衛門の家臣、金子惟彬の二男として生まれた。藩士とはいえ貧しい家柄であり、おまけに生母が三か月目に離縁で実家に帰ってしまったため、一歳の時から里子に出されるという、不幸な幼年時代を送らねばならなかった。

十三歳の時、父親が職禄を辞したため、酒造業を営む親戚の家に寄食して苦労する。このような状態が二十歳ごろまで続いた。やがて剣道の腕を認められ、師範として頭角を現すのであるが、もし彼が維新に出くわさなければ、一生部屋住みのパッとしない生涯を送る破目になったろう。

しかし、時代の大きなうねりは、彼の鋭い感性に大きな影響を与えた。二十六、七歳のころより勤王討幕の運動に加わり、土佐の志士らと交わるようになる。加えて長崎に留学したり、京坂の勤王家と接触したり、七卿落ちの三條実



明治期の裁判光景（東京大学明治新聞雑誌文庫蔵）

美の護衛をつとめたこともあるという。

　戊辰の役には討幕派の一人として活躍、維新後は地方行政官としての道を歩む。しかし、維新のさいに目をかけられた楠田英世（北海道総督参謀）の推挙により、司法省入りを果たすことができた。雄藩以外の出身者が、中央権力の道を歩むチャンスをつかんだのである。

　三十六歳の時司法少判事となったが、当時の司法卿たる江藤新平に見い出され、出世コースを歩むことになる。しかし、児島惟謙の名を政府部内に認識させたのは、福島上等裁判所勤務のさい、鶴ケ岡事件を解決したことからであった。

　当時鶴ケ岡県（山形県）では廃藩置県を喜ばず、いまだ県政が実施されていなかった。これに抵抗した森藤右衛門という士族が中心となり、新政が行われないために蒙っている損害賠償を宮城控訴院に訴え出たが、政府はこれを握りつぶしていた。児島はこの一件を調査するや、直ちに内務卿大久保利通に建白を行い、解決の権限を与えられると直ちに現地に臨時裁判所を設け、脅迫をものともせず、被告行政官庁の非を認める判決をくだした。

　このような経歴にあらわれているのは、困難にめげない剛直な性格、政府の行政に対する反発意識である。そのほか、司法官としての使命意識がなかったといえば嘘になろう。現に敬愛した江藤新平が、西郷らとともに辞職に追いこまれたうえ、改定律令において削除されている梟首刑に処せられているのである。裁判官は予断をもってはならないというが、このような状況を経験しても何一つ感じないというのであれば、人間として信用しかねる。

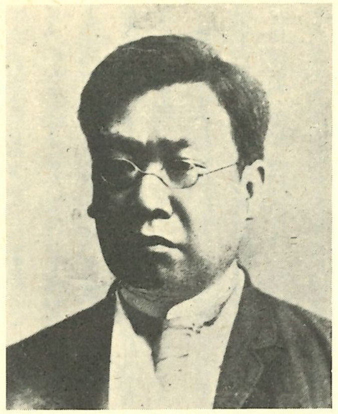
　大津事件における惟謙の苦闘は別の章にくわしいので省略するが、大審院で裁判すべきでなく、まず地裁で裁くべきだったというような凡ミスはあるが、失点というべきものではない。当時の全国民を覆っていた異様なムードと、政府の猛烈きわまりない、といおうか破廉恥というべきか、とにかくその後の司法史上にないようなプレッシャーをはねつけ、法理論の筋を通したことは高く評価せねばならない。惟謙の個人的存在がなければ、明治の司法界のあり方は変わっていたであろう。

　政府との間に一種の気脈が通じていたというのも疑問であって、不如意な判決に激怒した西郷内相が帰京にあたり、駅頭で児島を面罵したという事実は、両者の断絶のいかに深かったかを物語っている。考えてもみるがよい。衆人環視の中で高官二人が「コノ結果ヲ御覧ナサイ」「何ノ事デスカ」などと言いながら、たがいに詰め寄っているのである。要するに「覚えていやがれ」「何をいうか」ということだ。異常といわずして何といおうか。

　案の定、無頼漢の喧嘩にふさわしい陰湿な復讐が行われる。翌年、大審院判事弄花（花札とばく）事件という一種のフレームアップが発生、大審院長としての彼は引責辞職を余儀なくされる。花札をよしとするものではないが、明治時代のそれは一種の社交手段であり、今日の麻雀のようなものにすぎなかったことを知るべきである。

　以後、貴族院議員、衆議院議員を歴任した彼は、明治四十一年（一九〇八）、七十一歳で没した。当時の人は、大津事件における彼の業績をすでに忘れていたように見えるが、それは「思い出すのも不愉快な聖代の不祥事」（三宅雪嶺）という感覚があったためであろう。

　児島惟謙が〝護法の神〟として再びクローズアップされるのは、昭和初期に入ってからである。惟謙の遺した『大津事件顛末録』や、司法畑からの総合的研究である尾佐竹猛の『湖南事件』（『明治秘史疑獄難獄』に所収）が出て、人々は忘れていた事件を思い出した。忘れるといっても、三十数年も前の話であるから、むしろ全く知らない世代がほとんどであったろう。



星亨（共同通信社提供）

　明治時代の法曹家をふり返る場合、もう一人目につくのが星亨である。この人と児島惟謙は、イメージ的にずいぶんかけ離れているが、共通点として生まれが貧しく、恵まれぬ少年時代を過ごしたこと、法律畑へ入ったことで出世の機会をつかんだこと、有力者の知遇を得ることによって昇進し、実力を発揮したことなどがあげられる。法律関係の仕事というものは、昔から医術につぐ高度の専門職であって、身分制度のいまだ濃厚な時代に、徒手空拳、一定の地位を築きあげる早道であった。

　星亨は左官屋の息子として生まれたが、生後間もなく父親に蒸発され、母親の手一つで育てられた。やや長じて横浜に出た彼は、蘭法医の玄関番に住み込み、さらに開成所に入学、幕府の海軍所教師となる。やがて陸奥宗光の嘱目を得て、二十二歳の時神奈川県二等訳官にひろいあげられる。当時百円の高給である。

　このころのエピソードとして、陸奥に連れられて紀州屋敷へ赴いたところ、大玄関に御簾（みす）をおろして「奏任官以下昇降を禁ず」とあった。それを見た星はサッと顔色を変え、「他日参議になったら、この玄関から来る」と言い捨てるや、一人で帰ってしまった。

　また、吉原へ書生を引き連れて行き、どんちゃん騒ぎのあげく邏卒を殴ったというので、閉門百日の刑に処せられたこともある。そのさい、位が低いため土間に引きすえられた屈辱が忘れられず、陸奥の力を借りて租税寮七等出仕に任官した。

　有力者のうしろだてがある者は強い。間もなく彼は横浜税関長となったが、明治七年（一八七四）、税関公文書で大英帝国のクイーンを「女王」と訳したのに対し、英国領事から「女皇」とすべしと抗議をうけ、あくまで譲らなかったため、後難をおそれた政府によって免職にされてしまった。しかし、この場合も陸奥の手がさしのべられ、条約改正準備という名目でロンドン法学院（ミドル・テンプル）に留学してこいという命令をうけた。

　三年後、星はバリスターの免状を得て帰国した。周知のことと思うが、バリスターは法定弁護士のことで、事務弁護士のソリシターとは区別され、活動範囲が広い。例えば法廷で直接弁論ができる。当時ミドル・テンプルでこの資格をとった日本人は馬場辰猪がいるけれども、星の場合は並の勉強ではなかった。そのことは、現在も慶応義塾図書館に保存されている星文庫によって知ることができる。法曹家志望者が読むべき専門書が、ほとんど網羅されている。ちなみに、星は生涯、ヘビー級の読書家であった。明治の政治家中、最高の読書好きであったといってよい。

　英国ではバリスターだが、日本に帰れば代言人にすぎない。〝三百代言〟ということばさえある。星はまず司法省に提言して司法省付属代言人の制度を設けさせ、さらに自治的代言人組合を組織した。彼の力によって、日本の弁護士制度は大幅に前進したのである。

　卓抜な指導力をもつ人は、単なる専門家、実務家としての境遇に甘んずることをよしとしない。星は代言人として最高の収入を得る身分となるや、政界に眼を転じて立憲自由党に入党し、論客として活躍したが、演説会で官吏を侮辱したかどで六か月の重禁固をくらう。それについで秘密出版事件をおこし、再度入獄、憲法発布の大赦により出獄する。

　その後の経歴は、衆議院議長、自由党領袖、駐米公使、逓信大臣など、すこぶる多彩なものがあるが、陽の当たる場所を歩いているようでいて、実績に乏しい。政界入りしてのちの児島惟謙と同じで、名士になることにより歴史の中枢部から逸れてしまったのである。

　彼の性格は剛直というより剛腹であった。そうした性格が災いして、伊庭想太郎に刺殺されたのは惜しい。五十一歳の働きざかりだった。

　なお、明治時代の代言人として、花井卓蔵（一八六八〜一九三一）を逸することはできない。広島藩士出身というほかは、星の経歴とよく似ているが、日比谷事件、大逆事件など、扱った事件の大きい点が異なっている。（評論家）

九十年後のいまも

小林亜庭

京町通り二丁目

大津市・京町通り二丁目、乗念寺図子角の碑はまだ新しい。「此附近露国皇太子遭難之地」とある。真向かいに住む村田利兵衛さんと滋賀俳文学研究会が、昭和四十五年に建てた。

「うちんとこの地所なもんでね、向かいが。市役所に言うても建ててくれませんでね。場所がちょっとずれてますんで、この付近となってますでしょ」

と言う村田さんの奥さんの話では、この通りは昔は東海道であった。いまこそさびれているが、かつてはメインストリート。軒を並べた商店が松の枝に提灯を吊り、国旗をかかげ、幔幕を張ってロシア皇太子一行の通過を迎えたのだ。

狭い通りである。わずかな隙間に立つ人垣と警官。その間を人力車の隊列が通り過ぎると思ったとき、事件が起きた。血の吹き出る頭をおさえて人力車をとびおりた皇太子が、永井呉服店の店先へ走る。店の前の揚店（床几）にきちんと膝をそろえて一行を迎えていた主人の長助が、あわてて身をよける。その木綿の粗末な座布団に皇太子がよろけ込み、血をしたたらせる。

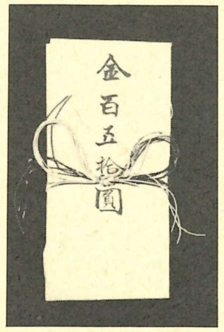
その時、村田さんの隣家、出物利口品専門店の看板を出している泉商店のタカさんは三歳。「こわくて家にとび込んだ」と、九十歳を過ぎたいまも記憶している。他に現場を目撃した人は、だれも生き残っていない。

永井呉服店のあったところは、いまはこのあたりで目立って新しい建物の初音屋楽器店になっている。だが、その隣の小林布団店、かつて質商を営んでいた斜め向かいの村田さんと泉さんの家などは、ほとんど当時のままである。

むしろ被害者

「あそこに床机がありましたばっかりに、いまに至るまで、こうしてお話せんならんことになりました。」





上　永井長助（永井昌二氏蔵）
左　宮内省からのお手当金（同）

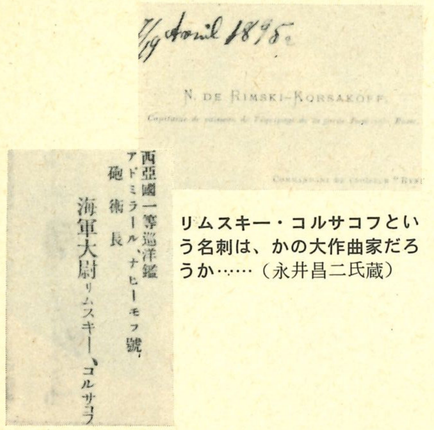
滋賀県庁の近く、四宮神社前に住んでいる永井信子さんは永井呉服店の養女。後に養父の長助氏から聞いた話で、事件直後の情況は鮮明に頭に描かれているようだ。

一応、奥の間にお床をのべて、休んでいただくようにということで。赤い毛氈を敷いて、お客布団のいちばん上等のを出して用意はしたんですけども、「それにはおよばん」ということで……。宮様（有栖川宮威仁親王）がお家に上がってくださるし、えらいことやったということでした。でも、おけがも軽かったし、無事にお帰りになったということで、お手当金を百五十円、宮内省からいただいたんですね。それで町内の人にお酒や記念品を出しまして、残りはいくら残ったのか知りませんが三井銀行に預けたということですけど。

父は毎日、裁判所から呼び出されて、犯人扱いなんですね。「その方」「その方」と言われて、「私は別に悪いことした覚えもないし、名まえもありますから名まえを呼んでください」と抗議したとか。家は地所とも、日赤が買い上げたということですけれど、補償金は全然なかったんです。父はまだ三十五歳だったのに、店がなくなったので商売はできなくなりますしね。

それでも当時のことですから、ロシアから金のノベ棒をもらったとか、白いハンカチに赤いインクをつけて大もうけしたとか、いろんな噂が立ったらしいんです。「永井はもうけた」と、いまでも言う人がいます。むしろ、うちは被害者なんですけどね。日露戦争のころでしょうか。出征兵士を送りに行く人たちが、「露探（ロシアのスパイ）！」と叫んで、うちの戸に石を投げるとか、あったようです。

父にすれば残念なこともあったようで、くわしく書き残していますけれど、やはりみなさんには、ようわかってもらえない思ってます。あの県庁にある座布団。あんな汚なそうなもの、返してもらって焼いてしもうたら、さっぱりする思うんですけど。あれ、傷の手当てをした晒木綿といっしょに没収されたわけですけどね。家も没収と違いますか、お金は出ましたけど──。



リムスキー・コルサコフという名刺は、かの大作曲家だろうか……（永井昌二氏蔵）

古い名刺帳にはロシア語の名刺がたくさん貼られている。皇太子は事件から三年後、ロシア最後の皇帝・ニコライ二世となる。とくに神戸に寄港するロシア東洋艦隊の士官たちは、皇帝陛下の血のにじんだハンカチにキスすることが上陸の大きな目的になったらしい。

「魯西亜国一等巡洋艦アドミラール　ナヒーモフ號　砲術長　海軍大尉　リムスキー・コルサコフ」と日本語で印刷された名刺は、かの高名な作曲家のものか。同一人物とすれば、海軍軍人でもあった「サドコ」の作曲者は五十歳ちかくになっていたはずである。

何も残っていない

サーベルをかざして、逃げる皇太子を追う津田巡査。その足を車夫の一人が払った。倒れた巡査の背中を、もう一人の車夫が拾ったサーベルで斬りつけた。二人の車夫は皇太子の生命を救った英雄として、ロシア側から勲章と二千五百円をもらい、さらに千円の終身年金までもらう。当時にすればばく大な褒賞であった。

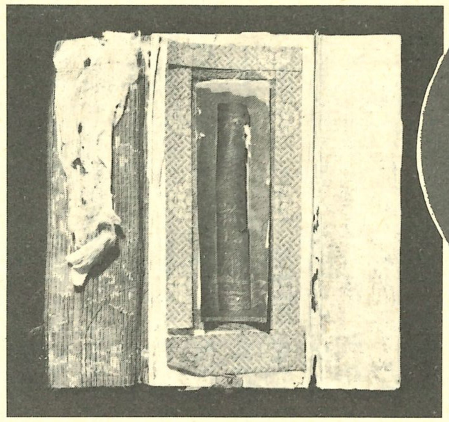
その津田巡査を斬った車夫、北賀市市太郎の末の娘さん、小林千鶴子さんは、いま枥木市に住んでいる。大金を手にした市太郎氏は故郷の石川県大聖寺町（加賀市）に帰り、田畑を買い、郡会議員になった。地主の北賀市家に生まれた千鶴子さんは、「幼いころの思い出は、いいことばっかり」と言う。

事件の時は日本全国から手紙やらお金やら、もったいないほど送られてきたって言うてました。父は情深いというんでしょうか、人助けが好きで、何でも寄付するんですね。優しい人でした。大晦日の夜などは、借金に追われている人に泣きつかれたりすると自分のことは構わないというふうでした。米蔵はいつもいっぱいで、小作人もたくさんいて、私たち子供は苦労知らずでした。果物なんか売ったりしないで、蔵の前に積み上げて、欲しい人は取りにいらっしゃいというふうでした。

父が亡くなったのは私が九つの時でしたので、くわしいことはわかりませんが、敷地は八百坪もありました。それも昭和九年の大火で焼けて、土地も人手に渡りました。いまは何も残っていません。お墓があるだけです。一年に一回はお墓まいりに行きますが、このごろ、私も年をとりまして、よく昔の夢をみます──。

大金を持って故郷へ帰った人は、その大金が

畠山勇子のお守り





永井信子さん

偶然の所得であることが知られているだけに気を張った生活を強いられるはずである。日露戦争当時は、敵国から年金を受け取っていたのだから、永井家以上に白眼視されることが多かっただろう。もちろん、その年金はロシア革命によって途絶えるのだが。

もう一人の車夫、向畑治三郎については、派手に金を使って零落したことが知られている。永井家の名刺帳には「勲八等　向畑治三郎」の名刺が残されていたし、大聖寺の北賀市家へも一度だけ訪ねたことがあるらしいが、その後を知るものはいない。

世をはばかる墓

三重県上野市の大超寺墓地。高さ四十センチほどの小さな墓石は墓碑名も判読できないほど崩落しているが、津田三蔵の墓である。

捕らえられた津田巡査は、大審院で終身刑の判決を受け、その年の秋、釧路集治監で死んだ。伊賀上野は彼の故郷である。

身をすくませるだけすくませたような墓に弱い冬日があたり、供えられた花がドライフラワーのように枯れている。だれが供えた花なのか。寺の奥さんに訊くと、遠縁の人が毎月きまってお参りに来ているという。その人は、寺のすぐ近くに住んでいた。

「うちが津田家と関係があることは他の人はだれも、近所の人も知らしまへん。私はここに嫁いできて、後で知ったんですが、もともと私と大超寺の奥さんとは従姉妹でして」

と、内職らしいミシンの手を休めて言う。

従姉妹同士が、知らずに嫁入りした先が、一方は津田三蔵の姉の娘の子供。一方は、津田家の墓をまもる寺。これは偶然である。三蔵の父親は、伊賀上野・藤堂藩の御典医だった。

国を憂えて、したんだということも聞いてますけど、いろんな見方ありますんでな。絶対、それは他人に言わんようにと。親戚だと言うな、と聞かされてました。うちの主人も聞かされてませんもんでね。はじめは世間はばこうて、お花も（墓に）供えなかったらしいんですわ。うちの息子も、いま大学で法律の勉強してまして、この間も大津へ行って来たらしいんですけど、（津田三蔵の）親戚の子だとはよう言わん。

それでも、上野警察の署長さんが新しく赴任なさると、お墓に参っておいでになるそうで。お花があがってます——。

津田三蔵の行為がどのようなものであったにせよ、国を震撼させた先輩警官の墓がある土地に赴任すれば、一礼なしには気がすまないというものであろうか。

事件後、ロシアに相すまないと遺書を残して自殺した畠山勇子の墓は、京都下京区・末慶寺にあるが、こちらは見上げるばかりの巨石である。そして、なぜか戦時中には教師が学童を引率して参拝に来ることが多かったという。

「それにしても人はね、いろいろと流されたり巻き込まれたり……」という永井信子さんの言葉が耳に残る。

（ルポ・ライター）

歴史への〝招待〟

明治天皇御巡幸に就て御尋ね致しました処、御多用にも拘らず、早速御返事を下さいまして誠にありがとうございます。御巡幸に就て詳しく記述をいただきましてよく判りました。只此処で申上げたい事がございますので、一応為念記述いたします。

老生は明治二十七年の生まれでありますが、その老生が五歳か六歳の折りに、郷里仙台市に於て明治天皇陛下の御巡幸をお迎え申した記憶がハッキリしておるのであります。その月日は忘れましたが御巡幸の巡路である第二師団に直通する仙台市大町二丁目の道路の両側に奉迎の市民は、地上に土下座してお待ち申上げたのです。

御乗物が土下座しておる所から約一丁位近くに来ますと、巡査の号令が烈しくとび、市民は頭を路面に押付けて御通過なさるのをお待ちして、再び巡査の命令で頭を上げるのです。その時は御乗物は一丁も向こうに過ぎた時で、どのようなお方が乗っておられたのか判らなかったものです。

その時の仙台市のお祭り騒ぎは大したもので門毎に日の丸を掲げ、赤飯をたき、頭付きの鯛を添えて客人をもてなし、帰る際は、赤飯並にごちそうを、一背にしょわせたものです。その後もう一度、日露戦争前に御巡幸があったように思います。（以下略）

（山梨県長坂町　鈴木三郎さん）

（前略）

貴局の「歴史への招待」を毎回楽しみに見させて頂いております。

太平洋戦争に依って中断された幕末史が、今日ようやく陽の目を見るように成り、真実が次から次へと白日の下にさらされるように成って来ましたが、本当の歴史の価値は、百年目にして出てくるといわれていますが、貴局の取材スタッフの方達、編集者の方々も、大変御苦労なさっておられることと御拝察申上げます。どうか、この番組を長く続けて下さい。私達も素人ばかりでつくった歴史研究会ですが、皆、自分の職業の合間をぬって、好きな幕末史に熱中しております。

編集者、スタッフの方達、歴史への真実の招待に益々御活躍下されて、青少年に、真実の歴史、幕末史を放映して下さい。

（神奈川県横浜市　檜府　進さん）



（埼玉県久喜市　川辺喜川坊さん）

二人の義経は重なりませんでしょうか（アリバイ成立しませんか）。

六月七日「歴史への招待」（義経は二人いた）につきましては、大変参考になりました。巷間私達にとりましては、時代背景を含み人間をうきぼりに書いてあります海音寺潮五郎氏の作『武将列伝』が理解しやすい所で、該書により私も義経探しをいたしたことがあります。

千葉県東葛飾郡関宿町にある、中戸山西光院常敬寺が私の檀那寺にあたり、当主の住職が深栖と申します。話の中から、寺宝として、義経が使用したものとか守り本尊とかあるが、何故あるのか不明だと、和尚の方より言われ、それから私の方から、鞍馬山より牛若丸を連れだしたのは、深栖三郎であり、和尚と同苗である事を話し納得してもらい、和尚もそれから千葉県教育委員会等へ参り、種々調査の結果何の変哲もないお堂の一つが、鎌倉時代の作であることが判明した次第であります。義経について、海音寺氏がここに一年程滞在してるとの話が、何となく立証出来た事が嬉しく思いました。

又、同氏の文章の中に、義経が近江の国で盗賊を退治（ハカマダレヤスケ）した話は、実はこの下総の話が近江と混同したのであろうとの話でしたが、近江の話は近江であった事、山本義経といたしますと、近江と下総に同時期に二名いた事になります。海音寺氏が御存命でありませんだけ、他人が云々言う事が出来ませんが、右の寺に痕跡がありますので、この辺からなおご研究が進みませんものでしょうか。かえって海音寺氏の否定が下総を証明させましたので、二人義経が明白になる様な気がいたしますが、いかがなものでしょうか。考えのヒントとして大変参考になり、ありがとうございました。

（福島県郡山市　岩本静次さん）

前略

過日は「歴史への招待」の御知らせ頂き有難うございました。又、なつかしく拝見させて頂いて居ります。一言感想を述べさせて頂きますと、私達明治生まれの人には何だか少々物足りません。

「露国皇太子遭難」の大津事件もさる事ながら、「ここはお国を何百里」に致しましても、せめて戦友の全歌詞を唱って頂くと、昔を思い出し、新しく

之を知る人の為にも、面白味、否、深い一字一字の文句にこめられた戦友に対する温い情が、現代の人にもわかって頂けて、本当に意義深い真の「歴史への招待」になった事でしょう。残念でした。私は子供の頃、よく川やいなご取りに郊外へ出ると、声を張り上げて、「ここはお国を何百里」とうたったものです。今でも歌詞は全部覚えて居ます。現代の若人たちに之を聞かせたら、戦争で友を失った人でなくても、親友に別れた人達はどこかこの思い出の中の歌詞の一節でも、思い当る場がある事と思います。この歌をテレビに入れたら、聞く人達涙新しく、又々の再放送をお願いしたかも知れません。あの位では、何が、この「ここはお国を何百里」という題名にして、テレビ版にのせたのか意味がわかりません。おしい一晩でした。

悪口になってしまって御免なさい。

今夜は昔を思い出して、「ここはお国を何百里」をうたい、そして感情のおもむくままに書いてしまいました。

今の人なら、五百里でも六百里でもはっきり知っているという様なお話をされましたが、戦争でどんどん進んで行く一兵卒には、何百里が想像も付かぬ遠い所と云う意味でしょう。では、又、時々感想を書かせて頂きます。

（群馬県伊勢崎市　金井節子さん）

拝啓　私はいつもかかさずＮＨＫの当番組を見ているものですが、あなた方の放送は、戦国時代を大変多く取り上げて下さるので、興味深く拝見させて頂いております。

たいへん厚かましいリクエストですが、司馬遼太郎氏をスタジオに招いて、戦国時代の変った鉄砲集団で、司馬先生の小説にもなっている紀州雑賀党の頭目、雑賀孫市について探ってみて下されば、大変うれしく思います。つきましては、何とぞ何とぞ身勝手なお願いをお聞き下さい。

（東京都北区　荻原敍弘さん）

歴史への招待は、一週間の内最大の楽しみです。と云っても小生難しい事は判りません。先日放送の鼠小僧の事ですが、義賊といわれた記録は何もない、後年講談が作り上げたものとのお話でした。私は少しおかしい。何時もは司会者、立合の先生も記録以外の推理想像をなさるのにこの間はそれが全々ない。成程四人の情婦はいても、十年余り稼いだ金が何千両、普通ではとても使えない。少しは講談にあるように、貧乏人に撒いたのではないかと、奉行所がそんな事を書いたり記録にしたら、世間が同情し、獄門にしたらお上、奉行所が悪くいわれ、ご政道にも差支える。そんな思惑があったのではないか。それに一般の市民に迷惑をかけず、大名、旗本ばかり、其処にも世間の理解があったのでしょう。今の強盗も、銀行は損益決算で落し損はない、損は国がする。そこらの長屋で、二万、三万盗る強盗はクズです。私は考えます。何か少しは種がないと、いかに講談でも誇張はしても、全部嘘は話せません。御意見如何です。これからも面白い歴史を見せて下さい。

（大阪府東大阪市　那須亮市さん）

投書のおねがい

『歴史への招待』発刊以来、続々とお手紙をいただき、担当者一同、深く感謝いたしております。これからもより多くのご投書をお待ち致します。ご投書の中より毎月数点を採用させて頂き、この欄を充実させて行きたいと考えております。そのために、一応の目安を左記し、皆様のご便宜をはかりたいと思います。

○通信文は、お葉書一枚に要領よくお書き下さい
○お手許にある日本の歴史に関する素材
○放送又は本書に対する感想やご意見等

採用の場合は、掲載誌を一部贈呈致します。

編集室だより

歴史物といわれる出版物が数多あるが故に、新しい出版物、映像と出版との結合の果実が実るのかどうか、懸念し続けた一年半が過ぎ、やっと刊行が始まりました。

皆様のおかげで、どうやら好評のうちに、二月が過ぎました。一集、二集の増刷も急ぎ刊行予定です。さて四巻目をやっとお届け致します。気に入っていただけるかどうか…。スタッフ一同精一杯工夫しました剣豪ものです。一巻発売以来のご好評にお応えできただろうかと、発売日をヒヤヒヤもので待っているところです。皆様なにとぞよろしく。　（田）

●表紙

日本古武道最古の流派として名高い鹿島新当流、香取神道流からは、多くの流派が派生した。ト伝の新当流と縁の深い天真正伝神道流極意大竹利典師の備前長船（おさふね）が、香取神宮の神域の気を斬り裂くと、四十年を越す修行の道が一瞬白く真一文字の線を引いて光った。

撮影　土田ヒロミ
構成　荒田秀也

●資料提供・協力者

NHK
平凡社
綿谷　雪
都立中央図書館
富永文男
島田美術館
関ケ原郷土館
東京大学史料編纂所
永青文庫
芳徳寺
柳生宗久
宝山寺
樋口定広
徳川恒孝
渡辺一郎
静嘉堂文庫
足立巻一
滋賀県庁
北賀市市太郎
永井昌二
永井信子
末慶寺
日本古武道振興会
小笠原清信
大坪指方
神之田常盛
米野光太郎
武藤正雄
澤田花江
平田家
日本近代文学館
吉沢英明
日本近代史研究会
共同通信社
中山榮之輔
国立国会図書館
真正極楽寺
吉川浩一郎
内田栄一
岡見安定
伊藤昭司
吉見屋
小山秀雄
長吉寺
松井家
長崎県立図書館
宝井馬琴
小林千鶴子
村田利兵衛
大超寺
山口倭子
岡田一男
弘前市立図書館
飯篠快貞
大竹利典
ドン・ドレイガー
京増重利
柳生鎮雄
フィルム・ライブラリー協議会
都立大学付属図書館
宮本信男
仙台市博物館
野口昴明
百年社
新人物往来社
鈴鹿家
帝国書院
徳川黎明会
臨済寺
山名隆三
相国寺光源院
長興寺
中央公論社
村井益男
斎藤俊彦
神立　繁
岩波書店
滋賀県立図書館
鎮国守国神社
山梨県立図書館
東京大学明治新聞雑誌文庫

（順不同・敬称略）

●NHKスタッフ

北山章之助
中村清次
河邑厚徳
三浦　基
中澤俊明
西田禮一郎
佐久間　宏

●カメラ

斎藤合一
首藤将夫
鈴木昭男
土田ヒロミ
村井吉直
毛利寿夫

●アート

荒田秀也
中島敏夫

●製作・進行

渡辺謙二

●編集

平田喜久雄
小林恒夫
佐藤　實
山内直樹
梶山憲一
高橋　純
輪島節子
犬塚せつ子

歴史への招待　④

昭和五十五年二月一日　第一刷発行

編集・発行人　藤根井和夫
印刷・製本　凸版印刷株式会社
発行所　日本放送出版協会
東京都渋谷区宇田川町四一—一
郵便番号一五〇　振替東京一—四九七〇一